
your earth

白亜迦舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

your earth

【Nコード】

N0947E

【作者名】

白亜迹舞

【あらすじ】

‘夢’降る夜の寝物語。一匹の猫‘チヨ’は、姿を人間のそれと変え、ただ一人街を彷徨う。かつての飼い主‘ツミ’を追うため。世界を変えるため、世界を悪夢で塗りつぶしていくツミ。彼の語らない想いを知るために、チヨは旅をし、時に戦う。 月神 と向き合う 大地の代理人 として。

幕前（前書き）

この小説は「my moon」の続編です。初めての方の為にあらすじを付けましたので、どうぞ。尾ひれ付けてありますが、そこは読み飛ばして結構です。

幕前

ここは自立夢囃子学園。幼稚園から大学院まで何でもありの学園の中の、共通図書棟の第七小閲覧室。

がらがらと木の戸が開かれ、詰め襟の黒学生服に巨軀を包んだ少年、高等部所属コランド・クーフナーが入ってくる。

「あ、いた。瀬理、何か面白い本教えてくれ」

不躰にコランドが呼びつけた、瀬理という女性は簡素なカウンターに身を収めて本を読んでいた。茶のブラウスに灰のロングスカート、そんな私服が三瓶瀬理が大学部の学生であることを主張していた。

「年上には敬語が基本だと思うけど……まあいいでしょう。」

コランド君が読みそうな物は……」

カウンターから出た瀬理が書棚から一冊の本を選択した。

「『your earth』……。つて、何だこの本。B5裏表

刷りの紙に二つ穴明けて紐で結んであるだけじゃねえか」

「自費出版……というより、人の思念だけで蔵書が増えるこの図書館ならではの物ね。どう？ 十五禁なシーンがなくて、戦闘の多めなコランドの好きそうな内容だけど、読まない？」

コランドはとりあえずはじめの数ページを読んだ。

「現への侵攻は、さながら星を落とすこと、或いは種を蒔き芽吹かせることに似ている。なあ、この本前作があるんじゃないのか？」

「そう言えば……前作の題名は、確か『my moon』。あら、

棚にないわね」

その時、扉が開き新たな人物が入室してきた。

「その本はね　この間クーフナー先生が借りてたよ」

高等部の制服を着用した虹彩異色の少女、彼女の名は立浪・架夜オッドアイズ。
チエック柄のスカートを指定よりも短くしているのが目立つ。

コランドが言う　「クーフナー先生が？　あの人、本読むんか？」

瀬理「二月に一冊読みます、クーフナー先生は。でも、その間は期限が過ぎようと絶対に返却されません」

「まじかよ。なら違う本を……」

「私、前に読んだ。だから、あらずじ教えてあげる」と架夜。

「いや、別の本読むし」

「それなら私が」

「おい！」

＊＊

その宇宙には、一つの大きな世界と無数の小さな世界と、二種類の世界が存在した。大きな方を現、小さな方を夢、人々は謂われも知らず二つをそう読んでいた。

現の世界では、一般に人々は魔術等の神秘的事象を扱うことを知らなかった。鉄の兵器と科学の炎、人々はそれで生活を豊かにすると同時に争いを続けていた。終わりのない無為な戦争をしている者達がいれば、飽食と怠惰の平和に腐れる者がいた。

無数にある夢の世界、そこはせいぜい一つの街程度の広さしか持

たない世界だった。泡沫うたかたのように生成と消滅を繰り返す世界。そこに住む人間はすべて現から来た者達だった。彼らの中には、精神の深部に秘められた特殊な能力に目覚める者もいた。

夢は通常互いに孤立して、行き来することができない。しかし、時折接触すると、夢同士は戦争をしなければならぬ。勝った方のみが存続を許される、それが宇宙の節理の一つだった。

物語の舞台は、そんな夢まぼろしの一つ。天戸あまののやねの宅と名を持つ一軒の家がある夢だった。五人の女性が暮らしていた日々、現から一人の少年が入り込んだときから始まる物語。

その男、物語の主人公となる者はツミと名乗った。夢で暮らす多くの者がそうであるように、彼は現での名前を忘れた。

小説『my moon』は全六幕にまとめられていた。

第一幕。夢に来たツミが初めて会った女性は、炎を使う赫い髪の若い女だった。戦いを知らなかったツミは『戦わねば世界もろとも死ぬ』という現実を受け入れ、アカの能力を解放し、同時に月の魔力を行使するという自分の能力も覚醒させ、彼にとつての初陣を見事勝利に運んだ。また、風を従える少女キズオトと、水の術を行使する女ササヤキと知り合う。

第二幕。予知能力を使う娘サキと、彼女に献身する女ネガイは、七日の間ツミから姿を隠していた。ネガイから古刀あめのこしたち天乃常立を得たツミは、それに秘められた強大な力を操る術を学び始める。また、自分を含め六人の人間を家族と見なして生活していこうと決める。

第三幕。ツミとキズオトが秋の森へ狩りに行く。そこで淡島の存在を知る。

第四幕。ササヤキの中に隠されていたもう一つの人格、ナゲキと接触する。ササヤキの上位人格だというナゲキは、ア力を凌ぐ術力とそれを使いこなす知性を持っていた。

第五幕。ツミとキズオトは他の夢から侵入してきた少年ヨミと出会う。ヨミはツミ達の夢を歪めさせる存在だった。現実に苦悩するツミを前に、ア力はヨミを殺害した。

第六幕。冒頭でササヤキ・ナゲキが死亡し、キズオトも姿を消した。意識を目覚めさせた天乃常立はツミを主と呼び、彼に宇宙を変えるための神となることを勧める。ヨミをはじめとし、二人の家族を失ったのはこの宇宙の節理のせいだと結論したツミは、三年住んだ家を去り現へと下ることを決断した。ア力は彼を引き留めるもかなわず、彼の計画を妨害する為に現へ行く。サキとネガイは、最後の一人、^{ハイフ・キャット}を待つて二人きりで残ることにした。

それぞれの幕の間では、最後の一人、^{ハイフ・キャット}猫人のチヨがサキから昔話を聞き、またチヨが夢を見る様子を垣間見せた。終幕でチヨはツミを追い旅に出る。すべての想いを知る為に、チヨは旅立ち、またサキとネガイも旅立った。

「ずいぶん細かく教えてくれたな」

眠そうな顔でコランドが言った。

瀬理「そう？ まあ、サービスよ。細かいところは『my mo on』本編を読まないとわかりませんよ」

架夜が言った「あらすじは出来事だけ。この小説は、大部分がツ

ミの主観で描かれ、彼の心情が多くつづられているよ。作者の白亜
迹舞は、ツミの独白を記しただけ、とも言ってる。とにかくそんな
感じで、テーマが自分たちが生きる為に他の存在を滅ぼす事への苦
悩だったり、一緒に住む女の人達との交流だったりするよ」

「この物語には、古事記や日本書紀などに記された伝承の要素が
含まれているわ。知らなくてもいいし、知っているのとちょっと楽し
くなるかな」

一息。これまで三者は書棚を前にずっと立っていたので、四人用
のテーブルへと移動した。

そうそう、と瀬理が言う。

「この物語の人達はみんな一つずつ属性を持って術を使うけど、
基本的にこれらは系統化された魔術・呪術の類とは違うの。特に、
アカとキズオトは術というより超能力みたいな感じね。日常生活で
は呪いまじなを使っているような描写がある。他に、ササヤキ・ナゲキは
微声詠唱魔術、通称‘囁き’を使うことがあるわ」

コランドの瞼が半開きになっている。彼は別に人の話を聞くと眠
くなる類の人間ではない。まるで、催眠魔術でもかけられたかのよ
うであった。

架夜はそれに構わず話す。

「そういえば、あのお話の中で‘封印術’を使ってたよね」

静かに扉が開かれ、四人目の人物が現れた。

架夜と同じ制服の少女、名を紫部しほ・陽子ひつひという。身こなしが落ち
着いた、しかし目が生き生きと輝いている少女だ。

「あ、クーフナー先輩、立浪先輩、三瓶さん。皆さんおそろいで
何を話されているんですか？」

「陽子、良いところに来たわ。さあ、そこに座って封印術について話して下さい」フリース・ブローサム 封魔士」と瀨理。

陽子は空いていたコランダの横に座った。その気配に、コランダの目が少し開かれた。

「『your earth』ですか。私『my moon』から両方とも読みました。そう言えば、みんないきなり封印術使うときがありましたね」

*

封印術、封術とは平易に言うならば対象の力（主に術力）を抑制し、それを使用不能まで持ち込む術である。魔術・呪術・法術などのように系統化されてはいるが、特に不自由がないので混同して使われている場合も多い。

封術は大きく十の系統に分けられる。それぞれ、一から十の番号で呼称される。

『my moon』作中に出てきたのは、二（荷）式と九（吸）式の二つ。どちらも、ネガイが力を暴走させた者に対し使った。

キズオトに対し使われた二（荷）式。力を抑制する能を持つ道具の効果を発現・強化する。

天乃常立を鎮めた九（吸）式。術者が自身の体内に、もしくは術者が開いた‘穴’に、対象の力を吸収させるもの。

封術は攻撃としても使える一方で、保護や援護の術としても使える。そのため他の術と併用して習得しておくのも良いが、封術単体で習熟させることで攻防一体の戦闘が可能となる。

*

「私は十（凍）式をよく使います。自分を中心に神秘エナジー霊力の流れを凍らせる結界を張る術だけど、二と九と違って自分も術が使えなくなります」

瀬理「まあ、そんなにややこしいものではないはずですよ。よつぱど気になったのなら作者に御一報を。きっと反省して何とかするでしょう」

「そう言えば、この小説そここに誤字脱字がありますよね」
陽子の言葉に架夜が答える。

「そういうときも、作者にメールしてあげたらいいかな。きっと喜ぶよ。感想欄に書くのもありだね」

そして三人の女性が立ち上がる。コランドは机に突っ伏して静かな寝息を立てている。

「さて、少し長く話すぎたかな。私、家に帰ろうかしら」

「三瓶先輩、クーフナー先輩はどうするんですか？」

「そつとして置きましょう。ここの鍵は開けたままでよいですか」
ら

瀬理はコランドの耳元に囁く。

「良い夢を」

あれ、と架夜が首を捻った。

「そう言えば、『my moon』の中で、『夢』と書いて、『まぼろし』と呼んでいたけど、あれにはやっぱり意味があるんだよね」

「それはそうでしょう。現まから発せられる負のエネルギーが形成する世界・夢まぼろし、言うなれば世界の悪夢でしょう。ツミが現に夢を送り込むことは、世界に悪夢を返すことに等しい。それにどついう意味があるのか、というのが『your earth』の核心の一つね」

「闇の中に沈む想いもある」

「そうよ、陽子。『your earth』のテーマは『すべて
の想いを知ること』。主人公となったチヨが、一体悪夢に沈む世界
でどんな想いを見付けたのか？」

「それは読んだ人だけが知っているのね」

三人が去る。

残されたコラントは、夢の中で一つの寝物語を聞いていた。

開幕

真っ黒なビロードの上に、金剛石の欠片が散りばめられている。それらの中心には、丸い銀の鏡が一つ。音のない、比類なき光を放つそれは、

僕の月。

自己紹介を 否、『そなたら愚民に我という存在を教えよう』、
と言つべきだろうか。

僕の名前はツミ。月の神、夢の王、現に仇為す侵略者、暴虐にして冷淡な夜闇君主。それらが、僕に与えられた称号。

そう、僕という存在は今、数多の夢を指先だけで操り、無知な人々が住む現を侵略するものとなったのだ。そして僕の為したことによつて、現は、今やどこであろうと等しく妖化した人間や異形バリアントによつて戦火が絶えない大地となった。

現への侵攻は、さながら星を落とすこと、種を蒔くことに似ている。小さな世界・夢を現に降ろすのだ。現に降ろされた夢は、その神秘的な性質を周囲にひろげ現を夢化させる。そうして、現は侵略される 世界は一つになるのだ。

宇宙は僕の思うがままの姿になる。だけれども 否、だからこそか 僕はもはや物語の主演ではない。僕は悪なる敵役であり、惨めな裏方でしかない。

*

街に火の手が上がる。炎は、僕がもたらせた夜の闇を照らし出す強い光を放つ。そして、あれに呑み込まれて無力な人々が幾人も死んでいく。

火は赫い。流される人の血、焼かれて爛れる人の肉も赤い。

そういえば、かつて僕がツミという‘人間’だった頃、僕は一人の女性の所有物となっていた。

燃えさかる火炎の色、‘アカ’が彼女の名前だった。

別れる日の少し前に、彼女から愛の告白を聞いた。

僕は彼女を愛していなかった。好きだったが 人として生きている間に会ったすべての人間より好きだったが 愛してはいなかった。

アカは、とても心の強い、気丈な女性だった。紅珊瑚色の瞳にまっすぐな光を宿している。しかし、その心の芯には脆さを隠していた。初めて出会ったときなどは、自らの火炎に恐怖を抱いてさえいた。

そういったところが、僕は好きだった、気に入っていた。決して成熟した精神など持っていない、青い彼女が僕は好きだった。

断っておくが、僕はアカを蔑んで憐れんでいたわけではない。

そしてここで思う。彼女は僕のどこが好きだったのだろうか。

普通の恋人同士なら、二人でそんなことを語り合うのだろう。だが、僕らにその様な会話はなかった。アカは恥じらって話そうとしなかったし、僕は彼女が側にいてくれるだけで不足はなかったから敢えて聞くことも思わなかった。

しかし、最終的に僕はアカを好いてはいたが愛することはなかった。そして、僕の心がそこから動くことはもう無い。なぜなら、僕は神となり人としては死んだからだ。

かつての人間二十年、僕が唯一愛した存在は一匹の猫だった。彼女の名前、僕がつけた名前は、'チヨ' という。

人として生まれて十四年目の頃、僕は母を失った。臃げな悲壮感と大きな喪失感から立ち直るまでの間、心を閉ざしていた僕とチヨは共にいてくれた。彼女が傍にいれば、僕の心は自然と安らいだ。離れていても、彼女のことを思うだけで不思議と胸が温かくなった。夢にいた頃、僕は彼女の名前を忘れていた。思い出せないでいた。だからこそ、僕はアカを いや、止めておこう。これを言うのは卑怯というものだ。

そして今、どういう運命の巡りか、チヨは人間の姿を得、僕の住んでいた夢を訪れたあと僕を追って現に戻ってきた。

飼い猫に僕は追われ、またかつての恋人のアカも僕を追っている。この他にも僕を追う縁のある二人がいる。未来視をする盲目の女性。今は男性になった。サキという人間と、いかなる契約に困るのは謎だがサキに仕える黒い女性ネガイ。この四人こそが、これからはじまる物語の主役だ。

*

「おつとめ御苦労さまでした、月の御方^{おんかた}」
「ごくろつさま、我が主様」

現にも僅かながら非科学の事象に通じ、夢の侵攻に気付いて抗し
てくる勢力がある。

今もそうした一群を殺戮したところだ。僕自身と比較すれば赤子

のような者達を、天乃常立の一振りで蹴散らした。僕の周りは、半径四百メートルが円状に真っ平らになっている。

「ダウンロード
降着の準備を」

「わかりました」

僕の共をしている二人の女性。二人は鏡に映ったように同じ姿をしている。背丈は僕より少し高く、起伏は控えめ。滄い髪は短めで、ややたれた眼の虹彩は藍色。面長だが、各部位の調和は取れている整った顔。

二人は水と氷を使う。黒い大地の上に、銀色の水が「降着」ダウンロード、夢を現に降ろす儀式。のための法陣を描き、紅い氷が必要な神秘エナ霊力ジイを蓄え始める。

準備が終わると、頭上に大きな‘星’が出現する。現に顕在化した極彩色の光を放つ夢が、ゆっくりと僕の立つ場所に降りてくる。こうして夢が一つ降りれば、現の混迷はまた一つ色濃いものとなり多くの命が奪われる。

僕の大罪。

「来ると良い、我が民よ。地上うつつを追われし悪夢の一欠よ。我が汝らの罪を背負う、故に、汝ら躊躇うことなく現へ帰り来るが良い」

しかし、僕は王だ。民の為に罪を背負うのは当然。そして、世界を変えようと思ったのは他ならぬ僕自身なのだから。

声が、聞こえた。

「また夢まぼろしが現まに混ざった……！ ツミ、いつまでもあなたの思い通りにはさせない」
憎悪の炎の向こうから、アカの声。

「相変わらず、躊躇うことの少ないお方ですわね。すべてが終わるまでには辿り着きませんと」
惑わしの閃光の中から、サキの声。

「ご主人様、どこにいるの？　ボクは、どこにいるの？」
地上の迷宮から、チヨの声。

*
*

さて、皆さんにはここでお暇申しあげることにしてしましよう。今後、僕が物語ることはない。ここからは、彼女たちが物語っていくこと
でしよじ。

さようなら、皆さん。そして

開幕の刻です。

開幕（後書き）

こんにちは、白亜迦舞です。

いよいよはじまりました、『your earth』。基本的に、前作でできなかったことを詰め込みつつ前に進んでいこうというのが目的です。

前作を呼んでいない方。あらすじを読んで解らなかつたら読んで下さい。前作は生温く十五禁だったりします。

今回はそう言ったシーンも断ち切って、戦闘場面を多くしていこうと思っています。早速、次回から戦闘を入れるつもりです。……とは言っても、大して格好いい物になるとも思えませんが。未熟者ですが、最後までお付き合い下されば光栄です。

1・1「迷い猫」

たくさんの靴の音。

たくさんの人の顔。

あふれてうねる、人いきれ。

うねってあふれる、街の灯り。

街は明るい。赤や黄色、勿忘草色に躑躅色の光達が踊っている。

ボクが歩く大通りには、暗いところは一つもなく、文字だって、色だって、何だって昼間のようにはっきりと見ることが出来る。

でも、見上げた空の星は幽か。人よりちよつと良い目を持っているボクでも、こんな地べたからは数えられるくらいの星しか見えない。

見えない。見えない。

そして、見えないのは星だけじゃない。

すれ違う人達の顔。みんな、何を考えているのかわからない。疲れた顔の大人達。若い人間達は笑っているけど、心は閉じられて瞳に光るものがない。

みんな心を殺して生きている。

怖いと思った。どうしてみんな生きているの？ そんな誰とも分り合えることのない世界で。きつと、この人達にとっては‘生’だなんて牢屋みたいにしかならないんじゃないかな。望みを失くして、ただガツガツと生きている。まるで、何かの罰みたいに。街に来たのは初めてじゃない。人ごみの中を歩いたのも、これまで何回があった。

でも、その時はボクは一匹じゃなかったよ。いつもご主人様の腕の中で、誰かに踏まれないように、大切に抱きかかえられて歩いた。

ご主人様、どこにいるの？

飼い猫は、飼い主を探して歩く。

ボクは、どこにいるの？

ボクは一匹。周りには数え切れないくらいの人がいるけど、ボクは孤独だった。ボクを見る人がいない訳じゃない。けど、その目は珍しがるものばかり。ボクを気遣ってくれるものじゃない。

ショーウィンドウに映るボクの姿。背は日本の女の人にしては少し高い。髪は灰色で、瞳は金色。肌はちよつと茶色。他の人間とは違う。でも、ボクが変なのはもつと別なところ。

耳。頭の横についてるけど、灰色の毛が生えててとがつてる。

それに尻尾。こつちも髪の毛と同じ灰色の毛が生えている。ボクの思い通りに動かすことができる。

半襦袢と、その上に市松模様の着物。下の丈は膝上で、袖も短くされている。パンツは穿いている。服装も、古めかしくて周りから浮いている。

寂しいよ。

サキはどうしているんだろう。ネガイと一緒にだから寂しくないのかな。

でも、ボクは独り。寂しい。

*

テレビモニターがたくさん置いてあるところに来た。電気屋さんの前。何も映してないテレビ、スポーツを映しているテレビ、一番多いのはニュースを、それも同じやつを流しているテレビ。

「昨夜起きた北海道××市の大規模火災の続報が入りました。市の約八分の一を消失させたこの火災ですが、救急隊により新たに四百五十六名が遺体で発見されました。これでこの火災による死者は二千三十六名、重体が千百二名、行方不明者が三千九百九十一名となりました。救急隊は自衛隊との連携を強め、行方不明者の迅速な救助に臨む姿勢です」

嘘だ。

理由も根拠もないけど、ボクはそう直感した。ニュースで言っていた街で火事なんて起きてない。もっと別な災害が、そう……

ダウンロード
……降着。

頭の中に、そんな言葉がとっさに浮かび上がった。けど、ボクにはそれが何のことだかわからなかった。

直感したことはそれだけじゃなかった。もう一つ、その災害にはご主人様 ツミが関わっているのだと、ボクは感じた。

なんて、恐ろしいことなんだろう。

道を早歩きで行き交う人達は、このニュースに目を留めない。でも、何人かの人は足を止めてこれを見ていた。

「最近多いよな、こういう事件」

「一体、これで何人死んだんだ？」

「この街にも起こらなきゃ良いけど」

「いっそのこと、全部壊れちまえばいいんだ、ハハハ……」

見れば、このニュースを耳にした人は、みんなちよつとずつ表情が変わってる。

やっぱり、ご主人様は悪いことをしてるんだ、と思った。サキカ

ら少し聞いていたけど、実際に現に来て耳にすると衝撃がある。

ご主人様のやっつてること、人は死んでしまっし、生きてる人の心にも何かの戸惑いを作っている。みんな、静かに暮らしていたのに、ご主人様は、何をしたいんだらう？

まがろし 夢同士の戦争をなくす、それが目的だってサキは言っていた。でも、このまま行けば現はぼろぼろになっってしまう。きっと、ご主人様はその事に気付いている、気付いていないはずがない。そして、そのためにご主人様が何をするのか、ボクにはわからない。

ボクは知りたい。ご主人様のすること。見ているだけじゃなくて、関わっていく為に。

だから、行こう。寂しいけど、どこへ行けばいいのかもわからないけど、とにかく行こう。

深呼吸するみたいに、息を大きく吸う。

大きな音を立てて走る車の排気ガス、人間達が頭に付けている薬道ばたの糞やゴミ、食べ物屋さん……たくさんのおいの向こう、ボクは一つのおいを嗅ぎ取った。

妖化した 夢に住んでいた人が化け物のようになること 人達のにおい。

狙われている命を感じて、ボクは走り出した。

身体が軽く、普通の人間では無理と思う速さでボクは走った。

走る先は大きめの公園。

街の光から遠ざかり、周りはちよつとずつ暗くなってくる。この目は人間のものとあまり変わりがいいから、色のない暗闇にちよつと戸惑う。

でも、ボクは止まらない。ようやく見付けた目的地に縋り付くみたいに。夏の虫が、灯火に寄せ付けられるみたいに。

暗がりの中に浮かぶ影、木立と遊具のもの他に、人の大きさの

ものが五つ。

猫の耳を澄ます。聞こえる息づかいからして、普通の人間は一つだけ。あとはみんな妖化した人間。四人の妖化した人は、その一人を取り囲んでいた。脅かすみたいに。

でも、その普通な人も全然騒いだりしてなかった。変だと思ったけど、ボクはとりあえず周りの妖化した人を倒すことにした。

走り続けた勢いのまま、ボクは地面を蹴って飛び上がる。高さ二メートルちよつとから、敵と定めた人の後ろ頭に跳び蹴りを入れた。蹴る瞬間に足を右に振ったので、ボクは彼に邪魔されることなく一人だけの普通の人間、女の子の横に着地した。

「大丈夫？ 怪我してない？」

ボクが女の子に聞くと、彼女はボクに驚いて身をすくませながらも答えた。

「い、いいえ。それより、あなたは」

この人達は、とボクは言いかけて、止めた。

残った三人が目を紅く光らせている。ゴツゴツした岩みたいな顔に、怒りや惑いを浮かべている。

あ、そういえば。

今倒した一人に意識を向ける。死んでないかな、と心配したけど、ちゃんと息をしているみたいだった。妖化も解けてないし、気を失っているだけみたいだ。

ボクはここで誰の命も失わせるつもりはなかった。ツミは誰かを殺さないと自分たちを守ることができなかった。でも、ボクは違う。ここをうまくやり過ごして女の子を連れて逃げるだけで良いんだから。

「えつと……とりあえず説明はあと。少し暴れるから、後ろに下がってて」

ブレザーにひだのスカート、制服姿の女の子は黙って頷いた。

三人の意識はボクにある。言葉こそ話さないけど、ギラギラした視線はとても人間くさい。言うなればチンピラ。

と、そんな風に冷静に分析してみるけど、実際のところボクはそんなに戦い慣れているわけじゃない。猫時代でもなるべく他の猫と喧嘩しないようにしてきたし。

だから、ボクは先手を打つ。駆け引きなしの戦いのために、この身体の高い能力で相手が反応する前に攻撃する。

「いつくよー！」

十歩くらい離れた相手の胸に、握り拳を突き出して跳びかかる。妖化してる相手の身体は固い。けど、身体を一本の棒のようにし、鳥のような速さで突っ込むボクの一撃は彼の胸を大きく軋ませて、彼の身体を吹っ飛ばした。

着地と同時に、左右斜め後ろから拳が飛んできた。残ってる二人が、腕を伸ばしたんだ。

高く跳び上がってかわす、紙一重なんてできないから。

地上三メートルくらいからとんぼをきって一人の頭を蹴飛ばした。着地。ボクに蹴飛ばされた人も、地面に倒れて落ち着いた。

最後の人は腕を四本にして、それをめちやくちやに振り回しながらボクに迫ってきた。

「う……これは読むしかないのかな」

いくら高く飛んだり走り回ったりしても、それだけで攻撃するのは難しいと思う。

足元を見る。彼の振り回す手は地面にも届いているけど、すこしは隙がある。

「今！」

スライディング。彼の鱗の生えた足を横に払う。

倒れる。四本の腕は身体を支えない。

ボクは鱗の二本足を掴んで投げ飛ばした。

「それー！」

脳しんとう、胸骨かんぼつ、頭がい骨骨折、全身強打。

みんな重傷みただったけど、生きてはいた。妖化していれば回復力も高いはずだから、ボクは手当てすることなく女の子だけ連れてその場を離れた。

七色の光に飾られた大通りを横切り、建物間で立ち止まった。

「追ってくる足音はしないね。もう、大丈夫かな」

自分の手下とも言える妖化した人が倒されて、ツミは何と思うのかな。まさか出てくるとは思わなかったけど、現実に出てこないとなるとやっぱりちょっとだけがっかりした。

そして、あの人達。あの人達はどうなるのかな。傷が治ってそのままどこかに帰ればいいけど、誰かに見つかったり鉢合わせたりしたらどんな事になるのだろう。また、誰か普通の人を傷つけたら嫌だなと思う。そういえばさっきのテレビみたいにニュースを変えてしまう人がいるのだから、もしかしたら現うつにも妖化した人間というものを知っている人がいるのかも知れない。その人達が彼らを……殺してしまうのかな。

そんな事を考えていると、目の前の女の子は怪訝そうな目でボクを見ていた。まずはこの女の子をどうにかしないと、と思ってボクは考えるのを止めた。

女の子は濃いめのお化粧をしていた。新橋色のアイシャドーがされた黒い瞳の目で、ボクを挑みかかるように見ている。

「あなた、何なの？ さっきの奴らは人間じゃなかった。あなた

の動きも、普通の人とは思えなかった。 助けてもらって言うのもあれだけど、あなたは何者なの？」

口紅をぬった紅玉のような唇を突き出して、彼女はボクを問いつめた。

やっぱり、怖いよね。

絶え間のない雑踏の音が、失望と手を取り合ってボクの心に押し寄せる。

「……人のいる場所をたどって帰ってね。いろいろ危ないことがあるみたいだから」

ボクが質問に答えなかったことが気に入らなかったのか、女の子は眉を顰めた。けどボクは、さようなら、と言って彼女に背を向けた。

「待つてよ」

待たない。

ボクは彼女と違う。どちらかと言えば、彼女を襲ったあの妖化した四人と同じ者だから、彼女と一緒にいてはいけないと思う、やっぱり。

「待ちなさいよ！」

その瞬間、お尻に強い痛みが走った。

「痛い！」

女の子はボクの百センチメートルくらいの尻尾を引っ張っていた。尻尾を掴まれたままでは振り返れない。ボクの背中に向けて、彼女は怒鳴るように言った。

「別にあんたのことキモイと言った訳じゃないでしょ！ 答えづらいことがあるんだったら答えなくても良い。でも、これだけは答えて あなた、帰る場所はあるの？」

帰る場所。

ふと、ボクは猫だった頃にご主人様と暮らしていた家を思い出した。兄弟もお母さんもいなかったけど、お父さんはいた。人一番悲しみに弱い人だったけど、お父さんは今も元気になっているのかな？何にしても、今のボクには帰る場所どころか寝る場所もない。

「家に来てよ……。お礼、したいから」

女の子の声には、寂しいような、切ないような、そんな感じがあった。ボクの尻尾を掴む手も、なんだか縋り付くみたい……。

「手、放してくれる？ それ 本物だから」

「え……ご、ごめん」

女の子とボクは向かい合う。じっと、窺うようにボクを見ている。「私、別に怖がっているわけじゃないからね……」

黙りこんだ彼女に、ボクは笑って見せた。

「ボクの名前は、チヨ。ただのチヨだよ」

「いぬこ 乾・ゆしみ 優見」

ボクたちが黙ると、車の走る音が遠く聞こえた。眠らない街。優見の瞳に踊る街の光たちは、ちよっとやわらいで見えた。

「うち、お父さんもお母さんもないから……誰もいないから……」

「いぬこ 行こ？」

優見の手をとった。銀の指輪がはめられたその手は、とてもやわらかかった。

友達になれるかな？

もちろん、ご主人様を探すのなら彼女とは別れないといけない。

……それ以前に、ボクはまずサキと合流しないといけないんだけど、でも、そんなこととは関係なく、ボクはこの出会いがうれしかった。手を結んだとき、胸の中に走ったのがさよならの予感だとして

も、ボクは優見と会えたことをとても喜んだ。

優見がボクの手を引いて案内してくれる。
街の明かりが、雑踏が、怖くなくなった。

1・1「迷い猫」(後書き)

第一幕です。とりあえずチヨをメインに四話構成で行こうと思います。

『my moon』の時は背景を色々弄り回してみましたが、『your earth』では地味に行こうと思います。

都会。私も五歳の頃まで北の都会で育ちました。今はちょっと引込んだところで暮らしていますが。田舎は良いッス。

……孤独な人間は、何処にいても孤独。神になろうと猫になろうと、自分から絆を結んでいかないと。

1・2「彼女の名前」

優見の家は小さなアパートの一室だった。

アパートは、階段が錆びて、外の壁はひび割れがあちこちに見られた。けど、

「中はキレイなんだね」

「もう、莫迦にしないでよ。一人暮らしだからって散らかしてなんてないわよ」

「ううん、そうじゃなくて……このアパート自体のことを言うてるんだよ」

ボクの言葉を違うふうに見た優見は怒ったように返事したけど、訂正すると照れくさそうに笑った。

ここに来るまで街を歩いている間、優見と少しお話をすることができた。ピカピカしているお店を一つ一つ訊ねるとか、変な服を着ている人がいるとか、そんな他愛のないことを選んで話した。彼女はボクと話するとき、街を歩くたくさんの人と違って、瞳をキラキラさせて心を開いてくれた。話題を選んでいるボクに対しても、きちんと受け答えしてくれる優見が嬉しかった。でも、だからこそボクは見てしまう。そんな心を開いた彼女の瞳に、時々悲しい色の影が過ぎるのを。

玄関から上がるとき、ボクは自分の足が泥だらけなのに気がついた。ボクの履いている靴は、ご主人様があの夢の家（おまごのやま） 天戸（あまど）の宅（たく）に置いていった運動靴だったけど、それはボロボロになってしまった。その上靴下も履いていなくなかったから、足が汚れ放題だったんだ。気遣いの細やかな優見がこれに気付いた。

「む、ちヨ、そこで待ってて。今タオルを持ってくるから」
優見はパタパタと家の中に駆けていき、蛇口からジャーと水を流

す音のあと、白い布を手に戻ってきた。

「足出して」

「え、自分で拭くよ」

「いいから！」

言われたとおりまず左足を出した。優見は真つ白なタオルでボクの足を、指の間一つ一つまで丁寧に優しく拭いてくれた。右足も同じだった。

ボクがお礼を言うと、優見はほほえんだ。

「命の恩人だからね。気にしなくて良し！」

次に彼女は眉を立てて、ボクを頭の中から爪先まで眺め回した。

「全身も泥だらけね……。まずはシャワーに入っ。着物は洗えないから、替わりに私の服に着替えてね」

*

温かい雨。

石けんのにおい。

白い湯気。

毛皮じゃない素の肌は敏感。その肌をとおして、ボクはそれらを幸せと一緒に感じていた。

人間の身体になってシャワーを浴びるのは初めて。猫だった頃は、一月に二・三度ご主人様と一緒に風呂に入った。子供の頃から慣らされていたせいか水は怖くなかったけど、水を吸った身体が重くなるのは好きじゃなかった。

人間の身体は毛がないから、素肌の上を水が流れていくのは逆に気持ち良かった。こわこわしてた髪の毛尻尾の毛も、シャンプーでやわらかくなった。

あ、背中髪の毛……。

手を回すと、意外と洗えた。ボクの身体は筋力もすごいけど、柔

らかさも人より上みたいだった。

シャワーのコックを閉め、優見の出してくれたバスタオルで身体を拭く。毛皮の部分はドライヤーで乾かしたいけどそうはいかないので、よく拭くだけにした。

「着る物出しといたからね。ちゃんとチヨが着れるように大きいの出したよ」

優見はボクより少し背が低いので、彼女が服を出してくれるのから大きめの物にしてくれないといけない。

脱衣所に置いてある籠に入っていたのは、ボクの物ではないパンツとブラジャーと、パジャマ上下。優見は下着もボクに貸してくれるみたいだ。

とりあえずパンツを穿く。元のボクのパンツは股上が長く取られていて尻尾をとおす穴を開けてあったけど、優見のパンツには当然それはない。しょうがないので、尻尾はお尻の下に挟んで我慢。

次にブラジャー、って

「優見い……これどうやって付けるの……？」

バン、と勢いよく脱衣所の扉が開けられた。

「これ、ってブラのこと？ うーん、そんなものかしらね」

ボクはこれまで晒し布を巻いて胸を押さえていた。ブラジャーはその形は知っていても着けたことはない。

優見がブラジャーを手に、ちよつと呆れたみたいに笑いながらボクの後ろに回った。

「まず腕をとおす。……そう、その紐の間。で、パットを胸に当てて後ろのホックを……!?」

キ、キツイ。胸全体にまんべんなくかかる圧力に、ボクは息が止まりそうになった。

「ちよつとチヨ、あんたどれだけ胸デカいのよ。私のブラが壊れちゃうじゃない」

優見が慌てたような怒ったような声で言った。

ボクの身体からブラジャーが外され、優見が眉間にしわを寄せてボクの前に出てきた。

「あきれた……これじゃブラは無しね。でも、あの布は洗濯して
るし。とりあえず家の包帯でも巻いとく？」

「ボクの胸って、そんなに大きい……？」

ボクにとつて比較できる女の人はネガイしかいなかった。ネガイはボクよりちよつと大きかったけど……。

優見の目の色が変わった。ボクの前で、はじめて怒ったような表情になった。

「大きいわよ！ トップで九十はあるんじゃないの？ 何とかしないと、パジャマも着せられないわよ」

そしてドシドシと足音を立てていなくなったかと思うと、何かをひっくり返す音のあとに包帯を手に戻ってきた。

「さあ、ギリギリ巻くわよ。その馬鹿乳を弾圧してやる」

「優見、目が怖いよ……」

「問答無用！」

*

「ふふ、可愛い。猫舌なんて、本当に猫だったのね」

あれから包帯を巻かれパジャマを着せられたボクは、丸いちゃぶ台を前に正座して優見と一緒にインスタントラーメンを食べていた。理解できない怒りを込めて巻かれた包帯は、ヤマタノオロチみたいにボクの胸を締め付けてる。

インスタントラーメンの味はシーフード。生の魚介類には比ぶべくもないけど、それなりに味わいのある海産物の香りと、濃いめの醤油味がおいしい。でも、優見の言うとおり猫舌のボクはちよつとずつしか食べることができない。そんなボクを、優見は楽しそうに見ていた。

ちなみに、ボクの舌にはちょっとだけザラザラが付いている。猫の時ほどいっぱい付いていないけど。

「人間のジャンクフードっておいしいの？」

「うん、人間になったときに色々切り替わったみたいで。味覚自体変わったし、猫の時なら気になった調味料のにおいも平気なんだ」

優見にはボクの事情を要領をまとめて全部話した。現の^{うつつ}人には縁遠い　　というか知りもしない　　ボクの話を彼女は無表情に聞き、聞き終わったあとは何事もなかったみたいにインスタントラーメンを出して食べている。嘘をついているみたいで薄い微笑で、他愛のないことことを話そうとしていた。

家の明かりの下で、優見はお化粧をおとした素顔でいる。ちょっと蒼白い優しい色の肌に、細くてまっすぐな眉。花は少し低め。髪の毛は黒の混じった梔子色^{くすりなせ}。脱色、したのかな？　今はあまり手入れがされていないみたいだった。

ボクがごちそうさまを言うと、無地で若竹色のパジャマを着た優見が空の容器を手に立ち上がった。

殊の外静かなその背中に、ボクは言葉では表せない空気の重さを感じる。

優見は絶対何かに憤っている。それはボクに対してではないみたいだけど、少なくともボクに関する事、ボクが話した事に関係する。だから、ボクは後ろめたいような気持ちが出て、自然と顔は下の方を向いてしまう。

「私の思っていることが気になる？」

その声は、夕立の雨垂れのようにやにわに振ってきた。

「うん」

ボクが頷くと、優見は立ったまま堅い声をボクに告げた。

「私ね、怒ってるの。わかると思うけど。でも、それはチヨにじやない。私は、チヨの話してくれた‘ツミ’って人に怒っているの。私は、その人を憎むわ」

優見の座る気配と一緒に、カタン、と木と木を打ち合わせる音がした。視線を上げると、そこに額縁に納まった一枚の写真が、ボクに見えるように置いてあった。

写真には二人の女の子。共に寄り添い笑う、仲の良さそうな二人。一人は優見。髪が今より明るい茶色で、これまた今とは違う健康そうな肌によく映えている。もう一人の女の子は、優見と同じくらいの背丈だった。髪は少し長い綺麗な黒で、それをまっすぐ降ろしている。肌は白い。枯葉色のスプリングコートを着て、裾に黒いラインの入った白いロングスカートを穿いている。何より目立つのは、丸い眼に収まった彼女の千歳緑の瞳。人とは一層違う個性の持ち主だと感じさせる光が宿っている。

「この子は葉名^{かよ}。本名は青野・葉名。私の親友で、私は‘ヨウ’と呼んでいた。

ヨウはちよつと人とは違う心で動いてる子だった。友達を作ろうとしなかったし、私には他に友達がいたから出席番号が近くなかったら話しもしなかったと思う。でも、私達は話した。そして、私はヨウのことが大好きになったの。

化粧も、服も、流行の物じゃなくて自分で選んで着ていた。お買い物が好きで、私は良く遊具もない山の公園に連れてかれた。私のことを‘ユウ’と呼んで、無邪気に笑ってた。

けど、ヨウはもうこの世界にいない。ヨウはおばあちゃんの家に行くって、山の向こうの村に行って、そのまま死んだの。村ごと大きな火事になったって……」

「私はそれをニュースで知った。聞いた直後には、私の足はヨウの行った村の方へ動き出していた。電車に乗って、バスに乗って。でも、村まであと少してとところで、私は自衛隊に止められた。村は危険だつて、それだけ言われて行く手を阻まれた。私は大人しく帰るしかなかった。

誰かが何かを隠しているのはわかった。でも、私にはそれが何だかわかるはずもなかった、探る方法もなかった。そして、今やっとわかったわ。私からヨウを、お父さんもお母さんも奪ったのがチヨの、ご主人様、だつて」

ボクは優見の方を見ることができず、うつむいたまま彼女の話聞いていた。彼女の言葉は、容赦なく降り注ぐ雨だった。怒りに激しくなることはなく、ただ悲しみに冷やされた水がボクの心を濡らして重くさせた。

ボクは悲しかった。大好きなご主人様がたくさんの人を殺し、たくさんの人を悲しませていることが。ご主人様は、一人でいることが多かったけど優しく誰かを思う心持っていた。なのに　今はもう変わってしまったのかな!?

「ねえ、チヨはどうしてその人に会いに行くの。会いに行つてどうするの」

優見は決して声を大きくして怒鳴ったりしない。今もただ、はっきりと落ち着いた声でボクに問う。でも、それは逆に偽ることを許さないものだった。

「会いたいから、もう一度。それから確かめたいんだ。どうしてご主人様がこんなひどいことするのか」

「その人は、その……夢（夢）とかつて言う世界から戦争をなくすためにいろいろしているんでしょ？　よくわかんないけど。　　どう

して、なんてわかりきっていることじゃないの？」

違う、とボクは半分感情に任せて反発する。

「違うよ！ ご主人様はわざとこうやってひどいことが起きるようになっている気がするんだ。だって、現まっに夢を帰すだけならここまですでひどいことにならないはずだもん……！」

「 どうして、そう言い切れるの？」

ボクは言葉に詰まった。

でも、でも……理由は無いけど……

「ねえ……今『現に夢を帰す』って言ったよね？ 現と夢は別々のものなんじゃないの？ もしそうなら『帰す』とは言わないよね」
優見の質問は鋭い。ボクが熱くなってとっさに言ったことを、冷静に聞き逃さず返してきた。

「……チヨは何を知っているの？ 何がわからないの？」

「わかんない……わかんないよ、優見。ボクが知っているのはサキから聞いたことだけだもん。サキは、夢が現を侵略するって言うてた。ご主人様のやっていることは、だいたいが天乃常立あめのことたちから聞いたことで、現でひどいことがおきるのも避けられないことだって……」

「……じゃあ、どうしてさっきみたいなことが言えたの？」

ボクは口から言葉を出るに任せて、根拠のないことを言い連ねていたのだろうか？ ボク自身、それが本当だと思っ込んで。

耳を塞いで逃げ出したいような、途方もない気持ち胸に沸いてきた。真っ黒い何か、ボクの頭をスッポリと覆ってしまったみたい……。

「チヨ……もう止めようか」

混乱したボクが時の流れを感じられなくなったとき、優見の手が、そっとボクの頭をなでた。

「たった一人でなれない場所に来て、チヨは疲れているんじゃないの？ 今日のもう考えるのは止めて、一緒に寝よ」

穏やかな声での提案を、ボクは畳みかけるみたいな質問で返してしまふ。

「どうして？ どうしてそんな優しいことが言えるの？ ボクは優見の友達を殺したツミの飼い猫なんだよ。ツミが憎いんですよ？なのに、どうしてボクに怒ってないの？ どうして泣いてもいないの？」

優見はほほえみに少しの寂しさを漂わせて、ボクの頭をなで続けながら答えた。

「私がチヨに怒らないのは、私がチヨのことが好きだからよ。チヨだって、ご主人様からはぐれて一人つきりになってしまっている。私が親しい人たちを失ってしまったみたい。もしかしたら裏切られたのかもしれない、もうその人は変わってしまったのかもしれない。けど、チヨは‘ご主人様’のことを信じようとしてる。私は、それが間違ったことだとは思えない。だから、チヨにひどいとは言えない」

「……………」
「私が泣かないのは…………どうしてかな。泣き疲れちゃったのかな？ 悲しいことは悲しいけど…………今は、ほら、チヨがいてくれるから」

ボクは、やっぱり優見から離れるべきなんだろう。

優見はボクに遠慮して泣かないんじゃないかと思う。ボクが好きだって、ボクを哀れんで、ボクを傷つけないようにしてくれているんじゃないのかな？

でも、ボクは結局優見に甘えてしまふ。ボクは、頭をなでて引き

留めてくれる人から離れられるほど強くはなかった。

ベットは二人で寝るにはちょっと狭かった。おまけに、ボクの体は女の子にしては大きめだ。

猫の体に戻れたらいいのに。

ちよつと悩んだボクの顔を見て、優見はほほえんだ。

「明日は服を買いに行こうね。靴も帽子も。あちこち歩いて回るのに、そんな格好じゃ目立つだけでしょ？」

うん、とだけ返事をしてボクは瞼を降ろした。

目を閉じた闇の中でも、優見はもちろんそこにいる。

その事実をしつかり手に握り締めながら、ボクは眠りの中に落ちて行った。

1・2「彼女の名前」（後書き）

悲しみを表現することができない、と気付いたこの頃。

それなりに悲しむ人もいますが、なかなか……

「ここは悲しむところかな？」とか、「悲しんだら泣けばいいのかな？」とか考えるんですよ。怒るときは火みたいに怒らせればいいのですが、悲しみはそうはいきません。

例えば、今回の優見のように、「悲しんでいるように怒っている」とか、難しいことをしてくれる人が多いです。

結局は私の未熟さに帰結するんですけど……。

1・3 「真昼の街中で」

ふと、目が覚めると、ボクは布団の中にいた。

いた、というよりは、掛け布団の中にすっぽりと覆われている感じ。一方向に、優見のお腹が壁のようにある。

身体が小さくなってる？

ボクは猫の身体に戻っていた。

耳は優見の心臓の音から、筋肉がちよつとずつ動いている音まで聴く。

鼻は汗のにおいから息のにおい、布団に隠れた微かなかびのにおいを嗅ぐ。

目は光のない布団の中でも物陰を見る。

全身に毛があり、顔に髭も生えている。

ほつとするものを感じる一方で、ボクは焦った。

なぜなら、このままではご主人様を探すのに不便が出るかも知れないから。人間の世界を歩いて回るのなら、やっぱり人の身体が一番なんだ。

もしかしたら、夢かも。

そう、そうに違いない。五感は妙にリアルだけど、これは夢に違いない。

夢なのだ。

そう自分に言い聞かせて、ボクは身体を優見にすり寄せ丸くなって眠った。

次に目が覚めたとき、またしてもボクは布団の中に埋まって丸くなっていった。でも前と違うのは、布団の端から足とが尻尾が出ていること。また身体は大きくなって人間の物となっていた。

けど、違うこともあった。優見がいない。
ちよつと不安になって身を起こすと、エプロン姿でちゃぶ台と台所を往復する優見を見ることができた。

「あ、やっと起きたわね寝ぼすけ猫さん。ご飯にするから服を着てベットから出てきなさい」

「服？」

気が付くと、ボクは一切の服を着てなかった。

「え、ええー！　なんでボク裸なの？」

「知らないわよ。言っとくけどね、私は朝起きたら床の上だったのよ。まったく、人をベットからたたき出すわ、服を脱ぐわ、どういう寝相してるのよ」

優見の口調は叱りつけるそれだった。本能的にボクは耳を垂らし、いそいそと服を着はじめた。

「優見い、胸に包帯巻くの手伝って」

「いいわよ、めんどくさいから。パジャマだけ着て出てきなさい」
言われたとおり、ボクは裸の胸のままパジャマをはおった。胸の前でボタンを留めると、ボタンは胸の張りで思いつき横に引っ張られた。

ちゃぶ台の前に正座。ボクの胸に目をやった優見が一言、

「エロい……」

「え、何か言った？」

優見はブンブンと手を振った。

「な、何でもない。さ、熱いうちに食べよ」

献立は、主食がパン、おみそ汁、サケ（と言っかマス）の焼かれた切り身、サラダにツナのオムレツ。

どこかあり合わせと感じられるメニューだけど、優見が一生懸命作ってくれたんだなとわかった。

「おいしいよ、優見」

ボクが素直な心で言つと、優見はニコツツと笑った。

「よかった、朝ご飯なんて久しぶりに作ったから自信なかったんだけど。張りきって作ったから、全部食べてね」

「うん……!」 ちよっと多いけど。

「今日は、もう少し日が昇ったら買い物に行きましようね。新しい服とか靴とか、バックとかも買ってあげる」

優見は心底嬉しそうに声を弾ませて言った。女の子はお買い物が好きというのは本当なのかな？

「あ、でも……ボクお金無いよ。優見にも、そんなに迷惑かけ」「人の好意は素直に受け取る！ いいのよ、私には必要以上の、望んだ物じゃないお金があるから……」

優見はたくさんのお金を持っている。けど、その由来を聞いてちゃいけない。言葉を尻つぼみにして黙り込んだ優見の顔が、ボクのそう悟らせた。

なるべく、明るい雰囲気を作りたいと思った。

「……あとで言われても、返せないよ？」

ちよっとおどけて言うと、優見はフツツと声を出して笑った。

「もちろんよ。ちゃんと必要分は残して使うから、心配しないで」

つやの出た木目のフローリングの上に、白い光がさざめく朝。静かで穏やかな、世界の目覚めの時間。ボクと優見は、二人きりでその平和を味わっていた。

*

午前十時。平日の街中。

季節は七月の真ん中ほど。梅雨は終わった。アスファルトの上を

走る湿った風が、これから四時間ほどで訪れる蒸し焼きのような暑さを予告している。

深いビルの谷間では、今日も多くの人達がせわしなく歩き回って、車がびゅんびゅん走ってる。優見は「やっぱり人が少ない」とか言ってたけど、ボクには充分たくさんの人が歩いているように感じられた。とくに耳から拾える音、ガラスとコンクリートで出来た塔を木霊する色んな音が、ボクを圧倒した。

ボクが今のところ着ているのは白のポロシャツに灰のジーパン。ジーパンは裾が足りないので冬用のブーツでごまかしてある。もちろんすべて優見の物、ボクの着物はたたんで家に放置してある。

耳は、開き直って、出している。優見曰く「お洒落だと思っかも」とのこと。尻尾は流石に目立つのでジーパンの下に隠している。

そう言う優見は、青いラインのセーラー服に、黄色のアクセントがちよっとだけ付いた白いスカートを着ている。靴は真っ白なスニーカー。昨日の夜はめていた銀の指輪はない。

「あー、この髪何とかしないと……」
手入れされてなかった茶髪には黒が混じって、あまり見栄えが良くないことになっていた。脱色し直す暇もその薬もなかったから、紅いラインの縁なし帽で隠している。

結論：二人とも変な格好をしてる。

まずボクらは十二階建てくらいのデパートに入った。ひやりとしたクーラーの空気に迎えいられながら、エスカレーターで三階に上がる。そこにあるのは下着屋さんだ。

「あの、優見。一つ気が付いたんだけど……」

「なに？ チヨ」

「ボクさ、背中に毛皮あるでしょ。店員さん、見て驚かないかな……？」

ボクもそうだけど、優見もこのことに気付いてなかった。ボクらは店の前で立ちつくしてしまった。

優見の表情が、驚きと焦りをまぜまぜにした物になってしまったる。

「な、なんとかならないの？」

「うーん」

普通に考えてなんとかならない気がする。でも、せっかく優見が連れてきてくれたのだから、なんとかしたい。

「とりあえず、中に入る」

ボクがそう言うと、優見は顔を思いつきりしかめた。

「なんで？ その身体は……」

「大丈夫。ボクを信じて」 その根拠はないけど。

半信半疑な優見の手をボクが引いて、ボクが店員さんの前に歩み出た。

「いらつしやいませ。何か御用はありますでしょうか？」

ちょっと高めの、かすれた声。サキの声に似てる。

「あ、あの……バ、バスのすすす法を測ってもらいたいんですけど」

緊張してきたあ。

後ろでは優見がハラハラしてる。

店員さんはそんなボクらの心の内など知るよしもなく、「かしこまりました」と小さくお辞儀してボクに更衣室を示した。

鼓動の音が大きい。ボクは意識を「あること」に集中させて、気を鎮めながら服を脱ぎだした。

「お客様。私どもは肌着の上から測ることもできますよ」
なんですと。

でも、ボクはもう準備万端で予定を変えるわけにはいかなかった。一方、部屋の隅に立った優見の顔には、店員に従えと書いてあった。集中、集中。

見よ、この背中……！

*

「どうやったの？」

‘人間’として、無事下着を買ったボクは、お金を払うと早々に店から離れた。店員さんには背中 of 毛皮を見せることはなかった。

優見はもちろんその方法を聞いてくる。

「あの時ね、ずっとボクは心の中で『自分は人間、自分は普通の女の子』って念じてたの。実はねボク、今朝寝しているとき猫に戻ってたの。それはボクが寝る前に『猫に戻れたらなあ』って考えたからだったの。だから、さっきはその逆をやってみたの」

あの時、ついでに尻尾もなくなってた。耳はそのままだったけど。優見が感心しきつた顔になった。

「へえ……。じゃあ、今はどうなの？」

「今は元通り。多分、今の状態がボクの普通なんだと思う」

「ま、とにかく良かったんじゃないの？ 次は洋服ね」

そう言つて、優見はボクの胸元に目を留め一瞬だけ複雑そうな顔を見せてから歩き出した。

測ったあとは優見と店員さんに任せていたから良くわからないけど、買ってもらった青いブラジャーには‘F’というフダが付いていた。ホックは前にしてもらった。毛皮の上にホックが来るのは嫌だったから。

そのあと、ボクらは途中でお昼ごはんを挟みつつあちこちを回った。じっくりゆっくり服を見て選ぶのはそんなに楽しいこととは思えなかったけど、優見が元気そうにしているのでボクも嬉しかった。

彼女の黒い瞳にも、悲しい影が走ることはなかった。

お昼ごはんはハンバーガーだった。ボクが食べたフィッシュバーガーは白身魚のあじが素朴でおいしかったけど、タルタルソースは

好きになれなかった。あと、コーラのパチパチにもちよっと困ってしまった。

最終的に揃えられたボクの服。パーカー付きのシエルピンクの半袖シャツにコーラルレッドのベスト。下はオレンジのジーパン生地の短パン。靴はバーガンディーの化繊ブーツ。帽子は無し。尻尾は今のところ意識して、しまつて、あるけど、穴の開けられるパンツを買ってきたので家に帰ったらお裁縫して出せるようにしようと優見は言ってる。

「巨乳猫娘。萌えよ、萌え！」

どうも優見の言動が妖しい。っていうか、モエって何……？

気が付くと、たいぶ太陽は傾いて空が朱っぽくなってきていた。

その空の下、優見が背伸びする。

「さて、これからどこに行こうか？」

「え……まだ、どこか行くの？」

ボクが暗い声で言うと、優見はくすりと笑った。

「そんな困った顔しないでよ。私も久しぶりに太陽の下を歩いて疲れたわ。家に帰って、今日はお風呂を汲んで入りましょう」

その時、ボクらの視界にソフトクリーム屋さんが入った。

優見が「なんにする？」と聞いた。

「じゃあ……チョコチップ！」

梅雨明けの宵の刻は、ソフトクリームを食べるにはちょっと涼しすぎる。

広場にベンチを見付け、そこに二人でソフトクリームを持って座った。

少しずつ暗くなっていく青い空。その彼方をぼんやり眺めていると、となりで優見の音がする。

「チヨ、聞いてもいい……？」

なあに、とボク。振り返って見た優見の顔には、もの悲しい表情があった。

「チヨのご主人様って、優しい人だったの？」

「……うん。ご主人様は友達がいなかったしお父さんともあまり話さなかったけど、ボクには優しくしてくれたよ。時々勉強を聞きに来るクラスメイトにも、親切に教えてあげてたよ」

ボクが答えると、優見は目を反らして俯いた。次に顔を上げたと
き、優見はさらに申し訳なさそうな顔をしてボクに尋ねた。

「じゃあ、聞くよ。もし、今その人が心から変わってしまったって、本心からみんなを傷つけるのを楽しんでいるとしたら、チヨはどうする？」

優見の問い、まっすぐにボクの心に突き刺さった。答えるのは難しいし、辛い質問。でも、心優しい優見が無神経にこんな質問をしているはずはない。彼女は、ツミへの憎しみとボクへの優しさの間で揺れている。辛いのはボクだけじゃない。だから、ちゃんと向き合わなきゃ。

「もし、本当にご主人様が悪い心を持って酷いことをしているのなら、ボクはそれを止めるよ。みんなを守る為に、ボクはご主人様を止めるべきなんだ」

「でも、どうやって？ その人は街一つ軽く壊せるのよ。チヨは運動神経は良いみたいだけど、他にすごい超能力があるわけじゃないかないつこない」

心配した顔の優見。

「それでも、やるよ。ずっと考えてたから、そのことは」

ボクはソフトクリームのコーンを口に押し込み、立ち上がった。

「それにね、ボクにも力はあるよ。感じるんだ、大地の鼓動を。」

ほら、昨日ボクはちょっと変なことを言ってたでしょ。『夢を現まぼろしうつら』

に帰す』とか『ひどいことにはならない』とか。あれはね、みんな大地が教えてくれるんだ。その声はまだおぼろげで、はっきり聞こえるわけじゃないけど」

優見は黙って何も言わなかった。

しばらくして、また問いがあった。

「もう一つ。もし、私が、ツミを絶対に許さない、ツミを殺して、て言ったら……どうする？」

残酷な問い掛け。でも、それで傷ついたのはボクの心じゃなく、彼女の心だったと思う。

「その時は、ボクは頑張るよ。ご主人様と優見が仲良くしてくれるように」

ゴーと風が吹きはじめた。

風の訪れと一緒に、世界が翳りはじめた。

夜が来る

「まるで、チヨウテイシヤ調停者、だな、月に愛されし四つ足の子よ」

少し離れたところに、いきなり人間が、銀のマントに全身を包んだ三人の人間が現れた。時を早めてやってきた夜の闇に、星みたいに輝いている。

「誰？　もしかして、ご主人様の……」

マントの一人、小柄な人がにやりと口を歪ませてマントから手を引き出した。……優見に向かって。

光の矢が放たれる。

「優見！」

ベンチごと吹っ飛んだ優見。ボクが駆け寄って抱き上げると、右胸からいっばい血を流していた。

「嘆くなよ。喜べ。俺たち双方にとって主であるお方が、お声を下さるぞ」

はっとして見上げた夜の上に、蒼い月があった。
弓張りの月は、嘲笑うみたいに半開きになった口のようだった。

1・3「真昼の街中で」（後書き）

なかなか前に進めません。これでは今年いっぱいはかかってしまいそうです。

チヨのバストネタが多く、正直どうしようかなと悩みましたが、結局このままです。その妥協が命取りなんですけど。

‘調停者’というのは流石に強引でしたかね。もっとじっくり来るのを次はやってみます。

第一幕は次回で終わりです。すこし派手に行きます。

1・4「初めての殺し合い」

蒼い月はボクらを、この夜空の下にあるすべてのものを見下していた。

冷たい、とても偉ぶった感じ。腕に抱えた優見の身体が流す赤いぬくもりを感じながら、ボクは月に叫んだ。

「どうして？ どうしてみんなを傷つけるの、ご主人様。そんなことをしても誰も喜ばない、ご主人様は嫌われるだけ。なのに……」

天上から目を降ろすと、目の前の地面にご主人様が立っていた。

「!?!」

別れたときと同じ、女の子っぽさのある優しい顔立ち。甘い琥珀の瞳。髪が白く、見慣れない青い蓮の花が描かれた白い着物を着てる。おまけに目の前の姿は現実のものじゃなく、光の作る幻だった。けど、その人はボクがよく知る‘ご主人様’だった。

「チヨ、久しぶりだね。ずっと会いたかったよ」

「ご主人様……!!」

ご主人様の手がボクの頭に触れる。幻の手でも撫でられる感触があつて、覚えぬ喉がごろごろと鳴りだした。

「‘ご主人様’、か。君は僕をそんなふうと呼んでいたんだ」

「うん……」

わけもなく嬉しくて、ボクはただご主人様が頭を撫でてくれるに任せていた。

「相変わらず可愛いよ。女の子の姿になっても、君の愛らしさに変わりはない。本当は肉の身体で来たかったんだけどね、忙しいんだ。だから、焦らさずに君の問いに答えてあげる」

ずしり、と心に重いものを感じた。顔を上げてご主人様の顔を見

ることができないで、ただボクは彼の話すのを聞いた。

「僕はね、みんなに教えてあげているんだよ。悲嘆や慟哭、憎悪や悔恨というものを。それはすべてかつて夢まぼろしに住んでいた者達が味わったもの。こんどは現まほろの者達に教えてあげる。そうして、悪夢によって世界を平らなものにしたいんだ。　僕が王になる為に」

木陰のような優しい声で、ご主人様は言った。

「王、さま……？」

「そう、僕は月の照らす千年王国の統治者となる。誰も傷つかない、眠るように安らかな国を築くんだ。この動乱は、そのための通過儀イニシエーション礼なんだ」

誇らしげに言うご主人様。ボクも、それに無条件で賛成したかった。でも、ボクの考えることのできる心が、それを必死に否定していた。

「そんなの……ダメだよ。ずるいし、間違ってる。ご主人様はみんなを恐がらせて言うことを聞かせるの？　そんなの、変だよ！」

ボクはご主人様の目をしっかりと仰ぎ見た。彼は、ボクの視線を受けて寂しそうに笑った。

「では、君ならどうする、チヨ？　君なら、平和な世界を創る為に何が出来る？」

ボクは答えられなかった。

ご主人様はボクに背中を向け、肩越しにボクに言った。

「ボクの可愛い猫。今夜は君に、戦うことを、殺し合うことを教えてあげる。　答えを探し旅をする為に、戦うことは必要だから

これから、あの三人と戦うんだ。その女の子、乾・優見いぬい ゆうみの命を賭けて。もし、君が彼らの命を奪ったら、その対価に彼女の命を助けてあげる」

そこで、ご主人様の姿がふっと消えた。

ボクの‘敵’ 戦うべき三人は、ボクとご主人様が話している間、ずつとひざを折り頭をたれてご主人様に従順をあらわしていた。

やがて立ち上がった三人が口々に言う。

「なんと美しく、泰然としていらっしやるのでしよう……」

「今宵の月もまた冴えわたっている。我らは、この蒼き月下にいられることを至福と思う」

一人がフードの中から、白く不気味に光る両目をこっちに向けた。その人は野太い声でボクに話しかける。

「聞いたな、月に愛されし四つ足の子よ。我らは今より命の奪い合いを始める。規則はない。あるとすれば、その無力な娘を傷つけてはならないということ。われらの戦いが始まれば、その娘は月光の盾で守護されるだろう。何も心配はいらんよ」
「にやり、と歪んだのは墨みたいに黒い口だった。」

ボクは断じて殺し合いなんてしたくなかった。でも

「構えよ……！」

何とかしてみよう。

三人からは威圧するような恐怖を感じる。全身が粟立って、今にも逃げ出したい気分になる。この身体が人間のものじゃなかったら、

優見という守るものがなかったら、ボクはきつとそうしていた。

けど、今は何とかするしかない。だれも殺さず、ボクが勝利するために。目の前の人たちはご主人様みたいな術を使うかもしれないけど、この身体の運動能力なら避けられるはず。隙を突いて、あの人たちを抑えつける……

「じゃあ、まずは私から……」

声からして女の人、そうさつき優見を撃つた人だ。一番小柄なその人が、マントから抜き出した手をこっちに向けた。

「来たれ、星数の矢！」

よけなくちゃ！

考えるよりも早く、身体が左に動いた。

避けた直後には、ボクの立っていた場所はアスファルトが砕かれて滅茶苦茶になってた。優見の周囲だけは、円く守られて無傷だった。

小柄なマントの人は、片手から光の洪水を出し続け、それでボクを討とうとしていた。ボクはその人を中心に円に走って逃げ、隙を窺う。

「そろそろ……」

だん、と地面を鳴らして蹴り、進む方向を垂直に曲げる。距離は十五メートルくらい。できる限りの速さで彼らに走り寄る。

「止め」

若い男の人の声が聞こえた。それと同時に、急に足が重くなった。その人とは別の、大柄なマントの人が大きな槌を振り上げた。

「碎ける　すべて！」

ボクに向かつて槌は振り下ろされる。急ブレーキをかけ、ボクは慌ててバックステップする。

地面にめり込む槌。その瞬間、ボクの目の前が弾けた。

「うああああああ！」

受け身を取れずに、三十メートルくらい吹き飛ばされた。激しい痛みを全身に感じた。アスファルトを剥がされたむき出しの砂利の上で、ボクは身動きができなくなった。

「無謀だな、月に愛されし四つ足の子。力を使わず、その身のみで挑みかかるとは。さあ、選ぶがよい。そのまま伏して死を待つか、立って我らの喉笛に食らいつくか」

ボクは優見を守らなきゃ。

ご主人様を止めなくちゃいけない。ボクは、死ぬわけにはいかない。

「死にたくない！」

ズ……ン！

ボクの叫びに応え、地面が跳ねた。

「おい、すごい量の神秘^{エナジー}霊力が動き始めたぞ！」若い男の人の声が、焦った感じで叫んだ。

ボクは感じる。身体中に傷があり、熱い血が流れてくことを。傷に入り込んで疼かせる土や砂が、ボクに力の使い方を教えてくれる。

「『黒き牙……母なる大地……』、食べられる！」

せりあがった岩の角が、三人を包囲した。

「く……守れ！」

突き出された岩の角を、見えない壁が砕いて阻む。

けど、その時にはボクは動き出していた。右手に何十キログラムもの土砂を纏わせて、彼らに突っ込む。

「退け！」

「潰れちゃえ！」

ボクの手の土砂と槌が激突する。衝突の刹那、ボクは土砂の重さを解き放つ。十キログラムほどの槌は大量の土砂に飲まれ、地面に落ちて埋もれた。

「ハアツ！」

左手を猫のものに変化させる。爪を振るいながら彼らの間を走り抜けると、人間の柔らかい肉を引き裂き骨を断ちきった感触がした。

「うぐあああああ！」

絶叫したのは若い男の声の人。彼のマントの左側は大きく裂かれ、足下に左手が落ちていく。バタバタと、血が地面を打った。

濃密な血のにおい。ボクの意識は高揚し、鋭くなつた目が落ちた左手の断面を凝視していた。

食べたい。

楽しい。

戦い。

ダメだ！

このまま頃し合いをしたら、ご主人様と同じになってしまう。ボクは、ご主人様に酷いことを止めて欲しくて戦ってるんだ。だから、彼と同じことをするわけにはいかない。

「お願い、大地よ。ボクらに道を教えて。みんなが幸せになれる道を……！」

ボクは心を鎮め、一心に祈った。

応えはすぐにあつた。ボクを包んでいた、激しい火山のような力が消え、かわりに雨上がりの泥濘ぬかるみみたいなやわらかさがボクを包んだ。そして、それは癒しの波となって周りにも広がりはじめた。

「傷が……腕が！」

大地の慈しみの波動は、ボクの周りにあるすべてを癒しはじめる。折られた木、燃えた花、地面に横たわる優見からマントの三人まで、分け隔てなく。ほどなくして、みんな破れた服さえ治されていた。

「これで……これで、ボクらが殺し合う必要はないよ」

「甘っちょろいことを！」

野太い声の人が猛り、槌を失くした手で拳を作って走ってくる。その拳にも砕きの力がこもっている。下手に受ければ危ない。

戦いを終わらせる方法、ボクは答えを求めて足下の大地に意識を向けた。目を閉じ、軽く開いた両脚の裏をしっかりと地面につけ、心の耳を澄ます。

「『六（陸）式封印術。眠れ、大いなる地の腕に抱かれ！』」

ズン、と周囲の空気が重くなる。重力がここだけ強くなったんだ。そして

「来たれ星数の矢　？　しまった、術が発動しない」

地の気脈をボクが抑えたから、ボク以外誰も神秘^{エナジー}霊力を使う術が使えなくなった。

ボクは三人に求める。

「ここはもうボクの勝ちだよ。あなた達はもう帰って。できれば、もう二度とご主人様のお手伝いなんてしないで」

ふざけるな！ ボクの求めははねつけられた。

「月の御方より離れると言うのか！ 御方の元で争いない世界を作るのは我らが悲願。我らがこれまで負ってきた苦しみ、知らぬお前がほざくな！」

「……ボクは、知ってるよ」なぜなら、大地が伝えてくれるから。でも、それじゃダメなんだ。痛みを知ったから、他の人にも味わわせるなんて、絶対に間違ってる！

「みんな少し休も？ 疲れて、ちゃんと考えられなくなってる。だから『石化！』^{コンジール}」

想いをふりしぼって、ボクは彼らが足を留め休むことを願った。

*

三人が真っ黒い石像になったのを確認して、ボクは優見の方を見た。傷の癒えた優見は、既に立ち上がって服の埃をはたいてた。

「チヨ、髪が黒くなってる」ボクを見た優見が言った。

「うん……大地の力を使えるようになったからだよ」

髪だけじゃない、全身の毛が黒く、豊穡な土の色になった。瞳の色もやわらかな木の葉色になってることを力で鏡を作って確認した。「優見、どこか痛いところはない？」

ボクがそう尋ねると、優見はほほえみと一緒にゆるゆると首を横に振った。

「大丈夫、チヨが治してくれたから。感じたよ、チヨがみんなを大切にする『想い』を」

そして優見は月を見上げた。月は優しい鬱金色だった。冷たい夜風が、スツと駆け抜ける。

「私ね、ずっと寂しかった。大切な人がみんないなくなっただうしたらいいかわからなくなってた。あの変な奴らに囲まれて、もう死んでもいいかなって考えたとき、チヨに会ったの」

優見が、月の下で告白していた。

「真つ暗だった私の日々に、チヨは差し込んだ一筋の光のようだった。その光を憎く思った瞬間もあった。でも……たった一日のつきあいだったのに、どうしてだろう？ チヨのことを、こんなにも身近に感じるなんて」

優見と目があつた。くもりのない黒瑪瑙オニキスの瞳から、光が一粒落ちた。

「行くのね、チヨ。私を置いて」

「うん」

ボクの返事は涙声だった。次々と溢れ出した涙で目の前が歪んで、優見が近づいてくるのも見えなかった。

細い指がボクの目の下をなぞって涙をすくった。

「チヨ、約束して。全部終わったら、また会いに来てくれるって。それまで、私待ってるから。また、学校に行つて、新しい友達作って一人じゃなくなるから」

優見は泣いているのかな？ 自分の涙で、ボクは何も見ることができない。

ボクの目にハンカチが当てられた。

「ほら、涙を拭いて。泣きっぱなしじゃ、話もできないわ」

ようやく晴れた視界の中、優見は笑ってた。赤い目をしていただけ、満面の笑みで、ボクを見上げてた。

「そのハンカチはあげる。……あと、お金もあげるね。あんまりないから無駄遣いしないように、でもけちけちして浮浪者みたいになってもダメだからね」

ボクは受け取ることしかできない。それは、優見に会った瞬間からそうだった。彼女の身を守ることはできても、ボクはそれ以上何もできない。

だから、ボクは約束する。

「わかったよ。全部終わったら、絶対に会いに来るから」

そう言つと、優見は笑って頷いてくれた。その笑顔はまるで、春に咲く桜草プリムローズのようだった。

そしてボクは歩き出す。優見から離れ、サキに会い戦いをはじめ
る為に。

大地が、地球が回る。運命も同じ。でもボクは独りじゃない。
だから、迷わずに歩き出せる。

1・4「初めての殺し合い」（後書き）

プリムローズの花言葉は『私を信じて』です。決して『はじまり』とかではありません。しかし、『プリ（プリム）』は『一番』を表す前置詞なので、から始まりでも悪くないと思います。

今回はそこそこ泣いてくれましたね。どうやら、私の小説の登場人物は死別よりも生別を悲しむ傾向がありそうです。みなさまはどうですか？

これで第一幕はお終いです。第二幕はサキとネガイをメインにした話です。ちなみに、第三幕はアカがメインです。感想をお待ちしております。

2・1「闇に沈む街」（前書き）

これはボク、チヨとサキが再び会うまでの、二日前から一日前にかけて起きたこと。サキはこの話をまるで人ごとのように話した。ボクは、聞いたままにここに記す。

2・1「闇に沈む街」

蒼い月。

月に従う銀の星々。

満ちきつた円かな月は、太陽の代わりをするかのように傲慢不遜な光で地上を照らしていた。

小さく瞬く、星の光はそれに比ぶべくもない。しかし、青黒い空をびっしりと埋めつくした星々は、地上に立つものを威嚇する勢いがあった。

「雨は上がったようすわね、ネガイ」

月光の漏れ入る廃ビルのエントランスに、二つの影があった。闇の中の影。一方は背丈が百五十センチメートルもない小柄な影で、もう一方の背丈はそれより頭一つ高く日本人であれば標準といえるものだった。

「はい、サキ様。雲一つ無い夜空で御座います」

低い声　男性であれば標準であろうが、口調に男性的な要素はなかった。黒い空間に溶け入るような、上品なアルト・ボイスであった。

「……では、少し外を歩くことにいたしましょう」

はじめの問いの声と同じ、中性的な声。推断するにはこの声の主が‘サキ’なのであろう。

闇の中では小柄な影が動き始めた。エントランスの硬い床を歩く、叩くような澄んだ音が響く。その影は月光の密な入り口の方へ進んでいく。

「ああ……綺麗な光ですわね」

サキの声が言い、続けて吐息する。恍惚ともらされた溜息は、しかし自動ドアの立てた鈍い駆動音にかき消された。

月下に現れた小柄な人間。蒼い光の中で、その者の髪と肌は蒼白く照らされる。おそらく本来は雪のような純白を持つのだろう。月を見上げる、円らな眼の憂いのこもった瞳は天色。顔立ちは、輪郭が丸めの曲線を描いており、鼻が小さめで慎ましやかで、全体的に雅やかな趣がある。黒いスーツに身を包んだ全身は瘦躯で、一見すれば男性と見えるが立ち姿には女性的な雰囲気がある。

漂^{ひら}と音を鳴らす夜風。

風に押され、白い髪の者がよろめく。すると、その者に続いてドアをくぐった者が、肩を背後から支えた。

「サキ様、お気をつけ下さい。天候が変われば風は動きまするゆえ」
サキと呼ばれた白い髪の者。サキは、もう、と声を鳴らしては背後の者を顧みた。

「そういった過保護はもうおやめなさいと、これまでも言ってますわよね、ネガイ？ 私は男性の身、そしてここは戦場^{いくさば}、守られるだけでは駄目なのですから」

自らを男性と主張したサキ。彼の言葉の最後は、ほんの僅かだけ自らに言い聞かせる調子があった。

「申し訳ありません、サキ様。以後、注意します」

ネガイ、と呼ばれたもう一方の人間は、サキに謝罪して一歩退いた。

ネガイは女性であるようだった。胸に豊かな脹らみがある。背の中程まで伸ばされた黒髪、黒い髪、そして褐色と呼べる濃い色の肌。加えて漆黒の留袖を纏っている。『闇』 彼女を形容するに、その一文字以外の言葉はすべて不相応だった。

「ネガイ。私、一つ思うことがありますの」

サキが月を仰ぎ見ながら言った。だが、彼は月の円な形を見ているわけではない。視力のない彼は、蒼い月光のみを感じられる。

ネガイは「何で御座いますよう？」と言おうとした。しかし、その時、あること、が彼女の意識を惹きつけ、現実に彼女の口から言葉を出ることを遮った。

「ネガイ？」

相槌のないことを訝しんだサキがネガイを見た。

ネガイは彼とは別の想いを込めた視線で空を仰ぎ見ている。否、彼女の視線は立ち並ぶビルの稜線をなぞっていた。

「サキ様。あなた様は先程、御自分は戦場にいると、そう仰いましたか？」

「はい、ネガイ。何か起きまして？」

サキの問いに、ネガイは肯定の意を示す。

ビルの頂点に人影が現れた。一つ、二つ、三つ……両の手指では足りない、幾つもの影。

サキはそれを見て、ふっと笑みを零した。

「よろしいでしょう。では、今の問いは彼らに答えて頂くとしまし
よう」

*

二人の周囲、五十メートル前後から着地音が聞こえた。

音の数と、じつとこちらを窺う気配からサキは推測する。

「お客様の数は二十……二十三ですか？ ちよつと手間がかかりそうですね」

サキと背中合わせになったネガイが答える。

「そのとおりです。敵勢力は総数二十三、すべて異形であります」

「異形が二十三……」

異形 人や動物、命あるものとはまったく異質の存在。破壊と殺戮のみを知る、宇宙の凶兇。

風が動いた。

異形たちが走り出す。まずは五体。稲妻のような速さで二人へ肉薄する。

戦いが動き始めたことに二人は動揺しない。サキは黒いスーツ、ネガイは喪服。おおよそ戦う者のではないが、二人は戦いを知っているようだった。

サキが流れるような静かな動作で、左腕をまっすぐ上げた。重力に従い、左腕の袖が落ち、彼の白い肌が露になる。

「spread……shining impulse」

露出された肌が光を放った。その光は衝撃となり、向かってきた五体の異形の出先をくじいた。

「ひとつ、お聞きしたいことがありますの」

腕を下ろし、袖を直したサキが言った。戦いは終わったわけではなく、光の衝撃に打たれた五体の異形もすでに姿勢を取り直し終えている。だがサキはその流れを無視したように何の構えも取ることなく問いかけを始めた。

「あなた方は、この月がお好きですか？」

五体の異形は答えない、もちろんのことだ。再び稲妻の速さを取り戻した彼らは、サキの十メートル手前で空へ躍り上がった。

「この月は美しいですわよね……私は目が不自由なのですが、それでも感じられますわ、蒼く澄み切った眩いほどの光を」

そう、サキは目が不自由なのだ。けれどもなぜ、彼はこんなにも余裕綽々なのだろうか。

月光に異形の姿が露になる。その姿は醜い。青黒い爛れてぬめった肌。紫の一つ目。赤い針のような爪。尻には長く黒い毛を生やし、その下の二本足は鳥のそれに似ている。

跳躍した異形たちが落下を始める。落下点はサキだ。

ネガイの姿がない。

異形たちの姿が暗黒に飲まれた。唐突に彼らの姿は見えなくなり、一秒の後に同様の唐突さで彼らの姿が現れた。しかし、その身体に四肢と首はなかった。

サキの足元に五体の屍が落ちた。出血は不自然に少ないが、落下の勢いでわずかな体液がサキの白い頬を汚した。

「……もう。ネガイ？ できるのならもっときれいな方法で戦ってくださいな」

「申し訳ありません」

月光が作るサキの影から、ネガイが湧き出るように現れた。彼女はそでから白い布を取り出し、サキの頬の穢れをふき取った。

穢れのなくなった頬で、彼は少し笑った。そして、新たに動き出した八の気配を、その風の動きを肌で感じながら、彼は唱えた。

「come on, defensive light」

サキの周囲に八つの光の球が出現する。

そこへ異形が突撃した。

光球が高速で動き出し、一つ一つが異形の頭部を貫く。すると、しわだらけの頭部は西瓜のように弾け、青紫の脳漿を撒き散らした。

「……でも、私わたくし、あの月を好きになれませんわ。何故なら、あの月は私の物ではありませんから」

果たして、今度はサキに異形達の体液がかかることはなかった。

敵はまだ十いる。

新たな二体が姿勢を低く走り寄ってくる。また、彼らを闇が包んだ。

一瞬。

闇が晴れたあとも異形の姿に変化はなかった。しかし、よく見れば彼らの顔からは紫の一つ目が消えている。もしその眼下を覗きこむ者がいたならば、その者は虚らとなった頭部の内側を見ることになるだろう。

「あなた方はどうお思いですか？ あの月はあなた方の内、誰か一人だけの物ではありません。それでも、あなた方はあの月を好きでいられますか？ 三十秒の制限時間を設けさせていただきます。過ぎれば……死んでいただきますわ」

サキが両手を天に掲げる。手と手の間に赤い光の球が生まれ、それはゆるやかにサキの頭上十メートル程まで上昇した。

「microwave oven……Count down, start!」

残り八体。彼らは身の危険を本能で感じ取り、しゃにむにサキとネガイを目指して駆けだした。

サキの頭上にある赤い光。そこから発せられているのはマイクロウェーブ、電子レンジの中で発せられる電磁波の一つだ。電磁波は光、光を操ることのできるサキは、可視光だけではなく赤より波長の長い光も操ることができるのだ。

一帯を強力なマイクロ波が照らしている。サキとネガイはもちろん照射の外にいるわけだが、中にあるものは避けようのない過熱状態にある。生体なら、体液が沸騰して破裂死する可能性が高い。

異形の爪牙がサキの姿を通過した。しかし、それは幻。聴覚と触

覚、そして先視の能力を最大限に活かし、彼は異形達の攻撃をか
わす。

彼は自らの軌道に残像を残し、異形を惑わす。その光景は、まさ
しく光との輪舞だ。

「鬼さんこちら。ふふふ」

サキに習ってネガイも異形達を攻撃しない。わざと姿を現したま
ま、質量を伴った闇の流れで敵を吹き飛ばしてはまた引き寄せてい
た。

「あと十秒ですわ。はやくお答え下さいな」

異形達の動きが少しずつ緩慢になってきた。マイク口波を浴びて
いることで、体温が異常に上がり続けているからだ。

「五・四・三・二・一　はい、では、boiler！」

サキの言葉を合図に、異形達の体液が沸騰をはじめた。頭部を始
め、首、胸、足、血液の多い場所がほぼ一斉に弾けた。

水風船を割るようだった。飛び散らされた体液、内臓の欠片から
は、温かなしかし不快なおいにする湯気が立ち上っていた。

「残念ですわ……色々な意味で」

足についてしまった体液をハンカチで拭いながら、心底残念そう
に彼は言った。

*

「もう一つ、質問がありますのよ」

光のないスーパーマーケットの中で、ネガイを伴い歩くサキは言
った。二人が歩くのは食品売り場。冷却能力を失った保存機の前を
過ぎ去り、二人は缶詰やレトルト食品といった保存食の類を集めて

いる。目の不自由なサキに闇を属性とするネガイ、二人とも光がなくとも何不自由な様子だ。

「ネガイ、先ほどあなたは、'夜空' という表現を使いましたわよね？ 昼の刻を奪われたこの町で、'夜' という概念は存在しうるものなのですか？」

自分ならどうするのか、そんなことは一切棚に上げたような一方的な質問。

問いかげながらもサキは食料を拾う。それは気のおもむくままといった様子で、自分が拾った量を鑑みる様子はない。そして持つのは一切がネガイの役目。どれだけかこの中身が重くなるうと、サキにつき従う彼女。だが、彼女のほうにこのことを不満にする様子もない。ネガイは下僕で、主人がサキなのだ。

「はい、確かにこの街にはもはや'昼' という概念はありません。サキ様と私がこの街に滞在している七日の間、一度も日の光がこの街を照らすことはありませんでした。しかし、私達は昼を忘れたわけではありませんし、この街の住民となつたわけでもありません。ですから、昼の概念が失われたというこの街の則に、私達が従う必要もないかと判断します」

サキはその答えに何も言わなかった。声も立てずに、にこりと一人笑い、足を進めスーパーマーケットを後にした。

二人の姿はいったん月下を歩き、次に衣料品店へと入った。

洗濯能力のない その気もない 二人は、下着を拾っては捨て捨ては捨てとその繰り返しをしていた。今度も、まったくそのためにやってきた。

「そういえばもう一週間になりますのね、この街に来てから。いいかげん、キズオトちゃんに会うために動き出す頃合ですわね」

天戸の宅あまのやねを去り現まじに来た二人は、すぐにこの街にたどり着きそれから動いていなかった。それはひとえにチヨを待ったためだったが……
「思ったより遅いのですもの、チヨは。 本当に、先の見えない未来を待つというのは、こんなにも焦がれるものでしたのね」
嘆息。

かつてサキの性別が女であったときは、その先視の力は的確に近い未来を予見し、時には断片的ではあれ十年先まで見通すほどであった。しかしツミによって男性の身体に変えられて以来、どれだけ意識をトバそうとも、半日先を見るのがやっとだった。

「まあ、なくしたものを悔やんでも仕方ありませんわ。代わりに、健康を得られましたもの」

ツミさんの仰ったとおりでしたわ。

彼は声に出さずにそう胸の中で言った。まるで、大切なものを箱に入れたままそっと覗くかのように。

そして気がつけば、物思いに耽ったせいか足も手も止まっていた。背後のネガイも、彼の影法師のように動きを止めていた。

「私つたら…… あら？ 生きた人のおいがしますわね」

「生きた人」というのは、「異形ではない」という意味である。

サキは猫並みの嗅覚を持っているわけではない。しかし視覚の代わりに強化された嗅覚は、何らかの原因で人間が強い体臭を放ち始めたときには、離れていようともそれを嗅ぎ取ることができる。そして今は

「これは……病気の方？ ネガイ、誰かいますか？」

闇の中では特殊な知覚能力を発揮できるネガイに、サキは問う。

「はい、発見しました。幼い少女が一人、ここより南十メートル

ルの位置にある試着室の中で眠っています。体温の過剰上昇を感じます」

気配のするほうへサキは進む。ネガイはその後に従う。試着室のカーテンを開くと、そこにまず布の山があり、内部に少女が丸くなって眠っていた。悪寒に身を震わせている。

サキは少女を覆う衣類をどけた。そして彼は少女の顔に手を伸ばし、遠慮する様子もなく、その造形を確かめるために撫で回した。「まあ、なんてかわいらしい女の子」

触覚で感じた少女の面立ちは、日本人のものとは異なっていた。すらりとした鼻梁、全体に彫りが深い。しかし輪郭は愛らしい曲線を持っており、まるで人形のような可憐な顔だった。

顔をなでられた感覚が少女の意識を覚醒させた。開かれた眼は、半開きながらもすばらしい大きさを持つていた。

「誰？」 小鳥のような声が、眠そうに小さく問う。

「お邪魔してしまいましたか？ 私はサキと申します。わたし故あってこの街にしばらくとどまり、しかし明日ぐらいには出立しようと考えていた者です。あなたに危害を加える意思はありません」

そう、サキはあやしつけるように囁いた。その甘い声音に、熱に浮かされた少女の意識はずるずると眠りの中へと帰って行った。

「どうやら、あまりよくない感じですね。ここは一つ、この街を去る前に私たちが看病さしあげることに行きましょう。良いですね、ネガイ？」

彼の下僕は反論しなかった。

では、とサキは少女を両腕に抱き上げ言った。

「私とこの子は、きれいなダブルベットを探してそこで一眠りします。ネガイはこの子の服を探してきてください。なるべく、かわいらしいものにしてくださいね」

楽しいなサキ。彼は腕の中の少女の頬に唇を当てた。

ぶるん、と少女の頬はやわらかい弾性を持って彼の唇を押し返した。

2・1「闇に沈む街」（後書き）

『my moon』の時も第二幕はサキとネガイがテーマでした。いきなり活躍してますね、サキは。彼は英語を話せます。ですが、スペリングがあっているかどうか不安です。

皆さん、電子レンジの原理は御存知でしょうか？

マイクロ波も光も、波長が違うだけでみんな同じ電磁波です。つまりサキは光ではなく電磁波を使うのです。その気になればラジオ放送もするかも知れません。

久しぶりに三人称で書きました。言葉遣いが変わったらご指摘お願いします。

2・2「疑惑する孤独人形」

白いベッドの中、少女のような少年と、彼に抱かれる人形のような少女が眠っていた。

ここはある廃デパートの第六フロア。電気の明かりはないが、漏れ入る月の明かりはある。

眠れる二人を微かな月明かりが照らしている。

ベッドの脇には黒い女性。ネガイという彼女は、ただ静かに立って眠れる二人を見下ろしている。しかし、その姿にを照らし出す光はない。闇に身を包み二人を見守るネガイ。その顔はいかなる感情も表にしていなかったが、彼女の雰囲気には別れを告げるような不可解な含みがあった。

ともあれ、それから二時間ほど経過してから二人は目を覚ますことになる。

「誰……?」

少女の第一声。

少女は起きてすぐに、自分が見知らぬ人間に添い寝されていることに気付いた。さらに、自分がパンツ一枚のみしか身していないことに気付き、まだ起き上がっていないサキからシーツを奪い、それに隠れるようにくるまった。

「あら……恐がらないで下さい。私わたくしはあなたに悪いことをするつもりはありませんわ。あなたが熱を出されて眠っていらしたので、私とネガイで看病さし上げていましたのよ」

彼の言葉を聞き、少女は自らの身を顧みた。なるほど確かに記憶の最後にある身体の熱っぽさが無くなっている。完全ではないにし

る、大分身体の調子も良くなっている。

少女の身体に巣くっていた病魔を退けたのはネガイだった。

「闇」、その中に内包される「災い」の概念を使い、ネガイは少女の病魔を打ち消したのだ。

少女の様子を見て、サキは満足に思った。彼はベッドの縁に腰掛け、少女に無用のおびえを与えぬ為に腕一本分の長さを取った。さらに、立ちつくしていたネガイにも座るように促した。

「私の顔が見えますか……見えませんわよね。明かりを点けてよろしいですか？」

「どうやって、と少女は疑問に思いつつ、とりあえず首を縦に振った。」

「では……lightning」

三者のちょうど中心となる位置に、光の球が現れた。少女はすごいと思ったが、同時に驚くことではないとも思った。少女は不思議な力に対して見知りがあった。

明かりの中で少女はサキとネガイを観察した。サキは白い無地のTシャツに黒いスラックスという姿だった。ネガイは漆黒の留袖姿。サキは現の人間らしい姿をしているが、ネガイの格好は異質だと、少女は思った。

「眩しくありませんか？」

少女はかぶりを振った。

「では、まず服を着ませんか？ その前に、体をお拭きしないといけません」

見知らぬ人間に身体を触られることを警戒したが、二人に害意はないと言つことを信じ、その提案を受け入れた。

少女が自ら身にまもっていたシーツを脱いだ。その時、少女は小さく震えた。

「寒いのですね。少し我慢してください。ネガイ、頼みますわ」

ネガイは頷き、用意していたお湯の張った桶と薄紅のタオルを取り出した。

彼女が少女に近づくと、少女は怯えたようにびくりと身をすくませた。

「安心してください。ネガイは私の言いつけ以上のことはしませんから」

サキの言葉に、少女はぎこちなく頷いた。

少女の肌は垢に汚れていた。しかしネガイが身体を拭き終わると、その全身は真珠のような輝きを持っていることが明らかになった。自分の主人のそれに勝るとも劣らない物だ、とネガイは秘かに思った。

次に着衣。自身が治したものだが、少女がまだ病み上がりだということを考慮し、ネガイは少女の下着を厚めのものにした。その上から白と青のフリルが見事なドレスを着せつけた。

「済みました、サキ様」

ネガイは少女から一步退き、上品に頭を下げた。

「どうですか？ かわいらしくできましたか？」

「はい……良い仕事をさせて頂けたと思います」

ドレスの色は、少女のサマーグリーンの髪とフロステイブルーの瞳に合わせて選ばれたものだった。思惑通り、シアンのスカートと瞳の色は共に引き立てあい、白い背中にはサマーグリーンの髪がさりりと流れ、少女の愛らしさを一つの人形の如き完成度に持ち上げていた。

少女の表情にも微かながら喜びの色がある。可愛らしい装いをすることができたという、女性らしい喜びだった。サキはその表情を見ることはできなかつたが、気配は逃さず感じていた。

「喜んでいただけただようですね」

サキの問いに、少女は顔を赤く染めしかし答える。

「はい……ありがとうございます」
ぱつとサキは破顔した。

「ふふ、それはなによりですわ。 少し、お腹が空きましたわね。
ネガイ、用意はできてますか？」

ガスコンロで薬缶やかんの水を湧かし、それでカップ焼きそばを作る。
サキは味の濃い焼きそばが好きだった。

少女は前掛けをつけ焼きそばを食べている。ネガイも伴食していた。

「お口に合いますか？」

少女は焼きそばを頬張りながら無言で頷いた。

「お腹が空いていらしたんですね。でも、まだ病み上がりですから、
あまり詰め込んではいけませんわよ」

とサキは言うが、少女の持っている容器の内容は既に減らされている。
減らされた分は彼が食べているのだ。

程なくして三者はほぼ同時に食べ終えた。全員の容器をネガイが
回収し、離れた場所にあるゴミ箱まで捨ててに行った。

「現には便利な食べ物がある、そう思いませんか？ 数多くある
現の保存食の中では、私わたくしはこのカップ焼きそばが一番気に入りましたわ。
そう言えば、私は生の焼きそばを食べたことはありませんけど。
あなたの好きな食べ物は何ですか？」

質問されたことに、少女は少し目を見開いて反応した。他愛のない
事柄だが、自分のことを話すことに少女は少し戸惑い、しかし邪
気の無いサキの表情にある程度の警戒は解くことにした。

「キドニーパイ」

それは腎臓を中身にしたパイ。イギリスの郷土料理だが、サキは全く知らなかった。けれどもその事を顔には出さず、曖昧に微笑して返答とした。

そして、問う。

「お名前をお聞きしてもよろしいですか？ 私の名はサキ、その彼女はネガイと申します」

少女は顔を伏せ、上目遣いにサキを窺った。じっと、最大限の観察で彼を見る。そうして、少女はあることに気が付いた。

「お姉様、御目が見えてないのですか……？」

え？ とサキは頓狂な声を出した。‘お姉様’。サキは始め堪えたが、しかし無理だった。その中性的な声で、彼は大笑いしはじめた。

「ええ、ええ、お兄様は目が不自由なんですの」

彼の哄笑に、少女は表情を凍らせてしまっていた。そこでようやく、サキは自制して笑いを収めることができた。

「……驚かせて申し訳ありません。そうですね……現に来て大分声も低くなりましたし、そろそろ口調もふさわしいものにならないとほかの人に誤解ばかり与えてしまうかもしれませんわ……」

しゅん、と考え込む表情になったサキに、少女は恐る恐る尋ねた。

「その……サキさんは、男の方なんですか……？」

サキはほんの少し、さびしそうに微笑した。

「男性が怖いのですか？」

少女はさらに表情をこわばらせ、しかし重ねて問う。

「それで……」「はい、目は見えません。ほとんど、視力がないのです」

少女の顔から感情が消えた。今、少女は心中で、自分が男性である事と盲目であること、その二つを秤にかけているのだろうとサキは推測した。そして彼はそれが差別的なものと考えだと思い、しかし少女もその事を多少なりとも感じていて、それ故に迷っているのだろうとも思った。

彼は問う。

「お名前を、教えてくださいまし」

ぎこちなく、少女の口が音を作った。

「私……アケルナル。今は、そう言います」

では、とサキは真剣な表情を作り少女アケルナルに告げた。

「アケルナル、私を信じるのはお止めなさい。私とネガイは近いうちこの街を去ります。そう　今すぐにでも」

「いや！」

アケルナルが高く叫んだ。そして、ためらいもなくサキの腕に抱きついて言う。

「行かないで……ください。……私、寂しいんです。私、兄さんを待っていて……兄さんはなかなか帰ってこなくて……私、病氣して、誰かのご飯食べたのなんか久しぶりで、……その……」

断片的にたたみかけ、涙ぐみ始めるアケルナル。まだ下がりきつてない病の熱を片腕に感じながら、サキはあいている手を彼女の頭に置いた。

「そう、寂しかったのですね。人を信じるということは難しいことです。私たちを疑った事は人として当然の事ですから、お気にやむことはありませんよ。謝罪の言葉は、どうか胸の中にしまっておいてください」

サキはアケルナルのサマーグリーンの髪を撫でる。彼女は一瞬身をすくめたが、じっと彼に身をゆだねた。

「お兄様がいらっしやるんですの？」

アケルナルが肯んじた。

「はい、兄さんは私にとってたつた一人の家族で、私のそばにいてくれる唯一の人です。私たちの夢が、月の御方様に降着させられて見知っている人が現に散らばってしまったても、兄さんだけが私と一緒にいてくれたんです」

「今は、どちらにおられるのですか？」

一瞬、アケルナルは言葉に詰まった。それは現の人間にならとも聞かせられないような秘密だったからだ。サキは夢の人間のようにだが、自分達とは立場が違う。しかし、彼の人格を信じ話してしまおうと、彼女は決心した。

「兄さんは……御方様の直属の部下 月の子 ブラネスフィア の一人として各地を廻っているんです。私は戦うことができないので、ここで兄さんの帰りを待つて居るんです。兄さんは、一週間に一度帰ってきてくれます……」

一週間。しかし昼夜のないこの街で、その時はより長く感じられるだろう。幼い少女にとっては尚更のこと。サキは、そう心から同情した。

「いけないお方ですわ、こんな可愛らしい妹さんを一人にするなんて……」

サキの言葉に、アケルナルは激しくかぶりを振った。

「いいえ、兄さんは悪くありません！ 私が戦うことを恐がったから、兄さんは一人で戦わなくちゃいけなくなっただんです。寂しいのは、兄さんも同じです」

「……優しいですね。アケルナルちゃんは」

サキはそつと彼女を抱き寄せた。平たい胸に、アケルナルの小さな頭がもたれかかる。

「わかりました。こんな私達でよろしければ、お兄様が帰ってくるまでの間あなたの側にいましょう。 よろしいですね、ネガイ」
ネガイは黙って頷いた。

「……ごめんなさい。サキさんとネガイさんは行くところがありませんのよ」

「お構いなく。可愛い女の子と独りにするのは、滅すべき悪徳ですから」

サキの最後の言葉に、アケルナルは兄を思つて反駁はんぱくしようとした。しかし、サキが晴れやかに微笑すると、つられてアケルナルも笑い言葉を呑み込んでしまった。

*

アケルナルを腕に抱き再び就いた眠りの中で、サキは先視をした。目を覚ました彼は、アケルナルを起こさないようネガイに睡眠術をかけさせ、そしてネガイを同伴してデパートの屋上へ行った。

屋上階は硝子に囲まれた部屋があり、その外にコンクリートの床と空があった。硝子の扉の向こうには、銀のマントに身を包んだ三人がいて、彼らはしきりに何かを話し合っているようだった。サキとネガイが近くに寄ると、ぎよつとして二人へ振り向いた。

唐突にサキは言う。

「アケルナルちゃんのお兄様はどちら様でしょうか？」

その問いに、三人はそれぞれ異なった反応を示した。呆れる者と同情する者、三人の内二人がそれで、その感情は最後の一人に向けられていた。そう、その者が

「俺だ。アケルナルは俺の妹だ」

挑みかかるような口調と共に、声の主はフードをめくった。高校

生くらいに、まだ少年と呼べる者。しかしその露わにされた顔は、妹と同様の造形美を持っていた。顔を包む、眺めの黒い艶やかな髪に、妹と同じフロステイブルの瞳。鼻は高く美しい三角形をなしている。

サキはその顔を見ることはできない。だが、やはり似通った雰囲気を持っていて、感じている。

「妹様を大切に思っていていらっしやるのでしたら、今すぐにそのマントを捨て戦うことをおやめなさい。さもないと、痛い目にあってももらいますわ」

いつになく強い口調のサキ。虚ろな双眸は閉じられ、眉間にしわを寄せている。

対するアケルナルの兄もまた表情を硬くしていた。譲れない物を心に秘めた両者。彼らのにらみ合いはしばらく続いた。

「俺は、月の御方の下で世界を創り替える。この歪んだ世界を正し、争いのない安らかな世界にするんだ。そうだ、俺は選ばれたんだ。全宇宙にたった八十八人しかいない月の子の一人に。その為に『エリダヌス』という名も授かった。俺はエリダヌスだ！ 誉れある月の子の一人として、戦いを止めるわけにはいかない！」

「妹様を孤独にしてもですか！？ あの子は、この位街で一人きり、孤独から目を反らせないままあなたの帰りを待っている。ごはんを食べるときも一人。病気をしても、誰にも診て貰えない。……それが、どれだけのことかわかりますか？ 私、怒っているのですよ！」

サキは叱責する。しかし、アケルナルの兄、エリダヌスもまた、沸々とした激情を胸に秘めていた。

「黙れ！ 月の御方の寵愛を受けながら御方に背き、ついには男の

身におとされた売女め。俺は妹を……アルを一時だつて忘れたことはない。だが、今は為すべきことがある。いずれ、麗しき月の王国ができた黄昏には、この孤独も過去の記憶となり忘れられるだろう……。先視の娘 よ、大局を見よ！」

「芝居がかった口調で、己の本音を隠そうとしているのですか……?!?」

憤りを堪え噛みしめていたサキの唇から、血が一筋流れた。

「そうですね、よくわかりました。その盲目さ、己が身で償いなさい」

サキはエリダヌスに背を向け、ネガイに向き直った。

焦点の定まらない天色の双眸で、サキはネガイを見る。まるで

そんなことは不可能のだが 目を合わせようとするように。

そしてネガイもまた、虚ろなサキの瞳をじつと覗き込んだ。

「ネガイ、人間を捨てる覚悟はできてますか？」

2・2「疑惑する孤独人形」（後書き）

第二幕はあと一話です。ちょっと詰め込む感じになりそうです。
（なら止めるよ……）

今回はサキが怒りましたね。今まで怒るのはアカぐらいでしたが、二人は少し似ているかもしれせん。

あんまり日本神話の要素を出せません。楽しみにしている方、申し訳ありません。

2・3「the blightness in the dark」

その時サキは、心身の両面でネガイと合一していることを感じていた。それは性交の部分的な合一とは違う、文字通りの合一。サキとネガイは、物質的な形を曖昧にして一つに溶け合っていた。

『私はイザナミ。死して黄泉に封ぜられた神の名を持つ人ならぬ者妖あやかしです』

初めて二人が会ったとき、彼女はそう言った。出会いは、天戸あまのの宅やねを訪れたサキを、ネガイが迎える形だった。

彼女の言葉に、サキはこう答えた。

『ずいぶん重い名ですこと。そんな名はお捨てなさいな。替わりに……そう、ネガイ、と名乗りなさいまし。私は、未来サキ、あなたは、願ネガイい、良いですね？』

あれから百年に近いときが流れた。二人だけだった生活に、キズオトが加わりササヤキが加わり……。彼女たちは終にネガイが人ではないことを知らずに、姿を消していった。だが、それは間違ったことではなかったのだ。‘ネガイ’の名を持つ彼女は紛れもなく人間だったのだから。

人間を捨てる覚悟はできてますか？

問いに、ネガイは‘Yse’と答え、その存在を消した。

もう‘ネガイ’という存在は宇宙のどこにもない。今、サキの傍らにあるのは昏き闇から湧き出る力だけだ。だが、サキは変わらぬネガイの‘想い’を感じていた。

「今こそ未来に願いを 希望を示す明星の光とならん！」

サキの身体が、眩く白い光と螺旋を描く黒い闇に包まれる。纏う衣服が再構築される。純白の長袖シャツに、漆黒のズボンとマント。

白い髪と天色の瞳は変わらない。だが、その額を縦に裂いて紫苑色の瞳が開いた。

そして彼の左手に一丁の散弾銃。磨き上げられた黒曜石のようなボディを基礎に、グリップはつやのない象牙質、トリガーは白金。虚のような銃口は十ミリメートルほど。バレルには祝詞が草書体で白く書き連ねられている。

砂利を踏むような音を立て、サキは銃を持ち上げ構える。その先はもちろん、エリダヌス以下三人の フラインスフィア 月の子 いくゆみや だ。

「闇から生まれし光 これが私の生弓矢ですわ。……さあ、最初にぶち込まれたい方はどちらですか？」

月の子の一人、エリダヌスと同じ背丈のものがせせら笑った。

「ほざけ！ めくらのためえに何ができる」

やや低い男の声が言うや、サキは彼に向かって引き金を絞った。

射撃される無音の衝撃。それはレーザーでなく、放電する光の粒子。散弾は、その名の通り拡散しながら敵へと飛来した。

月の子三人の手前で、光の散弾は不可視の壁と衝突した。

「防護、反射！」

やわらかな響きの女性の声が唱えた。

光の弾丸がまっすぐ跳ね返される。だが、サキはすでに位置を変えており、反射された光の弾丸は何にも当たらずに虚空を駆けていった。

彼は三人の側面に回り込んでいた。気負いのない動作で、第二の射撃をする。

「無駄よ！ 反射！」

三人を囲む結界が光った。

しかし弾丸は真つ向から結界にぶつからなかった。四散し、八方へ飛び、あらゆる方位から三人を守る結界を叩き、砕いた。

「うわぁ！」

結界を砕かれた衝撃が、フードをかぶった二人の顔を露わにした。顎の鋭い金髪の青年と、黒い髪の中年くらいの女性だった。

「くそ、よくもあのお方から授かった俺たちのマントを！」

金髪の青年がいきりたつて喚いた。

「油断するな、カリス・ミノル。相手は腐っても、かつて月の御方の側に待った者だ。どんな底力を秘めているかわからんぞ」

カリス・ミノルと呼ばれた青年は、空に手をやり何も無い場所から長槍を引き抜いた。長槍の長さは二メートル超。馬蹄型の穂先を低く構え、彼は叫ぶ。

「いくぜニューハーフ。月の子の一人、このカリスがためえを穴だらけにしてやる」

カリスとサキの距離は約五メートル。この距離なら、長槍を持つカリスは銃を持つサキと同程度の戦闘ができるはずである。

一閃。音速の突きを、サキは僅かに半身をずらしてかわす。
第二閃、これも微小の動きでかわす。

銃口はカリスに向けられ、しかし射撃されない。見下すようなサキの威嚇に、カリスは激昂した。

「野郎！ これでもくらいやがれ！」
カリスが高速の連続突きを放つ。一秒間に八度繰り出される突きは、常人の目には花火のようにしか見えない。

しかしサキは余裕の表情でこれを防ぐ。彼の動きは特別速いわけではない。少し身体をずらしたり、銃のバレルで穂先の軌道を変えたり、それだけ。緩やかで、流れるような動きだった。

「氷刃！」

後方の女性が支援の攻撃術を放った。

幾つもの氷の刃が飛来する。光の散弾が、それを迎撃した。

「隙あり！」

背丈の差を利用し、カリスは槍をサキの首筋に向かって突き下ろした。

だが次の瞬間、背後から流れてきた光の弾丸によってカリスの両腕と槍は粉碎され、攻撃は中断された。

「ぐあああああああ！」

氷刃を跳ね返した光の散弾が、そのまま消えずに飛び続けていたのだ。光を操るのはサキの能力、そして

「お忘れではありませんわよね？ 私が先視わたくしの使い手だということを。

あなたの動きが一瞬先にでもわかっていたら、こちらから攻撃を当てる事は可能なんですのよ。なぜなら、光は何よりも早く動く

のですから」

彼自身はすばやく動けなくとも、光は速い。彼の反応に、時間差なく光は動く。加えて、彼の第三の眼。この眼が開いた事により彼の先視の能力は大幅に強化され、まさしく未来を「見る」ことを可能とさせていた。

「見える、とは面白いことですね。 あなたのその顔、ぞくぞくしましてよ？」

両腕を失い膝をつく自分を見下ろす、焦点の定まっている紫苑の瞳。カリスは恐怖に顔を歪ませてそれを見上げた。

「では、まずあなたから死んでください」

口の端を歪に引いて、サキは引き金を絞った。

水袋をたたき付けるような音。

横たわったカリス・ミノルの屍には、両腕と頭部、つまり上半身から生えている部位がすべてなくなっていた。その断面から流れ出す血液は、サキの黒い靴底を濡らした。

「次は、そちらの女性の方ですわ」

黒の散弾銃を女に向かって構えなおす動きをつくると、それに伴い血に浸った足下で水音がした。

「させるか！」

銀の両刃剣を両手で構えたエリダヌスがサキに斬りかかる。

サキはその斬撃を先視して回避。銃を右手で持ちそれで彼を牽制しつつ、左手で空中に光の文字を書き始めた。

『The attack cannot hit me, because...』(その攻撃は私には届かない、何故なら……)

流れるような美しい筆記体。さらに、文の横に呪術的な意味のある文様を描いていく。

「く、この……当たれ！」

エリダヌスの攻撃がサキに当たる様子はない。サキは顔を彼に向けていない、おまけに立ち位置もほとんど変えていなかった。

エリダヌス、離れて。

女がエリダヌスに念話で伝える。彼は、口惜しそうに渋々サキから離れた。

「、招来、烈火、朱雀！」

サキに向かって鳥の形をした炎が放たれる。炎は床のコンクリートを融かすほどの熱を持っている。

一直線にサキに向かって飛ぶ炎の鳥。

それは悠然と構えたサキの手前で、何の抵抗もなく進行方向を反転させた。

「な……反転術陣!？」

‘反転’は‘反射’とは違う。反転の術は反射の術よりも効果が高い。しかし反転の術は相手の術によって使い分ける必要がある。つまり、相手の攻撃を予測できなければ使うことはできないのだ。

サキにとってその予測は何よりも得意とするところだった。敵対した女が使う術が炎に関するものだとは先視したサキは、このようなことを空に書いていた。

『Fire is born the south. So it should return the south』(火は南で生まれる。なので、南に還るべきである)

これは陰陽道の術形態に則った呪文。

蒼い月を背にした女が自ら放った炎の鳥に襲われた。

「エリダヌス……アルちゃんを大切に……」

女の声はそこで途絶え、炎が晴れたときにはそこに塵もなかった。

「あらあら……どうしますの、お兄様？ まだ私と戦いますの？」
軽い口調でサキは問う。エリダヌスは、憤怒に声を濁らせて答える。

「当たり前だ！ この ブラネスフィア 月の子 のエリダヌス。同士の無念を晴らさずに、退くことはない！」

雄叫び一つ、エリダヌスは己の足下に剣を突き立てた。

彼を中心に半径十メートルの床が一瞬で破碎した。砕けたコンクリートは粉体となり、煙幕のようにサキの周囲を覆った。

「くだらない」

その煙幕の中ではもちろん視界が利かない。それに加え、バラバラとコンクリート片が落ちる音が聴覚を奪い、肌を叩く欠片が触覚も奪う。

エリダヌスの勝算はこうだ　いくらサキがこちらの攻撃を先視しようとして、剣士である自分の方が彼が動くより早く攻撃できる。加えて、いま彼は感覚を奪われている。

サキの背後から斬りかかった。

が、彼の予測に反してサキは動いた。しかも、それは回避ではなく攻撃。上段に振りかぶったエリダヌスの胴を、サキは渾身の力で薙ぎ払った。

仰向けに倒れたところで、剣を握った右腕を足で押さえられた。

右の肩口に、ひやりとする銃口が押し当てられた。

「この右腕、要りませんわよね？」

感情のないサキの声。引き金にかかって指に、くつと力が込められるのをエリダヌスは見た。

「あがああああああつああ！」

銃声はなく、響いたのは肉の弾ける音。

エリダヌスの右腕が、主を離れて飛んでいく。右腕は根こそぎ無くなった。傷口は肺にまで達し、そこから覗くのは骨だけではなく、パイプのような大きな血管も断面を見せていた。

大量の出血。エリダヌスはほとんど即座に意識を失い、身体はぶるぶると震えはじめていた。

「あら……これでは死んでしまいますわ。その前に、お話ししましょう」

サキは痙攣するエリダヌスの頭の上に膝をつき、彼の額に手を置いて脳に直接呼びかけた。

『選んで下さい。Die or Live?』

返事はない。彼は、死を望もうとしていた。

サキは重ねて呼びかける。

『では、妹様はどうしましょう？ そろそろ目が覚めて私がいないうちに気付いている頃だと思えますが。そうですね、あなたが死ぬのなら、あの子も後を追わせてあげましょう。それなら、誰も寂しがることもないですわね』

脳に直接する会話に、嘘は吐けない。サキは本気だった。

エリダヌスの意識が震えた。

『あなたにとって、何が一番大切なのですか？』

彼の意識は迷わず答えた。アル、と。

『ならば、誓いなさい。金輪際ツミさんと袂を分かち、妹様の傍でのみ生きると。少なくとも、妹様があなたを必要としている間は、共にいて上げるべきではありませんこと？』

彼は恥じ入り、謝罪をはじめた。すまない、その言葉は彼の関わ

ったあらゆるものに向けられていた。

サキは立ち上がる。両手を組み合わせ集中し、眩い癒しの光を創りだした。

「さあ、あなたの願いを未来へと繋げましょう」

*

アケルナルは暗闇の中、一人目を覚ました。

誰もいないデパートの寝具売り場、サキはどこへ行ってしまったのだろう。

夢だったのかもしれない。

「兄さん……」

孤独感に抗うように、アケルナルは呟いた。

ベットから出る。自分がドレスを、それもなかなか可愛らしいものを身に着けていることに気付いた。

迷い子のお姫様、と彼女は自分を形容する。滑稽だと。

ふと、窓の外に目をやると空が白んでいた。昼の刻を奪われた終わるはずのない夜の街に、おとずれる優しい夜明け。硝子越しではなく直で見る為に、アケルナルは屋上へと向かった。

気がはやり、息を切らせて階段を登る。

屋上に出ると、やはり夜明けの薄桜の光が彼女を迎える。

太陽はまだ見えない。東から西にかけて、紅、珊瑚、白群、紺碧、藍、そして黒、美しいグラデーションの空。月が輝きを失い、星が一つ一つ消えていく様を、少女は息を詰めて見つめた。

じやり、と砂の噛む音。振り向くと、そこにアケルナルの待ち焦がれた人物がいた。

「兄さん……！」 「アル！」

アケルナルは兄に駆け寄り、腰の少し上に抱きつく。兄は抱き返してこない、否、自分の身体に巻き付くのは左腕だけで、右腕はと言うと

「兄さん、腕が……！」

エリダヌスは身体の右側に黒いボロ布を巻き付けているが、そこにあるべき厚みがなかった。それに気付いたアケルナルの顔に衝撃が走る。彼女の兄は、腰を屈め笑いかけ、頭を撫でた。

「心配は要らないよ、アル。俺は何ともない。お前のことは、左腕一本でも守っていけるから」

そう言っただけで彼は妹を左腕で抱え上げ、東の空と向かい合った。日の出は進行していない、だがそこにあつた。

曙光に照らされた兄の風貌は、すりきれた黒いズボンに裸の上半身といったものだった。その身体からは血のおいがする。だが、それは戦の名残と言うべき痛みのおいではなく、力強く脈動する命のおいだと、アケルナルは思った。

「俺が一番大切なものに気付くまでにたくさんの時間を使ってしまった。たくさんさんの命を失わせてしまった。それらは取り戻せるものではないし、かといって俺が償いきれるものでもない。」

でも、アル。お前が許してくれるのなら、これからはずっとお前の側にいたいと思う。これまでにあつたすべての過去を捨てて、一からこの世界でお前と生きたい」

兄の横顔には、一切の悔恨がなかった。過去とのしがらみを斬り捨て、その上で過去と向き合う、そんな潔さが彼の顔で光っていた。アケルナルに兄を罰する気持ちは欠片もなかった。それどころか、兄がそこまで自分に献身してくれることに後ろめたさを感じてさえいた。

だが、彼女はそんな気持ちを表現できるほど大人ではなかった。

「……ずっと一緒にいてね、兄さん」

幼い笑みの言葉。夜明けに照らされて、二つの顔が笑っていた。

輝く地平線を左手にサキは歩く。

「まもなくこの夜明けは終わり、また夜に戻ることでしょう。違いますか、ネガイ？」

だが、彼の傍らにその女性はいない。黒い散弾銃の銃床で、彼は頭を掻いた。

「寂しいものですわね、独りは。 ツミさん、あなたはどんなのですか？」

白い骨色の月に向かって独り言。そして彼はたゆまず歩き続けた。

2・3「the blightness in the dark」(後書き)

フラスウィア

月の子 というのはそのまま星のことです。エリダヌスは、太陽神アポロンの子供が落ちた川の星座、アケルナルはエリダヌス座の中で一番明るい星らしいです。見たことはありません。

彼らの名前はツミから与えられたもので、前は別の名前でした。これからは、どんな名を名乗っていくのでしょうかね。

……そう、実はツミ君の本名を考えていません。最終話に向かう為には必要な鍵だと思っんですが……。

次回からは予定を変えて、バトル全開で行こうと思います。アカはですすし、水と氷の二人も登場です。

3・1「想いと立場」

そして、チヨとサキは再び巡り会った。ボクラ

相変わらず、サキはいたずらっぽいやつぽい雰囲気を漂わせていた。声が低くなり、服も巫女服じゃなくなったけど、サキはそのままだった。

「私わたくしと離れている間、寂しがつてくれました？ 切なくて、自分で慰めたりしました？」

一人でいるときはサキと優見のことを半々、そしてご主人様のことをちよつと考えていた気がする。サキのことだけを考えていたわけでもないけど、それを言うのは何気に酷いと思う。

何とも言えず曖昧に笑っていると、サキは背を伸ばしてボクの唇を奪った。首の後ろに手を伸ばして引き寄せ、ぐいぐいと濃厚なキスをした。

ネガイはいなくなってしまったのだろうか？

きつとそうなんだろう。何となくだけど、ボクの直感が教える。死んでしまったわけではないと思うけど、もうサキのそばで言葉を交わしたりしない。

淋しいのかな、と思って意識せずにサキを抱きしめた。すると、彼は唇を離してボクの胸に顔を埋めた。

サキは独りになって淋しさを感じた。

サキは声が低くなって、新しい自分に戸惑っている。

サキは余裕そうに振る舞うのをやめ、少しだけ素直になった。

そんな気がして、ボクは彼のことを愛おしく感じた、ちよつとだけ。

ひとしきり再会の喜びを分かち合ったあとは、とりあえず廃墟となったファミリーストランに行って休むことにした。

真っ暗な中、ボツクス席に向かい合って座る。サキが明かりを点けた。

ファミリーストランに食べられる物は残されていなかった。けど、無菌処理のミネラルウォーターとインスタントコーヒーはあったので、それを飲みながらお互いの旅の話とかをした。もちろんコーヒーを飲んだのはサキだけだ。

「私が怒ったのなんて、もう三十年位前の気がしますわ。それくらい可愛らしいお嬢さんでしたのよ、アルちゃんは。……食べちゃいたいくらいでした」

サキがそれを言うと、何故か冗談に聞こえない。

彼の話聞き終わってから、ボクが話した。

「優見さん、ですか……。敵ですわね、その人。チヨは身も心も私の物のはずなんですのよ」

「ボ、ボクはツミの飼い猫だよ」

ボクは真剣に言ったが、サキはさも面白い冗談のように笑い飛ばした。

「またまた……。ああ、でもあなたの黒い髪。確かに、私達の家に来たばかりの頃のツミさんを思い出させますわね」

サキがボクのそう長くない髪に手を伸ばす。そして立ち上がったかと思うと、こちらの席まで来てボクを押し倒した。

ボクの胸に頭を押しつけるサキ。

「や、やだ。ボク、こんな場所は……」

心臓がバクバクいってうるさい。サキも、きつとこの音を聴いている。

「ふふ、あなたはかわいいですね、相変わらず。少し疲れたので、このままお休みさせてくださいまし」

そう言って、サキは目を閉じて本当に眠り込もうとした。

やっぱり、淋しかったのかな？

さつき話をしていたとき、ネガイさんが銃になってしまいうりでもサキは声を乱すことなく、何でもないように話していた。でも、二人は何十年も一緒にいたんだ。やっぱり、いなくなつて淋しくないわけがない。

「サキ、この体勢はさ、ボクも辛いから膝枕してあげるよ」

優しく彼の耳に囁く。サキは起き上がつて、ボクの太ももの上に頭を載せる。そして一言「すみません」と言つて、彼は瞼を下ろした。

微かな寢息。誰かということへの安息感。ボクも目を閉じて、サキと呼吸を合わせながら眠りの中に降りていった。

*

目が覚めると、窓硝子の外が赫かった。夕焼けかな、と思ったけど、その赫はゆらゆらとせわしなく揺れていた。

火！？

耳を澄ませばパチパチと爆ぜる音が聞こえる。店の片隅には、もう既に火が入つてきている。

「サ、サキ起きて！ 火事だよ火事！」

膝の上の頭を掴んで揺さぶると、うー、と眠そうな声を出してサキが起きた。

「んー、火事ですわね……。まあ、じつとしてればいいんじゃないやありませんの？ きつと、揉め事が起きてるのでしょうから」

「な、なに言ってるんだよ、サキ。もうこの店が燃えはじめてるんだよ。早くここから出ないと」

不承不承起き上がったサキの手を引いて、ボクは出入り口に向かう。途中に火の手はあつたけど、出入り口自体に火はなかった。

出たところの駐車場では、運転手を失つて放置された車が何台も

燃え上がっていた。いつ爆発したりするかわからないので、ボクはそこから離れて交差点に行こうとした。

けど、サキがボクの手を引いて立ち止まった。

「サキ？　どうかしたの？」

し、とサキは鋭く言いボクの口を塞いだ。

「ここでじつとしていきましょう。厄介なことになりますわよ」

ボクは理解できない。

と、そこに第三者からの問いがあった。

「そこに誰ぞおるのかや？」

「いいえ、誰もおりませんわ」

て、サキ、自分から何してるんだよ。

「……おとなしく出でよ。話くらいは聞いてやるっ」

聞いたことのある声だった。ちょっと前、ボクが天戸あまこのやねの宅にいた頃に見た夢の中で……。

言われたとおり、店の影から出る。両側四車線の大通りの真ん中で僕らを待っていたのは、やっぱり見覚えのある人だった。長い三つ編みの黒髪に、翡翠色の瞳。背はボクと同じくらい高く、濃い色の肌の上に重たそうな黒いドレスを着ている。そう、この人は

「糸鶴いしづつ……」

名を呼ばれた彼女が、驚いて目を見開いた。

「何故名乗りもしていない妾の名を……。お主ら、何者？」

ボクは、と名乗ろうとしたとき、斜め上から炎が飛んできた。

サキが素早い動きで腰から散弾銃を抜き、空に向かって撃つ。大

きな光の球は炎の球とぶつかり、相殺して消えた。

「何しているの、糸鶴イトリ。口を動かしている暇があったら手を動かさない」

炎を纏って空から降りてくる赫い髪の女の。彼女は、地面に降り立つと金の双眸でボクを見て、サキを見た。

「お久しぶりですわね、アカ。私にとっては五年ぶりですが、あなたはどうですか？」

機先を制すように、先んじて話しかけたサキ。

アカは眉を顰めて答える。

「四年ぶり、ね。変わってないみたいね、あんたは」

「ええ……。アカは変わりましたわね。大人らしく、綺麗になられましたわ」

サキはついこの間まで夢まぼろしにいたから歳をとっていない。でも、アカは現うつに来て四年経つから、その分歳をとっている。

サキの言うとおり、今のアカは綺麗で凛々しい雰囲気を持っている。赫い髪は豊かな波をうって腰まで伸び、パリツとした黒いスーツを着ている。切れ長の眼に長い睫毛、瞳の色は金。鼻は高く、でも大きすぎない。唇には口紅を塗り、薄化粧の頬は薔薇色だ。そう、しげしげと彼女を見ていると、強く睨み付けられた。

「誰？ その女。人間じゃないわね」

むき出しの敵意。けど、ボクはひるまず答える。

「ボクはチヨ。ツミの飼い猫だよ」

「ツミの？」

反射的、といった動作でアカが右手を振り上げそこに火を呼んだ。サキが挑発的に言う。

「そう、チヨはツミさんの飼い猫。あなたさえも愛さなかったツミ

さんが、生涯たった一つ愛した存在。 私との約束を忘れても、彼女の前には姿を現すほどですからね」

サキの言うのは、実はご主人様はサキが現に来たら一度会いに行くと言ったのに、その約束が果たされていないということだ。ボクには会いに来てくれた、けどサキには会っていない。

それを聞いたアカの雰囲気が変わった。さっきまでの雰囲気は、言うなれば純粋な破壊衝動だとしたら、今はそれにどす黒くて粘っこいものが混じった感じ。嫉妬じゃない、そんなものは比較したら生温く感じられる、渦巻く憤怒。

彼女はボクに問う。

「それで？ あんたは何の為にここにしているわけ？ あんたも、あいつの馬鹿みたいな理想郷を創りたいと思っっているわけ？」

「うん、ボクは、ご主人様を止めたいんだ。ご主人様は悪いことをしようとしている。そんな必要もないのに。だから、ボクが止めさせる」

ハン、とアカは鼻で嗤った。馬鹿にしきつた眼でボクを見た。

「じゃあ、あんたはツミを殺すのかい？ 違うんでしょ？」

「うん、もちろん違うよ。殺したり、殺されたり、そんなんじや何も解決しないから」

アカはサキの方を見た。

「サキ、あんたもそうなんですよ。 まったく、いい連れ合いじゃないの」

だけど、サキはゆるゆるとかぶりを振って言う。

「いいえ、アカ。私はわたくしツミさんをこの手にできなかつたら、あの人を殺すつもりですわ」

その言葉に、アカは一瞬虚を突かれた表情になった。サキはそれ

に満足そうにほくそ笑み、散弾銃を鳴らして構えた。

「まあ、それはともかく。……私達とあなた達は敵同士と言つこと
ですわ。かつての友であるうとも、一切容赦しませんわ」

「上等」

業、とボクらの前に炎のカーテンが引かれた。迫り来る火勢は、
そのままアカの敵意と激情だった。

「一つ言っておくわ」 火の向こうからアカは言う。

「今の私の名は、紅鳥、よ。氷室・紅鳥、それが私の名前。ついで
に、そのこのパートナーは紫部・糸鶴。私達は月の子、を狩る
漆黒の守護者。夜の星々を覆い尽くす、漆黒」

炎が猛る。ボクは大地の助力を請いつつ、アカの声を聞いた。

「さあ その罪ごと焼き尽くしてあげる」

戦いが始まった。

3・1「想いと立場」(後書き)

今回はちょっと短いです。

まあ、このあとはバシバシ戦ってもらおうかと思えます。残り四話が予定ですが、五話になるかもしれません。

漆黒の守護者……これでよかったのかなあ。こつこつ組織の名前を考えるのは難しいです。

3・2「激突のはじまり」

火が走る。火が踊る。火が叫ぶ。

実体のないそれから放たれる光は、夜を退け月の色を奪つ。

渴いた風が荒れ狂い、眼や肌を痛くする。

「いつけー、重力！」

光を呑み込んで黒くなる、小さな重力の球がボクの手に生まれる。この持つ力は小さいけど、当たれば痛い。

重力球をアカの足下を狙って放つ。アカがそれをかわす。その瞬間を計って、重力球を破裂させた。

変化した重力に引つ張られて、跳躍したアカの動きが乱れた。

そこにボクは走り寄って拳を叩き込む。

「く！」

直線的なボクの攻撃を、体勢を立て直したアカが身をよじってかわす。まずボクの軌道を空けるように身体を四分の一だけ回転、ボクが過ぎたあとはこちらから見て向こう側に一歩下がる。鮮やかなフットワーク。なにがしかの体術を習っているのかもしれない。

「カライゲキ火雷撃！」

高温のあまりプラズマ化した炎の一撃。白い光の塊は、普通の土砂ならすぐに溶かすほどの熱を持つ。

「『盾となれ雲の母』　ボクを護って！」

地面から雲母だけを取り出して盾とする。

黒い雲母の盾もプラズマを完全に押さえられる訳じゃない。でも、穴だらけになりながらも何とか受け止めた。

「砕けて！」

赤熱していた盾が砕ける。熱い欠片は、すべてアカに向かつて飛ぶように操作する。

アカがひるむ。その彼女に一瞬で肉薄し、拳を繰り出す。彼女が腕を交差させてボクの拳を受け止めると、その骨からミシツと嫌な音がした。

「っ！」

さらにボクはガードの下から拳を打ち上げる。拳はアカの鳩尾を一撃し、アカは後ろに吹き飛ばされ、そして嘔吐した。「やってくれるわね……。こんなに手こずらされたのは久しぶりだわ」

そういうアカの瞳には、揺るぎない闘気のみがあつた。口を拭い背筋を伸ばす彼女は、完全に一人の戦士と化していた。

アカの全身が炎に包まれた。何かと思つた次には、アカはボクの頭より高い位置に浮かんでいた。

「いくわよ……シュレンリュウセイ朱連流星！」

空中から火球の連続射撃。

始めの二発は盾で防ぐ。でも炎の温度が高く盾が持たないので、走って逃げることにした。

ボクは普通の人より高い運動能力を持っている。加えて重力制御で身体を押して動けば、文字通り目にも留まらぬ速さで動ける。

距離を取ってから、背後に重力を持つてきて急ターン。一気にアカの真下まで引き返し、オーバーヘッドキックを放った。

「ヒラシヘキ緋雲壁　近寄るな！」

咄嗟に発生された炎の風で、吹き飛ばされた。

二回転して、着地。アカは傲然とボクを見下ろしている。

「なかなか速いじゃない。でも、速さはあんただけの物じゃないのよ。行くわよ　焰翼飛翔！」エンヨクヒシヨウ

暴ボウ、と大きな音を立ててアカの全身が火炎に包まれ、撃ち出されたかのようにこっちに向かって飛んできた。

速い！

とりあえず避ける。ボクの傍を飛び去る彼女が、熱い空気を残していった。

けれど、ボクを通り越したアカは慣性を無視した動きで反転して、またこちらに飛んできた。

衝突！　まるで溶岩に飲まれたような感覚。

ボクは叫びながら吹っ飛ばされた。

「お返しよ！」

倒れ込んだボクの上から、すかさずアカが拳を振り下ろす。拳には炎が纏っていた。

「反重力！」

咄嗟にボクは叫ぶ。引き寄せの反対の力が、アカの身体を空に向かって押し出す。

「突き上げて、大地の角！」

無我夢中で喚いた。そんなボクにも大地は力を貸してくれて、隆起した岩の塊がアカの身体を打った。

けど、浮かされているアカに下からの攻撃は威力が低い。僅かに押されただけのアカは、炎の推力で重力を無視して体勢を立て直した。

「爆碎弾！」バクサイタン

いそいで地面を蹴って反動で動き出し、彼女に向けた背中を守る

盾を呼ぶ。

盾となった壁の向こうで爆発があった。

「……重力、ちよつと強めに」

重力を戻して、立ってアカと向かい合う。少し強めにしたのは身体の強いボクが有利になる為だけど、アカは火炎の推力で浮かび上がっているからあんまり意味はなかった。

「楽しませてくれるじゃない。じたばたしたって、焼かれるときは一瞬よ」

ボクとアカはにらみ合う。彼女からひしひしと殺気を感じる。

「ボクは……負けられない」

そう言つと、彼女の双眸がざらりと光を放った。

「それは私も同じよ!」

彼女の闘気に呼応し、また炎が燃えさかった。

一方、サキは糸鶴と交戦していた。

糸鶴はチヨ達のように強力な術を持たない。その代わり、彼女は細い鋼の糸を使って戦う技術を習得していた。

縛り、締め、切る。

長さ七メートルの程の糸を、一時に七本操る糸鶴。その戦闘技術は変幻自在、近距離から中距離まで己の全方位を攻撃範囲とし、糸に触れたものはすべて切り刻まれた。

彼女はもちろんすべての糸の軌道を把握している。その上で、今サキとの戦いで思った。

完璧じゃな。

自分の技がではない。サキが糸を避け動き続ける軌道がである。

糸鶴が捕捉している己の死角と言うべき、糸のない位置。そこをサキは逐一なぞって動いているのだ。

「これならどうじゃ？ Silver Wave！」

糸鶴の鋼線が数を増した。束となった糸がほぐれ、面状に広がる、うねりながらなびく様はまさしく銀の波。鋼の波はコンクリートを飛沫と変えながらサキに迫る。

美しい技ですわ、とサキは一言。そうして気負いのない動作で銃身下のフォアグリップをスライドさせてコッキング。すると散弾銃全体に書かれた祝詞の文字色が、白から赤に変わった。

「ではこちらからも brandish laser！」

闇の覗く銃口から幾百のレーザーが束になって放たれる。しかし指向性の強いレーザーは視認することができないため、傍目からはうすばんやりした光が射撃されたようにしか見えない。

その薄い光は、銃口から直線に五十ミリメートルほど進んだ後、地面に対し扇状に拡散した。すると、光の当たった部分は深々と切り裂かれ、そこにあった銀の波も一直線に断ち切られて動かなくなった。

断頭台の刃のようじゃ、と操りを失い動かなくなった糸の束を見て糸鶴は思った。

「なかなかどうして、お主には敵いそうにないのう」

両手を下ろして諦めたように糸鶴が言うと、サキはにこりと微笑した。

「あら、そんなふうに言ってしまったっていいんですの？」

「妾は己の劣るところは素直に認める主義じゃ。向こうの赫い娘と違ってな」

そう言って、齡二十九の糸鶴は、肉体的には六歳ほどの違いしか

ないア力を見る。

ア力とチヨの戦いは緩やかに加熱し続けていた。チヨは大地の神^エ秘^{ナシ}霊力を直接炸裂させ、ア力も負けじと火炎の爆発をつくっていた。じつと立っていれば、その衝撃は離れていても伝わってくる。

「どうしますか？ このまま休んで二人の戦いを観戦しますの？」

サキは余裕のある口振りで問う。

「いいや……あいにくじゃが、戦うのが今の仕事でな、怠けるわけにはいかないんじゃ。お主にはもう少し付き合ってもらおうぞ」

糸鶴が手を上げる。新たな鋼線がその指から垂れていた。

「私……本気を出しましょうか」

珍しく恥じ入るようにサキが言う。糸鶴はそれに苦笑で答える。

「いや……どうじゃろう。殺されそうじゃからな。妾はまだ死

ぬわけにはいかない。このまま生きて、少しでも多く ^{ブラネスフィア}月の子 ^ど

もを駆逐したいからな」

「あら、そうですね……」

二人は遠慮がちに笑みを共にする。二人の間には、なにがしか通じ合える物があるようだ。

「では、再開しますか」

音を鳴らして、サキは銃を構え直す。

と、その瞬間、彼は目の前の対峙者とは無縁の危険を感じ取るや、刹那にして引き金を絞った。

銃口から飛び出す大きな光の球。光球は二人のちようど真ん中で四散する。

「ずいぶんせつかちじゃの！」

糸鶴は鋼の糸をなびかせ光の散弾を弾く。だが、彼女のその行動はサキの意図を全く取り違えたものだった。彼女は気付くべきだった。光の散弾はサキの方へも飛び、そして天へと放たれたことに。

天へと放たれた散弾は、その射線で何かを迎撃していた。

「氷……！？」

現状に気付いたときにはもう遅い。降り注いだ非情な氷の刃が、糸鶴の腹部を背中から貫いた。

儂い声を発し、糸鶴が崩れ落ちる。彼女が身体を曲げると、腹部の氷は脆く折られた。

「糸鶴さん！」

サキが糸鶴に駆け寄り抱き上げる。内臓を切断されている彼女の体内を額の眼で透視し、慎重に治癒の術をかけ始める。

「お主……もしかして妾を………」

「喋らないでくださいまし」

糸鶴が気付いたとおり、サキは彼女を守ろうとした。糸鶴は詫びようとしたが、それはぴしゃりと遮られた。

「ずいぶん酷いことをなさるのですね、ササヤキさん、ナゲキさん」

姿なき者への呼びかけ。否、俄に降り始めた冷たい雨と共に、二人の和服姿の女性が姿を現した。

「お久しぶりね、アカ、サキ。そしてはじめまして、チヨ」

＊＊

「コウテイエンブ
紅帝炎舞！」

炎の閃きが駆け抜けけると、アカの周囲が一瞬で灼熱と変わる。ボクはそれを岩の陰に隠れてやり過ごす。

それにしてもアカはすごい。もうこれだけ周りの建物がドロドロ

になるほどの炎と熱を生み続けているのに、力尽きるどころかいやまして燃え盛ってる感じた。ボクはそろそろ疲れてきたのに。

これが彼女のツミへの想いなんだろうか。そう思っただけを覗き見ていると、アカの頭上で何かが融けて蒸発したのが目に入った。

「っ！」

直感的にバックスステップして立ち位置を変えると、一瞬前まで立っていた場所に鋭い氷が落ちてきて突き刺さった。

そして、聞きなれない声。その声はアカとサキに再会を告げ、ボクに初見を教えた。

「まさか……生きていた　いえ、生き返ったの!？」

驚愕するアカの視線の向こう、いつしか降っていた雨にいち早く冷やされた瓦礫の中に立つ、まったく同じ顔の二人の女の人の。

二人は同じ蒼い留袖を着ていて、髪も同じく短くて滄かった。背はボクくらい高く、胸はおとなしくて全身がすらっとしていて。瞳は藍。ちよっと長い綺麗な顔に、浮かべている表情だけがちよっと違う。一人は憫笑。もう一人は物憂い。

対照とも言うべき雰囲気纏うことに気付いたとき、ボクの頭の中でサキの物語りがよみがえり、二つの名を呟いたのはアカと同時にだった。

「「ササヤキ・ナゲキ」」

にっと一人が笑い、一人は無表情に頷く。そして前者がまず名乗りを上げた。

「そう、私がナゲキよ。そしてこっちがササヤキ。私達はツミの手で蘇った、全宇宙で最も月神に近い存在。今は月の子として、私がアクエリアス、ササヤキがピスシスの二つ名も与えられている。つまりね　」

ナゲキは頷いてササヤキを促す。俯きかげんのササヤキは顔を上げ、ボクらを一瞥したあと毅然とした口調で言う。

「私達はここにいるすべての人の敵としてここに来たわ。ツミの邪魔をする者として、あなた達すべてを排除します」

ナゲキが芝居がかった仕草で両腕を上げる。その袖には、大きな口を開けて叫ぶ龍の絵が描かれていた。

「さあ、古き世界の立つ者達よ、蒼き月の間近にいられる私に嫉妬しなさい」

3・2「激突のはじまり」（後書き）

戦いを二つに分けたのがちょっと面倒でした。別にアカとチヨの戦いだけでも良かったのですが、糸鶴をなるべく活躍させてやりたかったのでこうなりました。

サキの散弾銃の形式はスライドアクション銃と言っらしいです。別に実弾撃っているわけではないのでコツキング（装填・排莢）は必要ないのですが……気分ですね。

キズオトが出てきませんね……。予定では第五幕まで待たないといけないのですが。間幕でも挟みますかな。

3・3「光と水の懐古」

ササヤキとナゲキが現れたことで、戦いは新たな局面へと移行した。

まず糸鶴が撤退。サキの応急処置を受けた彼女は、二人のブラネス月のフィア子を前に口惜しそうに退いていった。

そしてアカがササヤキ・ネガイを標的に定め襲いかかると、ナゲキがこれに応戦。アカがナゲキに狙いを絞ると、ナゲキはチヨを巻き込んだ攻撃を開始し、三者入り乱れて戦闘を始めた。

残るはサキとササヤキ。両者は激突を繰り返す三名から距離を取り、静かな路地裏に立って無言で向かい合った。

闇の濃い路地裏の上には、蒼い月がかかっている。

サキは攻撃されない。何故なら先視を持つ彼はどんな攻撃も回避し、そこから反撃を可能としているからだ。そして同時にササヤキもまた攻撃されない。ササヤキはサキのような先視はできないが、彼を上回る術能力を持ったため油断ができない。

その状態を膠着という。そんな中、サキがおもむろに口を開いた。

「相変わらずお美しいですわ、ササヤキさん」

「ありがとう、サキ。あなたもまだまだ可愛くて女の子らしいわよ」
ササヤキの作る表情は意外に軽く明るいもの。儂い雪の頬笑み、
そうサキはぼんやり思った。

「それで、どうなんですか？ ツミさんのお側にいられるというのは？」

突然の問い掛け。単刀直入の問い方は、思わせぶりな態度を好むサキには珍しいものだった。

ササヤキは少し考え、おもむろに答え始める。

「そうね……まあ、だいたいはあなたの想像通りだと思うわ。私とナゲキはツミの側近として蘇らせられ、彼の傍にすることを常とし、時には夜伽をすることもある」

それを聞いたサキはなおも問う。

「……かつて 天戸の宅あまのや に暮らしていた頃、‘家族’と言いつつも何かと色事の多かった私達の中で、ササヤキ、あなたは一番ツミさんと潔癖でありましたわね。そのあなたが、今や私やア力をさしおいてツミさんの間近にいる。その気分とはどういうものですか？」

この問いに、ササヤキはやや不快そうに柳眉を逆立てた。

しばしの黙考の後、彼女は、

「 それに答える前に、私からも一つ聞いても良いかしら？」

「 何ですか？」

ササヤキは一息吸い、問う。

「今こうして私達は集っている。私達は生まれもその時代すら違うけど、同じ夢まぼろしに集められ、そして散らばった仲。ねえ、何故私達なのかしら？ たった一つの夢に住んでいた私達は、それぞれが強力な力を持ち、今や私達七人で世界を回していると言っても過ぎた表現じゃないわ。 サキ、あの私達の住んでいた夢は何だったの？ 私達がこの世界の‘特別’になつてしまったのは、きっとあの夢に住んでいたせい。教えて、あの夢について」

二人は視線を合わせ、互いの思いを探り合うように見つめ合った。はじめ感情の乏しかったササヤキの瞳は今雄弁で、対するサキの双眸は何も映しておらず、第三眼も冷えきった光を湛えていた。

「ツミさんは何か仰つてました？」

「いいえ。あなたに聞くと、ツミは言ったわ」

ふ、とサキは吐息を一つ漏らした。しばし視線を虚空に投げやつたあと、彼はゆっくりとした口調で答え始めた。

「確かに、あなたの言うとおりあの夢は特異まほうじでした。天戸あまこのやねの宅あまのいわととは、日神 ひのかみ を隠しその前に神々の集う天岩戸の事。そこにイザナミの名を持つ妖ネガイが住んでいて、彼女は天之常立神の宿る刀を持っていた。そして、家を取り巻くそれぞれの地形にも神の名が与えられていた。その他の事象も含め、あの夢は疑いようもなく何かの運命的なものに仕組まれた特殊な力の場でした。

しかし、私達わたくしがそこに集ったのは、結局は偶然といえるでしょう。特に、ツミさんとチヨ以外の私達は、ただ単に二人と共にいただけ。そして私達は一度散逸し、こうして各々違う立場と想いを持って集っているのです」

言葉をそこそこに打ち切って、彼はネガイの遺した散弾銃を構える。その動きの意味するところは一つ。ササヤキもそれを感じて術の準備を始めた。

戦いは唐突に再開される。

「phantom star！」

立て続けに三度トリガーが引かれ、光の散弾が大量に撃ち出される。一帯を埋めつくす散弾は、すべてが同時に射線を曲げ全方位からササヤキに襲いかかった。

『波打つ護り、美しく、光を散らして』

囁く声に応じ、彼女を水の膜が包む。無作為に反射された弾丸は、狭い路地裏の壁を削り欠片を飛ばした。

ばん、と小気味よい音を立てササヤキを包むものが弾ける。その音とは対照的に無音で動く彼女は、サキに正面から肉薄し水の刃を叩き付けた。

「今のツミと一緒にいることが、よもや楽しいことだと思っ
ないわよね」

斬撃に付加された問い掛け。サキは敢えて避けずに銃身で受け、それから身を回して逃げたあとの銃撃で答える。

「そうですね？ あの人の行動に賛同できないのならば、あなたが諫めてさし上げれば宜しいことではありませんの？」

水圧の弾丸が光を弾いてサキへ直進する。

「私は戒めを受けているのよ。ツミとナゲキから、彼に逆らわないように」

サキは水の弾丸を紙一重でかわす。コッキングで銃身の文字色を青に変え、極太の青の光砲を放った。

「そしてあなたもそれに甘んじている　そうですね？　別に恥じることはありませんわ。あなたはツミさんをほとんど弟のように考えていたのでしょうか？　姉として、弟のわがままを許したくなるのは間違ったことではありませんもの」

ギチ、と奥歯をならすササヤキに苛立ちの表情。跳躍一つで十メートルを飛び彼の光砲をかわすと、落下せずにそこに留まった。

「知ったふうには言わないで。私も、ツミも、みんな苦しんでいるのよ。あなただって、そうじゃないの？」

見上げるサキは、拒絶の意思を露に言葉を返す。

「苦しんでいる、ですって？　私は^{わたくし}苦しんでなんかいませんわよ。たとえ苦しんでいたとしても、それに甘んずる事はしません。ましてや、それに乗じて偽悪を行うなど、笑止千万ですわ」

二度目の光砲。表情を殺したササヤキが、それをよけずに受けた。貫かれる身体。しかし、飛沫するのは血ではない。

「まさかとは思いましたが……あなたも人であることを捨ててしま
うとは」

「私は人を捨てたわけじゃないわ。蘇らせられたとき、更なる力を
得るために仕方なくやったのよ」

ササヤキの身体は水の塊だった。その肉体も服も、水を固着させ
たもの。形をなくし水となった彼女は、嵩を増やしながらサキの頭
上に降り注いだ。

路地裏に洪水が発生する。大海のような滄の水は、重さで敵を圧
し量で窒息させようとする。

「brilliance jet……let's fly
y！」

地面に向かつて光砲を撃ち、その反動でサキは飛ぶ。

彼を見上げた水面が、追って無数の水の棘を射出する。

サキは散弾銃の推力を巧みに使い、鮮やかに宙を舞い攻撃をかわ
した。

「ところでササヤキ。あなたはチヨについてどこまでご存知ですか
？」

形なき水が答える。

「ツミの飼い猫ということしか……。ああして今、人の姿でいると
いうことは、彼女も妖なんでしょう？」

渦巻く水を見下ろして、サキは十三階ほどのビルの上に立つ。術
陣を展開させ高出力の術に備えつつ、サキは言う。

「まあ、妖あやかしと言えは妖ですわ。でも同じ妖だったネガイと比べ、チ
ヨは非常に豊かな心を持っています。笑い、泣く、私達人間と寸分
変わらぬ心。その上で、彼女は何かを信じ続ける心を、絶望せず、

向き会い続ける強さを持っている。　そう、遙か天にある月の魔力を司り所詮絶望するしかないツミさんと違って、チヨは大地と語り未来を切り開く力を持っているのですよ」

滄い水面が驚愕に揺らめいた。

「まさか……あなたはツミを否定しているの……？　そして、チヨをぶつけて、ツミを……！」

「チヨをツミにぶつけたところで、血が流されることは絶対にありませんわ。　そう、でも確かに私はツミさんを否定しています。けれど、それは私が彼を愛しているからこそです。わかりますよね？」

しかしササヤキにはサキの姿勢が不可解であるようだった。否、理解を拒んでいるのだろうか。とにかく、彼女はその拒絶の意を、姿を禍々しい大魚に変えることで示した。

「意外と、あなたも蒙昧な女性なのですね。　その盲目さ、その身をもって償いなさい」

迫り来る大魚を眼前に、サキは銃口を天に掲げ術を完成させる。輝く術陣は空に巨砲を形為す。

下方を向く巨砲に宿るのは、水蒸気すら残さず分子レベルまで破壊する超出力レーザーの光。水そのものであるササヤキに効果的な痛手を与える為には、分子まで破壊する必要があるのだ。

サキはためらいなく散弾銃のトリガーを引く。

巨大な光柱が天地を貫いた。

＊＊

ドオオオオオオン。

轟く音はボクらから少し離れた場所からだった。振り返れば、眩い光の中ビルが一つ崩壊している。あそこにはサキとササヤキがいたはずだ。

「まったく、離れるとすぐこれね。そろそろ、遊びも終わりかしら」
そう言うのはナゲキ。彼女の言うのはササヤキのことだろうか。
意識を澄ませて大地の情報網を使い周囲の状況を確かめると、ササヤキの気配がごく希薄になっている。大きなダメージを負ったのだろうか。ナゲキもそれを感じているみたいだけど、その割に彼女は落ち着き払って、口元には冷たい笑いを浮かべていた。

「なに余裕かましているのよ！ 爆砕弾！」
ボールを投げる動作で、低空飛行するアカがナゲキに火球を放つ。あれは半径十メートルは吹き飛ばすやつだ。

「燃えるなー！！」

突然、ナゲキが大声で叫んだ。

その瞬間、アカの投じた炎、及び周りに燻っていた火がすべて消えた。

ボクらの戦場に限定して、炎のエネルギーが凍結させられていた。一つ属性を完全封印する術はそう長くは続かないだろうけど、その短時間でもアカは無防備になってしまう。

「っ！」

ナゲキがアカに躍りかかる。
突進するような動きをアカはすれ違ってかわす。交差の瞬間にナゲキの後頭部に拳を入れようとするが
それはフェイントだった。

「……かは」

ナゲキの左肩から生えた氷が、アカの胸を深々と突き刺して背中まで貫通していた。

貫かれたのは心臓、それともその近くの大動脈だろうか。一撃で意識を飛ばされたアカは、指先で空を搔いたあと力なく崩れ落ちた。

「アカ ……っ！」

彼女に駆け寄ろうとするや、氷の檻が行く手を遮った。冷たい格子の向こうで、ナゲキがボクを嘲笑っていた。

「ねえ、チヨちゃん。あなたにとってツミとは何なの？」

「ボクのご主人様だよ」 即答した。

「では、何故あの人に逆らうの？ 矛盾しているじゃない。私達と共に来なさい。きっと、ツミは喜んであなたを受け入れてくれるわよ」

誘惑するような言葉。でも、ボクの想いはもう定められている。

「ご主人様は間違ったことをしている。そして、自分のしていることを誰かに止めてもらいたがっている。ボクofするべき事は、

馬鹿みたいに彼に従うことはなくて、一緒に新しい道を探していくことだと思ふんだ。だから、ボクはナゲキ達とは一緒に行けない。

ボクは、ボクの力でいつかご主人様に会いに行く」

「猫風情が、生意気な！」

彼女の言葉と同時に、氷の檻が棘を作り始めた。ボクを穴だらけにするつもりだ。

ボクは足の裏全体を使って、地面を踏みならした。ドン、と大地が応えて大きく弾んだ。

地震で檻が崩れたあと、ナゲキの姿はもう無かった。

場が鎮まった。

戦いが一段落すると、一帯に死んだような静寂が詰めかけていた。月は相変わらず蒼い光を、黒い天の中で皓々と放っていた。風は無表情に、眠気をはらんで流れはじめた。

アカは目を見開いたまま仰向けに倒れている。胸からはまだ血が流れていて、黒いスーツを重くしていた。

「アカ……………大丈夫？」

大丈夫なわけではない。ただ、まだ彼女の命はあった。ボクは彼女の身体をそつと腕に抱き上げ、大地の力を呼び出して治療をはじめようとした。

その時、聞き親しんだ声が警告してきた。

「彼女から離れなさい、チヨ！」

「何で……………っ！」

ぼ、と腕の中の身体が発火した。

おどろいてアカを腕から落とし立ち上がったところで、熱い風がボクを突き飛ばした。

炎が風となる。力の抜けたアカの身体が浮かび上がると、炎風は空に駆けのぼり、そして

夜を砕いた。

突然の太陽。灼け付く白い光の中で、人の声が獣じみた咆吼をあげていた。

3・3 「光と水の懐古」(後書き)

なんだかサキばかり戦っている気がする……。

言い忘れてましたが わざわざ言う必要もないかもしれません

が サキとナゲキの 月の子 の名前はそれぞれ魚座と水瓶座のことです。

あと二話にします。暴走したアカをどうチヨが止めるのか、ご期待下さい。

3・4 「大地の強さ」

「！」

天の焰と地の焰。呼応し合い、ひたすら荒れ狂う金色の影。

「アカは……いったいどうなってるの？」

聞けば大地は答えを送ってくる。けどあまりの量の情報が一度に寄越されてくるから、ボクの頭では捌ききれなかった。

四方を炎に囲まれた土の上、辛うじて張った結界の中で呆然としていると傍にサキが来た。彼も光の盾で身を護っている。

「知りたいですか？」

「こころなし硬い表情のサキ。

ボクは彼を促した。

「つまり、アカの力は小さな火に限らない。彼女の火は太陽に由来するものだったということ。普段は意識的にかそれとも無意識的にか、自分の力を固く封じているので彼女の太陽の霊力が発動することはありません。けれど、生命に危機など緊急事態に陥り意識が乱れると、彼女の解放された霊力は暴走をはじめようなのです」

「生命の危機というか、さっきのは……」

「アカはほとんど死にかけていた。でも今は元気そう。彼女は

死なないの？」

「サキの瞳に険しい光が宿る。」

「死なない、と言うよりかは、死にづらいと言った方がよいでしょう。火は根本を断たない限り火自体を切っても揺らめくだけです。」

そのように、火の属性とは暴力的な破壊生と復元性。そして、その上位としての太陽の属性は――

「死と再生。昇っては沈む太陽の巡りと同じ」

アカの咆吼が途絶えた。

降り注ぐ、太陽の光と共に、たった一人の女性の憎悪が熱い。一人の人間がこれほどの力を持ちうるものだろうか、ボクは半ば感心しつつ思った。

真っ白な炎天の中心に、彼女は大きな金の双翼を羽ばたかせ留まっていた。高さは五十メートルほどだろうか。見上げると首が痛い。そのまえに眩しくて眼が痛い。

太陽を背にして、彼女は憤怒を込めて下界を見ている。

「まずい……アカはここいら全部を火の海にする気だよ」

そう、あの高みから見渡せるすべての範囲が彼女の攻撃対象だ。額面通り、今のアカに見境はない。

「力に溺れた者はすべからくあなるものですわ。……逃げますわよ、チヨ」

「ええ！？ だめ 絶対だめ！」

ここいらは、ついさっきまでご主人様の支配していた夜の境界、その端のほうだった。ちよっと行ったところには、何も知らされていない人達が暮らしている。

「彼女を放って置いたら、きっと何も知らない人達の街を襲ってしまふ。」

それにあの炎に焼かれたら大地そのものが大変なことになる……夢が帰ってきているせいで現の大地の力は弱っているから、最悪何百年も草一本育たない場所になっちゃう。ボクは、大地に力を借りるものとして、そんなこと許すわけにはいかない」

ボクはサキと向かい合った。

「サキ、ボクはここに残るから、サキは逃げて。……正直、できるかどうか自信ないから」

「わかりました。終わりましたら迎えに来ますわ。ですから、死なないでくださいまし」

ふいとサキは踵を返し、ボクに顔を見せずに行ってしまった。恐いのだろうか？ ボクの恐いけど、それ以上に、アカをなんとかしなければと言う思いがボクを踏みとどまらせていた。

天に昇ったアカの方を見る。

太陽の霊力を、暴走状態とはいえ行使する彼女は力の大きさだけならツミに匹敵する。対して、ボクはまだまだ大地の力を使いこなせない。力の差、互いのいる場が天と地に分かれていること、術者としての位の差。そういったものがボクの力を彼女から遮る。

ボクはアカを倒すことはできない。

ボクにできることは一つ、彼女の力と想いを受け止めること。足を肩幅に開く。すでに熱によって砂となってきた地表は、足を滑らせるとザリと音を立てる。

大地の力が変化している。

地殻の内奥に蠢くマグマが、アカの力に呼応して騒いでいる。攻撃的な大地の力。でも、ボクが必要とする力はそんなものじゃない。

「『大地、其は揺るぎなきもの』」

昂ぶり続ける大地を抑える一言。

「『大地、其は盤上なるもの』」
攻撃に備え防御力を高める。

「『広き大地、力強き腕はすべてを受け止める』」
そしてこれが本命の言葉。

けれど、昂ぶりを止めようとしないう大地はボクの望む状態にはな
つてくれようとしないう。

なら、ここからは術を使う。

「『我と絆結びし大地。我が声に耳を傾け、我が命に従え……！』」

術とは、自身の制御下に置いた存在の力を行使すること。言
うなれば、術のパワースーツは自分より下位の存在と見なされる。
でも、ボクと大地の関係はそうじゃなかった。ボクが命令しなく
たつて、大地は想い一つで応えてくれた。

けど今ボクは大地を術の対象とした。そのことに大地は驚き、微
かに震えはじめていた。

「お願い、力を貸して。代わりに、ボクの命を取ってもいいか
ら」

戸惑い、同情、理解に貪欲。様々な大地の思いがあつて、しかし
それらすべてがボクに向けられて一つになる。そうして、ボクの準
備は整いはじめる。

ボクはアカに呼びかける。

「アカ！ ボクはアカを受け止めてみせるよ。でも……でも、でき
るならアカとは戦いたくない。力をぶつけ合っても想いは伝わらな
いから。ボク達は戦う前に、話し合うとができることがあると思っ
んだ」

ボクの言葉は地面の震動に増幅されてアカに届けられる。アカは
反応した。うるさそうに、地上を見下ろした。

滅びる

音ではない言葉。言葉は火の矢となり、地面に降って爆発した。

「っ！」

半径200メートルに及ぶ大規模な爆発。爆心はボクではなかったけど、範囲内には入っていた。衝撃はとっさのバリアで防ぐ。けど、その一秒後には息つく間もなく次の爆発があった。

滅びろ

滅びろ

滅びろ

爆発の連打。それは時に全然遠い場所でも起きる事があるけど、多くはボクをのみこんでいる。

地面が揺さぶられ、削られていく。巻き上げられた土砂は爆発に翻弄され、終には地面に変えることなく融けて蒸発してしまうものもある。荒れ狂う嵐のような爆裂の中、バリアを張って必死に耐える。

だけど、アカの力はまだまだこんなものじゃない。彼女の本気を引き出すべく、ボクは大地の怯えをなだめつつアカに再度呼びかける。

「ねえ……アカは何がしたいの？ ただ復讐したいの、ツミに？」

復讐に何の意味があるの？ 暴力だけじゃツミにたどり着けない。激情だけじゃ、大切な人に想いは伝わらないんだよ、アカ！

「うるさい！ あんたなんか、何がわかるのよ！！」

それは理解を拒む言葉。

アカは狂っている、そうボクは思う。そして同時に、彼女はただの泣いている少女なんだとも。

彼女は恋した人に捨てられ、泣くだけの少女。それから彼女にとって五年経ったけど、時間の経過は身体を成熟させただけで心には届かなかった。宇宙とか、世界の在り方とか、そんな大きなものが

彼女の心から慰めの時間を奪ったんだ。

「その炎こそ始原の焔。万物生滅の権、すべてその焔にあり。焔の力、我にあり！」

何より、あの燃える力こそアカを苦しめている。彼女の視界を遮り、激情を駆り立て続ける炎。

「大地よ、其は砕かれぬ忍耐と慈愛もて己が上のものを支えるもの。ならば大地、絶対不屈の力、我が命の気と引き替えに与え給え！」

受け止めるよ。

ただ、かわいそうだから。誰も慰めることのないアカを、ボクが抱き留めてあげる。

「シカイシヨウメツヒオウジン四界消滅緋王塵！！」

.....。

*

あとになっても、あれは何だったのかと思う。

アカの攻撃に包まれた瞬間、ボクは抗うことなく白い流れに呑み込まれた。

それは炎ではなかった。炎にしては熱すぎた。

それは熱ではなかった。熱にしては眩しすぎた。

それは光でもなかった。光にしては苛烈すぎた。

それは力。純然たる神秘靈力^{エナジー}。清流のように澄んでいて、風のよ
うに軽やかな暴力。

何もかも白い世界。そこに、何もなかった。光のような熱のよう
な炎のようなものの中、ボクだけが在った。

何もない。立っていた大地さえない。

ア力はどうなったのかな？

ちゃんと彼女を受け止めてあげられただろうか。

どうでもよくなってきた。何しろ、ここには何もないのだから。

これが滅び。一切の消滅。ボクも、すべてと一緒に消えていき
てなくなった。

「それがあなたの願いですか？ チヨ」

聞き親しんだ声、今は聞けないはずのネガイの声がボクに呼びか
けた。

そして、答える前にさらに呼びかけがあった。

「あなたは、自分が誰のものか忘れてるようですよすわね」

「……ボクはご主人様のものだよ」

その中性的な声は、ボクの所有を要求する。

ボクはそれが嫌だけど、そんな偽りのない彼が好きだった。

「サキ」

*

白い世界のあとは、包み込むような薄闇があった。

身体の下には地面があり、ボクは大地に横たわりながら膝枕をさ
れていた。

「サキの力って、光だけじゃなかったんだ」

問いかけると、彼の手がボクの細い髪を撫でた。

「ネガイから受け継いだ、本当のものです。あの散弾銃は、ほんの見かけ倒しですわ」

一息。

「でも、本当は恐かったですの。ネガイのくれた力は底知れないもの。私わたくしに扱いきれるか、心配だったのです」

でも、と逆説の詞。彼の気配が笑う。

「あなたは自分の力を恐れない。いつも目を反らさず、対話を続けている。だから、私も見習おうと思ったのです。そして、大地は闇と共に在るものです。なので、私もそのようにあると決めました」

サキはボクの手を取った。小さくて、やわらかい手。

身体を起こして向かい合っていると、薄闇の中彼の双眸の天色がよく見えた。

「ありがとう、サキ。でも、いいんだよ。大地はその内に闇を持つけど、その表はあたたかい光に温められている。だから、サキは闇と光どっちでも、サキの思う形でボクと共に在って」

サキが照れたように顔を伏せた。珍しいことだ。

その瞬間、闇が消える。

ボクは二つの光を見た。一つはボクらを包む、優しい春の日差しのような光。もう一つは、その向こうにあるすべてを焼き尽くす焦熱の光。

大地はすでに大きなダメージを受けていた。けれど、今はサキの影から流れ出す闇に覆われて保護されていた。そして大地は自らの再生を後回しにして、ボクに力を送り続けてくれていた。

「ごめんね、みんな。これが済んだら、好きなだけボクの命の力を取っていいから」

しかし、大地は要らないと答えた。これからも力を合わせていこ

うと。

「……うん！ ボク頑張るよ。一緒に、頑張ろう」

大地が奮起する。目に見えないエネルギーの流れが渾々と湧きだし、足の裏を伝わってボクに流れ込んでくる。

「チヨ、アカの力を受け止めるのは不可能です。そして、無意味です」

黒い服の彼が言った。ボクはその真意を尋ねた。

「彼女は自分を見失っている。今の彼女にしてさし上げるべきことは、それこそ自分と向き合わせて自らが何をしているのか自覚させること。そして、正気に戻れと殴りつけること。はっきり言って、あなたのしようとしていることは単なる甘やかしであり偽善ですわよ、チヨ」

「偽善……」

サキはほほえむ。少し寂しそうに。

「あなたの人の好き、優しいところは素晴らしいことです。私だって、できればアカを抱きしめて慰めてあげたい。それをしようとしたあなたの心意気、勇気は褒められて然るべきです。ですが、今それをするには不可能なのです、チヨ。私達の力では彼女の力を抑えることができない。悔しいですが、現在の私達では彼女を抱きしめてあげられないのです。だから残ることは一つ。……理解してくださいますか？」

非情なもの考え方だと思った。でも、サキの言うことに反駁する事はできない。ボクの力は弱すぎる。

「……うん、わかった。でも、あまり酷いことは嫌だよ」

「ええ、同感ですわ。アカは私の友人なのですから」

彼と笑みを交わすことができた。大丈夫、なんとかできる。そう思えた。

「『鏡となれ大地よ。地上にある全ての事象を映す、曇りなき鏡に』」

「Light is energy. I reflect energy, as I am a person who can operate light」

（光は力なり。我、光操る者として、力を跳ね返す）

大地が鏡面化しそこにサキの力が加わり、あらゆるエナジーを跳ね返す盾となる。

二人の力を一つにして、アカの力を跳ね返す術を発動させる。それは、重いものを押し返す感覚に似ていた。

「いつつけ　！！」

地から天へ、反射された力は光の塔をなし全てを貫き通す。

空が震えた。

3・4「大地の強さ」（後書き）

サキの心情がいまいちはずきり描けていない気がします。私自身、彼の気持ちを理解しているのかしていないのかはつきりしません。戦闘はどうだったでしょう。アクションが少ないので、もっと壮麗で派手なイメージを喚起できる表現にしたいものです。次回は一・三日後に提出します。

3・5「もう一度」

決着のあと、空はもう白くも黒くもなく、晴れ晴れと青く澄み渡っていた。

大地は熱に焦がされた跡で、それこそ白かったり黒かったり。ところどころに爆発に抉られた深い穴があった。ボクが再生を促すと、穏やかに振動を始め少しずつ慣らされはじめた。

「アカ……」

天空から撃墜された彼女は、一糸纏わぬ姿で地面に倒れていた。

大地は墜落の衝撃を和らげてくれたようで、彼女に打撲系の傷はない。彼女の負傷は、所々の火傷、霊力の過剰消費による衰弱、そして

「髪が短くなってますわね。私と初めて会ったときから、ずっと長いまま保っていらしたのに」

短い髪のアカは、少し小さくなったように見えた。泣き疲れて眠るような顔。やっぱりアカは、火を繰り返す漆黒の守護者 ではなく、大好きな人を追いつける一人の女の子だと思う。

「大地……アカを癒す力を分けて。みんなを傷つけてしまった人だけど、ボクは彼女を許してあげたいから。アカは、ちょっと一生懸命になりすぎただけなんだよ。だからみんな、アカを許してあげて」

大地はボクの言葉を聞き入れてくれた。深く豊かな大地の力が、アカに惜しまれることなく流れ込みはじめ。

「……ありがとう、みんな」

どういたしまして、と大地。大地は笑っていた。

徐々に癒えていく地面。風は颯々と吹き渡り、日差しは穏やかで暖かい。盛り上がってきた黒い土が、その熱を吸収する。

世界は優しい。

静かに立っていれば、世界はこんなにも穏やかな顔を見せてくれるのに、人々はせわしなく動いては波風を作ってしまう。

「ちょっといいですか、チヨ」

サキが腰を屈めて、座り込んでいるボクに話しかけた。

彼の両手には、彼が着ていたマントがある。

「えっと……もしかしてそれを？」

「はい、アカに掛けてさしあげようと思って」

「でも、それってネガイがくれた大事なものなんじゃ……」

いいえ、と朗らかに笑いつつサキはアカの素肌を黒いマントで覆う。

白のYシャツに黒いストラックスという服装になったサキ。しかし彼が自身の影に手をやると新らしいマントが手品のように引き出された。

「替えがあるんだね……」

ちょっと気抜けして、タハハと笑いが漏れた。サキもボクと一緒にくすくす笑った。

と、歩いて近づいてくる足音が聞こえた。剣を佩している男の人だ。ゆっくりと近づいてくる姿に、敵意は感じられない。

「私の名は名塚・鷲累。漆黒の守護者の代表、氷室・紅鳥の上
司として彼女の身柄を引き取りに来た」

黒いスーツのような装甲服に包まれた身体はそんなに大きくない。歳も二十代後半くらいでまだ若そうに見えるけど、声はとても厳しくゴツゴツしていた。

「それはご丁寧にどうも。　　チヨ、治療はどうなりました？」
皮肉っぽく鷺累に言った後、サキはこちらを見た。

「う、うん……」

ボクはアカを横抱きにして立ち上がる。ボクよりも少し背の高い鷺累にアカを差し出すと、彼は無言でアカを両腕に抱き取った。

そして沈黙。重い空気がボク達の間には立ちはだかる。

まず口を開いたのは鷺累だった。

「今のところ、私達が敵対する必要はない。だが、漆黒の守護者は
いずれお前達を排除する。私達は千人いるかいないかの小さな組織
故、お前達のような不確定要素を放置したまま戦う余裕はないのだ」

それに答えて、サキがにやりと悪っぽく笑った。

「上等　ですわ。いつかの戦い、楽しみにしています」

鷺累はそれ以上何も言わず、くるりとボクらに背を向けた。その
まま立ち去ろうとする彼に、ボクは言葉を投げかける。

「ねえ、　漆黒の守護者　は　月の子　を殺しているんでしょ？

ボク思っただけど、やっぱり殺し合うのは良くないよ。だって、そ
んなことしても誰の想いも慰められないもん。戦いは、どちらかが
倒れきるまで終わらないよ」

彼の足が止まる。返答は肩越しによこされる。

「私達は慰安の為に戦っているわけではない。潰し合いになるのな
ら、それで結構だ。漆黒の守護者は世を乱すものを排除する、それ
だけだ」

なんの感情もない、合理的な物言い。

ボクは言う。

「だったら」

「そう、お前がなんとかしろ。平和的な解決法など、自分で探すこ
とだ。だがお前が動けば必ず私達は対峙する。　　その覚悟はある
のか？」

ある、とボクは断言した。

「ならば、また会おう、大地の守護者 チヨ。迷いのない拳で、私達を打ち倒してみろ」

「うん、もう一度。その時こそ、アカを抱きしめるから」
鷲累の横顔が微笑した。

彼は歩いていく。ほぼ修復された真つ黒な土の上に足跡を残して。

「ああ……… やつと終わりましたわね。随分と長い戦いだっただ気がしますわ」

「 これからも、こんな戦いがあるんだろうね」

アカ、ナゲキ・ササヤキ、糸鶴（おしづ）に鷲累（じゆい）。ボクらはそれぞれを敵と見なし、泥沼のような戦いをはじめようとしている。

ぼん、とボクの肩をサキが叩いた。

「まあ、頑張るしかありませんわね。私達は二人なのでですから、問題ありませんわね」

ボクは力一杯頷いて答える。

「うん………！ 行こう、サキ。ご主人様の ツミのところへ」

「まずはキズオトちゃんに会いに行きましょう。彼女の力も、運命も、私達の勝利の為に必要なものですから」

サキとボクは互いの手を取り合い歩き出す。

陽は高く、西の地平線に白い月。

乾いた疾風が、ボクらを鼓舞するように吹き抜けた。

3・5「もう一度」(後書き)

鷺累君が登場しましたね。あんまり出番がなさそうな予感がします。一人を除いて、役者は揃いましたので、第四幕をインターバルっぽくして第五幕からはいよいよ核心と行くのでしょうか。(質問調ですね)

私生活ではテスト前で、レポートも課せられたのに調子が上がってきている感じです。北の大地は気温も上がってきましたし、頑張っています。

4・1「紅色走馬燈」

私が持つ一番古い記憶は、赫い。

それは揺れる影、踊る熱。血ではなく、血すら燃やし尽くしてしまふ炎の色。

何故燃えているのだろうか？

それは私が放火したから。

どうして私は火をつけたのだろうか………

*

「須藤すとうさん、お待ちせしましたー」

年若の男、まだ少年と呼べる男が私の苗字を呼びつつ走ってくる。往來で大声を出すあたり行儀がなっていないが、走る姿は軽やかでどこことなく優雅だ。

季節は夏。巷を熱い風が吹きぬけ、耳を澄まさずとも蝉の鳴き声が聞こえる季節。まぶしい光の中、白く輝くワイシャツを彼はさっぱりと着こなしている。

そして彼は私の前で立ち止まる。はあはあと息を切らすことなく一息で静の状態へ入る様もなかなか良い。

しかし

「すみません、須藤さん。父がなかなかしつこくて」

「……どうして敬語を使うの？ それに、私のことは名前で呼びなさいと言ったわよね」

私が咎めの気持ちで前面にこめて言うと、彼はやたら嬉しそうに破顔した。それにともない、私の視線とほぼ同じ高さにある琥珀色の瞳が細められる。

「それは、僕が謝っているからです。僕が謝っている限りは須藤のほうが身分は上。須藤さんはそういうことはつきりさせないと怒りますからね」

「……あなたは別の事で私を怒らせたわ」

彼の表情の変化を見る前に、彼の優面に拳を叩き込んだ。手加減はない。彼は顔を抑えて二・三步後ずさった。

「い、いたあ！ 痛いよ、××！」

彼が私の名を呼ぶ。しかし、回想の中でその音は聞こえない。

「もつと殴ってもいいのよ、」

私の口から出た彼の名も、私の耳に届かない。

彼は身をすくませ言う。

「結構です」

「ふん 行くわよ」

私は彼に先行して歩き出す。と、背後で彼の声が聞こえる。

「今日も怒った顔が良い……」

「何か言った？」

いいや、と彼は言葉をにじらせる。そして、長い赤のワンピースを翻しながら早足で歩く私に追いつき、横に並んで彼は話しだす。

これは、そう、今は氷室・紅鳥と名乗る私が現に生まれて十八回目の夏の話。私は華族でもある裕福な家に生まれ、結婚を先延ばしにしつつ気ままに生きていた。

私とともにある彼は、農家の実家と理系大学を行き来する貧しい学生であった。知性は人並み以上だったけれど、所詮庶民である彼は、本来ならば私と口を利くことすら憚られた。

時代は昭和の十九年。神の風が吹き荒れる狂気の夏。私は許されざる恋をしていた。

回想が途絶え、私は夢から覚める。

目覚めた場所は、すべてが灰色の部屋。灰色の寝具、灰色の天井、カーテンも灰色で仄明かりすら灰色だった。

「紅烏、目が覚めたかや？」

私のベットの横で、漆黒のガウンを着た糸鶴しじゅが椅子に腰掛けていた。私を看っていたのだろうか。

「水を頂戴」

「相変わらず偉そうじゃの」

彼女は立ち上がり、近くの棚に置かれていたピッチャーからコップに水を注いだ。

ほれ、と水は差し出された。喉が渴いていた。勢いよく飲むと、口から水が溢れ裸の乳房の上に雫が落ちた。

その感覚で、無意識に視線が下に引き寄せられた。と、そこにある物を見た。

「何？ この黒い布……」

灰色のシーツの下で私の身体を覆う黒い布。厚めの生地だがつやがあり軽いそれは、手に取ってみるとマントであることがわかった。「サキがくれたそうじゃよ。鷲累殿が言っておった。妾がはがそうとしても、お主は嫌がって放そうとしなかった」

「私が……？」

サキのものだというマントを手に取り見る。私の胸の中に、思慕にも似た得も言われない感情が湧き上がってきた。

「……邪魔だわ。……私のロッカーに入れておいて頂戴」

「あいや、心得た」

糸鶴は黒のマントを小さくたたんで膝の上に置いた。そして、私をじっと見つめはじめた。

「何？ 何か言いたいことがあるの？」

私が視線を返すと彼女の緑の瞳が一瞬揺らいたが、しかし彼女は私を凝視しつづけた。

「一つ、尋ねたいことがある」

わざわざの前置き。

「だから、それは何って聞いているの。殺さないから言いなさい」

私は瞳にさらに強い力を込める。だが、糸鶴も目を反らさない。まるで飼い主に挑む犬の瞳だ。

「お主は、何故あの男、ツミに惚れたのじゃ？」

にらめっこで先に目を反らしたのは私だった。

灰色のシーツに目を落とすと、先程の夢が私の脳裏に去来した。

「ツミは……私の初恋の人に似ているの」

糸鶴が呆気にとられた声で言う。

「初恋……。お主にしては、いやにセンチメンタルな名詞じゃな」

「そうね。もう、四十年位前のことかしら。現では六十年以上前ね。夢まぼろしに行く^{まぼろし}と現での記憶がおぼろげになるし、現に戻ってきててもそれは元に戻らなかつたから、もう彼のことは名前すら思い出せないけど。

ツミと彼はよく似ていたわ。甘い顔、やわらかい声に華奢な指。

瞳の色すら、二人とも珍しい琥珀色だった。振る舞いも、好みも。

二人とも、私が怒っているところを見ては秘かに喜んでいたわ」

そういえば、彼は私の肌を見ることはなかった。

眼を閉じると、走馬燈は再び流れ出す。赫い記憶。揺らめくところはまるでパトランプのようで、私の胸を懐かしさと不快さで掻き乱す。

一夏の恋とは、一夏に終わるもの。

疎開先であつた私の家のある村の、その近辺に空襲があつた残暑の候、私の恋人は赤紙を受け取つた。

「今まで無かつたのが不思議なくらいだからね。やっと来たか、ぐらいな物だよ」

まるで他人事のように、飄々と彼は言つた。

私は自分の頭に血が上るのを感じた。

「なに冷静に言っているのよ！ 死ぬのよ？ 恐くないの！？」

彼はにこやかにかぶりを振つた。

「恐くはないかな。恐がつても無意味だし。それより、もう君

に会えなくなる方が寂しいよ」

彼は私の顔に手を伸ばす。覚えず流れていた私の涙を、彼は指ですくい口に運んだ。

「僕は君のことが大好きだよ。良くわからないけど、愛していると
言つてもいい。もっと君のことを好きになりたかつた。でも、

それはもうかなわぬこと。それが、哀しい」

しかし彼はほほえんでいた。

私は言葉を失つた。けれども必死に彼の言葉に答えたくて、ついにはこんなことを言つていた。

「抱いて。最後なら……私を抱いてよ」

彼は両腕を私の腰に回し、唇を重ねた。貪るような、情熱的な口づけだつた。

しかし、彼は私の耳に囁く。

「君と寝ることはできない。別に君に誠実さを示したい訳じゃないけど、僕は君を抱くことができないんだ。まだ、自分の気持ちが良いかわからないから。……このまま君を抱けば、ただ君を汚してしま
う気がするから」

私はその言葉を拒むように、彼の胸を押しして自ら離れた。

「私の気持ちは　私の想いどうなるの？　あんたはそんなお綺麗な想いのまま死ねばいいのかもしれない。でも、私は……！」

揺らぎはじめた私の視界の中、彼の瞳は静かに私を見つめていた。自分の言ったことに一切の不安も不満もない、そう視線は語っていた。

「ごめん　　というのは卑怯かな。でも忘れないで欲しい、僕にとつて一番大切に恋しい人は、君だということを」

私はその言葉、声と息づかいすら未だに憶えている。

＊＊

そして彼は戦火に散った。

＊＊

彼の死亡通知を、私はわざわざ彼の両親を訪ねて確認した。彼の両親及び姉妹達は、華族・須藤の姓を持つ私が来たことに驚きを隠さなかった。

通知には、彼が、見事に、敵空母に突っ込み大破させたとあった。

それからしばらくの間、私は部屋にこもりきりになった。気持ちを整理する時間が欲しかった。あの時の私はそれなりの冷静さというものを持っていた。私は死んだ者のことをいつまでも引きずって生きるのには止めようと思った。

私の両親は、私が自身の家柄とまったく不釣り合いな庶民の男と付き合っていることを知っていた。それは私の両親がこの恋が一時

の物であると思つたからで、事実その通りであつたが、しかし私がなかなか立ち直らないのを見て俄に焦りはじめた。いくら私のわがままを許していた両親とはいえ、やはり私がいつまでも婚姻を結ばないのは家の評判に響くと思つたのだらう。

ある夕刻、晚餐を前にして女中に呼び出された私は、屋敷の中に見知らぬ男がいるのを見た。中肉中背、スタイルは悪くないがにやけ顔の不快な若い男。

私の許婚だつた。両親は、明後日の吉日に婚姻するように告げた。世界が息吹を失つた。しかし私は、自分の運命を無感動に受け入れた。

許婚は晚餐の間中、私にしきりと話しかけていた。金持ちにありがちな、蒙昧な男。話すことは自分の思い出と自慢ばかり。これの妻になれば碌なことにならないだろうと思つたが、いまさらどうする気も私にはなかつた。華族の家に生まれた者として、避けられざる事なのだから。

だが私は、許婚が婚姻を待たずして肉体関係を迫ってくるとは予想することはできなかつた。

それも私がすっかり眠り込んでからのことであつた。寝起きで力を入らない私をやすやすと押さえ込み、強姦するように私の処女を奪つた。

氣絶し、目覚めた。内股に残る白い精液と赤い血液を見たとき、心の中にはじめて憤りの想いが、そして故人への恋慕が湧き上がった。

滅びてしまえ、なにもかも。

私は、生きていく理由がないのに生きていられる人間じゃなかつた。

そつと寢室から抜け出し、物置へと向かつた。この夜、不思議と

ただ一人の女中もおきていなかった。

灯油を持ち出し、ありつたけ屋敷の壁に沿ってまいて歩いた。屋敷は大きいし油の量も半端ではなかったが、体力のある私にはそう難しい仕事というわけでもなかった。

屋敷を一周すると残りの灯油を一斗缶に詰めて、玄関から私の部屋まで万遍なく撒き続けた。そうして部屋にたどり着くと、用意していた松明に火をつけて窓から投げ捨てた。

火はあっという間に広がり始めた。屋敷を包囲し、玄関を破って侵入した赫い猛威に、狂乱する家の者たちの声が聞こえた。

死は怖くなかった。火がいよいよ私の部屋の戸をなめたとき、私は開放感から知らずとほほ笑んでしまふほどだった。

*

「だが……お主は死ななかつたんじゃな」

糸鶴が言った。

そのとおりだった。わざわざ言うまでもない、わかりきった事。

私はあの時、火炎の中から夢へと飛まほろしばされ、以来四十年近くサキ達と暮らしツミと出会った。そして夢を去りまた現へと来た。しかし、このことはいまさら語る必要もないだろう。

「……妾が、なぜ今になってこの事を訊ねたか、わかるかや？」

簡単な質問だった。

「私が負けたからでしょ。私の……私の狂気がどこに由来するのかを、今まで知りたくてしようがなかった。でも」

「聞けば、お主の心は揺らぐ。聞いた者を痛めつけるか、自分を痛めつけるか、どちらかじゃった。妾も故あって月の子を狩る者。いたずらにお主を惑わせて、こちらの戦力が低下する事は避

けたかった。　じゃが、今となつてはその気遣いもない。むしろ聞くべきときであつたと妾は思う。お主が、敗れた戦場にまた挑むために」

言い終えると、糸鶴は席を立ち部屋に私一人を残して去つた。

私の心は脆く弱い。

根拠もない一つの感情に身をゆだね、私は戦い、狂い続けた。私は狂女だつた。そして、狂つた刃は鋭くとも、脆かつた。

私がツミに焦がれたのは、初恋の男に似ていたのが第一の理由。けれども私は、ツミと過ごした三年間、いちいちその事を思うことはなかつた。ただひたすら、幼い少女のように私はツミに恋し、彼は黙つて私を受け入れた。

何の為に戦つていたのか。何の為に想い続けていたのか。それは変わりゆく世界に無関係で、ただ私個人のためだつた。この世界がどうなるかと、知つたことではなかつた。

しかし、その想いもくじかれた。今は言葉通り、燃え尽きたといった気分。憎しみも、子供っぽい恋も、天上にある蒼月に届きはしないのだと悟らされた。

する事もないので、ベットサイドに置かれていた灰色のローブを着て部屋を出た。あまり憶えのない建物の中、適当に歩いていると談話室に着いた。そこに二人の男がいた。

「おお、ひみこ 火巫女 殿。お加減はよろしゅうか？」

漆黒の守護者の一人である魔術師。彼は日本人だが、所属は日本ではない。……まあ、こいつのことはどうでもいい。

「驚累。手合わせて頂戴。身体がなまつたから」

黒髪黒眼のもう一人の男は、今は普通の黒いスーツを着ている。

だが、黒ずくめな雰囲気には人を威圧する物がある。
「……わかった、支度するか」

4・1「紅色走馬燈」(後書き)

メインヒロインであるアカの、初めての主観文です。

思いつきを考えるのは結構楽しかったです。もっと書いても良かったのですが、あまり長くてもたらだるさのような気がして止めました。

第四幕は戦闘があまり多くないかもしれませんが。湿っぽくはならないように気をつけます。

4・2「絶えない炎」

漆黒の守護者 日本支部は、東京のさる高層ビルの上階三つを占領している事務所だった。

漆黒の守護者 とは、現の人間が一般に知っている‘科学’の範囲外にある神秘現象を処理する国際組織 SEME の下位組織。現在世界を騒がせているツミとその配下である 月の子 に対処する為に、四年前に 漆黒部隊 は組織され、その中の戦闘部員が 漆黒の守護者 と呼ばれていた。

守護者は世界に百人前後いる。月の子が八十八人のはずだから、頭数としては足りている。しかしツミは月の子の他に‘異形’を無数に従えているので、守護者は手が足りていない状態である。

日本には私を含めて七人の守護者が常駐している。しかし、今私がいる広い事務所には、私、糸鶴、鷲累、の三人しかいない。他の四人は滅多にここに立ち寄らない。

そんなわけで、屋上にある模擬戦場は使いたい放題。私と鷲累は現代魔術学の粹を集めて作られた黒の制服に着替え、結界に覆われた緑の空の下で向かい合った。

「剣、か。 手合わせというより稽古になるな、これは」

鷲累が私の手にある物を見て一言。

私は武器として剣を持っていた。全長八百ミリメートルの反りがない片刃で、重さを一キログラムに抑えた軽い剣。実戦にはあまり向かないだろうが、剣技の経験値が低い私にはこれくらいしか持てない。

「……たまにはね。接近戦闘をやるうと思ったの」

時々訓練していたものの、私は近接戦闘はからきし駄目だった。炎を操る力があるので、それに頼りすぎていたせいもある。

鷲累が構える。無感情な視線が私を捉える。

彼の獲物は刃渡りだけで一メートルある直刃の剣。

「行くぞ……！」

一の太刀の動作は日本剣道にある正眼の面打。小細工はない。

風を切る斬撃を、私は身体を右にずらしてかわす。その動作のまま、右の袈裟切りを放つ。

鷲累の剣が私の剣戟を迎え撃つ。速い。まだ振り下ろしの半分も私は行っていない。

剣と剣がぶつかった瞬間、手首に強烈な衝撃が走った。

剣を落としそうになるのを堪え、私は後退した。腰を落とし、横一文字の斬撃を放とうとする。

だが、剣を右に溜めたときには、目の前に剣を突きつけられていた。勝敗が決した。

「未熟者。俺の剣を受ける腕力がなくせに、動作が遅くては話にならない。これ以上続けたいのなら、竹刀を持ってこい」

見下しの一言。だが、今の私に反駁する余地はない。

名塚・鷲累は、私を除いて、漆黒の守護者の中で最高の戦士だ。殊に、武器を使うことでは私が敵うはずもなく、模擬戦にしろ術を使わないことには、彼の言うとおり話にならなかった。

目の前から剣が下げられる。私は苦い思いを噛みしめながら剣を鞘に収めた。

「負けを認めるのか？ 負けたままでいいのか、火巫女殿？」

挑発されていた。普段なら炎を呼び出して鷲累を吹っ飛ばしているところだったが、今の私はせいぜい睨み付けるだけだった。

「……次まで憶えていなさいよ」
「そうさせてもらつよ」

こちらの精一杯の強がりにも、彼は飄々と答えた。
私は驚累の視線の下を通つて、模擬戦場を後にした。

*

事務所の中をあてもなく歩いてみると、どこからともなくギターの奏でが耳に入ってきた。クラシックの曲。

旋律が流れ来る元は、広い事務所の中の糸鶴の私有スペースにある音楽室。糸を操る糸鶴は、己の能力に合わせてか数多くの弦楽器をたしなんでいる。

現代に言われるクラシック・ギターよりも弦長の短い古風なギターを使って奏でられるのは、十九世紀のスペインの作曲家ディオニシオ・アグアトの難度の高い曲。

高度な技巧で演奏される軽やかな旋律に耳を傾けつつ、私はドアの影に座つて考え事をすることにした。

例えば、糸鶴おひじとの出会い。

ツミと離別し現に來た私は、当然のことながら、変わりきつた日本と世界に困惑した。

困惑した、と言つても、別に訳もわからずあちこちで暴れ回つたわけではない。私にも分別という物はある。食いつ持がないのでこちらの柄の悪そうなのを脅して金を巻き上げたり、古い服を着ている私をなめて釣り銭をごまかした店員を殴つたり……そんなところ。

現状として、ツミが夢を降着させ占領した土地は現全体で二割ほど。それもここ一月で急に増えたので、巷ではもはや「異世界」からの侵略を各国政府は隠しきれないでいる。

しかし今より五年前、私が現に来た五年前は、まだ現が降着するといった大規模な事件はなく、時々異形を連れた 月の子 がテロまがいの破壊行動をするだけだった。

現に来て三週間ほど経ったとき、私は偶然月の子と遭遇、戦闘し殺害した。正気のまま人の形をした人間を殺すのは久しぶりだったが、特に心乱されることはなかった。

残った異形を片手間に潰していると、突如として異形が見えない何かに切断され、絶命した。次いで私を守る炎が反応したかと思うと、私の周囲に焼き切られた鋼線が落ちていた。

蒼の月下で、銀色の糸を舞わず女、それが糸鶴だった。

「紅鳥こめづ!? 具合でも悪いのかや?」

我に返ると、長座していた私の左に糸鶴がしゃがみ込んで、驚きを露わにこちらの顔色を窺っていた。

「あ……別に。ちょっと考え事してただけよ」

言葉を濁し、気遣う視線から逃げるように私は立ち上がった。

糸鶴も立ち上がる。私より一回り背の高い彼女が、私を見おろす。彼女はフレアの付いた黒いドレスを身にまとい、普段三つ編みにしている長い髪は解いて下ろしていた。その髪のウェーブを眼にしたとき、私は今更ながら自分の髪が短くなっていることに気が付いた。

別に良いけど。

彼女が何か言うだろうと思い 彼女が何か言うのを期待して

私はあさつての方向を見て、彼女の言葉を待った。

「……たまには二重奏でもするかや、紅鳥?」

「そうね……」

彼女の誘いのまま、私は音楽室に入る。

音楽室には本当に沢山の、弦の付く物ならあらゆるものがある。

チェンバロ、二故、馬頭琴、ウッド……。それらはガラスケースに

収めて整頓され、いつでも取り出せるようになっていた。しかし、私の演奏できるのはただ一つだった。

朱塗りの箏を取り上げ、青海波模様の絹布を床の上に敷いてから、置く。

箏に対し四十五度の角度に正座し、深呼吸。昔よく着ていた狩衣を懐かしく思いつつ、姿勢を調整する。そして丸爪を三つ、右手の親指、人差し指、中指に付ける。

調子は平調子の吉越。吉の弦を二の音に合わせ、十三弦まで調律する。

箏のことはサキに教わった。彼女と友と呼び合うほど親しかった一時期、雨の日の遊びは箏を奏で合うことと決まっていた。サキは、何故か私の前でのみ箏を奏でた。

糸鶴がギターを弾きはじめる。バロック音楽を彼女なりに編曲した、哀愁のある旋律。私はそれに合わせて箏を爪弾く。

和と洋の楽器が協奏する、不思議な音楽。それは私を、ゆるゆると回想へと導いた。

*

「く……届け！ 妾の糸よ！」

不規則な動きで、美しく舞う銀の糸。糸は速く私には見切れないが、私を守る炎が糸を焼き続ける。

「コラティエンフ
紅帝炎舞」

イメージは蓮花。花開くように広がる真紅の火炎は、周囲の糸を完全に焼き尽くし爆風で糸鶴を吹き飛ばした。

「ぐっ……お、おのれ……！」

並々ならぬ闘志を發揮し、全身を灼かれてもなお立ち上がろうと

する糸鶴。

だが、火になめられた手指はもう糸を操ることができなかった。

「……あなた、自分が何者なのか言ってみなさい」

私が訊く。糸鶴は私を、敵意を込めて睨み付けた。

「聞いてどうするのじゃ、異邦の破壊者よ」

「私が質問しているのよ。……さつさと答えないのなら、その大事にしている指の先から焼くわよ」

彼女は唾を吐き捨てた。唾は、火に当たって音を立てた。

「妾は 漆黒の守護者 が一人、糸繰りの糸鶴^{しじゅる}。月の子^{プリネスフィア} と名乗る不埒な破壊者を狩り、人の姿を捨てた異形どもを駆逐する、誇り高き現の守護者じゃ！ 狂信者め、妾の怒り、思い知るが良い！」

糸鶴は腰から匕首を抜き出し、私に突進してきた。けれども、灼かれた身体の動きは鈍く遅い。

私は匕首をかわし、足払いを喰らわせる。匕首を取り上げ、彼女の白い喉元に突きつけた。

「殺すならはやく殺せ」、とは言われなかった。

彼女は私を睨む。その視線には、抗いと悔しさがあった。死への覚悟なんてものはない。隙あらば逆転を狙う、不屈の闘志。

「あなた……面白いわね」

私が匕首を投げ捨てるや、予想通り彼女は私を組み伏せた。底知れない憎悪を瞳に込め、私の喉を締め付ける。

彼女は面白い、そう心から思った。何の為に戦うのだろうか？ その瞳の憎しみはどこから来るのか？

私は締められた喉から声を絞り出して彼女に話しかけた。

「わたしを……なかまに……しなさい」

糸鶴は驚き、一瞬締め付けが弱まった。だがすぐに力は込め直さ

れ、彼女は呪うように私に言う。

「命乞いかや、月の子め。銀のマントはどうした？ 貴様は、主君を裏切るつもりかや？」

腹の底から笑いがせりあがってきた。首を締め付けられて笑うことはできなかつたが、笑顔を作ることはできた。

「笑うな……！ 気色悪い……」

「わた、しは、つきのこ……じゃないわ。……わたしも……ツミをにくむ……わたしは……ツミに……すてられたおん、な……！」
視界がいい加減白くなってきた。このまま死ぬ気はなかつたので、爆風を作つて糸鶴を吹き飛ばした。

地面に頭から激突し、朦朧としている糸鶴。周囲に燦る炎が彼女の服や髪を焦がしていたので鎮め、私は彼女を見下しながら告げた。

「私の名前はアカ。かつてツミを愛し、しかし今は彼を憎む女。

漆黒の守護者 糸鶴、私を連れて行きなさい。あの蒼い月を、血と炎の赤で染め上げる為に」

糸鶴は半信半疑といった様子だった。言葉を無くし、決るように私を見ていた。

私の望んだ答えは別のところからあった。

「良いだろう、炎の色を自称する女よ。守護者の長たる私が、お前を招いてやろう」

糸鶴の背後から現れた、長剣を佩した黒ずくめの男。

「私の名は鷲累。女よ、守護者になるにはその夢の名を捨ててもらう必要があるが、その覚悟はあるか？」

長身をいかして、私を睥睨する鷲累。無論、私は怖じ気づかず見返す。

「いいわ。よろしく、鷲累」

*

回想から帰ると、すでに演奏は終わっていた。もちろん、私が一人奏で続けていたわけではないが。

「紅鳥……、お主は割と沈み込むたちなんじゃない」

私が回想に浸りきっていたのは、やはり端から見てもわかるらしい。それ以前に、今日の私に普段の覇気がないことなど、特に深い観察が無くともわかることなのだろうが。

感情の起伏が大きいよ、と一人結論づけて、糸鶴に言う。

「あんたと初めてあったときのことを考えていたのよ」

ああ、と複雑な顔になる彼女。矜持の高い彼女は、負けたことに正の感情を持たない。それは私も同じだが。

「あれからもう五年、早いものね。あの頃はひたすらお互いを無視しようとしていた私達が、今はこうして二重奏なんてしている」

そうじゃな、と糸鶴は苦笑した。

「じゃが……じゃが、妾はお主のことを友だとか、そんな風に考えているわけじゃないぞよ。お主と仲間としているのも、お主の力が欲しいだけじゃ。お主がいつまでもくよくよしているようなら」

「もういいわ」

私は遮った。

「……素直じゃないのね」

「な……！ お主が言う台詞ではないぞ、それは」

そのとおりだった。

そうして、私達は笑いあっていた。旧知の友であるかのように、静かに、談笑していた。

箏を持ち上げ、ガラスケースにしまう。そのまま立ち去ろうとすると、声を掛けられた。

「お主……何の為に戦うのじゃ」

私は振り返らずに答える。

「もちろん、あいつをぶん殴るためよ」

「その想いが届かないものと思いき知らされても、かや？」
ふ、と思わず笑いがこぼれた。

「届かないのなら、届かせてみせるわ。何が理由であろうと、どんな形であろうと、この想いは本物だもの。 ねえ、あんたと同じじゃない？」

糸鶴もまた、敵わぬ相手に戦いを挑み続ける者なのだから。

「……そのとおりじゃな」

その時招集の放送があつた。 月の子 出現、と。

身体の奥に、また湧き上がってくる激情を感じた。

そうだ、この思いがある限り私は戦い続けるのだ。

「さあ、行くわよ。私の想いは、まだ燃え続けているから」
一度は破れたが、私は未だ戦場にあつた。

4・2「絶えない炎」（後書き）

アカが和琴を弾くところの‘二の音’というのは、二長調の二、学校で教える音階で言うところの‘レ’の音です。アルファベットなら‘D’の音ですよ。

どうも説明っぽくなってしまいますね。これまで全然、世界状況の説明もなかったのでここいらで入れないわけにはいかないのです、書いている立場としては。

しかしそれによってアカが必要以上に落ち込んでます。まだ、人に謝らないだけましですけど。

次回も、戦闘はありますが、だいたいこんな感じですよ。すみません、お付き合い下さい。

4・3「揺らめく世界」

公式には、各国政府は、月の王国、フランスフィア ツミとその配下、月の子
の一派を総称してこういう、による侵略などない物としている。
そのための情報操作も万全を期されている。が、先にも述べたとお
り、ここ一月でツミはその攻勢を一気に激化させ、もはや誰の目
にも、誰かが世界を変えようとしているのは明らかだった。

だがいくら一般人が騒ごうとも、漆黒の守護者、の活動は隠密
が基本。夜の闇に紛れ現に徒なす、月の子、達を、さらなる黒い深
淵に葬る。それが守護者の在り方。
そのはずだった。

私達が今回招集されたのは、月の王国の侵略によって荒廃した街
でも、夢の降着まほろしによって占領された土地でもなく、ごく平和そうに
活気づく夜の街だった。天上に昇る月が蒼くなかったら、私達は何
の為にここに来たのか想像もできなかっただろう。

今、ビルの上に私達は待機している。夏の熱帯夜の風が運ぶにお
いは、排ガスや、腐った食べ物や、はたまた芳しい化学香料のもの。
見下ろす往来の人々は小さく、喧噪の音だけが大きく聞こえる。

「この服……暑いな」

鷲累がぼやき、糸鶴がそれに肯いた。気温は二十五度だった。

「私は平気だけどね」

「さすがは炎の女だな」

おもしろくなかったので拳を飛ばした。

「で、どうということなの、姫鴉ひこ? もしかして、これ全部が抹
殺対象ってわけ?」

私達む三人の他に、この場にいるもう一人の人間に尋ねる。名を四し

村・姫鴉ひめからというこの若い男は、私達担当の伝令係兼情報収集係で、守護者ではなかった。

小柄な彼は、生真面目に背筋を伸ばして私達に告げる。

「その御質問には、場合によってはその様になる可能性があるかと答えませす。

今回の任務とは、サジタリウスと名乗る月の子の排除。

目標の言動とは、その月の子はこの街の人々を扇動し、しかしその言動に実はなく、ただ我々を挑発するものだろうということ。

任務の備考とは、月神の思想に染まった者は、もはや現の民として不相応ということなので抹殺の必要性があるということす。

「封鎖はできないのか、姫鴉？　いくら月神の思想に感化されたとはいえ、問答無用に殺すのは乱暴だと私は思うぞ。」

鷲累が仕事用の固い口調で姫鴉に言った。　彼がくれた口調になるのは、私と糸鶴に話しかけるときのみだ。

「漆黒部隊　の行動の結果とは、封鎖も妨害も敵の攻撃によって敵わなかったということ。

ターゲット、サジタリウスとは、　月の子　の中でも黄道十二宮の名を持つハイレベルな敵です。」

はあ、と愁いを含ませて糸鶴が溜息した。

「では、その者の下に殴り込んで、その場の人々を全滅させるといふことじゃな。」

「任務の備考其の式とは、その場の者の抹殺の判断は担当者にまかせるといふものです。」

「　上はかなり混乱していると見た。」

私も糸鶴と同意見だった。

ともあれ、私達は任務の為に目標のいる場所を確認する。どうやらそのサジタリウスという月の子は、近くのデパートを占領しそこ

で大々的に講演をやっているようだ。

デパートには念のため隠形の符を使つて入った。

サジタリウスは吹き抜けの三階にいた。吹き抜けは十階まで貫く大きなもの。白い壁に、茶金石のような壁がハイカラなダンスホールのように美麗だ。

私達は四階部に立つてその月の子を観察することにした。

月の子 は例によって銀のマントを纏いフードをかぶっているので、性別を判断することができない。背丈は、中肉中背といった感じだが。

「人が多いな……。いったい何人いるんだ？」

「ざつと七千人じゃな。まだまだ来るぞ」

人の入りは絶え間ない。それでいて、人が転んだりぶつかったりして混乱が起きる様子はない。統率されているのだ、月の魔力に。

「あやつらは、己の意志で月の思想を受け入れようとしているわけではないのじゃな。……あやつらを皆殺しにするのは、全くの無意味じゃ」

「そうだな。だが、あの月の子を殺しても影響が消えるかどうかわからんぞ」

三人が、それぞれ思案に耽りはじめた。

と、卒然に電気の照明が消えた。そして、電灯に劣らないくらいの明るさをもって蒼白い月光が降りてきた。

サジタリウスが話をはじめめる。

「ようこそ皆さん。今日この場にいる人々に、月神の祝福のあらんことを！」

女の声だった。割と柔らかい感じ。

続く歓声。だがすぐ止む。不自然だ。

「そう………よろしいです。月の王国とは静寂の国。むやみに大声を上げて喜びを表すことは、もう忘れ去られるべき習慣なのです」

また短い歓声。

そしてサジタリウスは話す。月の王国がどんなに素晴らしいものか、月神ツミがどれだけ慈悲深い神であるか。実のない言葉を、繰り返し連ねて。

「茶番ね」

「ああ、まっただ」

鷺累は白のクロスボウを取り上げ、サジタリウスに向かって構えた。

撃つ。無音の術をかけられた矢が、一直線に放たれる。

しかし、矢はサジタリウスの手握られて止まった。

「っ！ くそ、いくぞお前ら！」

私達はそれぞれ跳躍し、階下の吹き抜けに、サジタリウスに向かって鷺累を先頭に、糸鶴、私と並んで着地した。

驚いた人々の輪が、僅かに広げられた。

「やっと来たか、現の守護者。どう？ この人々の集いようはこの者達は皆、月の王国の誕生を、安らかなる新しい時代を望んでいる。月光が誘わなくとも、人々は自ずから集ったでしょう。なのに、何故あなた達は抗う？」

サジタリウスと五メートルの距離を置いて対峙する鷺累が剣を抜いた。背後から彼がどんな表情をしているのか見ることはできないが、彼の大きな闘気は感じられる。

「そうだな。確かに、お前達の王国は素晴らしいものとなる。それは認めてやる。だが、欠点がないわけではない。同じ欠点がある世界なら、私は慣れた今の世界の存続を望む。それが私の動機だ」

鷺累の答え。私の動機とは異なるが、その揺ぎ無い言い切りに私は羨望に似たものを感じた。

「不変が現の意志ということか……。よろしい、では決闘を」

サジタリウスがマントの中から手を出す。その両手には銀の拳銃があった。

鷲累が腰の剣の柄に手を掛けつつ、こちらを見た。

「決闘、だそうだ。お前ら手出し無用だ。　　紅烏、周りに火の境界を作ってくれ」

私はそのとおりにした。火は周囲の群衆を退け、戦いの場を守るリングとなる。

「　　参る！」

一喝の気迫と共に、鷲累が初撃を放つ。

一メートル以上ある白の長剣を一息に引き抜き、豪快に上から打ち下す。

対するサジタリウスは、剣撃をかわしてから両手の銃を射撃した。その銃弾は遅れてきた剣風に弾かれた。

「！」

流れるように足を滑らせると、鷲累は光のような突きを出す。

かわされる。だが、突きは無数に続いていた。

「この……！」

一瞬を捉え、サジタリウスは銀のマントを翻して鷲累の剣の腹を蹴った。彼の攻撃が乱れるや、サジタリウスは射撃しながら後方に跳躍した。

サジタリウスの顔が暴かれる。中国系の女の顔だった。

だが、相手が女であろうと鷲累の剣が揺らぐことはない。

鷲累は剣を下段に構えたまま、じりじりと相手ににじり寄る。

サジタリウスは両手を軽く広げやや下に向けると、腕を角度を小さくしながら五回、左右十発の弾丸を床に向かって放った。

「　　鷲累、下じゃ！」

「わかっている」

床にぶつかつた銃弾は、そのままめり込まず、不自然な角度に跳

弾した。左右の下方からの攻撃だった。

鷲累は慌てることなく、前進しながら二回、左右の下段からすくい上げるようにして剣を振った。

つくられる二つ銀弧。それが十発の弾丸を切断した。

「！」

サジタリウスはあの攻撃が防がれたことはなかったのだろうか？

動揺も露わに双銃で射撃するが、ただ撃つだけの攻撃が鷲累に通ずるはずがない。

床面にほとんど擦り寄るようにして、敵の懐に飛び込む鷲累。先程の二回の剣撃からの動きで、真下から真上に銀弧を描いた。

それで勝敗が決した。

サジタリウスの銃撃が止まったと思うと、その身体が赤い大輪を咲かせ二つに割れた。

「虎牙一刀流奥義、惨烈」

技名を呟き、凍てつく雰囲気をまとわせたまま剣を収め戦いの終了を告げた。

「……帰ろつかや」

糸鶴が言い出した。

任務ではこの場にいる人間すべてを全滅させなければならぬ。だが、結局私達の誰もが、非力な者を殺したいとは思えなかった。

その必要があれば、私達でなくとも、ミサイルでも撃ち込めばいい話だ。

しかし、私達が無関心にこの場を離れようとする、その非力な人間達が私達を阻んだ。

「この人殺し！ 虐殺者！ 我らの未来を破壊しやがるのか！」

どうして、あいつの思想になびく者は大袈裟な口調になるの
だろう？

この場、このデパートの中と外、この街の人間すべてが私達を罵
り、物を投げはじめた。

飛来物はひとまず糸鶴に落としてもらうことにした。

そういえば、蒼の月光はまだ降り注ぎ続けている。月の子を倒し
てもなお、ツミの魔力は途切れていない。この場の想いに呼ばれ続
けているのだ。

「やれやれ、帰れないぞ、これでは」

驚累がぼやいた。

鳴りやまない怒号。狂ったカーテンコールは、少しずつ私の心を
揺らしはじめた。それは苛立ち。多くの者達があいつを讃えている
ことに対するものではない。この苛立ちのわけは。

「この野郎おお！」

この苛立ちのわけ、それは私の進行を止める者がいるという
事に対する怒り。

一人の男が、拳を振り上げながら私に向かって突進してきた。

私はその拳を右手で掴んで止める。膠着の状態で男を睨めつける
と、私の金の瞳を見た男がその表情を恐怖に歪めた。

「退きなさい、
陽弓ヨウキウウハ覇」

私は怒りを力に変えた。

力は炎熱の波動となり、私の右手から一直線に男を貫きその背後
まで駆け抜ける。そして、波動を浴びた者は自然発火をはじめた。

怒号のカーテンコールに、悲鳴のパートが加わった。

「別に、あいつを讃えたければそれでもいい。でも、私の邪魔は誰
にもさせない。私の行く手を遮るのなら覚悟しなさい。私は、
行く手にあるすべての邪魔者を焼き払うわ」

私の想いは誰にも負けない、邪魔させない。

そう確信したとき、私の中で何かが弾けるのを感じた。鍵を掛けてしまい続けてきた物が、封印を破壊して出てくるような感覚。そして、解き放たれた物は暴れることなく私の手の中に収まった。

「『私の名は、アカ』。天照大神の力アマテラスのおお力みを持つ者」

言葉が口から滑り出る。

吹き抜けの天上が砕けた。

そこから降りてくる太陽の光。力強い波動の光が私を包み、貫き、そして天へと導く。

高みから見下ろした街では、月の光が無くなってもお月王国の到来を叫ぶ者達がいた。まるで、見知らぬ父親を呼ぶ孤児のように。一部の者達は自己を見失い、手当たりしだい身の回りの物を破壊していた。

「鎮圧の浄炎」

私が望みを唱えると、街のあちこちで金色の炎柱が立った。それを目にした人々は動きを止め、やがて己の手や隣人の顔を見て自らの行いを省みはじめた。

「太陽の靈力ちから……やっと操れるようになったのかしら……」

これまで、私が太陽の力を使うときは、いつも私は我を失った状態だった。けれど今初めて、私は自らの意志で太陽の靈力を行使した。

ふふ、と独笑が漏れた。

「これで、やっとあなたに勝てる見込みができたみたいね。ツミ

力を得ることができたのは、私が己の想いを定めることができた
だろうか。

そして、勝利の可能性を口にできたのは力を得たからだろうか。
いずれにせよ、私はもう迷う必要はない。あとは、いつかの決着
の時に全力をもってぶつかるだけだ。

「……帰ろう」

もうここに私の邪魔をするものはない。ここは私の戦場ではない。
とまどいの街を眼下に、私は炎の翼をはためかせて事務所まで飛
んで帰った。

4・3「揺らめく世界」（後書き）

サジタリウス（Sagittarius）は射手座のことで、十二星座の一つです。ツミの下僕たる星の子達にも順列があり、特に十二人は高位だというのが裏設定です。十二人すべて登場することはないでしょう。

もう一つ解説。

天照大神は（あまてらすのおおみかみ）が一般的な呼び方ですかね。ここでは音の関係で（あまてらすのおおかみ）にしてもらってます。要するに月神・月読命の名を持つツミに対抗するための名です。

一応解説しますと、太陽神で偉い神様だということ。天皇の守り神みたいなものらしく、この物語では現の守り神、みたいな意味もあつたりします。

そんな感じで少しずつ盛り上がってきました。第四幕は次で終わりです。

4・4 「私の戦火」 (前書き)

この作品はフィクションです。実在の人物・組織・事件などとは一切関係ありません。(いまさら)

4・4「私の戦火」

糸鶴を圧倒したその場で鷺累に招かれた私は、二つ返事で 漆黒の守護者 となることを決めた。彼らの現を守るといふ理念に興味はなかつたが、ツミと戦う為に、彼らの持つ情報が欲しかった。

守護者となる際、私は力を試された。それは守護者のトップ五人 の中には糸鶴もいたので、彼女が棄権したことにより四人だった との戦闘。五番目から二番目までは容易い相手だったが、最後に現れた鷺累との模擬戦闘は「死闘」となった。

私達は互いに力をぶつけ合うことに我を失った。鷺累の剣技はさまざま、四肢は落とされることはなかつたが、それに近い深手を負った私は、気が付くと彼ごと周囲一キロメートル半径を吹き飛ばしていた。

以来、私を知る者達から畏怖を込めて火巫女ひみこと呼ばれるようになった。古い女王と同じ音で呼称されるのは、単なる当て字以上の意味もあつた。 月神に抗う、神に最も近き者。それが漆黒を名乗る者達にとっての私だった。

サジタリウムを抹殺した三日後の昼、私達の事務所に客があつたといつて、私は鷺累に呼び出された。

この事務所には、一応 漆黒の守護者 の長である鷺累に用がある人間がやってくる。しかしそれは私には関係のない事なので、普段私が来客の応対をする事はない。そして、時に私と話したいとやってくる者もいるが、それも無視することが多かつたりする。

鷺累もそれを知っている。なのに、何故今日はわざわざ私を呼んだりするのだろうか。

「まあ、ちよつと偉そうな、というか本当に偉いやつが来たんだ。さすがに俺も断り切れないほどの、な」

というわけで、有無を言わず連れてかれる。

事務所の応接間は、それなりに立派だ。厚いマホガニーの扉の向こうは、灰色の煉瓦の壁に足の長いカーペットの敷かれた部屋になっている。暖炉があり、最高級のクーラーがある。窓は大きく、しかし防弾・防術の効果がある。

その木の戸を押して入る。そこには二人の人間が本革のソファーに座っていた。

一人は初老の肌の黒い男。二メートルはあるうか背丈の上に肩幅も広く、スーツは窮屈そうにしか見えない。が、それ以外は特になうという男ではなかった。

もう一人の方が強く私の注意を惹く。北ヨーロッパ系の顔立ちをした女。歳は三十五を越しているだろうが、美しい。赤みがかつた金髪はさらさらと長く伸ばされ、透き通った蒼い瞳にはまつすぐな光がある。肌は驚くほど白く、若さがある。ぴったりとしたスーツの上からわかる全身の身体の曲線も、何もかもが完璧だった。

そして、女は自身の座るソファアの右の腕掛けに、剣身が菊と同じ色の大剣をもたせかけていた。

私が何も言わず二人の前に座ると、男が立ち上がって手を差し出した。

「私の名前はマーカ・カーランドと申します。 SEME の理事長を務めております。よろしく、紅烏（こゆう）さん。 私の日本語、これでいいですか？」

差し出された手に、私は握手はせずに答える。

「発音はいい。けど、日本人は普通『我』と自分のことを言わない。頭がおかしいと思われるわよ」

「そうですね。よろしく」

マーカは握手を諦め座る。その振る舞いは気さくといったものだが、瞳の奥に隠されている刃のようなものを私は見逃さなかった。

一方、女は立たずに口を開いた。

「私はヨハンナ・リーベルト。ただの付き添いとしてきたから、これでいいわね？」

ヨハンナは日本語を話していない。口の動きを無視した音が、私には聞こえた。

「ならここから消えれば？ 目障りよ、あんた」

私の皮肉に、女はにこと笑って応じた。

「私、傭兵なの。今は彼の傍にるように傭われたから、ここにお邪魔させてもらっているのよ」

彼女が動く様子は皆無だった。

食えない奴。

とりあえずヨハンナのことは無視して、マーカに用件を訊いた。

「そのですね……まず言いますことは、太陽の霊力を制御下に置かれたこと、おめでとうございます。先のおつとめ、そればかりでなく混乱していた街を鎮静化させたという報告も受けました。

そして、今日お伺いしましたのも、それに関わることなのです。

あなたも見られたとおり、月の王国一派の存在は一般人にとってはカルト的、文字通り世紀末の新興宗教となっています。確かにそれも無理のないこと。二千年前のイエス・キリストと同じく、あの月神も各地で奇蹟を顕し続けているのですから。つまり……

あ、私の日本語、変じゃないですか？」

「……問題ないわ」

私が返答すると、彼は破顔してアールグレイ・ティーを啜った。

そのカップとソーサーはヴィクトリア朝の骨董品だ。

彼はわざと言葉を切った、私はそう判断した。

静かにカップを置いた後、マーカは蘇芳の瞳で私を見た。

「つまり、夢の侵攻に抗い続けるためには、現にも旗頭となる方が必要だと言うことです。」

SEME の代表として、I order you as
I am a master of the warrior
who battle with xenomonsiter（外
来の怪物達と戦う戦士達の長として、私はあなたに命令します）。
我らの旗頭として日神になって下さい、氷室・紅烏さん」

「……I turn down it（断るわ）」

私が告げると、マーカは一瞬の驚きの後それを隠すように無邪気を装って笑った。

「英語ができるのですか？ それはともかく お受けして頂けませんか？」

「私がここにいるのはツミと戦う為だけ。神になる為ではない。現がどうなるかと、知ったこっちゃないのよ」

マーカは不快そうに眉をよせる。表情はまだやわらかいが、眼光にはすでに穏やかではない色がある。

だが、私は彼に対し真つ向から想いを告げる。

「私は今の私のまま戦いたい。 教えてあげる。私はね、もう「氷室・紅烏」ではないの。私はかつて、あいつの呪縛から逃れたくてこの名を名乗ることにした。でも、結局それはかなわなかった。何より私自身が彼のことを想い続けてきたから。……だから、決めたの。私は、かつて彼を愛した、そして今の彼を愛している、日神でも、火巫女でも、 漆黒の守護者 ですらない、ただのアカとして彼と戦つと。」

だから、あなたの希望は却下」

マーカが一層強い視線で私を見る。だが、見返すこちらの視線が揺らぐべくはない。

場の雰囲気自殺気じみたものが感じられはじめたこの時、動きを作ったのはヨハンナだった。マーカの肩に手を置き、振り向いた彼に穏やかに言いつける。

「女の子に無理強いはだめよ、マーカ。しつこい男は嫌われるものだよ。」

そして左手でマーカの襟を掴み、右手には大剣を持ってヨハンナは立ち上がった。

彼女に引かれるようにして立ち上がるマーカ。

彼は一度顔を伏せ、再び顔を上げたときそこに剣呑な色はなかった。最初の時と同じ、人の良さそうな笑みだけがあった。

「お話を聞いてくださり、ありがとうございます。これでお暇します。もう二度とお目に掛かることはないでしょうが、我はあなたが考えを翻してくれることを期待しています。その時はまたお会いしましょう、Lady Himiko」

私は立たずに彼を見送る。

「一昨日来やがれ、よ」

マーカは破顔のまま頭を下げた。

そして二人が去っていく。その時、マーカではなくヨハンナが一つの言葉を、問いを残していった……。

*

「あ、紅鳥さん。これから次の作戦の説明をしたいのですが、よろしいでしょうか？」

私が応接間から出ると、待ち構えていた情報係の姫鴉がそう言っ

た。

客の対応に続き、ブリーフィング（作戦の説明）もあまり受けない私。しかし今日は姫鴉に頼みごともしてあったので、その話を兼ねてブリーフィングを受ける事にした。

ブリーフィングルームは八人用の小規模なもので、リノリウムの床に簡素な長椅子五つにパイプ椅子が十数個ある質素な部屋だ。しかしプレゼンテーション用のパネルは投影型のスクリーンではなく大型のプラズマパネルで、これだけ豪勢な気配を放っている。

「では、はじめさせていただきます」

場にそろったいつもの三人を前に、姫鴉がスクリーンを背に一礼した。

「まずお話しすることとは、紅烏さんから依頼されていた調査の結果です。」

その調査の結果の内容とは、キズオトという風操術の能力のある女性の調査でした。そして調査の結果とは、該当する方が一名、鳥取の船上山の近くのさる高校に在学しているということでした。

しかし同時に判明した事は、周辺の地脈に明らかに操作された痕跡があり、降着の準備が着々とされているということ。それも二・三日中に95パーセントの確率で実行されるだろうということでした。

今作戦とは、端的に言って降着の阻止です。月の王国は降着の際、最高位の術使ないし月神自身、そして異形の大軍を繰り出します。

このため作戦は困難を極めると予想されますが、ここにおられる皆さんの力量ならばと提示されました。また、他の守護者の応援要請も今なされています。

以上です。御質問は？」

私がまず問う。

「その、キズオトだと思っ子の説明をして」

「少女の名は相川・千風。公立諏訪高校の一年生。戸籍はあります

が、両親を含めすべての親族の存在が確認できない謎に包まれた少女です。中学校までは孤児院で暮らしていましたが、高校に入ってから一人暮らしをしています。彼女名義の口座には少なくとも金額が納まっており、それを生活費に充てているようです。

同校の生徒には知られていないようですが、彼女が使う風操術については SEME のデータベースに登録されていました。そのデータベースの記述とは、彼女という存在が、紅烏さんがこちらの世界に現れた五年前の時期と、丁度同じくらいの時期からはじまっていると言ふこと。以上のようなことから、私は彼女が「キズオト」であると確信しました」

苦勞しているのかしら。

ふと、思った。

高校生になつていふと言ふことは、彼女は夢に住んでいたことなど隠して現に適應しようとしたということだろう。私と違って。しかし、すでに七十年近く生きて彼女にとって、今更普通の子供として成長していくということはどういうことか。……きっと、並大抵ではない苦勞があつたはずだ。

と、そんなふうには他人を思った自分が少しおかしかった。私らしくない。そう、心の中で密かに自嘲した。

誰も質問をしなくなったのでブリーフィングはお開きになり、姫鴉は資料を残して去つていった。

「で、断つたのか？ 紅烏」

鷲累がおもむろに尋ねてくる。

先程のマーカとの話のことだろう。

「もちろんよ。旗頭なんて、面倒なだけ。それに、あいつらにも言つたけど、私はただの「アカ」としてあいつと戦うことに決めたの。余計な肩書きは、もうこれ以上必要ない」

「じゃあ……お前はもう紅鳥ではないのか？」

そう問い返した鷲の瞳には、油断無い光が宿っている。彼はきつと、私が今後も彼自身と同じ立場であるのかそうではないのか、探りを入れているのだろう。

「馬鹿じゃないの？」

私のはつきりそう口になると、鷲はおどけた笑いを見せた。

「私はここにいてやるわよ。あんた達とはもう腐れ縁みたいな感じだけど、あんた達のことは別に嫌いじゃないし」

己の立ち位置を告げ糸鶴を見ると、彼女は退屈そうに欠伸をしていた。

「妾には、お主がそう言うじゃろうと判っておったよ。鈍い上司と一緒にしないでおくりや」

そして彼女は席を立ち姿を消した。あとには湯飲みに入った冷めたお茶が残されていた。

「鈍い上司か……、言われたな。いつか見返してやる」
彼も立つ。

去りゆく背中に、私はふと思いついたことを尋ねかけた。

「ねえ、あのヨハンナって女は何者だったの？ 詳しくは名乗らなかつたけど、絶対只者じゃないわよね」

びたりと彼が動きを止める。その様子に、微かな緊張があるように感じるのは気のせいだろうか。

「ヨハンナ・リーベルト。リーベルト家というのは代々女が頭首を務める傭兵の一族だ。独自の術科学技術を保持していて、世界のどここの組織にも属さず、独自の軍隊だけで戦争をする。奴らの戦場に場所と表裏の隔たりはない。でかい戦場にならどこにでも首を突っ込み停戦させる、世界平和を謳うおせっかいな一族だ。……一族といてもまだヨハンナで三代目だけだな。

頭首は代々 ブロウ・フラウ という大剣を継ぐ。由来はわからんが膨大な魔力を秘めた剣で、それがあの一族、特に頭首を特異なものとしている。あのヨハンナにしろ、差しでの勝負なら、この地上の誰にだって劣りはしないだろう。

それで、なんか気になる事でも言われたか？」

訳知り顔で私に聞く鷲。私はそうだと答えた。

「あの一族はどいつも気取り屋だからな。俺も昔、あの女と戦ったときに妙な問答をさせられたさ」

それがどんな内容だったのかは告げず、彼は戸口をくぐって消えた。その後ろ姿に私は、ヨハンナの長い金髪が流れる後ろ姿を重ねた。

神にならない者にとって、神の力はさぞ重いものだろうね。

そう、ヨハンナは問いを残した。

私は、いつだって自分に重すぎる力を持っていたわ。

これが私の答え。ヨハンナには聞かせていないけど。

私は常に己の力を重く思っていた。恐れていた。初めて力に目覚めたあの時から、私の胸は一時も安らぐことなんてなかった。

そうかなあ？ あたしは全然怖いなんて思わないけど。

懐かしきキズオトの声が、私にそう答える。

恐くない？ こんな見境なく火をつけて回れるような力が、

恐くない？ ……ふざけないで。私はこんな力いらなわ。こんな力、どうして目覚めてしまったの！？

かつての私が叫ぶ、感傷じみた嘆き。

キズオトが言う。

だって、アカは自分を護りたいと思ったんでしょ？ 夢ではね、心の底から力が欲しいと思ったら、力が使えるようになるんだよ。理由なんて無い。

言葉は重ねられる。

それにね、アカ。あたし達がここで生き続けるためには、よそから来る夢の人と戦争しなきゃだめなんだよ。だから力が必要なの。……それとも、アカは戦わないでこのまま死にたいの？

少女のなりをした女が告げた、残酷な事実。

死、という一文字に恐怖した私は、結局他者を殺しながら生きることを望んだ。あの時、夢に来たことにより名前も何も失っていた私は、身に起きるすべてのことに混乱していた。私はわけのわからないまま死ぬのは嫌だった。だから……生きることを選んだ。

以来、力を使い続ける事への恐怖はいつも私と共に在った。いつこの炎の力が暴走して、何もかも焼き尽くしてしまうのか、恐れない時はなかった。

だけど、今、私は力を使うことを望んでいる。恐怖はなくなったわけではないけれど、この力を解き放ち、あいつと全力でぶつかり合うことを望んでいる。

この胸の高鳴る想いと共に。

きっと彼は私を受け止めてくれるから。過ぎ去ってしまったあの三年間みたいに、また彼が私を受け止めてくれると、私は信じている。

だから、私は出陣する。神の力も恐れず、己の武器としよう。忌み続けてきた戦火を、今こそ望もう。

4・4 「私の戦火」 (後書き)

こんな感じ……ですか？

いまいちまとまりを付けられませんでした。やはり説明などは少なく、端的にするのが一番ですね。問題はそればかりではないでしょうが。

ヨハンナについては別に出す必要はなかったのですが、何となく拘ってしまいました。

糸鶴と鷺累に割と出番があったのは良かったです。二人を好きになつてくれた人はいらっしやるでしょうか？

5・1「月に宛てられた手紙」

拝啓、月の神様

残暑厳しい候となりました。私の住んでいる町は毎日暑く、すっかり参ってしまいます。月の神様の国はいつも夜に包まれているそうですね。きつと涼しいのだろうなあと、羨ましく思う今日この頃です。

今日は私の話を、身の上話？ みたいのを聞いて欲しくてお手紙しました。くだらないことです。きつとお忙しいでしょうから、読みたくなかったらここで手紙は捨てて下さい。
さようなら。

その手紙は、一枚目の便せんにそこまで書かれ途切れていた。

差出人の名前は、相川^{あいかわ}・千風^{ちかせ}。かつて、キズオトと名乗っていた女の子だ。

今、ボクらは目的地であるキズオトの学校から、峠一つ隔てた村の小さな民宿にいる。時間は朝の九時くらい。昇った太陽が南東の空から、朝だけにあるキラキラした輝きを放っている。

「チヨ、お茶をいただいで来ましたわ。お飲みなさい」

部屋の襖障子を開けて、サキがお盆に湯飲みと急須を乗せて入ってきた。ボクはもう普段着に着替えたのに、彼はまだ寝間着である浴衣をだぼっと着ている。でも、そのだらしな感じは彼にあつて

いた。

どうぞ、と正座したサキがお茶を入れて勧めてくれた。ボクは手紙をちゃぶ台に置き、湯飲みに口を付けた。

「あ、おいしい。おいしいね、サキ」

「ええ、新茶だとおっしゃってましたわ」

サキもお茶を啜る。そして、ボクが置いたキズオトの手紙を取り上げた。

「あら……可愛らしい字。あの子、毛筆ではそれは酷い字を書いていたものですが、上達したのですね」

半ば感嘆しつつ、サキはキズオトの文面を見る。

手紙は端に蕙の模様が描かれた、萌黄の和紙のかわいい便せんに書かれていた。そしてサキの言うとおり、その上に書かれたキズオトの字はもつとかわいかった。

ボクらはこの手紙を、ここに来るまでの山道で拾った。まるで隠されるように、道から外れた藪の中に、瓶に詰めて埋められていた手紙。ボクが大地と繋がりのある者ではなかったら、きっと見つけれなかっただろう。

「？ 何でサキは昔のキズオトの字を知ってるの」

サキはつい最近になるまで目が見えなかったはずなのに。

「それはですね、私がネガイのmemoryの一部を引き継いでいるからですわ」

三つの瞳を同時に瞬かせ、サキはこともなげに答えた。

そこでサキが手紙を差し出してきたので、ボクは湯飲みを置いて手紙の続きを読むことにした。

二枚目の便せん。そこから何枚にもわたってびっしりと書き込まれた文面を、ボクは声に出して読み始めた。

ありがとう。

ここを読んでいるということは、二枚目にも目を通してくれているということですね。

まず、私の学校の話をお願いします。

私の通っている学校、県立諏訪高校は、全校生徒三百人くらいのもうあまり大きくない学校です。学校自体は広くてピカピカしていて、後ろには大山山系の立派な山並みがたたずんでいます。学校の生徒はいつでも山に入って、木々や草花、動物や昆虫たち、そして澄み切った風や水と好きなだけ触れあうことができるのです。

学校の雰囲気はのんびりしていて、けれど活気もあります。まるでじつと風を待つ川辺の葦のように、みんな生き生きとしています。私は学校にいるすべての人が好きです。でも、その中でも特別に好きな友達を四人紹介します。

一人目は詩之崎・三都。三都と私は呼んでいます。とっても勉強ができて、スポーツも上手で、その上ピアノやチェロまでできちゃうすごい男の子です。お金持ちの家のせいかちょっと偉そうですが、勉強の解らないところとか聞くと親切に教えてくれます。

三都には、七音っていうかわいい妹もいます。

二人目は勘解由小路・津辻。三都につづき、津辻の家も立派です。剣道の道場で、彼女も剣道の師範代をやっているそうです。加えて彼女は茶道もやっています。勉強もスポーツももちろん完璧です。なんていうか、女として憧れちゃうような、そんな友達です。

三人目は天使・水月。ちょっと変わった名前の女の子、でもとっても良い子なんです。料理とか、お裁縫とか、ほかにも何でもできちゃって、学校の成績も抜群。もはや神の傑作と言うべきこのスー

パーガールは、三都の勧めで、後に紹介する友達の家でメイドさんをやっています。水月のメイドさん姿はすごくかわいいですよ。

そう……私の友達の内、四人中三人は何だか学校中でも尊敬されてしまう非凡な人です。そんな有名人がどうして私の友達かという、それは私の一番の友達のおかげなんです。

平島・透ひらしま とうは私の幼なじみみたいな男の子です。透とは、小学校で始めて同じクラスになったときから、ずっと同じ学校、同じクラスです。透は前の三人に比べてしまえば学校の成績も良いわけではないけど、とても友達想いで、また友達からも好かれる男の子なんです。どれだけ友達想いかって言うと、お父さんとお母さんが遠くへ行ってしまっても、友達の為に一人家に残ることを決めちゃったくらいです。

透は本当にみんなから好かれる不思議な魅力を持っています。別にムードメーカーというわけでも、何か特別なことをしているわけではない。透は平凡な男の子、でも誰からも好かれます。三都も、津辻も、水月も、私も、そんな透に惹かれて一緒にいます。

次に、私自身の話をしようと思います。

私の名前、相川・千風あいかわ ちかぜと言います。でも何故自分がこんな名前なのか、私にはわかりません。

何故なら、私には両親の記憶がないから。私には十歳より前の記憶がないのです。

ふと気が付くと、私は孤児院にいました。そこから、今の私の記憶は始まっています。記憶のはじまりはぼんやりとしたもの、まるで水の中にあっただものが少しずつ顔を出すような感じで、私を驚

かせません。でも記憶がない事への不安がないわけではありません。身の回りの人は、私の九歳より前のことも知っています。だから、私が記憶を持っていないのはみんなにとってはありません。だから、私は記憶を失くしていることを隠しています。

私は誰なんでしょう？

こうして私は、自分のことも、周りの人のこともわからなくなつて、どうしようもなくなってしまうときがあります。

けれど、そんな時でも私はある存在だけは心の底から感じる事ができるのです。

それは風。

私は昔から、風というものをすごく身近に感じています。風は私の心を不思議と慰めてくれ、私が想うと流れを変えて一緒に遊んでくれたりもします。風は私の家族のような気がします。風は世界中にあるものですから、世界中に私の家族がいる、そんなふうに風は私を力づけてくれます。

しかし、時々夢に見ます。血はつながっていないのに、互いを「家族」と近しく認め合う五人の人たちと、私が暮らしている夢を。夢の中で私は十歳に満たない小さな女の子で、和風な家に住んで和風な装いをしているのです。

夢の家族の話します。

その家族には、まずお母さんのような姉のような、そんな年上の女の人が二人います。名前はわかりません。夢の中の事なので細かい表現できませんが、一人は色で言えば黒く、とても物静かです。もう一人は青く、とても優しい人。けど、その人は心の奥に氷のように冷たいものを押し隠している、そんな水のような二面性を持つ人です。

さらに、確実に姉と呼べる女の子が二人います。とはいっても、

私はその二人の事は姉と呼んでいるわけではありませんが。

一人は色で言えば白い人。白い人はとても私を可愛がってくれます。けど、その人の優しさは上辺だけのもので、その人の心は雪のように無感動な気が私にはするのです。

もう一人の赫い人は、白い人と対照的に本当に直情的な人で、すぐに怒ったり泣いたりします。私に限らずみんなのことを、時に好いたり、時に嫌ったり、でも心の中では好いている、そんな炎みたいに揺らめくアンバランスな心を持っている人です。

そして、最後の人は家族の中で唯一の男の子、私はその人のことを兄と慕っています。彼はいつでも誰に対しても誠実で、優しく穏やかな心を持った人。そして……その………すごくセクシーなんです。夢の中で私は小さな女の子なのに、彼に対しすごくドキドキしてしまうのです。私は、その人に恋をしているのです。でも、彼の思いはたった一人だけに向けられているのです。

私は思います。夢の中にいる私の兄、それは月の神様、あなたではないのかと。あなたに会ったことも、顔を見たこともないのにそう思うのです。

手紙はここで一区切りされていた。残る便せんは一枚。

「ネガイはキズオトちゃんを現まに送るとき、彼女が願ってはいないことでしたが、彼女の記憶を封印しました。つまり、私達と暮らした長い間の思い出を。彼女はすべての記憶を背負った上で、只人として生きていく覚悟をしていましたが、ネガイの温情がそれを止めさせたのです」

音読を中断すると、急に喉の渴きを覚えた。お茶を飲もうと思っただけ、もう急須に入れるお湯さえなかった。最後の一杯はサキが悠々と飲んでいた。

ボクは固い唾を飲み下し、渴きを我慢して尋ねた。

「キズオトは……それで少しは幸せになったのかな？」

さあ、とサキ。また一口お茶を飲み、言う。

「今の生活を彼女がどう思っているか、それは手紙の残された箇所に記されてるはずですよ。だから、続きを読んでくださいまし」

ことん、と音を立てて、サキはボクの目の前に湯飲みを置いた。まだ半分くらいお茶が残されている。

彼が笑う。飲んで良い、ということだろう。ボクはありがたく一気飲みした。

「 間接キスですわ」

すっかり、お伝えしたかったことと話がずれてしまいました。

ですが、月の神様にはおわかりいただけただけでしょうか？ 私がどれだけ友達を、平和な今の毎日を大切に思っているかが。

夢の家族のことも気にはなりません。でも、あれが本当に私の過去だとしても、私はあの生活を欲することはしません。なぜなら、あの生活がなくなってしまうのは、何か重大な出来事があったせいで、しかし私は誰かの思いやりでその出来事を忘れさせられている……そんな気がするからです。

私はあの生活に戻ることを望まれていない。また同時に、私も戻れることを望んでいません。付け加えて言うなら、私は月の神様に会いたいということも全くありません。たとえ月の神様が、私の恋した‘お兄ちゃん’であったとしても。

なので、お願いします。私達のところには来ないでください。世

界がどうなってしまったとしても、私は今の日常を失くしたくないんです。

私は他のみんなには無い力を持っています。そして、みんなはそのことを知りません。ですが、隠し事をしている私は、力を持つ私は、この平和の中においてはいけないのでしょうか？

私はそうは思いません。独りよがりかもしれないけど、私は次に言うことを守っていればみんなといて良い気がするんです。

それは、力を使わないこと。一切の目的の為に力を使わなければ、私はみんなと変わらないと思うんです。間違っていますか？

私はここにいることを望みました。‘千風’という私は、他の誰でもない、私の親しい人達と共に在る風であろうと決めました。

来ないでください。月の神様が来れば、私は全力を持ってみんなを守ります。でなければ、あなたはみんなを傷つけてしまうだろうから。

でも、守る為にはこの風の力を使わなければいけない。そして、力を使えば、私はみんなともう一緒にはいられない。

だから、どうかお願いします。来ないでください。私を、友達と一緒にいさせてください。

さようなら。

相川・千風・

それで全てだった。キズオトは手紙の末尾を、‘敬具’の言葉を抜かして、震えるくらい思いを込めて締めくくっていた。

「風とは万物を結ぶ絆。あの子は、とても情の篤い子になったのですね」

「きつと、サキ達と一緒に住んでいたときからそうだったんだよ。でも、キズオトはそれを口には出さなかった。出す必要もなかった……あの頃は、そんな毎日が無くなるだなんて、きつと思ひもしたくて良いくらい幸せだったんだよ」

戦争と隣り合わせの毎日。でも、彼女にとっては最高の日々だったんだろう。

だけど、彼女にとっての終わりは唐突に来てしまった。もしかしたらその時、彼女はその終わりを理解できなかったのかもしれない。終わりを受け入れはしたけれど、理解はしていなかったんじゃないだろうか。そして……

「怖いんだろうね、この上なく。終わってしまふことが」

「記憶は無くとも、想いはあるのかもしれませんが。そしてあの時の無理解は、根拠の無い恐れとして彼女の中に刻み込まれているのかもしれない。だとしたら、今の彼女は傷を負った獣と大差ありませんわよ」

傷を負った、風音かざオトの中キズオトにいる獣。それが、彼女の名の意味なのだろうか？

だとしたら悲しすぎる。彼女は必死に、牙も爪も、そして傷さえも隠そうとしているのに、戦いが彼女を暴こうとしている。

キズオトは手紙を書いても、それを風に託すことをしなかった。もうすでに決られ始めた彼女の傷が、彼女の心を失望で覆ってしまったのだろうか。

外に出て地面の上に立つと、大地が世界中の情報をボクに伝えてくれる。

……もう、戦いは始まっていた。彼女が恐れ、拒んだ戦いが。

「早かったですわね　私の先視のとおりでしたが。……ひどい通信内容。現の守り手達は混乱しきっていますわね」

電磁波も扱えるサキは、無線を傍受しながら独り言するみたいに言った。

遠望した遠くの景色。夜が侵す戦場は、遠くからは黒いカーテンに覆われているように見える。

「間に合うよね……？　キズオトの大切にしている日々、ボクらが守れるよね？」

ボクの問いに、サキは薄く笑った。

「それはあなた次第ですわ、チヨ。彼女はもう自分の後先を決めてしまっている。だとすれば、あなたが彼女を説得して彼女の決意を変えるだけですわ」

自分は関わらない、彼の態度は言下にそう物語っていた。

試されているんだ。

サキはボクの価値を推し量っているのだろう。この先、ボクと彼、どちらがツミと戦う上で前に立つべきだろうか。

ボクは、声に迷いを込めず言った。

「ボクは、キズオトは友達と一緒にいるべきだと思う。キズオトはもう生臭い戦いなんかに関わっちゃいけないんだ。だから、ボクは彼女のところへ行つて、代わりに戦いたい。　そのために、力を貸して、サキ」

「上等」

言葉は少なく、サキは満足げに笑みだけを浮かべた。そして黒い銃を取り、山の向こうを指し示した。

戦場はすぐそこだった。

5・1「月に宛てられた手紙」（後書き）

拝啓と書くと『京四郎と永遠の空』を思い出します。

‘諏訪’の名は‘諏訪神社’からもらいました。諏訪神社は建御名方神（タケミナカタノカミ）を奉る神社で、その建御名方神は風の神であるらしいのでこの名前です。
今回の手紙。キズオトが漠然とながら夢の家族を描写するところは要チェックです。いずれ何かに使えないかな、と思ってます。

次はやつと戦闘が入ります。

5・2「護りたい場所」

戦場となってしまうたキズオトの学校まで、ボクはサキをおんぶして走った。

走るときは重力を調整しながら、なるべく速度を上げていく。途中に森があったり川があったり、山を越えるので地形の変化もさまざまだったけど、大地が道案内してくれるのでそれはたいした問題ではなかった。それよりも、背中に負ったサキがボクの胸をつかんだり、猫耳に息を吹きかけたり毛を抜いたりするのは困った。

振り落としていこうかなと、何度本気で考えたことだろう。

とはいえ、出発してから三十分くらいで、ボクらは目的地の見える山の斜面まで来た。

なぜか、月は昇っていない。空は夜の黒ではなく、厚い雲の向こうから日の光が透けて、全体に白くなっていた。

学校はすっぽりと竜巻に覆われ、空と同じ白い風の壁で見えなくなっている。ここから先には簡単に進めなさそうだった。

「あれ……キズオトのかな、やっぱり」

ボクが言つと、背中から降りたサキが服を直しながら答える。

「まあ、そうですね。しかし、記憶の不完全なあの子がそんなに大きな力を使って大丈夫でしょうか？ ええ よくないことが起きるはずですよ」

それを聞いて、行かなくちゃと心が急いた。けれど行く手をささぎるのは竜巻だけじゃない。風の壁の前には、学校に入れないで手をこまねいている異形の集団がいる。日の光の下で見る異形の集団は、また気味が悪い。

「なかなか沢山いますわね。ここから見ている限り、壮観、と言っべき感じですよ」

サキは気楽に言う。でも、ボクの心はずしんと重かった。

「ねえ、サキ。……あの中には、妖化している人もいるんだよね？
ボク、人間を殺すのは嫌だよ」

異形とはどこからともなく生まれる怪物のことで、それらに命や心は無い。けれど、夢から現まぼろしに來た人の中で異形みたいに人間の姿を失ってしまう人がいて、それを「妖化」とボクらは言う。妖化している人は自我と人間の姿を失っているけど、命はあるし、心だつて人の姿だつて、方法さえあれば元に戻る。だから、ボクは妖化している人とはできれば戦いたくなかった。

「相変わらずのお人好しですわ」

サキが言った。でも、そこには蔑むような皮肉な感じはなかった。いいでしょう。今回はチヨに合わせてあげることにしますわ。

もつとも、あなたは異形と妖化した人の区別がつかないでしょうから、私に任せてもらうことになりますけど」

「うん……信じてるよ、サキ」

ボクらは山肌を蹴り、敵の中に突撃を開始した。

*

「killing star！」

やや上方に銃口を向け、サキがトリガーを引く。

一回、二回、三回、四回。毒々しい緑の光の塊が次々と銃口から吐き出され、それらは各々小さな弾丸に分かれて敵へ飛ぶ。銃弾の描く軌道は曲線。その無数の曲線一つ一つが、異形の頭を貫通して消滅させる。

ひとしきりサキの攻撃が行われると、目の前の軍勢は少しまばらになっていた。残ったのは妖化している人、のはず。彼らは攻撃が

止んだのを知るや、気味の悪い声をあげてこちらに向かってきた。

「サキ！ 乗って！」

ボクはサキを急いで背中に乗せる。

立ち上がると、地面を靴の裏で擦り大地に呼びかけた。

「ボクの足踏みに合わせて、踊って、大地。そして、前に振り上げる足に力を込めて、ボクの前に立ちふさがる全てのものを吹き飛ばして！」

言い終えたとき、敵との距離は十メートルを切っていた。だけど、ボクはあわてず、息を深く吸い込みながら右足を持ち上げ、その場に落とした。

「えい！」

ドン、と地を踏む音が跳ね、そして大地が跳ねた。

敵の足取りが乱れる。あるものは躓き、あるものはその場でひっくり返った。そうして、バラバラと敵の隊伍が乱れた。

次に、ボクは地面を蹴り上げる。表面の土を抉り、蹴り飛ばすように。

それで飛んでいくのは少しの砂と、重力の塊。目の前にいる敵が見えない力にぶつかって木っ端のように吹っ飛んだ。

道が開く。

「いっくよ！」

ダン、と右足による初歩の踏み込み。地が跳ねる。

二歩目の為に左足を振り上げ、土を踏む。眼前の敵が飛び、また地が跳ねる。

繰り返す。足を交互に前に出し、身体を支えながら進むのは歩み

という動作。速めれば走りとなる。ボクは大地を踏み、震わせ、敵を蹴散らしながら走る。

風の壁までだいたい四百メートル。こっちの速さが秒速十メートルくらいだから、四十秒走り続けられたらボクの勝ちだ。

ただ敵は幾千という。その形状は色々だ。

八十メートルくらい走ったところで、地震に対処できる身体を持った人が追いついてきた。

まずは翼のある人。竜巻の影響で飛びにくそうだけど、とりわけ頑丈そうなのが十五人くらい、ボクの後ろについた。

「サキ、お願い！」

「……人使いが荒いですわね」

ボクにしがみついたまま、サキは後ろを向く。両手は放せないの
で銃は使えない。額の紫苑の瞳で敵を捕らえ、彼は言う。

「ネガイ、力を貸してください。 blade shade」

飛ぶ人の影から黒い刃が飛び出した。影の刃は、あるじの翼を下から切り裂く。

甲高い叫び、絹を裂くような絶叫が次々と聞こえはじめる。

が、敵はそれだけじゃない。今度は地面を走って追跡してくる人がいる。手足四本に加え、二本の足を脇腹から生やして地面を走る人。おぞましい姿、狂ったように笑う顔に、人間らしさは微塵もない。

そして六本足は速かった。ボクの前に回れば蹴散らされるけど、左右と後ろには何の攻撃もないので、特に斜め後の辺りからしつこく突進攻撃を仕掛けてくる。

ボクはそれをジグザクに走って必死に避ける。そして、

「えい！」

跳んだ。

一際大きく大地を蹴ったことに合わせ、地面が大きく揺れた。さしもの六本足もひっくり返り、さらにボクの着地の衝撃で何人かが跳ね散らされた。

そうですわ、と背中の子が何やら弾んだ声で言った。

おさまらない敵の進撃をかわしつつ、ボクは何事かと彼に尋ねる。「良いことを思いつきましたわ。……チヨ、三つ声に出して数えて、それから思いつきり跳んでください。なるべく身体はまっすぐにして、前のめりに」

何か嫌な予感がした。けどボクが何か言う前に、サキは「三」と言ったのでボクもカウントダウンをはじめてしまった。

「、二、一、ジャンプ！」

「brilliant jet！」

地を離れた直後、未知の推進力が足の下に生まれたのを感じた。視線を軽く下にやると、そこに目も眩む光があった。光はボクの身体を上押し上げている。これは跳躍ではなく、飛翔。

「な、なにになに!？」

「チヨ! 落ち着きなさい。ちゃんと姿勢が保てれば、ここまま百メートルくらい稼げますわよ」

そんなこと言われても……

「ボク、飛ぶのは苦手……って、何か背の高いのがある!」

手を伸ばしてくる。

反射的に身を捻ってしまい、バランスを崩した。ボクらは右前に、敵の固まっている真っ直中に墜落した。

不時着の瞬間、ボクは何も言わなかったけど、地面がまた大きく跳ねて敵を遠ざけてくれた。けれど、敵はすぐさま寄ってくる。

「来るな!!」

大地のエネルギーを爆発させ、敵を吹っ飛ばす。でも命を奪わないように力を抑えているから、向こうの復活も早い。その上、次から次へとこの場に敵が殺到しているからきりが無い。

「サキ、手伝って……………サキ？」

彼は不時着の衝撃から立ち直れず、座り込んだままぼうつとしていた。

絶体絶命だった。ボク一人なら力尽くで逃げられそうなものだけど、サキがいてはどうしようもない。

とにかく地震を起こして敵を近づけなくする。だけど、手前の敵を飛ばしても、すぐ後ろの敵がやってくる。ボクはただ、敵の群れをかき混ぜているだけだった。

知らず識らず、ボクは叫びだしていた。何も考えれず、危機的な状況に心だけでも抗うように、空しく叫び続けていた。

*

「炎よ！」

*

赫い風が吹き抜けた。

視界が一度遮られ、晴れたときには眼前に迫っていた敵がすべて消えていた。…………遠くで、何かが叩き付けられる衝撃が、僅かに伝

わって来た。

「これ……、何が……？」

世界は一変していた。

まず、厚い雲に覆い隠されていた太陽が顔を出していた。そして、周囲の地面が一定方向に　ちょうど太陽のある方向から　抉り飛ばされていた。それはよほど大きな力だったに違いない。けど、ボクはそんな力を一切感じなかった。

何故だろうと思ひ呆然と後ろを顧みると、サキが座ったまま自分の影に手をつけていた。ボクが見ている間に、彼は悠然と立ち上がり太陽を仰ぎ見た。

「　やっと来ましたわね。遅いですわよ、アカ」

サキはいない人の名を呼んで話しかける。　いや、そこには確かにアカがいた。太陽を背にして、金色の炎をまとい彼女は飛んでいた。

珊瑚色の目でボクらを見下ろすアカ。その雰囲気は不思議と落ち着いている。この前会ったときは、全然違う。

「ふん……。先視して私がいつ来るか知っていたあんたが、'やつと'なんて言うんじゃないわよ、サキ。おまけに、結界張って私の攻撃を無力化したでしょ」

口調もまた平静だった。

たん、と軽く音を立て、少し離れた場所にアカが舞い降りる。ややくれて、彼女の背後に二つの影も現れた。糸鶴イトトリと鷺累ササグサだ。

「そっか……。ここら辺が夜になってなかったのは、アカが来てたからなんだね。ありがとう、アカ、助けてくれて。　でも、ここにいた人達、みんな殺しちゃったんだね……」

ボクの言葉にアカは答えない。彼女は足音も静かにこちらに歩み

寄り、

「馬鹿じゃないの？」

ボクの左頬を叩いた。

「別にあんたを助けに来たわけじゃない。私は 漆黒の守護者 として、ここにいる連中を焼いてまわってるだけ。それを何？」

「あんたは異形どもに囲まれてただ喚いでいて。一体何しに来たのよ？ 私が来なかったら、あんた、今頃土に還ってたんじゃないの？」

怒声ではない、けどボクの心に重く響く声と言葉。

「中途半端な優しさじゃ、ツミには勝てない。失せなさい、この戦場から」

それだけ言っつて、アカはボクに背を向ける。

彼女の言うこと、はじめからわかっていた。ボクの戦う相手は、みんな手加減なしで力を振るう。ボクが手加減して敵うはずもないでも

「ボクはここで戦いたいんだ。力が足りなくても、覚悟が足りなくても、ボクは戦いたいんだ……戦わなくちゃいけないんだ！」

振り向きざまに、アカはまた右手を振るう。

けど、今度はその手を受け止めた。

腕を掴んだまま、ボクはアカと向き合う。睨み合う。互いの想いを見せつけ合うみたいに。

「そうやって、あんたはサキの身まで危うくしたのよ？ その言い訳はしてくれるのかしら？」

「言い訳はしないよ。でも、次からはもっとちゃんとしてみせる！」

「甘ったれるんじゃないわよ！」

アカの膝がお腹にめり込んだ。
痛みと衝撃で身体を屈しそうになる。でもこらえて、一層強い力を込めてぐつとアカを睨み付けた。

「今の手加減されてましたわよね、糸鶴さん？」
サキが言った。

「そのとおりじゃな、サキ。実を言うと、ここまでも『妖化性の異形は殺さないで。一人殺したら、あなたの指を一本焼く』とあやつが言うもんじゃから、ここに来るまで異形以外は殺さないようにしてきたんじゃ。だから時間が掛かったんじゃ。　　のう、鷺累？」

糸鶴が言った。

「まったく。今日のあいつは変だ。しかし、最近のあいつはますますおっかなくなっただけだから。逆らうとマジで火葬にされる」

鷺累も言った。

ボクの目も前で、アカの顔がみるみる朱に染まっていった。鮮やかなものだった。

「う、うるさいわよっ！　外野は黙ってなさい！」
そう大声で言いながら、アカはパンとボクにつかまれていた腕を振りほどいた。朱くなった顔を隠すようにそっぽを向き、腕組みして言った。

「ここに来てやったのはね、あの竜巻を突破するのにあんたの力を使うのが一番らくだと思ったからなのよ！　別に、あんたのためとかじゃないわけ。それに、あんたがその調子だったら、頼まれたって願ひ下げだっということ！」

炎の属性のアカは、風とは相性が悪い。ボクの、‘揺ぎない’という大地の属性なら、あの竜巻もある程度楽に越えられる。

けど、アカの本当の属性は‘太陽’だ。本当なら竜巻だってなんでもないはずだ。それでも来てくれたのは、アカの　優しさ、なのかなあと思う。

「うん　アカ、ボクに力を貸させて。一緒に、キズオトに会いに行こう」

「……足引つ張るんじゃないわよ」

周りを見ると、削られていた軍勢が数を取り戻し、こちらに波となって迫っていた。もうおしゃべりしている時間は無い。

アカが言う。

「じゃあ、そういう事で私は行くから。あとは逃げるなり戦うなり好きにしないさい。　妖化性異形は……できれば殺さないで」

「わかった、と言いたいところじゃが……わかつていると思うが妾と鷲累には、お主のような魔物を見分ける‘火眼金睛’の瞳は無いのじゃぞ。お主の頼みは聞けそうに無い」

糸鶴が苦々しく言った。どうやら糸鶴はアカに好意的なんだなあ、とボクは思う。もちろん、その方がボクもうれしいけど。

そこで、サキが答えた。彼は銃を構え意気揚々としている。

「なら、およばずながら私がわたくし。アカの眼ほどではありませんが、あの程度は見分けられるので。　ここは共闘ということで、よろしいですわねお二方？」

「　いいだろう」

糸鶴と鷲累とならんだサキに、ボクは声かける。すると、彼はうれしそうに笑って言う。

「あなたの願いをかなえるために、私はここに残ります。ですから、あなたもがんばりなさいまし」

「……うん。行って来るよ、サキ」

サキと離れることに鋭く胸が痛んだ。どうして？

しかし今はその疑問を黙殺する。ボクはすでに戦場を選んでいるから。キズオトが守りたいものを守るといふ戦場を、ボクは選んでいるから。

「行くよ！」

5・2「護りたい場所」（後書き）

ずっと言い忘れていたことを。

アカのコードネーム、‘紅鳥’の由来。彼女のシンボルカラーのあか（紅）に、太陽の鳥であるカラスを組み合わせた名です。あんなまじり、‘コオウ’という音は良くないですね。

‘火眼金睛’は中国の伝奇によく出てくる、妖怪を見抜く特殊能力です。『西遊記』とかにあったはずです。アカの瞳は普段は珊瑚色ですが、この術が発動すると金色になる設定です。

ところで、皆さん『天使な小生意気』という漫画・アニメを御存知ですか？ 私は子供の頃にちよっとだけ見たぐらいです。全然記憶になかったはずなのですが……

やられました。‘天使’の姓を持つ者がすでにいようとは。無意識だったんです。本当に、パロディとかということはないんです。

5・3「子供たち」

風の壁を抜けると、そこは夜だった。

学校の白い外壁が蒼い月光に照らされ、妖しく光っている。敵の気配は希薄だけど、周囲の空気にはどことなくなじめない感じがする。純粹な悪意。押し隠した悲しみ。そんなものが、どんよりと漂っていた。

「胸糞悪くなる空気……。こんなところはさっさとおさらばしたいものね」

アカが口汚く言った。

「……キズオトはたぶん校舎の中にいるよ。気配を隠しているみただけけど、もう少し近くに寄れたらわかるはずだよ」

「なら、もたもたしてないで行くわよ」

ボクとアカは一緒に玄関に急いだ。

校舎内の空気もどんよりしていた。

電灯類は点けられていない。生徒も先生も大勢いるみたいだけど、みんなこの異変を怖れて息を潜めている。明かりも自分たちで消したのだろう。校舎に入った異形は一・二体。今のところは誰も傷ついていないみたいだけど、

「夢が降りてきたら、みんな……。大変なことになっちゃうんだね」
ボクが言うと、アカが答える。

「ま、皆殺しね。運が良いと生き残るかもしれないけど」

惨劇を前にした、重苦しい静寂。ただ蒼い月光だけが冷淡に漏れ入っていた。

それはそうと、ボクはアカを伴ってキズオトを探す。探す、といつても校舎を造ってる建築材に聞けば彼女の場所を教えてくれるの

で、ボクは導かれるままに歩くだけだった。

「どうやら、体育館の前まで来たよう。」

体育館の大きな鉄の扉の前に、非常灯の緑のランプ照らされて二人の人影が見えた。

二人とも学生服らしい服を着ている。服の形から男の子と女の子だ。まるで門番のようにこちらを待ち受けている。

背後に殺気。

「アカ！　っ！」

とつさに横ステップすると、そこに鋭い風が落ちた。鉄の刃、日本刀だった。

「曲者め、覚悟！」

それはちよつと低めの女の子の声だった。

月光の無い闇の中、銀の線が一直線に虚空を走る。

ボクは慌てて後ろに避ける。けど　しまった！　背中が壁に付

いてしまい、そこに矢のような突きが来た。

もうだめだ！

死を覚悟したとき、刀を持つ女の子が横に飛んだ。……アカが彼

女の脇腹にミドルキックを入れたんだ。

飛ばされた女の子は、しかし受け身を取ってすぐさまこちらに飛びかかるうとする。けど

「動くな！」

炎が女の子を包囲した。女の子はやむなく動きを止める。

「ふん……まるでガーディアン気取りね。だけど、客に殺意を向けたときの覚悟はできているのかしら？」

炎が勢いを増す。アカは女の子を焼くつもりだ。

「やめて！」 「やめてください！」

ボクの声に男の子の声が重なった。

声の主は扉の前に立っていた男の子。振り返って見ると、炎に彼の姿が照らし出されている。

「もしかして……透？」

前に夢で見た男の子。あの時も、彼はキズオトといた。

「どうして、俺の名前を知っているんです……？」

特徴的な琥珀の目を丸くして、平島・透はボクに言った。

そのようすに親しみを感じる。ボクは透に、ちよつとね、とだけ答え、アカに言う。

「アカ、その子を許してあげて。ここにいる子達は、みんなキズオトの友達だよ」

友達、と微かに呟き、アカは火を消す。解放された刀を持つ女の子に、透がすかさず走り寄り、両肩を掴んで動きを封じた。

「はなせ平島……！ あいつらを信用するのか」
唸るように女の子は言う。

「落ち着いて、勘解由小路。あの人達はきつと悪い人じゃない。俺が請けあつから」

透の諭しに、勘解由小路・津辻はしぶしぶ刀を納め立ち上がる。けど、疑いのまなざしはまだ納められていない。

ともあれ、場が静まったところでボクは自己紹介をする。

「えっと……はじめまして、だね。ボクの名前はチヨ。こっちはアカ。ボクらは……特にアカはキズオトと、その……相川・千風と、

縁があつて、それでここに来たんだ。あやしいのは認めるけど、君たちには敵意はないよ……」

尻つぼみになってしまった。

津辻はそんなボクの、自信なく揺れる尻尾を容赦なく見ている。

横でも、もう一人の女の子（たぶん水月^{みづき}）が半信半疑にボクを観察している。

透だけが、ボクらを信じてくれているみたい。

「相川のこと、何か知ってるんですか……？ あの、学校がこんなになってから、相川はずっと体育館に閉じこもっているんです。俺達が体育館に入ろうとしても、なんか開かなくて。中からはボウボウって風の音ばかりするし」

透の言つとおり、少し離れていても扉の向こうから風の音が聞こえる。きっと、あの風が扉を中から圧迫して開かなくしているのだろう。

ボクは、ボクを囲む三人の子達に意識を戻す。

三人とも想いはちよつとずつ違うけれど、みんなキズオトのことを心から思っているんだと、何か胸に迫るものを感じた。

「ありがとう、みんな。キズオトと 千風と仲良くしてくれて。

……て、ボクが言つてもしょうがないだろうけど、千風も、そう想つてるから。

説明するのは難しいけど、今、千風はみんなを守るために戦ってるんだ。でも、本当は千風だって戦うべき人ではないんだ……少ないとも、ボクはそう思う。だからボクはここに来た。彼女の戦いを代わるために。

ボクらはあのドアの向こうに行こうと思う。千風をみんなの元に帰すために。それまでここで待つて欲しいんだ。 いいかな？」

「はい、どうかよろしくおねがいます」

答えたのは水月だった。手紙にあったとおり、本当に可愛い女の子だと、彼女を見た瞬間に思った。

次いで透も頷く。津辻も、しかめっ面だったけど納得してくれたようだった。

ボクは扉の前に立った。

扉は壊すしかない。壊したときの衝撃を考えて、ボクはまず後ろの子達を守るための壁をつくった。

「アカ、お願い」

「蓮華紅塵！」
レンカウウジン

ドン、という爆砕の後、なだれ出る風がボクらの顔面を叩いた。

*

一切の光、蒼い月光さえない、無明の闇。漆を流したような闇の中、風だけが縦横無尽に吹き荒れていた。まるで黒い風がここを満たしているような、そんな錯覚さえする。

「キズオトおー！」

ボクは彼女の名を呼ぶ。けれど答えはない。そもそも風の音が激しすぎて何も聞こえない。自分の声さえ聞こえないのだから。

床にしっかり足をつけ大地の引力を頼りながら、ボクはアカの手を引いて風を中心へ向かう。そこにキズオトはいるはず。

はたして、そこにキズオトはいた。自らに閉じこもるように身体を丸めて耳を塞いで、渦巻く風を中心に浮いていた。その姿は周囲

の猛威に比べてあまりにひっそりしていて、暗闇でも見える猫の瞳にも、彼女の姿は朧に見えた。

怖いだね。

サキの言ったとおり、彼女は力の制御を失っているみたいだった。暴走する力が怖いのか、それとも力を使う自分が怖いのかもしれない。みんなに嫌われてしまうことが怖くて、ここに閉じこもっているのかもしれない。

「キズオト、もう大丈夫だよ。ボクらがここに来たから。ボクらがここを守るから」

返事はない。もう十分な距離に近づいたから、声は届くはずなのに。

と、そこではっと思いが当たった。目の前にいる女の子は、もうキズオトではないのかもしれない。

「千風。相川・千風、ボクの声が聞こえる？」

彼女は反応した。

やはり彼女はもう‘キズオト’ではないのだ。身にまとうのは和服ではなく、ブレザーとスカートの黒い学生服。セミロングの髪は黒。瞳の色は昔の名残かスカイ・ブルーだけど、それを除けば彼女は普通の現（うつつ）の少女と変わらない。

「千風、落ち着いて聞いて。」

この学校は今、悪意をもった存在に脅かされている。けど、安心して。ボクらがここを守るから。千風はもう戦っちゃいけない。向こうで友達が待っている。みんな千風のことを心配している。だから、さあ、戻ってあげて」

ボクは風に浮かぶ千風の両肩に左右の手を置き、静かに‘力’を込めて地に下ろした。

千風の身体が重力化に置かれたとき、体育館の闇を騒がせていた風も治まった。

「やれやれ、やっと治まったわね。……灯りをつけてもいいかしら？」

今まで風で身動きできなかったアカが、ほっとしたように言った。黒いスーツの彼女は、暗闇の中で金の瞳だけを爛と輝かせている。

まるで猫のようだ。人のことは言えないけど。

「ちよつと待って。千風？ 灯りをつけてもいいかな？」

目の前の少女は弱々しく頷く。

座りこんでいるボクと千風の上に、アカが火の玉を浮かべた。月の明かりとはまったく違う、赤みを帯びたそれがあたたかくボクらを照らし始めた。

と、千風が眼を丸くして頭上に浮かぶ火を見あげていた。どうやら驚かせてしまったようだ。

「あ、あのね？ 恐いことは無いから大丈夫だよ。もしか

して、見覚えあつたりする？」

ボクの問いかけに、あつさり千風は首を振った。

「あの……あなた方はどなたなんですか？ あたしのこと知ってるみたいだし……それに、風も鎮めてくれたみたいですし……、手品師ってわけではなさそうですけど……」

おずおずと千風が尋ねてくる。いじらしいその表情にはほえまじさを感じつつ、ボクは答える。

「ボクは、名前をチヨつていうよ。でこっちは」

「あんだ、私のこと覚えてないの？」

急にアカが口を開いた。

そういえば、アカはキズオトが記憶を無くしたことを知らな

いんだっけ。

サキが言っていた。ネガイはキズオトの記憶を消したことをアカに言っていないと。その理由は色々だろうけど、とにかくアカ知らないんだ。

背後に立つアカを振り返ると、その顔が不快そうに顰められていた。

「さっきから　あの子供達が話していたときから変だとは思っていたのよね。あの子供達があんたの力を知らないのはわかる。チヨがあんたを戦わせたくないのは、いつものお人好しだと思ってた。

けど、今のあんたは確実に変。　私のこと、忘れたとは言わせないわよ、キズオト……！」

忘れた名を呼ばれた少女が、びくりと身を震わせる。

それを見たアカは、いよいよ言葉に力を込めはじめる。

「そう、傷をつくる風の音、それがあんたの名前。攻撃することに誰よりも長けた女。今は私も太陽の霊力を使えるようになったけど、あんたも現に来て、広いこの世界に吹くすべての風を支配下に置いて力を増しているはず。あんたはね、比類なき殺戮者なのよ、キズオト」

「　いやー！」

千風が耳を覆った。

彼女はやはり、自分の力が攻撃することに傾いていることに気付いていたんだ。自分の持っている力が、守るためのものではなく、傷つけるための力であることに。だから……彼女は力を恐れたんだ。「聞きなさい！　ここはね、今、二つの勢力が互いに等量の命を賭けて対峙している。どちらかが勝てば、守られた数と同じだけの命が滅びるようになっていく。あんたはもうその戦いに関わった。い

まさらあとには」

「アカ！ …… もういいでしょ？ やめてあげなよ」

ボクはアカの言葉を遮った。

だけど、そこで黙る彼女でもなかった。

「はん！ お人好しの猫が！ キズオトはこれまでに何万もの敵を屠ったのよ。いまさら、普通の人間として生きていけると思っわけ？」

「アカ、何むきになつてるんだよ。 …… キズオトはね、ネガイが記憶を消しちゃったから何もわからないんだよ。だから、もっと優しくしてあげてもいいんじゃないの？」

アカは耳を貸さない。ほとんど怒鳴るようにしてアカは言葉を重ねる。

「ふざけるんじゃないわよ！ 元はといえば、キズオトとツミがやったことのおかげでこんな状況になったんじゃない！ それを忘れて済ますわけ？ 責任を取りなさいよ。私の日々を壊した 罪を償いなさい、キズオト！」

「い、いや …… ああああああ！」

突きつけられた言葉に、激しい拒絶を示したキズオト。彼女の想いに呼応して、静まっていた風の気配が一気に爆発した。

「ち、ちか ……！」

豪烈の風に名を呼ぶこともできない。

泣き叫ぶ風に、体育館も歯ぎしりした。

そして体育館が破裂したとき、ボクの意識は途絶えた。

*

気がつくと、体育館から百メートルほど離れた、グラウンドの真ん中にボクは倒れていた。

世界が軋んでいる。

統制を失いはじめた竜巻が、大気圧を不規則に変化させている。校舎には大きな負担が掛かっている。このままでは、千風が守りたいと望んだ学校自体が壊れかねない。

「千風……………」

吹き飛ばされたことによるダメージ自体は小さかった。これも大地のおかげかなと、立ち上がりながら思った。

と、横にアカが倒れていることに気がついた。怪我はない。気絶しているだけ。

『私の日々を壊した、罪を償いなさい！』

ふいに、アカの言葉が甦る。

口調は強かった。けど、込められた想い自体はあやふやだったよ
うな気が、ボクにはした。だってアカが本当にキズオトを恨んでい
たとしたら、この言葉は真っ先に出されるはずだから。彼女の
本心は、まったく掴みづらい。

う、と声を出してアカが目覚めた。

全身を確かめながらアカは立ち上がる。

そこでボクの顔を、瞳を覗き込む。まるで、ボクの瞳を鏡にして
自分の瞳を見るように。

「私……………言いすぎたかしら……………」

ぞんざいな言葉。けど、声には悔やみの気持ちがあつきりと表れ
ていた。

「大丈夫だよ、アカ。今度会ったときはちゃんと話せばいいから。
キズオトだってわかってくれる。だって、二人は家族なんだから」

ボクがこう答えると、アカははにかんだように笑った。そこには言葉はないけど、ボクは確かに‘ありがとう’の想いを受け取った。これだけでいいと思う。誰もが素直である必要はない。それにアカにだって自覚はあるのだから、ボクが必要以上に口出しすることもない。

「私、疲れたわ。あとはあんたに任せさせてもらう。……それでいい?」

「うん。じゃあ、またあとでね」

アカを残して、ボクは駆けだした。

強い風の中、目指すのは一人で泣いている女の子。

5・3 「子供たち」 (後書き)

いまさら言うことではありませんが、私は一話ごとの長さを一定限度以上にしないようにしています。

データサイズで言えば12kB くらい、文字数では六千をおおよその上限としています。

その理由は、長いと書きづらいし、読みづらいかなと思うからです。しかし話が進む事にそれも難しくなってきました。リアルにもっと時間があればじっくり書いてもいいんですけどね。

というわけで、生煮えの文章ですが読んで下さると幸いです。

5・4「大地と風」

「じゃあ、またあとで」

気安い言葉を残し、チヨは走っていく。その足取りに迷いは無く、小さく揺れるチヨの黒い短髪を見てアカは密かに思った。

うらやましいものね。

今は、自分も彼女と同じ短髪だ。風に揺られる後ろ髪はもう無い。にも拘らず、どうして心はいまだに揺れ続けるのだろうか。

いつかは彼女のようになれるかしら、と彼女は微かな憧憬を覚えつつ自問する。もちろん答えは無い。だが、良い。私は私なのだから。そこまで考えて、彼女は物思いを止めた。

「ササヤキ 戦うわよ」

姿無きものへの呼びかけ。

否、応えはあった。漆黒の空の下、蒼い月光を受けてきらめく二本の水槍が、アカの背後に音も無く投じられた。

水槍は目標に届く前に音を立て水蒸気となって霧散した。ア
力を守る高熱の結界だった。

「蓮華紅塵！」
レンカコウジン

振り向きざまにアカは力を放つ。

力の顕現は、彼女の正面全てを範囲とした大規模な爆発。闇を退ける炎。

だが赫い海の中、湯気を立てながら一直線にアカに接近する影が

あつた。

『 』
『 』
空気のよりに澄みきつた、不可視の刃がアカに振り下ろされる。そのわずかな気配と直感でアカは攻撃をかわし、すかさず眼前を爆破しつつ後ろに跳躍した。

「姿も見せないで攻撃してくるなんて、ずいぶん良い性格になったじゃない、ササヤキ。それとも……余裕が無いの？」

数秒前にアカが立っていた位置に、ササヤキが忽然と姿を現した。「あなたを退屈させないように、趣向をこらしてみたのよ、アカ。あなたには、ここで私と踊ってもらわなくちゃ行けないから」

ササヤキは顔に微笑を浮かべてアカを見る。その微笑は、何の感情も込められていないただの笑みだった。

「ふん、心配しなくても私はチヨの後なんて追わないわよ。キズオトのことはチヨに任せた。チヨがキズオトをどうしようと、私は関わらないと決めたの。だから、あんたが望むなら世間話だつてしてやるわよ。退屈しのぎにね」

アカの言葉には一片の嘘もなかった。

そもそも、アカがここに来たのは夢の降着を防ぎ、ツミの邪魔をするのが目的だった。アカにとって、キズオトに会うこととはついでに過ぎなかった。

だが、今のアカはその一番の目的すらチヨにゆだねていた。そのわけは

「……チヨを認めたのね、アカ？」

深い洞察を持って、ササヤキは言った。

さすがの長姉役ね、とアカは思った。

そしてアカは答える。普段の天邪鬼さは一切見せず、いつそ清々

しいまでに微笑を浮かべて。

「そうよ。チヨは確かにツミと対等に渡り合える唯一の存在だもの。力を持っていることでは私達はみな同じ。でも、彼女は想いを制している。想いを背負い、その上を歩いていける。想いにただ流されていた、私達は違うから」

憎しみの想いで炎を絶やさなかった女、アカが言う。

一方、ササヤキもまたチヨについて述べる。

「チヨがそうできるのは、彼女が大地と契りを結び、大地に立つ者故かしらね。彼女は想いを知り、想いを背負う。」

キズオト……キズオトはどうなのかしらね。あの子は想いを知ることとはできるけど、それを背負うことはできない。そこがチヨと違う。おまけに、彼女は脆いわ。昔は、私達が彼女の心を守ってきたけど、今はもう私達は離れてしまった。これから、あの子はどうなるのかしら？」

愛しき者の下僕となることで想いを封じた女、ササヤキが言った。炎に照らし出される二つの女の顔。だが、その表情はまるで違う。アカの顔にはやや悟ったような諦観の色があるが、ササヤキの顔にはまだ迷いがあった。

「ま、キズオトのことはチヨがどうにかするでしょ。キズオトが挫けても、チヨは彼女の想いも背負っていくだろうから。……それよ、今は私達がさしあたってすることを決めない？」
ふっ、と炎が消される。

辺りには再び闇が訪れ、二人の姿は蒼の月光が音もなく照らし出す。だがアカの顔は、彼女の手揺れる火が赤く照らししていた。

二人は睨み合う。そこに張りつめた息づかいと並々ならぬ闘志はあるが、殺意はない。

ササヤキが背中を見せた。

「あら、帰るの？」

一切の含みのない戦闘放棄の動作に、半ば呆れたように、気抜けしたようにアカは言った。

一方、ササヤキの返答はこれまでにない微笑混じりのものだった。「何かね……あなたがいつもの 私の知っているあなたらしくないから、調子が狂っちゃったの。興奮めっていつのかしら？ ……私は帰るから、あなたはそこにいてね。いい？ お願いよ？」

「……本当に良い性格になったみたいね」
まあね、とササヤキは振り返り笑って、そのまま姿を消した。

アカはチヨの消えた方向を見やった。その彼方では、エナジー神秘霊力の騒ぐ気配がある。

空を仰ぐ。

天の中心には月、それを囲んで星。澄み切った星月夜は、その背景にあるものを識らずに見れば美しさ限りないものである。

なかなか良いじゃない。

月光は深く、星の散らばりは果てしない。人間の、私の心とは大違いだと、アカは思う。

そしてこの美しいものは、彼女が愛する者が支配するものだけだ。あんたは私の物。そう、アカは想った。

体育館は校舎に後付けされた形だったから、壊れても校舎にダメージは少なかった。

その扉の前に千風の友達を待たせていたけど、彼らはボクの残し

た防御の術で守られたみたいだった。

よかった、とボクは思う。けれど、キズオト自体の問題はまだ解決してない。

今、千風は校舎の屋上にいる。空に一番近い場所で、彼女はひとりぼっちで泣いている。

止めなくちゃ！

風で校舎が壊れそうなのも、夢の降りる気配が強まっていることも、戦いが長引いていてみんなが不安がっていることも、千風が泣いていることも、みんな止めないと。

再び入った校舎はさつきよりも増して、不安の空気でどよんとしていた。でもこの不安の原因が、同じ学校に通う女の子が引き起こしていることをみんな知らない。知っちゃいけない。

ボクは全力で階段を駆けのぼり屋上を目指す。蹴った床が、階段がくずれてしまってもボクは構わなかった。

階段の終わりにあったドアを鍵ごと壊し、屋上に転がり出た。

その瞬間、女の人の絶叫がボクに向かって飛んできた。

同時に目の前を跳ねて飛んでいく拳大の氷の塊。 ナゲキだ。

ひどいダメージを負って人の形を取れなくなったんだ。

とにかく風が強い。風上に向かっては目を開けてられないくらいだ。ボクはとりあえず、風下に転がっている、氷の塊になってしまったナゲキを拾った。

「ナゲキ？ 何があったの？」

答えは頭の中に流れ込んできた。

『ふふ……ちよつとね。あの子の中の思い出を呼び覚ましてあげたの。あの子だったら、自分が私を殺したことを思い出したら。またぞろ私を殺そうとしたわ。まったく……可愛いわね。色々からかってあげたから、今あの子の心は破れた風車よりもひどい回転をしてい

るわよ。 さ、これでいいでしょう？ 私は帰りたいたから放して頂戴」

悪びれもせず、心から愉快そうにナゲキは言った。

「ナゲキ……！」

悔しさを込めて彼女を放ると、高笑いを残して彼女は消えた。

後ろを見る。叩きつけるような暴風がボクの顔に衝突する。さすがのボクも立ってられない。

「う……千風…………！」

両手を床に付いて絞り出した声に、意外にも反応があった。

風が変わった。地を這うような冷たい風が流れてきて、ボクの両手を舐めた。

屋上の縁に、夜空を、月を背にして千風が立っている。空色の瞳は、微笑に細められながらボクを見下ろしている。

「千風、力を」

「あたしはキズオトだよ、チヨ。 相川・千風というあたしは、もういないよ」

そう言っつて、彼女はあどけなく破顔する。小首をかしげるしぐさなんて、とても子供っぽい。

「あたしね、記憶が戻ったらどんな感じになるんだろうって考えてた。すごく、不安だった。けど、戻ってみるとなんてことはなかった。無くなるかもしれないと思った居場所も、ちゃんと今とは違う場所だけど、あたしにはあった。 あたしは、ツミと、お兄ちゃんと一緒にいればいいんだね」

「それが何を意味するのか、わかってるの？ 千風!？」

彼女がここを守らなければ、ここは夢に潰される。

それは、彼女が大切にした友達が　彼女を大切にしている友達が、死んでしまうということ。例えばボクらがここを守っても、千風にとってはもうここは終わった場所になるんだ。

「わかってるよ」

こともなげに彼女は言い捨てた。

「でも、この学校なんてあたしの仮の居場所みたいなものでしょ？　あたしは記憶が無くて、どこいけばいいか判らなかつたからここにいた。だから、いまさらここがどうなるうと、あたしには関係ない」

「嘘だ！　ここには千風が好きみんながいるんだよ。手紙にもそう書いてた。千風の友達、透やみんながいるからここを守りたいって、キミは叫んでいた！」

「うるさい！　あたしが捨てた手紙なんか関係ないでしょ！」
否定の叫び。

そして続くのは、絞り出すような郷愁の言葉。

「あたしは力を使ったからもうここにはいられない。もうどうせここには戻れないのなら、無くなってしまうえばいいんだ！　みんなみんな、あたしの世界から消えちゃえばいいんだ！」

その顔に、さっきまでの薄っぺらな微笑は無い。今彼女の顔にあるのは、涙をにじませたありきたりな女の子の表情だ。

いつしか、静かに吹いていた風は再び荒れ始めていた。それも、まるで吼えただけのような声を轟かせて。

そこまで彼女が友達を無くしたくなかつたのかと、ボクは深く同情した。そして、何もかも壊してしまいたくなるほどに友達を大切に思った彼女に、ボクは大きく同感した。

「千風はもどれるよ！　みんな千風を受け入れてくれる。信じてあげてよ、友達を！」

だけど不安のあまり自分の殻の中に眼を瞑って閉じこもってしまった者に、声は届かない。

「戻れない　戻れるわけがない！　だって風が、世界があたしに戦いを望むんだもん！」

「違う！　キミは本当に風の想いがわかってるの？　風は、千風の力となることを、千風と共にある事だけを望んでいるんだよ！」

風もまた、彼女のためにどうしたらいいかわからない。だから、こんなにも荒れ狂っている。

彼女は確かに力と記憶を取り戻した。でも彼女の本当の力、風の声を聞き世界を知る素質を取り戻してはいないんだ。

「わからない、わからないよ……。あたしには聞こえない。あたしは力を使って戦うことしかできないよ……………」

「……………なら　なら、戦おう、千風。そして教えてあげる。千風の本当の力と、風の想いを！」

彼女が絶叫する。

風が爆発する。

戸惑いが洪水となり、濁っていた想いが溢れ出した。

そして彼女から放たれる必殺の気配。それは強く、恐ろしい。だけど、この向こうには彼女自身が失ってしまった本当の想いがある。その想いを教えるために、その想いを知るために、

戦闘を開始する！

*

彼女の呼ぶ風は、大気の運ぶ純粋なエネルギーとしてボクにぶつかる。

ボクに風を切り裂き避ける術はない。目の前に壁状の防御境界を張りながら、しゃにむにこの身体を前に押し出していくしかない。

「うつ……ぬぬ……！」

足を踏み込むたびに、コンクリートの床は碎ける。

靴はとうに破けてしまった。足を猫のものに変え、爪を立てて前に進む。

前進は加速させる。重力の制御、身体中の筋肉、持てる限りの力を発揮し、ボクは走る。

「ち、かぜえー！」

拳を構える。彼女の力を砕くために、彼女を打ち倒すための攻撃を行う。

拳の速度は野球選手の投球くらい。当たればひとたまりもないだろうけど、ボクは迷いを込めずに撃ち出す。

彼女は避けなかった。

けど、まともに食らったわけでもなかった。

「……軽いね」

彼女は、風に木の葉のように身体を微妙に動かし、攻撃を殺した。戦いに溺れた、うつろな表情で嗤う彼女。

彼女の指鉄砲が、ボクの額に当てられる。

「バン」

彼女の人差し指から、すさまじい衝撃が放たれた。

とっさに防御の力を額に集中させたので、頭に風穴が開くことはなかった。けど防ぎきれなかった衝撃と吹き続けている風の力で、ボクは仰向けに押し飛ばされた。

「パンツァーファウスト！」

彼女がパントマイムで肩に何かを担ぐ動作をした瞬間、ボクは慌てて逃げ出した。

「！」

爆風。圧縮された風の球だったみたいだけど、とても受けきれないものじゃない。

圧縮空気弾による爆発に火気は一切無い。だけど、'破碎する'という目的においてこれほど効果のある攻撃法を、ボクは他に知らない。

彼女は次々と空気弾を撃っているようだった。爆発と同じくらいの間隔で、見えない何かを支える手が上下している。

そうか、ロケットランチャーだ。

彼女は自分の力を、実在の兵器に例えて具象化させているんだ。瞬く間に屋上にあったものが破碎されていく。屋上の入り口とか、ベンチとか。

やっぱり力では勝てない。そう悟り、ボクは術を使うことにした。

「大地、ボクに力を貸して。」

『六（陸）式封印術、起動！』

「

少しでも彼女の力を弱める術。

だけど、術が発動し一帯の重力が少し増えた瞬間、校舎が負荷に耐えきれず悲鳴を上げはじめってしまった。

「まず

「

「ねえ、これはどうかな？ ラティ・サロランタ！」

風の機関銃。

ボクは身を小さくし、無数にばらまかれる風の弾丸を防御する。身動きができない。むやみに戦えば、蜂巣にされてしまう。

やっぱりあれを使うしかない。

問題は場所とタイミング。

「千風えー！」

時間限定で防御結界を限界まで強化し、ボクは雄叫びを上げ風の弾幕を突っ切る。

拳を前に出す。

彼女はまたカウンターを狙って避けようとはしない。けど、ボクの動きはフェイントだ。

彼女の目の前でボクは両腕を広げる。

タツクル。

屋上の縁に立っていた彼女を巻き込んで、ボクは屋上を飛び出した。

5・4「大地と風」(後書き)

千風はミリタリーマニア、というのが影の設定です。彼女にとって近代兵器というのは力の象徴です。言っている名前の武器自体はてきとうです。

……後書きって難しいです。というか、最近になって苦手になりました。

文章を書いていると、あれこれ書くことと思うのですが、いざ後書きを書く段になると何を書きたかったのか思い出せなくなります。メモしていると良いんですけど……さすがに後書きのネタをメモする気もありません。

5・5「新しい名前」

タツクル。

ダイブ。

ボクらが落下していると、彼女を守る風は落下速度を緩めようと下から吹き上げてくる。

けど統制の乱れた風が、力強い大地の引力に敵うはずがない。三階の上、高さにして十メートルくらいの屋上から飛び降りたボクは、彼女を下に相当な勢いで地面とぶつかった。

「かは！」

彼女の肺から空気が叩き出される。

もしかしたら彼女の肋骨が折れてしまったかもしれない。けど、あとで治すからと、今は無視した。

「『大地の腕かいな、その広きを知れ！ “地縛”！』」

通常の三倍くらいの重力が彼女の身体に掛かり、身動きを禁じる。同時に風の力も大地によって縛られ、ボクは彼女の戦闘能力を著しく弱めることに成功した。

しかし彼女は抗う。動かない身体に力を込め、目を見開いて風を叫ぶ。

「助けて！ ファルクラム！」

今度は戦闘機！？

大地の記録からボクはその名を、その力を知る。

「バカ！ 千風まで危ないじゃないか！」

ボクの全身で彼女を覆う。

甲高いジェット音を立て、頭上を駆け抜ける音速の風。

その風は、もはや風と呼ぶにふさわしくない。軌道に沿う上下左右すべてのものを破壊していくそれは、純粋な破壊の波だ。

地面を引きはがすような衝撃波から、ボクは千風を守る。天にさらされた背中の服が千切れ飛んだ。

彼女は我を失っている。一層強くかけた封印の術に考える能力も奪われ、それでも彼女は、狂ったように言葉にならない何かを喚き続けていた。

だめだ、力が足りない！

技術が足りない。このまま封印術をかけ続けたら、最悪彼女は精神自体を封印されて昏睡、そのまま植物人間になってしまいかもしれない。もっと強いだけではなく、包み込むような高度な術を組み立てられた良いけど、ボクにはその技がない。

と、組み伏せている彼女の胸のあたりから、不思議な気配を感じた。

服の下だと気付いたとき、反射的に彼女の懐に（あとから考える）と恥ずかしくて仕方ないけど、手を突っ込んでいた。すると、そこから鎖に繋がれた何かを掴むことができた。

「それはだめ！」

彼女が不意に叫んだ。

手にしたのは鼈甲のかんざし。　　そうだ、前にサキから聞いた、ササヤキがキズオトに遣した封印の力を持つかんざしだ。

鬱金色のかんざしにはひびが走って濁っていた。おそらく彼女の力を吸収しきれずに壊れたんだ。

力を失ったササヤキの術具。でも、まだ込められた術自体は消え去っていない。これを治して力を注ぎ治せば、また使えるかもしれない。

「『よみがえれ砕かれし想いよ。』

我は其の物語を知る者。我は其の想いを知る者なり。

其、我が力を受ければ、其、応えて再び想いを力とせよ！』」

かんざしがまた力を放ち始める。

けど、まだ彼女の力は鎮まりきっていない。

その時だった。ボクの身体の奥と大地が共鳴し、大きな何かがボクにその存在を識らせた。

「『神器召喚』　！？」

全く知らない術式がボクの頭に流れ込んできた。

ぐつと意識が大地の深みに引つ張られていく。けど、彼女を前にしているボクもいる。　ボクの意識がこれまでにないくらい広がっていく。

「『安らかなるみどりこの祈り。命守る母の脈打ち。』

今、土のちから集いて、ここに極みのかたちを為す。

我、魂鎮めのちからを望む者。

古よりうたわれし神のまもり。大いなるかたちなす美しきその名は……！』」

半身を起こすと、世界の流れを感じた。

今、その流れはボクらを取り巻いて渦巻いている。

彼女のあやつる風さえ、この時は渦に巻き込まれていた。渦巻く神秘^{エナジー}力は、ボクと彼女の間で集結し、そして結晶する。

「ボクに力を貸して……『^{やさかにのまがたま}八尺瓊勾玉！』」

『 』の形に似た伽羅色の勾玉がここに顕される。
その力は絶対的な鎮静の力。八尺瓊勾玉は周囲の力を吸収し、大地に還しあていく。ご主人様が、月の王国 が発動させていた降^{ダウン}着の術さえ、無力化され解除される。

最後に竜巻が消え、世界は鎮圧される。優しい黄昏が訪れたのは間もなくのことだった。

*

「立てる……千風？」

斜陽に照らされて金色に頬を染めている女の子に、ボクは問いかけた。

「あかし、千風なのかな……？」

迷うような声は、黄金色の土に落ちて消える。

土の上に横たわったままの彼女に、ボクははっきり言う。

「キミは千風だよ。千風が拒まない限り、千風は千風だ。 とて

も、良い名前だよな」

「うん……そうだね」

ボクは手を差し出す。

彼女も手を伸ばす。 まっすぐ、空に向けて。 風を求めるように。

その手を引いて彼女を立ち上がらせると、祝福するようにやわらかい西風がさあっと駆け抜けた。

「今、風の声が聞こえた。……なんか、すごく久しぶり」

そよ風にもまぎれる声で千風が言った。その頬に、輝きがひとつ。宝石のように。

「なんて言ってた？」

「それは」

体育館があつた場所まで来ると、そこに石のドームが瓦礫に埋もれていた。

ボクが合図するとドームは開く。中から現れるのは、千風の三人の友達だ。

一番に駆け寄ってきたのは平島・透だった。

「相川！」

千風は名を呼び返すことはしなかった。

二人は間近で向かい合う。標準的な背丈の透より、千風の背はちよつと低い。

「相川……俺、その………」

口ごもりながら、透は言葉を紡ぎはじめる。 絆を紡ぐための言葉を。

「俺、相川が何者だったとしても気にしないから。例えば相川が宇宙人だったとしても、相川は俺の友達だ。 だから、もう二度とこんなことは……ひとりで閉じこもったり、いなくなったりしないでくれよ、相川………」

千風はうんとは言わない。そこはかたない声で彼の名前を呼んだだけだった。

気詰まりな沈黙。

打ち破ったのは、千風の四人目の友達だった。

「よく帰ってきたな、相川・千風」

「　　っ、詩之崎、いままでどこにいたんだ？」

夕日を背に、長身の男の子、詩之崎（詩之崎）・三都（三都）が現れた。

少し長めの髪を夕涼みの風になびかせてこちらに歩み寄る三都。

その姿は、大人顔負けの雅さがあるとボクは思った。

三都は千風の前で立ち止まる。切れ長の目ですつと千風を見下し、問いかけた。

「相川　お前は今どこにいる？」

はつと千風が、そしてボクも息を呑んだ。

それはいましがた風が彼女に送った問いと同じだった。その問いの本質は、決して彼女の物質的な所在を問うものではない。彼女の想いの所在を、彼女のこころざしがどこに向けられているかを、三都が、風が彼女に質問したんだ。

「あたしは……！」

ためらい。

けど、彼女の願いは一つ。それを口に出せないのは、彼女なりの罪悪感か、後ろめたさか。

しかし彼女はちゃんと願いを口にできる。　　彼女の想いは必ず吹く。

彼女の風は

「あたしは……ここにいる」

吹いた。

鐘の音のような、おおらかな風が駆け抜けた。

‘どう’とか‘ごう’とか、もうそんな言葉では表現できない風が、いまこの場に吹き渡っていた。

知らない風。

未知なる風は、そのまま未知なる彼女の象徴だった。

真新しい相川・千風は頬を上気させ、ゆっくりとやってくる宵闇の中、三人の友達と手を取り合っていた。

よかった、とボクは思う。土も風もそう思っている。

暮れなずむ空の下、ボクは自分の勝利を噛みしめていた。

*

県立諏訪高校を巻き込んだ現うつしと夢まぼろしの戦争は、二日後には突発的に局所的な竜巻と言うことで事後処理がなされた。

もちろん、そんなことは建前に決まっている。学校にいたすべての人が、現世にあるべきでないものを目にした。けど黒服に身を包む 漆黒委員会 の人達は、猫の手（ボクは関係ない）も借りたいくらいに忙しいので、みんなの記憶を操作するいとまもなく引き上げていくこととなった。

そうなるまでの四十時間前 つまり戦いが一段落してから六時間ほど経った頃 ボクとサキは学校からまだそう離れていない山の中の、無人小屋の屋根の上に昇って半分の月を見ていた。

ちょうど南の空の真ん中に来た月は、やさしい銀色。紗のような

雲が穏やかに天空を流れ、時々月を覆う。

星はチカチカと瞬いている。乳色の天の川は、星明かりを夜空から地上へと流し込んでいた。

「それで……結局、彼女は‘キズオト’であることをやめられて、普通の人として生きることにしたんですの？」

夜の静寂をできるだけ乱さないように、サキがそつと尋ねてきた。

「うん、キズオトはその名前を捨てて、‘相川・千風’としていくことを決めたよ。
八尺瓊勾玉やみかじのまがたまで力も封印してきたから、今の千風には凧揚げするくらいにしか力はない。あとは風の声を聞くことはできる。でも」

「でも？」

千風と別れたときの光景が甦る。

宵闇を渡る涼しい風を受けながら、千風はさわやかにこう言った。

「近いうちにまた会おうねって千風は言ってた。千風は、ツミに関わった人間としてではなく、この世界を守る人間として、ボクに力をかしてくるって……」

「うれしくないんですの？」

言葉を尻つぼみにしたボクの気持ち、サキが代弁した。

彼の言うとおり、ボクは千風が参戦することを喜ぶことはできなかった。何故なら、千風には素晴らしい友達がいる。もう二度と友達から離れるべきじゃない。それに……戦いに加わって命を落とすてしまうかもしれない。

「そういう考えは お節介というものですわ」

サキがきつぱり言った。

「あの子は自らの意志でそうきめたのでしょう？ ならば、私達が憂うことはなにもありませんわ。あの子は強い子です。きつと決断の先に最善の結果を掴むはずですよ。だからチヨ、あなたは祝福

してあげなさいまし。あの子、千風に、良き風があるように」

憂うべきことは何もない、か。

そうかもしれない。ボクは、怖れ続けていた自らの力とついに向かい合うことができた千風が下した決断を、ほめてさえあげべきなのかもしれない。

「千風が、良き風とあらんことを」

風が一陣、軽やかに走り去った。まかせてねと、手を振り行くように。

「そういえば、サキの方はどうだったの？ 鷲累と糸鶴、漆黒の守護者 の人達と仲良くできた？」

ボクが聞くと、サキはくしゃりと破顔した。

「ええ、とつても。別れ際に、果たしあいの招待まで受けてしまいましたわ」

「え？ なんの招待？」

「ですから、果たし合い、ですわ」

一瞬、思考が停止した。

サキはにこにここと笑い続けている。

「特段驚くことはありませんわ、チヨ。私達にとってはともかく、彼ら 漆黒の守護者 にとっては私達も敵。‘月の王国’という巨大な敵を前に、敵味方の整理をしておきたいと思うのは当然ですわ」
それはまあそうだけど……。

「三日後に、東京にあるアカ達の事務所まで来るようにとのこと。まあ、ツミさんとの戦いの予行演習もかねて、アカの牙城に乗り込むことにしましょう。それにチヨ、あなただってアカとの決着を付けるべきではありませんの？」

前のアカとの戦い、暴走したアカをボクとサキが力を合わせて倒したからボクらの勝ちのような気もするけど、完全な勝敗ではない。アカは変わった。次に戦えば、彼女は自我を失うことなく本当の彼女のままぶつかってくるはずだ。

「わかったよ。一緒に行こう、サキ」

「ええ、よろしくてよ。チヨ」

そこで、サキはボクの手に触れた。

やわらかい、白い手。

でも初めてあったときに比べて、少し強張ってたくましくなってきた。それは幾度と繰り返した戦いのせい、彼の男性化が進んでいるせい。

ボクはその手を取って、彼の暖かさを味わうように両手で包み込んだ。

「今日ね、サキと別行動しているとき、ちょっと寂しかったよ。これまでボクらはいつも声の届き合うところにいたから、離れていると……なんか、変な感じだった」

想いを込めるってこんな感じかな。

ちょっと恥ずかしかったけど、ボクは自分の気持ちをそのまま声に出した。すると……なんだろう、胸の中がほっと温かかった。

サキは答えない。彼は瞳を閉じ、口元に変な笑いを浮かべている。

「……サキ？」

呼びかけると、ようやく彼は反応した。

「あら、ごめんなさい。今夜はどうやってあなたを可愛がるうかと考えていましたら、つい妄想だけに夢中になってしまいましたわ」

「サキのバカ！」

おほほとサキは愉快そうに笑った。

「ねえ、サキ」

「なんですの？」

「………やっぱり、なんでもない」

誓いのようなこの言葉は、もっとあたたためてから言おう。

いつまでも、サキと一緒にいたい。

5・5「新しい名前」（後書き）

解説

八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}……三種の神器です。あとで他の神器召喚もしますよ。
元は天照大神の装飾具らしいです。大地に属するチヨが持っていることは、神話的な考証とは無関係です。
ファルクラム……ロシア（ソ連）のMiG戦闘機です。私の戦闘機の知識は、ゲーム『ACE COMBAT』によります。

「よき風と共に……」という『LAST EXILE』を思い出します。

次回からは第六幕。戦闘全開でいきたいと思ってます。

6・1「腹が減っては……」

ビルの谷間は昼よりも夜の方が明るい、とボクは思う。

あるいは、夜の方が命を吹き込まれたように華がある、とも言える。とても太陽の下に生きるはずの人間が作った物とは思えない。

ここは東京。かつて江戸と呼ばれた、京都に次ぐもう一つの四神相応の街。

色とりどりの光が舞う往来を、ボクらは歩く。

ボクは猫耳と尻尾がついていて、サキはおでこに三つ目の瞳がある。さらにボクは普通のジーパンにシャツといった軽装だけど、サキは真っ黒なマントを羽織りその下から黒いスラックスを覗かせた、少々ものものしい格好。

目立つてるかな……と思いきや、周りを歩く人達も風変わりな格好をしている人は多い。穴の開いたジーパンとか、左右の色が違う靴とか（あれ？ 普通かな？） 猫耳のカチューシャを付けた人も三人くらい見た。ボクらも意外と人波に溶け込んでいるようだった。

そして、時に銀のマントを羽織っている人もいた。ご主人様の家来、^{ブラスファイア}月の子の真似なんだろうその人達は、街頭で『新しい世界はすぐそこ』とか『偽りの灯火を消して月光を上げ』とか叫んでいた。

勝手だなあ、とか思うけど、それ以前に、あの人達は今の世界を好きじゃないんだなあと思っただ。巷には、小石のように絶望がゴロゴロしている。それに躓いた人は、もう世界の明るい部分を見ることはできないのかもしれない。

そんな街を歩み渡り、ボクらは指定されたビルまで来た。

四十階まである超がつく高層ビル。エントランスにある案内板を見ると、なんとかつていう電化製品の会社が多く、の階を持っていることになっている。

「あれ……？　漆黒　の事務所なんて無いよ？」

「チヨ、　漆黒　の人達の存在が一般に公開されていると思ってるんですの？」

……………そうだね。

サキが案内板をしげしげ見る。もちろん、額の眼で。周りを歩く人は、そんなことは露とも知らずに過ぎ去っていく。

「どうやら、上の階の方は高級レストランやスイート・ホテルになっているようですわね。　アカ達に会う前に、食事を取っていきませんか？」

「うん、お腹空いたね」

そこでボクらはエレベーターに乗って、まずレストランのあるフロアーに向かった。

*

「う、……………、牛テールの赤ワイン煮……………牛テールって何？」

気がつくくと、ボクはフレンチレストランにいた。

「わからないのなら私がオーダーわたぐししますから、チヨは黙っていていいんですのよ？」

サキはレシピアに素早く目を通しながら言う。

その様子はとても楽しそうで、それはそれでいいんだけど……………

「ねえ、なんでフランス料理なの？　ボクは普通に定食屋さんとか

「定食屋は今日の朝行きました」
「ほら、むこうに美味しそうなお寿司屋さんがあったけど……」
「そうですね……」

気のない返事。サキはメニューを見るのに没頭している。
ボクはお寿司屋さんに思いを馳せる。高そうな店だった。けど、
きつと頬も落ちるようなお寿司があるんだろうな……、と。

ボクらの旅費はサキの持つクレジットカードから払われている。
そのカードはアカの名義であり、『税金ですわ』 とのことだった。
日本の皆さん、ごめんなさい。

「良いじゃありませんの。せつかくビルの高くまで昇ったのですから、
食事も豪華な物を取りたいものですわ」

豪華な食事〓フランス料理、らしい。

「お寿司は……？」

「私、なまものは好きじゃありませんの」

聞いたことのない理由で、ボクの要望は一蹴された。

しょうがないので、ボクはフランス語のメニューを見て暇を潰す
ことにした。 良くわからないアルファベットの羅列を見ている
と、アルファベットが踊っているように見え始めて面白い。

しばらくして、サキが蝶ネクタイにチョッキのウェ이터さんに
オーダーをしていた。

そこそこ格好いい人でサキはその容姿を褒めていたけど、サキが
男か女か判じかねたウェ이터さんはただ困ったように笑いながら
いなくなった。

数分後、前菜を持った別の人が来た。小柄で、背筋のしゃんとし

た人だった。

「レタスとゼラチンのテリーヌです。ところで、あなた方はサキ様とチヨ様に相違ありませんね？」

「え……と……」

「こういうとき、なんて答えれば良いんだろう？」

「そのとおりですね。漆黒の方ですの？」

サキが落ち着いた受け答えをした。

ボクの出る幕はなさそうなので、葡萄のジュースを一口含んでから前菜に手を付けることにした。

「私は 漆黒 の諜報員、四村・姫鴉と申します。以後お見知りおきを。」

一階の監視カメラであなた方の来訪を確認しました。今、鷺累、糸鶴、紅烏の三名は戦闘の準備をしています。好きなときにいらっしやって下さいとの事ですが、あとのくらいでおいでになりますか？」

「そうですね……これから一時間、いえ二時間ここで食事をしてそのあと最高級のスイート・ルームにチェックインして、お風呂に入ってチヨと愛の抱擁をして」

むせた。

「 仮眠を取って、また抱き合って、それから身支度して………
…九時間ほどですわ」

サキが突拍子もないことを話している間、姫鴉は眉一つ動かさずに立ち続けていた。

淡々とした口調で姫鴉は答える。

「そうですね。では、そのように伝えます。 ああ、紅烏が申し
ていたこととは、三十分以上待たせたら二千一年九月十一日の再現

をしてやる、でした」

「な、ちよつ……………むぐつ」

の、のどに食べ物か。

横でサキはあらあらと呑気に言いながら、自分の分の前菜に手を伸ばしている。

「ちよつと待つて 行く、行くから！ 二十分で行くつてアカに伝えて！」

「あら、チヨ。私達の愛のまぐわいは？」

「また今度！」

「それにチヨ、フレンチの食事というものはゆっくりと時間を掛けるものですわ。ラーメンや蕎麦のように、ずるずると吸い込んで早々に終わりというものではありませんのよ？」

「そ、そんなあー！」

状況は絶望的。

姫鴉は何事もなかったかのように遠ざかっていく。

この場を放棄するわけにもいかず、ボクはアカの気が長くなってくれますようにと祈りながら食事をすることにした。

三十分 + 二十一分後。

最後のデザートを一瞬で呑み込み、渋るサキを引っ張りボクは店を出た。ちゃんと会計は済ませた。けど、デザートがなんだつたのかは全く思い出せない。

漆黒の事務所のある最上階まで行くには、エレベーターに隠された術式を発動させる必要がある。

ボクはそれを半ば脊髄反射で起動させ、目的地に移動する。

転送された先、白大理石に囲まれた四角い部屋で、姫鴉が直立不

動でボクらを待っていた。

「ア、ア力は……？」

まず口から出たのはそれだった。

「待っています。準備は万全です」

なんの準備か、考えたくないな。

姫鴉がボクらを案内する。

漆黒の事務所は思っていたよりずっと地味だった。床は飾り気の無いリノリウムで、壁もコンクリートに白い壁紙を貼っただけ。灰色のペンキを塗った扉の向こうに、三人の待つ部屋があった。

淡い色のパンチカーペットに、三人は黒い椅子を置いてそこに身を沈めている。

鷲累は胸や関節に薄板が入った黒い装甲服を着ている。糸鶴は重そうな革のドレスを身にまとっている。

二人は漆黒の衣装だった。でも三人目は違う。

アカが着ているのは、熱ささえ感じられそうな唐紅の狩衣。折れ曲がってて良くわからないけど、絹の生地の上には金銀の糸で密に刺繍もされている。豪奢、との一言に尽きるその服はまるで

「すっかり昔のようになりましたわね、アカ」

ボクの思っていたことを、サキが言った。

アカはそれに答えて笑みを浮かべた。とても自信に満ちた笑み。

彼女は腰を上げる。

「まあね。喪服みたいな漆黒の格好にも飽きたから、久しぶりに着てみたのよ。どう、この狩衣？ 仕立て直すのに一千万以上かかったのよ？」

アカはくるりと身を回し、ボクらに自らの衣装を見せつける。

生地の上から下にかけて少しずつ鮮やかさを増している。

模様は胸と前垂れにかけてが花と菱の幾何学、袖には鳥、そして

背には五爪の龍と蝶とが舞い踊るもの。

腰や袖に通された飾り紐は黒繻子で、その先端に白く煌めく蛋白石の玉がさがっている。

さらに服に香が焚きつけられていて、彼女が身動きするたびに茴香きょうの挑発的な香りがした。

そして、足に履くのは真つ白なスニーカー。そんなところで、サキが語った昔と同じだった。

「まったく…… 漆黒 を利用するだけになった奴に、税金とはいえ一千万も。だったら俺にうまい酒でも飲ませろっつうに」

鷺累が砕けた口調で独りごちていた。

「そういえば…… アカって公務員なんだ」

「ああ？ まあ、そうかのう。妾達は日本政府と関わりはないが、一応この国にいる間の経費は日本政府持ちになっているからのう」

「会計はどうやってつけているのでしょうか？ 存在すらも知らない物事に税金を使われる、日本のみなさんがお気の毒ですわ」

場がちよつとずつ和みはじめていた。

と、そこで姫鴉が発言した。

「さて……ここで茶菓でもお出しすれば話も弾むでしょうが、そろそろ本題と参ることにしませんか、皆様？」

それに対し、真つ先に鷺累が咳払いで反応した。

「わ、私は馴れ合ってなどいないぞ」

「鷺累、お主のことなど何も言っておらんぞ」

鷺累の相好が仏頂面のまま石になった。

それを尻目にアカが言う。

「じゃあ、説明をしなさい、姫鴉」

「はい、紅烏さん。」

本日の決闘とは、一対一での戦闘です。勝利条件とは、特に定められたものでなく、見極め役無し、対戦者同士で決着を付けること。戦闘場所とは、ここより上から、第一フロアー、第二フロアー、そして屋上。

対戦者組み合わせとは、こちらの希望から、第一フロアーで鷲累さん・サキ様、第二フロアーで糸鶴様、チヨ様。人数の関係上、チヨ様にはそのまま続闘をお願いして、屋上で紅烏さん・チヨ様とさせて頂きます。

そちらの希望があれば変更は可能ですが、何か御座いますでしょうか？」

サキが横目でボクを見て、回答を促す。

ボクは宣言するように、はつきり答えた。

「いいよ。それで戦おう、みんな」

漆黒の三者がそれぞれ肯く。

「では、フロアーの準備は整っていますので早速始めましょう」

*

糸鶴の用意する戦場は、何の置物もないただっ広い空間だった。

天上も床も壁も、四方がむき出しのコンクリート。まばらに柱があるだけ。黙って立っていれば、僅かな音さえよく反響して聞こえる。

けど、それは見かけの話。

本当は、あるものがこの空間に油断無く配置されている。

それは糸。

テグスカグラスファイバーか、とにかく透明度の高い見えづらい糸があちこちに張り巡らされている。考えるまでもなく、それはト

ラップ。糸鶴の指先一つで、あれらはボクを四方から襲う。そしてもう一つ、このボクにとって困ったことがこの場所にある。大地の力を使うボクにとって、この地上高くある戦場は力を弱めさせられる場所だ。おまけに、神秘^{エナジー}霊力の活性を抑える十（凍）式封印術が緩く施されている。

冷たい汗が、背筋を流れた。

「どうやら、ここがどういふ場所かは気付いてくれたようじゃな。

じゃが、よもやお主、この程度の覚悟もなく来たわけではあるまいな」

糸鶴の声が重々しく響く。

「もちろん……。どんな状況でも、ボクは負けないよ」

「よくぞ言った。ならばその覚悟、身体でも示してみよ！」

両者、構える。

このコンクリートに塞がれた空間は、物理的に冷えていた。それは確実に、ボクの心を威圧する。ただ

「ボクは、絶対負けない！」

「これを開始の合図とした。」

6・1「腹が減っては……」（後書き）

フレンチ料理は美味しかったのでしょうか？

私はフレンチを食べたことはありません。ついでに言うと、二十階以上の建物に入ったことはありません（多分）。

……田舎者ですよ。いや、田舎万歳ですよ。私の世界は狭いですが、ちゃんと一人前になって、世界を広げていきたいですね。英語、頑張って旅行とかしたいなあ……。

6・2「双つの戦い」

初撃はいつもながらの真つ向からの突撃。
糸鶴しじゅうは動かない。

彼女がどんな手を隠しているのかは、全くボクには予想できなかった。

対して、術の使用を限定されたボクにとって、攻撃の術は肉体を使った物理攻撃しかない。だから、ボクは真つ正面から仕掛ける。

走る速さは三步で時速七十キロメートルを超える。

拳を前に出せば、鋭く空を切る間隔が腕を伝う。

「いけえ！」

「Spider Net！」

一瞬で目の前に網が張られる。その名のとおり、粘着質の糸で出来た網だ。

さすがに反応が早いな、糸鶴は。

ボクも一瞬で左手を猫のものに変化させ、網を切り裂く。

左手の動きに合わせ、身体を回転させて左足から蹴りを放つ。

回し蹴りは甲高いジェット音で空を裂く。

「！」

糸鶴が僅かに眉を顰める。

頑丈なワイヤーが、何十本と縊り集まってボクの左足を捉えた。

「うっ……くそ！」

ボクは一秒もかけず強引に左足を取り戻す。

けど、この隙を糸鶴は見逃さない。

「Destiny Thread！」

全方向からの糸による攻撃。

ボクは咄嗟に防御結界を張るが

「う、うあああああああ！」

一本、二本、三本。皮膚のごく表面と髪の毛を切っていく。

十一本、十二本、十三本。糸が服を切り裂き、肌に食い込みはじめる。

五十四本、五十五本、五十六本。糸は肉に入り、抉る。

九十八、九十九、一百。深い傷は骨まで達し、傷つけられた太い血管からは止めどなく血が流れ出していく。

「あ……あ………！」

意識が遠ざかる。

攻撃は止んだ。けど痛みは消えはしない。稲妻のような痛みがボクを包み、意識が埋没していく。

負けられない。

痛みの中で雑念が消え、それだけが頭にこだました。

「……このおお！」

身体が本能的に動き、ボクは前に歩み出た。

踏み込みはコンクリートの床を砕き、身体は低空を滑走する。

「なに………！」

渾身の一撃は糸鶴の右頬を打った。

確かな手応え。ボクの一撃は彼女の歯を折り、脳に大砲のような衝撃を与えた。

「……！」

大きな打撃を受けたはずだが、彼女は倒れなかった。

糸鶴が腕を振るう。

咄嗟に回避すると、身体の横を銀の風が駆け抜けていった。

「……強いね、糸鶴は」

「当たり前じゃ。これでも 漆黒の守護者 第四位の妾じゃ。

妾を倒さねば、紅烏と戦うこと叶わぬぞ」

「どうして、糸鶴は戦うの？」

「……… さあな。まだ、教えぬよ」

糸鶴が腕を振るうと、赤い血と一緒に銀の糸は舞う。

「お願い、力を貸して……」

微かな神秘^{エナジー}霊力を呼び起こし、ボクはコンクリートに呼びかける。
天井と床のコンクリートが小さな音を立てて、爆ぜる。破片とな
ったコンクリートの小片が宙に舞い上がり、糸にぶつかって運動工
ネルギールを奪う。

それをおとりに、ボクは重い身体を引きずって糸鶴の視界から逃
げようと試みた。

「逃げられると思うてか！」

「思わないよ！」

けど走る。

ボクが走っていれば攻撃は当たらない。けど糸鶴が攻撃を止めれ
ば、そこがボクのチャンスになる。傷ついていても体力はボクの方
が上のはずだから、いずれはボクが攻撃する機会が出来るはず……！

だけどボクにも余裕はない。はっきり言って糸鶴の攻撃力がここ
まで高いとは予想外だったし、もしかしたら体力面でもボクの予想
を超えているかもしれない。そうだとしたらやっぱりボクに勝ち目
はない。 走り続けるのも賭だった。

「どつやら、妾の力、糸という武器について学んでくれたようじゃな？」

不意に糸鶴が喋りはじめた。

「元来、糸はブービートラップなどには使えるが、近接戦闘において武器になるものではない。じゃがな、こうやって敵を招くのならば別。今この時こそ、‘糸鶴’の本領が発揮されるときなのじゃ。わかったら、覚悟を決めよ、チヨ！」

覚悟？

何の覚悟だろう。

その時、ピン……と頭上で軽い金属音がした。

手榴弾？ そう思い飛び込み前転をして姿勢をギリギリまで低くする。

しかし、ボクの予想は外れた。

頭上から来たのは爆炎ではなく、叩き付けるような光と轟音。

スタングレネード！

「わかっておるのかや？ 妾とそなたは今、殺し合いをしているのじゃぞ」

格子状に糸が迫る。当たれば、ボクはゆで卵よろしくスライスされる。

身体の損傷に加え、五感の故障。力の抜けきった身体をどうにか立て直し、気持ちばかりの反重力に縋ってボクはほうほうの体で攻撃をかわした。

感覚が戻らない。

頭痛がする。耳鳴りがする。目はチカチカする。

平衡感覚だって壊されてしまった。それでも……触覚だけ、今は使えそうだ。

追撃の気配。

「そこだ！」

百分の一秒刻みで、肌に糸が食い込むことを感じる事ができた。ボクは、闇雲ではない動作で猫の爪を使って糸を切り裂いた。

切る。

断つ。

斬る

絶つ。

攻撃を、剪り、絶つ。

「な、ばかな……………」

糸鶴の気が乱れた。

そこでボクは彼女の頭上のコンクリートを少し破裂させる。なるべく大きな音を立てるように。

彼女は自らの頭上を仰ぐ。この空間の破壊を危惧して。

そう、糸鶴はこの空間を壊すことを避けようとしている。でなければ、これまでに一つくらい爆薬の炸裂があっても良かった。その理由はわからない。でも、これがボクの攻撃のチャンス。

姿勢が正せないまま、ボクは無理な体勢から攻撃を仕掛ける。

ドロップキック。

かわされたら後がない、一か八かの大技。

「！」

爪先が彼女に突き刺さるのを感じた。

カウンターで、太い綱がボクの全身を鞭打った。

糸鶴はそのまま弾け飛び、向こう側の壁にめり込んだ。

「ボクらは殺し合いをしている……………そんなこと、わかってるよ。」

でも、そんなことは今に始まった事じゃない。だから、ボクは糸鶴を「倒す」。殺しはしない。だって、それじゃご主人様と同じになっってしまうから」

「ざれ、ごと、を……！」

糸鶴が壁の中から立ち上がり、血を吐きながら言う。

「殺意を持って戦う者に、殺意を持たずして勝てると思ってるか？」

なるほどお主の想いは立派じゃ。しかし、その想いに足るだけの力を、お主は持っているのかや、チヨ？」

ボクは答えない。

「よいか、チヨ。流血を避ける者。お主がそうであっても、サキはどうするかや？ サキはきつと鷲累を殺すぞ。さもなければ、鷲累がサキを殺す。そうして仲間が殺し合いをしているのに、お主だけ無垢でおられると思ってるか？」

「サキは」

「これ以上傷を負えば、お主は紅烏に勝てる万が一の可能性だって失うぞ。妾を殺せ、チヨ。今なら、抵抗せずに殺されてやる。」

糸鶴が口を閉じた。

糸鶴はボクを罪で穢したいのかな。

だぶんこの戦いはそのためにあつた。

糸鶴は、殺し合いをしないボクが嫌なんだろう。だから、ボクを追いつめて罪を背負わせようとしている。ボクが罪を背負えば、殺し合いができるようになると思ってる。

そしてボクが決意をすることを期待している。ボクがツミを殺す決意を。

糸鶴はボクが嫌いで、ツミも嫌い。でも自分がツミにも、ボクにも敵わないから、せめて自分を殺すことで罪を負ったボクがツミを

殺すことを期待している。

あるいは、罪を負ったボクが混乱して自滅することを願っているのかもしれない。だけど、なんにしても……

バカに、されてるよね。

確かにボクは半端な覚悟しか持っていないのかもしれない。力も弱いのに、大それた願いを持っているんだろう。

でも……

「ボクは糸鶴を認めない。サキはボクの勝利を信じて誰も殺さないことを約束してくれたし、ボクもボクのやり方で戦っていくことを決めた。だから、ボクは糸鶴を、糸鶴の死を否定するよ」

「そうかや……。ならば、もう言うべき言葉はないな。チヨ
妾が引導を渡してくれる！」

今までにない大袈裟な動作で、糸鶴が腕を振り上げる。

それに応じた大きさで、このフロアー全体の糸がざわめいた。
必殺の空間。

「Sister Trio of Moirai」。妾の渾身の
一撃、受けて散るがいい……！」

糸鶴が震えている。それだけ、これからの攻撃には力と集中力が
注ぎ込まれるのだろう。

「散りはしないよ。自分で戦うことを止めた糸鶴に、ボクが負ける
はずがない！」

この想いは、試されている。

なら戦おう。この想いで世界を変えられることを証明するために。

一方、糸鶴とチヨが戦う階下では、鷲累とサキの戦いが繰り広げ

られていた。

せつかなので、少し時を遡ってみてみよう。

鷲累が用意した戦場は黒かった。

四方を囲む壁と天井、床が黒い。特に床はゴムのような素材に覆われていて、足を動かしても音がしない。光源は、天井に取り付けられた小さなライトのみだった。

鬱々とした音無の仄闇が、サキと鷲累、二人の男を包んでいた。

「何のために私達わたくしが戦うのか、確認させてもらって宜しいですか？」
その声は余韻を残さず闇に吸い込まれていく。

「戦うため、だろう？ 私もお前も、どうやら理由もなく戦える者になってしまったみたいだからな」

慇懃さを装った声で、鷲累が答えた。

「そうですね……。私ったら、かつて女の身であったときは本当に身体が弱くて戦いとは無縁でしたのに、男の身になったとたん戦いを楽しむようになってしまったんですもの。そして今日は鷲累さんという現でも屈指の戦士がいらっしゃる。これを楽しまずして何とすればいいのか。ところで、その気取った口調はどうかと思えますけど」

「お互い様だろう。ま、さつさと始めるぞ。簡単にイっちゃまうなよ」

両者は得物を構える。

サキの武器はうつもの黒い散弾銃だ。闇の中でも、その銃は濡れたような光を放つ。

対する鷲累は漆黒の大弓を手にしている。背に負った籠には、弓の全長と同じメートル半の合金製の矢が十本足らず入っている。

音のない銃撃の、その閃光が戦いの開始を告げた。

光の散弾は闇を鮮やかに裂いて飛ぶ。

散弾を紙一重で避けることはできない。鷺累はやはり大きく回避行動を取り、そこから矢をつがえ弓弦を引いた。射る。

固い鋼の強弓から放たれる矢は容易に音速を超え、甲高い風切り音を立ててサキを狙う。

サキがかわす。

しかし矢のまとう空気の刃が、彼の白い頬に赤い線を引いた。

そして鷺累は一秒とおかず次の矢をつがえる。

「！」

第二射。

サキは先視の能力で矢の飛来を予測するも、迎撃するいとまも与えられず紙一重でかわす。

矢は途絶えない。

当たれば頭蓋骨を貫いて反対側から鏃が顔を出しそうなくらいの威力を持つ矢が、絶え間なく射撃される。

速射の最後は三本同時の射撃だった。

「！」

サキは三本の射線の間立って矢を回避する。

だが一本の矢が、彼の身肉を浅く削っていった。

「どうやら、先手は鷺累さんの物のようですわね」

矢を失い無用となった弓を捨て、鷺累はサキに背を向ける。

それは敗走か。その意味は問わず、サキはただ彼の背に向かって引き金を絞る。

横回転で弾を避け、彼は壁に手をつく。

黒い壁には、一面に多種多様な武器が掛けられていた。

「……ブーメラン」

次の瞬間を予測したサキが呟く。

その名の武器が、軽快な風切り音を立て飛来する。サキは横側からブーメランを叩くことで撃墜する。

「今度はトマホーク」

ブーメランより質量の大きい投擲武器を回避する。

そこに斧を持った鷲累が「飛来」した。

「！」

防御のために掲げた散弾銃が切断される。

同時に、サキの胸板にも斬撃が浅く走った。

「blaze short！」

一気に後退しながら、バレルの切られた銃でサキは銃撃する。

鷲累は横方向に身をずらして回避を試みる。

だが、バレルの切りつめられた散弾銃の拡散は大きく、

「！」

小さな光弾が二つ、鷲累の左手と左足を貫通した。

鷲累がわずかにひるむ。その瞬間にサキはさらに後退した。

「なかなか多才な技をお持ちのようですね」

「お褒めにあずかり光栄至極。これが私の売りですね」

二人は闇を隔てて油断無く対峙する。

「でも、そろそろ本当の力をお見せ頂けませんの？ 私、わたくし焦らされるのは好きじゃありませんの」

何かを見透かしたようなサキの口調。

「いいだろう。お前の好きそうな、でかくて太い奴を突っ込んでやる」

鷲累はまた壁に武器を取りに行く。

今度はサキは銃を向けず、静かに待っていた。

少しして鷲累が戻ってきて、サキの眼前で手にした得物を床に叩

きつけた。

そこに腕力は込められていなかった。しかし武器は自重だけで防音の床を切り裂き、下のコンクリートに噛んで音を立てた。

「ああ………なんだが、見ているだけで濡れてしまいますわ………」

戦いに飢えた二人の男。

恍惚とした笑みを互いの顔に浮かべ、激突の瞬間を闇の中で焦がれていた。

6・2「双つの戦い」（後書き）

最近、この小説がいつのまにか少年漫画的な調子になっていたことを思い知らされました。

何故でしょう……戦闘をメインにしたせいですかね。私もどうしてかバトルが好きなんですよね。ゲームをしても、戦闘がないと物足りなかつたりします。

『バトルフィールドに駆ける俺達の情熱』はJAMの歌ですね。

6・3 「勝敗のつけ方」

全長二メートル超の直線のフォルム。

両刃の長さは一・七メートル。その先端は鋭角大剣。

近接戦闘において最高級の破壊力を持つ武器。刃の鋭利さにかかわらず重量だけで切断と破壊を可能とするその武器は、その巨大さのみで対峙するものに威圧をかける。

「動力付機構剣 ノートウング。魔剣ってほどじゃねえが、その名の通りちよつとした仕掛けが色々ある剣だ。用意はいいか？」

「ええ、いつでも」

重い物は長いほどより支えるための力が要る。それは、物理で言うところのモーメントや、一般的なてこの原理で明らかなこと。

それを驚累は正眼に構える。その動作は決して軽やかなものではなく、しかしそれが彼の雰囲気には凄味を持たせる。

「漆黒の守護者 が長、名塚・驚累。この名に隠した、修羅の意味、その身で味わうがいい！」

前に出した右足を軽く浮かせ、左足のバネで滑るように彼が前に出る。

「この私に勝てると思っっているのですから、盲目ですわね。その盲目さ、己が身をもって悔いなさい」

左手で銃を水平に構え、サキは迫り来る驚累を見る。

サキは斬り下ろしを予測して右に避ける。そこに光で作った幻影を残し。

さらに幻影を作りながら、彼自身は後ろにさがる。

そこから誘われるべき鷲の行動とは、斬り下ろしを途中で曲げた右への斬り払い。だが

「あら」

まず幻影が消えた。サキの意思と無関係に。

その向こうで、鷲は振り上げた剣を脇で構えなおし、わずかな溜めから決るような突きを放った。

一瞬前で攻撃を先視したサキは、それを余裕を持ってかわす。

身体の脇をかすめる突きが払いに転じないうちに、銃の先端で剣身を押さえる。

銃と剣が触れあい火花を散らす。

押した力を活かして、サキは後ろに大きく跳躍し鷲から距離を取った。

「どうやら、小細工は通用しないようですわね」

ふわりとマントを翻しながら着地し、さらに走り、銃撃しながらサキは言った。

「我が前に偽りは在らず、ってな。そら、まだまだ！」

散弾を剣で叩き落とし、サキに追い縋りながら鷲は剣を振る。

黒い空間の中の、描かれる黒い弧。

剣風だけが肌に鋭利。

時折床に剣が触れると、刹那の火花が戦場を明るくした。

リーチが長く、それ以上に隙のない剣技。それは確実にサキを追いつめるもので、彼自身それを自覚していたが、彼には余裕があった。

その余裕は彼の持つ先視の能力がもたらす物ではない。事実、鷲の剣技は自在で目まぐるしく、先視は辛うじて対応している状態

だった。

命がけの状況。だが、これこそサキの望んだものだった。理屈もしがらみもなく、ただ純粹に命を賭けて力と技を競い合うことのできる戦い。

余裕とは、そんな戦いにおける享樂に他ならなかった。

次に斬り下げ……………！？

彼の先視が異常を感知した。

自らの能力を信じ、次の動作を考えない緊急回避を行う。

次の刹那、サキのいた場所に神速の斬撃が落ちた。先程までの剣の振りとは比較にならない速さの斬撃。

「剣撃が加速した……………？」

「御名答。よく避けたな」

両者は互いに間を取る。

「ま、これが今の俺が用意した、お前に有効な手のすべてだ。どうだ？ 次はお前の番じゃないのか？」

サキは少し前の危機を思い返す。

冷や汗と戦慄。これが自分の求めていたエクスタシーだと、彼は思った。

「そのとおりですね。では！」

サキは走り出す。

疾走は全力。

接近と同時に、鷲冪を囲んで幻影を仕掛ける。

しかし幻影は目標の二メートル手前で消滅する。

「無駄なことを」

「そうでもありませんわ」

サキは鷲累に肉薄する。

左手は散弾銃の本来の持ち方から外れ、銃床を鷲掴みにし剣のよ
うに銃を持っている。

「white edge !」

一秒に十二回の乱れ斬り。

銃口から出る光の刃はダイヤモンドさえ切断する力を持つ。

しかし、鷲累の持つ大剣はその刃をやすやすと防ぐ。

「！」

加速の斬撃が反撃する。

紙一重でサキは後方へ跳躍する。

両者の距離、三メートル。

鷲累の剣が放つ破幻の力が及ばぬ範囲で、サキは光の幻影で分身
する。

「しやらくせえ！」

十数体の分身に囲まれながら、鷲累は一直線に一人のサキを狙う。
鷲累が接近してもなお消えないサキ。

「心眼の剣技、ですか」

「そうさ。俺の剣術もなかなかだろっ？」

鷲累の連撃。

サキはかわしながら、銃を右手で構える。

「！」

銃が斬り飛ばされる。

「これで、終わりだ！」

斬撃の加速が始まる。

その命令が鷲累の脳から腕を伝い剣に伝わる、刹那にも満たない
時間

黒の弾丸が、黒の剣身を叩き飛ばした。

「な、馬鹿な、お前の銃は……！」

「この銃は闇の結晶。偽りでも何でもなく、複製が可能ですの」

鷲累の腹部を衝撃が突き上げる。

内容物を逆流させるほどの衝撃に、鷲累は体裁もなく膝をつく。その額に、サキは銃口を突きつけた。

「イキますか？」

「ああ……最高だな」

サキが指を引くその直後。

鷲累の精神に打撃が加えられ、彼の意識が消えた。

だが、彼の呼吸は途絶えない。

「私^{わたくし}、約束は守る女ですよ」

聞く者はなく、言葉はやはり闇が無為に飲み込む。

気絶した鷲累を引きずり、サキはその場を後にした。

「一の糸、“ラケシス”！」

この空間にあるすべての糸が唸る。

迎え撃つよ！

猫の爪を研ぎ澄まし、迫り来る糸にボクは五感を研ぎ澄ませる。

振るう。

糸は簡単に切れる。だけど、その数は一本や二本、二十本や三十本でもすまない。

それでも切り続ける。

「やるのう……じゃが、それがいつまで続くかの？」

片足に糸が絡まりついた。

かまっちゃだめだ。

ここで解こうとした瞬間に、もっと多くの糸が絡まるだろう。

ボクは来る糸を切ることに集中する。

“ラケシス”の糸に攻撃力はなく、ただボクの身動きを封じるだけみたいだった。たぶん、これから続く攻撃が絶対外れないようにするためなんだろう。

「この、この、この　！」

ひとしきり糸が舞ったあと、結局ボクは左手以外動かせるところが無くなっていった。

特に、首に巻き付いた糸には苦しいものがある。

「なかなか良い格好じゃな、チヨ。死ぬ覚悟はできたかや？」

「ボクは　……うっ」

言い返そうとすると首が絞められる。

そんなボクを、糸鶴は心底愉快そうに見ている。

だけど、それまでだよ。

ボクは唯一自由な左手を、まっすぐ糸鶴に向ける。

心に描くイメージは銃。それも、サキが構えている姿。

ボクの利き手は右手だけど、サキは左利きだ。左手しか動かさせない今のボクにはぴったりだ。

「泣き叫ぶが良い。

“クルートー”！」

うおん、と耳元で空気がうねる音がした。

全身を糸がひっぱたき始める。鞭、鞭の雨だ。

隅々をくまなく打たれ、服を破り肌に食い込むような痛みの中に集中が乱れる。

だけど、左腕だけは上げ続ける。銃を構え続けるように。

銃にこめる弾丸はボクの身体の中で練り続けていた力。ボクの力を弱くするこの場所だけど、身体の中の力まで弱められることはなかった。

「！」

頬に糸が当たった。やわらかい肉が弾けるのを感じる。

痛い。だけど

「痛いから、やり返したくてボクは戦うんじゃない。それと同じで、例えばこの先の戦いで手が汚れてしまっても、その罪を言い訳に僕は悪を為すことはないよ。どんな事があっても、ボクは自分の戦いを貫く。だから　ボクと大地との力、一つの弾となって立ちふさがる物を貫き道をつくれ！」

左手の形は指鉄砲。

人差し指の先から力を撃ち出す。

力はボクの外で物質化し、赤く、火山弾のように輝いて飛んでいく。

「な……なんじゃ……!？」

糸鶴が糸を迎撃に舞わせる。

だけど、一本一本が弱い糸がちよっと出てきたくらいでボクの弾丸は止まらない。

「か、は！」

重い衝突音を響かせて弾が糸鶴の身体にめり込む。

弾はそこで爆散し、衝撃で彼女を打ち倒し、破片で彼女に繋がるすべての糸を焼き切った。
ボクの戒めも解ける。

「ボクの勝ちだね、糸鶴」

床に倒れる彼女を見下して、ボクは自分の勝利を宣告した。

「妾はまだ……、？」

憎々しい声を吐き出して起き上がる糸鶴。

そこで彼女は気付く。自分の身体が重いことに。

「指を中心に身体の動きが鈍くなるように呪いをかけたよ。これでもう糸は使えないし、格闘でもボクに勝てない。もう戦いは終わりだよ」

「まだ……これならどうじゃ！」

緩慢な動作で、糸鶴は懐から銃を取り出す。

すかさず撃つ。

銃声はボクの耳を打つ。だけど弾はボクの間近で止まり、下に落ちる。

「拳銃くらいじゃボクは倒せない。諦めが悪いね。ていうか、

諦めたんじゃないの？自分で戦うことを」

「いつからそんなことになった？妾はこの勝敗をどちらかの死をもって締め括りたかっただけ。お主が妾を殺さぬのなら、妾がお主を殺す。それだけじゃ！」

糸鶴は立ち上がり、今度はナイフを抜く。

突き出される腕を掴み、ひねり、糸鶴を組み伏せる。

「……醜いね。なにが糸鶴にそうさせるの？」

そう言う自分の声はびっくりするほど冷たかった。言葉の冷たさに、自分の口が灼けるくらいに。

「復讐じゃ！ 夢まぼろしや月神に限らず、この世界を侵す現世ならざる物すべてへの復讐 妾の家族を奪った者達への復讐こそが妾の戦機！」

興奮して喚き、もがく糸鶴。

家族の復讐、と糸鶴は言った。家族を奪われることは確かに悲しいこと。ねじれた光を宿す目を見開き、背筋を凍らせるほど醜い顔をするに足る理由。

「……ボクは糸鶴の戦うべき相手じゃないと、自分で思う。糸鶴の気持ちは良くわかるよ。きっと糸鶴も後に退けない戦いをしているんだね」

ボクは糸鶴を解放する。

「でも、ボクも退かない。ボクも負けられないよ。今はもう戦いはお終い。もし糸鶴が納得いかないなら、また、今度戦おう」
「……そうじゃな。今は妾も退く。じゃが覚えておれ。漆黒の守護者 一人、紫部しきべ・糸鶴しじゆは、現世ならざる物すべてを屠ると」

彼女は去る。

後ろ姿の長い三つ編みが、もの悲しく揺れていた。

6・3「勝敗のつけ方」（後書き）

サキと鷲累は気楽に戦ってますねえ。

なんかもうちょっとと糸鶴について煮詰めておけば良かったかな、という感じです。一応頑張りましたが、ガタガタな内容ですね。

これにめげずに次のア力対子ヨの戦いも楽しみにして下さい。二話分にして、やっとこさのあの子も登場です。

6・4「紅帝」

屋上へ続く階段を上る。

堅いコンクリートの階段に音はなく、荒いボク自身の息の音だけが響く。

大丈夫かなあ。

糸鶴の前では半分強がったみたいな感じになっちゃったけど、ボクはかなりボロボロだ。

血が足りないし、傷もシクシクどころではなくズキズキと痛む。少ない大地の加護を集めて、今歩いている最中にも治療しているけど、とうてい治しきれない。……とりあえず血だけは止めていけるかな、という状態。

こんな状態じゃアカには勝てない。

でも何であろうと、ボクはボクのありったけでアカとぶつかればいい。

どうしてボクはアカと戦うのだろう？

勝負とは優劣をつけること。優劣はものごとに優先順位をつけるための物で、その‘ものごと’というのがボクらの場合は、ツミと戦う順番みたいなものと直結している。

サキは（詳しい理由はわからないけど）ボクの後についてくることにしてくれた。千風はこの世界が守ればそれでいいから、ツミと戦うことに拘っていない。

そうなれば、ボクとアカ、どっちがツミと戦うかだ。

ボク自身はアカと一緒にご主人様と戦っても良いと思う。そもそもボクの力は防御や援護に傾いているから、本来は対一で真っ向勝負するには向いていない。反対に、アカの力は攻撃一辺倒な感じだから、ボクと協力してくれればすごく戦いやすいはず。

だけど、アカはボクと一緒に戦うことを快く思わない。それどころか拒絶さえする。その理由は明白で、独占欲の強いアカが一番大切に想う人、恋人であるツミを、戦いの相手だとしても独占したい気持ちがあるからだ。

でもボクもご主人様と戦って想いを交わしたい。だからボクがご主人様と戦うためには、アカに勝って彼女よりボクの立場が上であることを示さなくちゃいけないんだ。

ああ、勝たなくちゃ。

アカは感情面ではボクを認めてくれている。だけど、それだけで自分が一番焦がれた瞬間を譲ってくれるほどアカは甘くない。

そう、勝たなくては意味がない。全力でぶつかればいいのか、そんな甘い事じゃアカは今以上にボクを認めてくれない。

となれば、ここは一つ反則してみるか。

首にかけてある八尺瓊勾玉やさかにのまがたまを握り、そこに組み込んである千風の封印を解除する。同時に、一つの想いも送信する。

そうこうする内に、階段の終わりに来た。

屋上へ続くドアを開く手に、不安と怖れが一片もなかったのは良かった。

*

ドアを開けると、一陣の風がボクを迎えた。

黒い空、蒼い満月。殺伐と吹く夜風の中、アカは真朱の狩衣をはためかせてボクを待っていた。

「待ちわびたわ、チヨ。感謝なさい」

開口一番、アカはそう言った。

なんだか、女王様態度に磨きがかかったような……。
アカと十メートルの距離を置いて、ボクは彼女と向かい合う。

「うん……ありがとう。待っていてくれたこと、それとボクと戦ってくれることに」

「はあ？ あんた、なんか勘違いしてない？」

舌打ちが聞こえてきそうな、苛立った言い方だった。

「私があんたがどれだけの力を持っているか知りたくて戦うことにした。あんたのお人好しの筋金がどれほどの物か、私は見てみたいだけ。力とは正義。あんたの力がその甘っちょろい正義を貫くのに不相应な力だったら、私はあんたを殺す」

「うん、わかってる。ボクはアカを倒して、自分の力を証明するよ」

それがボクの信念を貫くために必要だから。

対してアカは、何だか呆れたように頭を掻いた。

「……やっぱりあんたとは波長が合いそうにないわ。ま、とりあえず始めましょう」

アカが炎を呼ぶ。

赫い炎。右手の人差し指と中指を揃え剣印を結ぶと、炎はその先端に点りバーナーのようにまっすぐ燃え始めた。

「赫き炎の中に、来なさい私の剣」

召喚の詞。

まっすぐな赫い炎の中に、剣が姿を顕す。

抜き身の剣は静かにアカの手におさまる。サーベルのような、細身で両刃の金色の剣だ。

「神剣 高御産巢日^{たかみむすび}。ツミの持つ神剣 天乃常立^{あめのとこたち} に対をなす現^{うつ}の剣で、 SEME が保管していたのをついこの間もらったの。実戦で使うのは初めてだから手加減はできない。 する気もないけどね」

「猛る炎が 高御産巢日^{たかみむすび} を包む。

アカが切っ先をゆつくりと天に向けると、赫い炎が天をついた。

「じゃあ……死になさい。その甘さごと焼き尽くしてあげる」
剣が振り下ろされる。

その瞬間、ボクは自分のお人好しを後悔した。

世界が砕かれ始めた。

*

落ちる。

灼熱の中、落ちる。

高さにして百メートル、四十階分の高さをボクは落ちる。

着地はいつも通り大地が手助けしてくれるから問題はない。それよりも……

地面に降り立ったボクは、目の前に広がる景色に愕然とした。

「ビルが……、 サキ！」

ビルは完膚無きまでに破壊されていた。高温の爆発のせいか、瓦礫は赤く半融けの状態で燻っていた。

周囲のビルも身を削られている。電気は消え、すくむような静けさだけがある。

「ふん、こんなものかしら。もうちょっと威力があると思ったんだ

けど」

けぶる破壊の向こうから、アカがすまし顔で現れた。

「アカ、なんて……なんて酷いことをするんだ！ サキが……サキや鷲累や糸鶴、他のみんなが……！」

「ああ、どうなったのかしらね？ 簡単には死なないでしょうけど、瓦礫に生き埋めかもね。 探してみたら？」

そのとおり、ボクは赤熱する瓦礫の中に飛び込む。

「馬鹿馬鹿しい」

大地が警告を発し、ボクが防御結界を張ったのと同時。

アカが 高御産巢日 を一振り、水平に薙いだ。

炎が駆け抜ける。

次の瞬間には、赤々と煮えたぎるコンクリートとアスファルトしかなかった。

「これで……生きてる人間はいなくなっただかしら？」

忍び笑いを伴った言葉。

「アカあー！」

自分の中で何かが切れるのを感じた。

殺してやる。

この女は生かしておいてはだめだ。ボクの中で怒りが 　　これまで感じたことのない激しい感情が 　　そう囁いた。

「はは……あんたもちゃんと怒れるのね。 　　上等じゃない。来なさいよ。その煮えたぎる想いを、私にぶつけてみなさいよ！」

ボクは雄叫びを上げ、拳を振り上げる。

拳には、足下からはぎ取った解けたアスファルトとか土砂とか、合わせて二百キログラムを超える塊がついてくる。

力が疼く。地上に立てたおかげで、大地の力がボクの中にどんどん満たされるのを感じる。傷ついた身体も、急速に癒され始める。

「 いけえ！」

「 消えなさい！」

塊を投げつけると、アカが高御産巢日を振るって迎撃する。

かなりの量が土砂が、火が激突し飲み込んでいく。

「 ！」

なんと、火炎は大量の土砂を飲み込んでなお燃え続け、ボクに飛んできた。

重力球を放って炎を足止めする。その間に、ボクはアカの側面に回り込む。

「そこ！」

アカが乱暴な動作で剣を横に振る。

灼熱の衝撃波が、ボクと、その後ろにあつたビルを同時に打った。踏みとどまれずボクは転ぶ。

そこに、さらなる追撃があつた。

「コウテイライサイショウ
紅帝雷裁掌！」

「 ！ 大地よ、ボクを高く厚い壁で守って！」

ボクの言うとおり、二十メートルくらいの壁が立ち上がって炎を受け止める。

だけどその壁も長くは持たない。刻々と炎になめられて薄くなつていく。

突破される前に、ボクは壁を登りはじめた。

重力を制御し、垂直な壁を床に見立てて走る。

崩れ始めた壁を蹴り到達した高さは地上十八メートル。アカの真上から、ボクは自由落下を始める。

「『六（陸）式封印術！ 美しき四角錐よ、大地の威力示して騒ぐ

力を鎮めよ！」

アカを中心にした正方形の頂点から、ボクに向けて石の柱が伸びる。

石の柱が交差し、形作る辺だけの四角錐。これはボクのピラミッドだ。

「押しつぶせ！」

ピラミッドの頂点に立ち、アカを見下ろしてボクは叫ぶ。

通常の二十倍の重力がピラミッドの内部に発生し、アカを圧迫する。

「く！」

自分の体重を支えきれなくなったアカが膝をつく。

炎を推力にして、もしくは 太陽 に含まれる天の属性を使って、空を飛ぶこともできる彼女だけどボクのかけた封印術の中ではそれもできない。ボクがそうさせない。

これほどの封印術を使ったのは初めてだった。この術にかかったら普通の人間は言わずもがな、力の弱い術者でも精神に過負荷が掛かって死んでしまうだろう。

ボクはアカを殺そうとしていた。

「薙ぎ倒せ、大地の豪腕！」

ピラミッドの床が隆起し、アカを打つ。それも何度も。

立つことも叶わず、弄ばれるアカ。

良い気味だと、ボクは思った。

しばらくアカを打っていると、砂埃でピラミッドの中が見えなくなってきた。なので少し止めて中を観察すると、彼女は全身を赤くして倒れ伏していた。高い回復力を持つアカだけど、力が封じられる境界内だとやっぱり回復が遅い。あとは心臓に杭でも突き立

てれば殺せるだろう。

「 やってくれるじゃない」

むくりとアカが立ち上がる。強い重力下で、加えて全身骨折しているだろうにそれと感じさせずに。

「 ！」

ピラミッドが一撃で砕かれた。

ピラミッドに代わり、直径20メートルくらいの炎の柱がアカを包む。

ボクは退いてそれを見るしかない。

「コウテイホウオウザン紅帝鳳凰斬！」

巨大な炎の波が、地面を裂きながら猛進してくる。速すぎて避けられない。ボクは地に足をこすりつけ、向かい受ける。

「『固き金剛の盾。砕かれぬ力、我が前に示せ！』」

硬いダイヤモンド、燃えない石綿、そんなものを融合させ鎮めの力を付加した盾を作る。

盾は第一撃を難なく受け止める。

「なかなか良い防壁ね。いつまで保つかしら？」

ボクの視界を覆う盾の向こうで、アカが興奮して剣を振るう。

第二撃。これも問題ない。

第三撃、第四撃。盾を残して攻撃に出ようとしたら、周囲が炎の海で身動きできないことに気付く。

第五撃。盾がひび割れ始める。逃げたいけど、逃げられない。ボクの動揺は盾を脆くする。

第六撃。ひびから火が噴き出した。

第七撃。来ない？

アカはしびれを切らしたのか、いつのまにか盾の間近に来ていた。

「散りなさい！」

神の名と力を持つ剣が、直接盾に打ち込まれた。

その効果は爆発を凌駕した力の奔流。

一瞬にして目の前が白くなり、ボクは無抵抗に天高く打ち上げられた。

着地は激突。何だかもう、右も左もわからなくなった。

「魔女は火炙り、猫も火炙り、あんたも火炙りにしてあげる」

全身が灼熱に包まれたのを感じた。

そこに苦しさはなかった。前にアカの炎に吞まれた時と同じ、ただ崩れゆく滅びに身を委ねたくなるような甘みのある誘惑だけを、ボクは感じた。

「だめだ、まだ死ねない！」

アカを殺したい。心に燃える憎悪が、ボクの身を包みアカの炎から守る。

「へえ……楽しませてくれるじゃない」

この状態はそんなには保たない。

でも、それでいい。もうすぐ、ボクの呼んだ強い力が来る。

「凍る風、あたしの翼となれ！ グリペン！」

速く、冷たい風が炎をかき消しながら空を駆け抜ける。

白い氷雪で蒼い月下に綺麗な軌跡を描き飛行する何か、それは

「まさか……キズオト!？」

着陸する。

雪花が、可憐に撒き散らされる。

ボクに顔を向けて立つのは、確かに千風だった。空色の瞳には毅然とした光があり、口元には落ち着いた微笑がある。

身になっているのは彼女の学校の制服だった。黒いブレザーで、襟元の緑のラインが夜闇に鮮やかだ。

「来たよ、チヨ。この世界を守る、チヨの力となるために」

ちらとアカを見て、千風はボクの方に歩み寄ってくる。

「ありがとう、来てくれて。でも……サキが……！」

千風は手の届く近さでぴたりと立ち止まる。アカと同じくらしい背丈の彼女は、普通の人より背の高いボクをじっと見上げる。

「チヨは、アカをどうしたいの？」

「ボクはアカを殺したい。サキの仇を……！」

びしゃりという音が響く。

頬に軽い痛みを覚えた。

自分が平手打ちされたということに、ボクはしばらくしてから気付いた。

「まさか、チヨまでが月の魔力に吞まれるなんてね」

冷静な声で千風は言った。

ボクが、ご主人様の魔力に惑わされている？

見上げた漆黒に、月が冷たく淡く輝いていた。

6・4「紅帝」(後書き)

- 解説 -

たかみむすびのかみ

高御産巢日神は天照大神よりも高位の神。天之常立神と同じ別天津神です。古事記には天照大神と一緒に号令を下す部分があるので今回の起用となりました。

この物語において、武器は力を纏め増幅させる効果があります。アカにも何かないかなあ、と割と急いで考えました。

グリペン is スウェーデンの戦闘機。スウェーデン 北の国 凍る風の連想です。

今回チヨが意外と頑張りました。当初の予定ではもっとここでんぱんにやられるはずでした。憎悪という感情がなせる技でしょうか。

6・5 「彼女達の最先端」

ご主人様の呼ぶ月は、心ある者を狂わせる。蒼い月光で。綺麗なのに、こんなにも透き通っているのに、心の奥にある暗い物を騒がせる。

「大地に聞いてみなよ、チヨ。今ここで、失われた命があるかどうか」

千風のくもりのないスカイ・ブルーの瞳は、昂ぶっていたボクの心を落ち着かせる。

ボクは千風の言うとおり、半径三百メートル以内の状況を大地に尋ねた。

誰も死んでいなかった。半径五百メートルで非常線が張られ、人々は避難させられていた。

サキ達は、少し離れた場所でボクらを見ている。

「アカも手の込んだことするよね。人を怒らせてそんなに楽しいの？ この若作り」

「だ、誰が若作りよ！ キズオト、あんただって老けたじゃない」「老けたのはアカ。あたしは成長したの。それにね、あたしはもう“キズオト”じゃない。あたしの名前は相川・千風。ちゃんと覚えてよね、おばさん」

「お、おば　！？」

アカの顔がこれ以上ないくらい朱くなる。

かなわないなあ。

アカと千風、それにツミ、サキにナゲキとササヤキ。消えてしまったネガイを合わせ、七人から見れば、ボクは外野みたいなものだ。

だから、簡単にやりこめられてしまう。アカに負けそうになったり、蒼い月光に惑わされてしまったり。

でも、ボクはここにいます。ツミが好きなボクは、アカや千風達も好きだから。

「あ、笑ってる。　　なんだか、ちゃんと元に戻れたみたいね」

ボクを振り返った千風が言う。

「うん、ありがとう、千風。ボクはいつもどおりだよ」

ボクは晴れ晴れとした気持ちで答える。

笑顔にあどけなさの残る千風。でも、その瞳の奥には怜悯なものを感じさせる。

「自分の痛みには耐えられても、他人の痛みには耐えられないんだよ、チヨは。あたしはそうじゃないし、だからチヨのことが凄いと思って、力になりたいと思った。

でも、忘れないで。他人の痛みを理由に報復をするのは、罪を理由に悪を為す事と同じだって。他人の痛みも罪も、その人が勝手に押し量って決めるもの。そうじゃなくて、人は自分の中にあるもつと純粋な気持ちで行動しなければいけない。　　それを分かってくれるのなら、あたしはチヨの剣となるよ」

風によく響く、高く澄んだ声で彼女は言った。

ボクは肯く。力をこめて。

「わかったよ。約束する、ボクはもう報復のためではなく、ボク自身の護りたい気持ちでツミと戦うことを。　　だから力を貸して、

相川・千風」

黒いスカートを風にはためかせ、千風はボクの右側に立つ。

正面、十二メートルくらい向こうで、炎を身の回りで揺らめかせるアカがこちらを見ていた。

「私は アマツヒメのおおかみ 天照大神 アカ。 今一度、私は戦う者の名を知りたいわ」

アカの要求。

まずボクから、はっきりと名乗りをあげる。

「ボクは 大地の代理人 チヨ。すべての想いを知るために、土の上を歩く者だよ」

千風も名乗る。

「あたしは 風神楽の巫女 相川・千風。あたしの古い名前が示すとおり、あたしの風は刃にしかないけど、この刃をあたしはみんなの平和を守るために使う！」

ボクらに先んじて、アカが たかみむすび 高御産巢日 を振り上げた。

「喰らいなさい！」

全力の一撃。

赫い炎の波が、猛烈な勢いでこっちに迫る。

「チヨ、あたしを守って！ 時間を稼いで！」

「わかった。ボクは千風の盾になるよ。 焼結の盾！ 固い六角

を成してボクらを炎から守って！」

ボクは千風の前に立ち、大地に呼びかける。

今度の盾は、亀の甲羅を思わせる白く小さな六角の集まりだ。この一つ一つは、一般的なセラミックスに似たもので出来ている。珪素、タングステン、神秘霊力を貯めやすいルビーなどの宝石を寄せ集め、術力と少しの熱を加えて固めてある。この盾はアカの炎の熱

を吸収してさらに固くなる。

「面白いじゃない。なら、これはどう!？」

アカが接近してくる。直接、神剣を叩き込むつもりだ。ボクは白い盾を前に出す。

打ち込みが入る。盾にひびは入るけど、今は防御だけを考え、力を出し惜しみせず注ぎ込むと、盾は壊れず耐久した。

「風よ！ 抗うための力を求めるあたしに剣をちょうだい！」

背後で、千風の術が始まった。

「幾つもの名を持つ剣。天と地、森羅万象を駆ける風。

今、形無き風はこの手に集いて形を為せ。

あたしは大切なものを守るために刃を求める者。

古い物語に謳われた、道を開くための刃よ、今ここに……!!」

それはちよつと前にボクがやったものと同じ、 神器召喚 の術。

「風よ、あたしの刃となれ！ 『草薙乃剣』！」

風が集う。

千風の願うとおり、世界中から風がこの場集う。渦巻く風は炎を飲み込みながら、千風の手の上一点に集中する。

「 風に大地の祝福を」

ボクも風の中に大地の力を与える。

風が凝縮し、物質化する。

灰色で、大きな剣。両刃は三度波打ち切っ先で一つになっていた。

“ 鋒 ”とも呼べる古風な形の剣だった。

「!」

アカが 高御産巢日 を振るい、炎を放つ。
千風の 草薙乃剣 が完成したのを見届けて、ボクは後退する。
前に出た千風は、剣を腰ために構えた。

「草薙の名において、炎よ、退け！」

草薙乃剣の一閃。

火炎は風に押され、アカへ逆流する。

「てええやあつ！」

飛び出した千風がアカと剣を打ち合わせる。

炎と風、力と力の激突。

灼熱と豪風が周囲の地面を抉り、土砂を巻き上げる。

轟音が鳴り響き、衝撃波が離れた場所のビルまで破壊した。

まるで隕石が落ちたような、すさまじい衝撃。これが神の名を持つ神剣と、神から与えられた神器との衝突なのかとボクは思った。

アカが炎の翼を作り、爆炎を撒き散らしながら飛び立った。

千風も風に乗って後を追う。

それを待ち受け、アカは攻撃する。

「コウテイバクゲキタン
紅帝爆撃弾！」

直径三百メートルの火の玉。

高速で飛ぶ千風は避けずに、草薙乃剣を振り上げて切り裂こうとする。

だけど、それは悪い判断だとボクは気付いた。今のアカの攻撃は剣によるものじゃないから、千風が剣を振るった瞬間にアカは剣を使うことができる。

「 対空援護砲撃！」

千風が右から左への払いで火の玉を相殺したと同時、ボクはアカに向かって岩の弾頭を砲撃した。

弾頭を落とすアカ。

そのすきを千風は逃さなかった。火の玉を斬った動作の続き、左から右への一閃。

「虎牙一刀流奥義、散葉^{チリハ}！」

とつさのアカの防御を打ち破る一撃。
風が、炎を吹き飛ばした。

*

声が聞こえた。

それはボクが人の姿を取るようになってから、初めて聞いた本当のあの人の声。ボクにとって、ううん、ボくらみんなにとって一番大切なあの人の声。

おいで、と言っていた。遠く遠く、月の裏側から響くような遙かな声で。

あの人　ボクにとってのご主人様が、ボくらを誘っていた。

*

戦いが終わると、後には得も言われぬぼっかりとした静寂だけが残される。まるで祭りの後のように。

周りには瓦礫も残されていなくて、ただ焼けた土だけが一面に広がっている。その中にいるのは、ボクと千風と、大の字に倒れているアカだけだ。

千風は　草薙乃剣　で身を支えながら肩で息をしている。ボクが横に立つと、彼女は下に向けていた顔を上げ、破顔一笑して見せた。試合あとのスポーツ選手の笑みに似ていると、ボクは思った。

「全力を出すって、なんか良いよね。この剣を持って空に飛び出した時、本当に風になった気分がしたよ」

その剣を持つ彼女の手に、ボクは自分の手を重ねる。

と、不意に 草薙乃剣 は姿を消した。細かく表現すると、ボクが触れた瞬間に 草薙乃剣 は光の粒子に分解して、ボクの胸元の 八尺瓊勾玉 に吸い込まれたんだ。支えを失った千風は、どおと力なく地面に倒れてしまった。

「あた……、一体なにが……」

「多分、これから千風が草薙乃剣を使う時は、そのたびにボクが手渡しする必要があるってことだね。草薙乃剣を使うのは千風だけど、管理するのは八尺瓊勾玉を持つボクってことか……。ところで、大丈夫？ 立てる？」

なんとか、と千風はもごもご言いつつ立ち上がるうとする。

ボクは手を貸そうとする。

その時、突然現れたアカが千風の襟を掴み 「ぎよえ」 強引に立ち上がらせた。 「ぎよえ」 はちよつとかわいそうな千風の声だ。

「ひどいよ、アカ。あたしは猫の子じゃないんだから。……そいうことはチヨに」

「ボ、ボクも嫌だよ」

ふん、と荒い鼻息で応じるアカ。

「私を打ち負かした奴が、いつまでも寝てるんじゃないわよ。というより、この勝負誰の勝ちなの？」

そう問うアカは、全身ぼろぼろの酷い有様だ。一千万以上かかったらしい狩衣も、もはや雑巾にしか使えなさそうな状態。

「あたしが勝ったから、チヨの勝ちってことで」

「そ、そういうことにして。……やっぱり、ボクだけなら万全な時でもアカに勝てそうにないし」

「……………負けを認めるのか、勝ちを主張するのか、どっちかにしなさいよ……………」

呆れの色の濃いアカの返事。

「だけど、そこにさっきみたいな苛立った感じはない。彼女の口元には、親しみを感じることでできる微笑が浮かんでいた。」

「それで、チヨ？ あんたは私に何を望むの？」

「ボクは、アカと一緒に戦いたい。ツミと戦う時も、アカとボクどちらかだけじゃなくて、二人一緒に戦いたいんだ」

アカは肩をすくめ、眼を閉じてリアクションした。

「それだけ？ ……ま、言葉にするとこんなものなのかしら。いいわ、考えとく。そう……………あと一週間後までに」

最後の言葉は、天上の月を見ながら言われる。

月は、欠けていた。下弦の手前、臥し待ち月と呼ばれる形。

『朔の夜に現れる僕の城までおいで』

それがさっき聞いたツミの声だった。たった一言、だけどその一言がボクらの心をどれだけ揺さぶったか、とても言い表すことはできない。

「いよいよかあ、と思う。ここまで長くもあり、短くもあった。今すぐご主人様に会いたいと思うし、まだ早いとも思う。」

「いずれにしても、月はカウントダウンを始めた。この月が欠けきった時、ボクらにとって、そして世界にとっての答えが出る。」

撒き散らし、そして積み重ね続けた想いの、その先にあるものが見えるはず。

新しい月は、新しい世界の空にかかる。

*

「この世界の行く末は、あの者達が決めるんじゃない」

黒いドレスに身を包む女が言った。

「そうですね。彼女たちの思いこそが、この世界にとっての最先端となるのです」

黒いマントを羽織る少年が答えた。

「そりゃ楽しみだな。で、良いのか？ 後に続く者が言う言葉は」

黒いスーツを着る男がぼやいた。

蒼の月下、降り注ぐ夜の光を拒むように黒い服を着た三人。彼らは倒壊していないビルの上で月を背にして立ち、少し離れたところの三人の娘を見ながら、思い思いのことを口にしていた。

「何故、あの者達が世界を変える？ 答えておくりや、サキ」

糸鶴の問い。

サキは薄笑いを口元に浮かべて答える。

「それは、彼女たちが力を持っているからに他なりませんわ。乱暴なまでに強大な力、すなわち“暴力”を」

「暴力？」 鷲累が復唱する。 「世界は暴力で変えられるのか？」

「さあ、それはどうでしょう？ 暴力は人と世界を支配します」

が、世界を革新たらしめることはありません。暴力は世界を変えるための原動力であり、世界の形を決めるのは、想いです」

サキはそこまで言うと、踊るようにステップを踏んで鷺と糸鶴から距離を取った。

彼が振り返った時、三つ目には刃のような底光りが宿っていた。

「さて……この世界の命運は、月と私達の間にもみ有ることが理解していただけましたか？　そこで私わたくしのお願いなのですが、来る決戦の時の露払いをあなた方　漆黒の守護者　が行っていただけられないでしょうか？　我が儘を申しますと、これ以上雑多な人達に邪魔をされたくないのです」

そう、悪びれもせず、むしろ傲慢にサキは言い放った。

「断ると言ったら？」

「どうしようもありませんわ。腹いせに鷺さんと糸鶴さんを殺してみますか」

くすくすとサキは笑う。

不意に、月光が途絶え闇が周囲を支配した。

闇はサキの影から、渾々と湧き出していた。

「それは、交渉にも脅しにもなっておらぬぞ」

「ええ、だから『お願い』だと言いましたわ」

声の主、サキの姿は闇に溶け込んで見ることができない。

しばしの間を置いて、鷺が溜息を伴った返答を出した。

「ま、他にすることもないしな。　承知した、と言っておく。何人集まるかは知らんが」

その時、ふつと闇が消えた。

鷺と糸鶴の前方、月の光が落ちるコンクリートの床にサキの影は落ちていない。

サキは二人の後ろにいた。

「では、未来miraiをつくりに行きましょうか。彼女たちの願いへねがい

《が導く、新しい世界へ》

サキの声はこれまで以上に少年らしく、男性的だった。

いま発した自身の声に　いつの間にかまた変化していた自分に

サキは密かに戸惑った。だが時は、戻ることなく前に進んでい
る。

6・5「彼女達の最先端」(後書き)

- 解説 -

草薙乃剣 普通は 草薙の剣 ですが、まあ有名な剣ですよ。ね。四、五の名を持つらしいです。ヤマトタケルの物語を御存知の方なら、草薙が炎に強い理由も解るかと思います。

こんな感じで千風を華々しく活躍させよう……というのも難しいですね。もう残された場面が少ないです。

さて……申し上げづらいのですが、これから一月余り更新を止めることになります。お仕事で京都に行ったり、帰ってきて試験があったり、忙しくなりそうなのです。

いずれ帰りますので、どうかこの白亜と『your earth』を見捨てないで下さい。後は最終幕なので、どうかお付き合い下さい。

お休みの間、もしかしたら短編でも書くかもしれませんが。『はてしない物語』のアナザーストーリーとか良いなあ、と企んでいます。

7・0「fly me to the moon」

アカとボクが戦ってから三日がたった。月の欠け具合からして、ご主人様の言った日まで後四日といった感じだった。

サキとボクは京都の外れにある旅館に泊まっていた。のどかな景色、美しい日本家屋を見ながら日々をすごす。三食は毎回おいしい懐石料理。温泉まで沸いていて、とても贅沢な毎日だった。

このお金のかかる日々を継続させているのは、アカを通してボクらに届く税金。申し訳ないなあ、と思いつつもボクにはここを動けない理由があった。

ポーン、と呼び出しのベルが鳴った。

「あら？ まだお昼には早いですわ。どなたがお出でになられたのでしょうか？」

それまで写真集に眼を通しながら暇をつぶしていたサキが、いそと立ち上がり玄関に向かう。揚羽蝶の柄が入った墨色の着物を身にした彼の後ろ姿は、ちょっと優雅でかっこいい。

戸の開く音がした。ボクは布団の中にいて、ここを出ない限り玄関を見ることはできない。

「まあ、アカじゃありませんの。どうしてここへ？」

「ご挨拶ね。私はあのあと忽然と姿を消したあんだ達を、ずっと探していたのよ。それがこんな一日二十万もする高級旅館で悠悠自適に休暇中？ 少しは金の分だけ働こうって気は無いの？」

アカはのっけから怒っているようだった。

ずしずしと床を踏みならし、黒いスーツ姿のアカが部屋に入って

くる。間もなくして彼女は、寝室で横になっているボクを見つけた。

「あんた何しているの？ 風邪？」

「ボクは……せ、生理痛だよ」

アカは苛立ちと呆れがほどよく混じりあつた表情を見せた。

「生理痛って、それだけで寝込んでいるわけ？ あんたどれだけ甘つたれてるのよ？」

厳しい口調で一言。彼女の剣幕に、ボクは布団の中で首をすくめることしかできない。

けど、ボクには心強い味方もいた。

「そう怒らないでくださいまし、アカ。チヨは初めてなのですわ」
サキがアカの背後に音もなく現れた。

アカは彼の登場にぎよつとした顔を見せる。しかしすぐに仏頂面を作り直し、彼の言葉にとりあえずの肯きで応えた。

「そう、ならわかつたわ。あんたは好きなかだけ寝てなさい。それよりもサキ。あんたは生理でも何でもなく、ただ暇しているんですよ？ 少しは先視を使って 漆黒 の作戦の組み立てに協力しなさい」

それがアカの目的だったようだ。

一方サキは、「いやですわ」といつも調子で一言。

「チヨが寝込んでいる以上、私はチヨのそばわたくしを離れたくありません。なぜなら、私はチヨの所有者なのですもの。いかなる時もこの子のそばにいて、その変化を観察していただきたいのですわ」

「ボクのご主人様はツミだってば……」

相変わらず、サキは変なことをいう。

と、またそこでチャイムが鳴った。

サキが応対に出る。

「あら、今度はキズオト　いえ、千風ちゃんですよ」
「うん、久しぶりだね、サキ。お邪魔しちゃうよ」

パタパタと軽い足音を伴い、玄関からセミロングの黒髪の子高
校生が姿を見せた。

「うん、チヨとアカもいるね。こんにちは、二人とも。全員集合だ
ね」

澁瀬と挨拶する千風。

アカが答える。

「　あんだ、もしかしてこの場所のこと……………」

「最初からわかってたよ。でもこっちの準備もあつたし、アカに合
わせてここに来ることにしていたんだ」

にこにこ満足顔の千風。

アカはただ深いため息だけついた。苦労してボクらを探したのに、
千風はあっさり同じことをしたからだろうか。

千風がぐるりとこちらを向く。

「チヨ、具合はどう？　初めてだとちよつと大変だと思うけど」

「うん、まあ大丈夫だよ。もう少して終わると思うし」

かちゃん、と音を立てサキがコップにお茶を入れて運んできた。

アカと千風に座布団を示し、三人はボクの布団を囲んで座る。

「ふふ…………　ようやく役者が揃ったということですね。こうして落
ち着いて見ますと、皆さんずいぶんと様変わりされましたわね」

皆さん、というのはボクも入っているのだろうか？

「あんだもね。この中で、唯一男じゃない」

アカが冷静に言う。

サキはにこりと笑みを濃くした。

「ええ、そのとおりですわ。私、^{わたくし}チヨの生理が始まったとき、とっ

さに何をしたらいいか分からなくなっていましたもの」

でも実際は、サキはちゃんとボクを助けてくれた。サキはいまだによくわからない部分があるけど、それでもボクにとっては心強い存在だ。

「そういえばアカ、あなた生理はありますか？」

「え？」

突拍子もないサキの質問に、ボクは思わず変な声を出してしまっ
た。

もちろん、あるに決まってるよね。

そう思ってたアカの横顔を見ると、ちょうど彼女もこちらを向いて
目と目が合ってしまった。

アカがボクの名を呼んだ。

「あんたはどう思う？　もしかして、知っているのかしら？」

まるでなぞなぞを始めたみたいだ。

「ううん、知らないよ。でも……アカも女の子だよ、ないわけ……」

…

「ブブー！」

突然の「ほべしっ」　千風の声。　間髪入れずアカが千風に

突っ込みを入れた。

「びっくりするじゃない。　ま、そのとおりだけどね。私は太陽

の霊力を使っているせいかな、“月”に縛られる月経はないの」

サキが言葉を継ぐ。

「日神　天照大神　は治める神であつても、産み出す神としての能
力は薄いのです。古事記では、一応“宇気比（神を産むこと）”を
していますけどね。しかしそれも建速須佐之男命（スサノオ）に
負けています。　チヨ、私が言いたいことがわかりますか？」

ボクは分からなかった。

するとサキは相好を崩し、にたりと笑った。なんか嫌な感じ。

「察していただけなくて残念ですわ。つまり、私達でたくさん子供を作っていきましようということですよ。できれば今すぐ　ぐっ？」

アカがエアチョコクでサキの言葉を元から止めた。

「ちょうどいいから、そのまま連れて行くわ。じゃ、また近いうちに会いましょう」

腕をサキの首にかけたまま、彼を引きずってアカは去っていった。あとに、ボクと千風だけが残された。

「ね、外で話ししない？　今日はいい天気だし。　動けるんですよ？」

ボクは肯いた。

「うん、寝てるのが好きだから寝てるだけだよ。猫だから」「猫だから、か。本当にそのとおりみたいだね。　じゃ、行こっか」

*

宿から少し離れ、見晴らしのいい川沿いの茶屋に来た。そんな場所に来てふと気がつくのは、季節がいつのまにか夏から秋へと移ろうとしていたこと。木々はちらほらと紅くなり、景色は少しずつ秋の色になっていた。

涼しい風を浴びながら、千風とボクの二人は白玉あんみつを食べる。煙水晶のような白玉は、少し尖っているボクの歯にまとわりつくので食べづらいけど、あんみつ自体は甘ったるくておいしい。

「ねえ、チョコ。変なこと聞いてもいいかな」

わざわざの前置き。遠慮の少なそうな千風には珍しいと思った。

「チヨはサキのことどう思ってるの?」

この問いはまだ真打じゃない。

けど、難しい質問だ。ボクは少し考えてから言う。

「サキは、ボクにとって大切な人だよ。好きなどころはいっぱいあって、嫌いなところもちよつとあるけど、ボクにとってかけがえない人。サキがいなければ、ボクは不安でいっぱいになる。サキがそばにいてくれれば、ボクにとってそれ以上心強いことはない。ボクは、サキのことを」
「愛してる。」

とは言えなくて、まだ。

「大好きだよ」

「じゃあさ……サキと子供、つくりたい?」

普通の少女らしい恥じらいの見せ方だった。千風にもこんな面があったのかと、ボクはちよつと驚く。演技かもしれないけど。

上目遣いの千風に、ボクは少しためらってから

「……………うん、そうだね」

言ってから恥ずかしくなった。

やっぱり、と千風は顔に書いていた。呆れたような、でも悪い感じのない笑顔に。

千風は答えを予測していたからこそ、こんな質問をしたのかと、ボクは思った。

ボクは子供をつくりたい。

それはボクが大地と絆をもつものだから。種を受け取り産み出す、

大地と同じ本能をボクは持っている。本能だけに従えば子供の父親は誰でもいいのだろうけど、ボクは本能以外に感情も持っている。そのボクの感情とはもちろん

「サキ以外にはいないと思う。ボクと子供をつくる相手は。……今のところは、他のだれも考えられないよ」

向かい合う千風は、とても優しい、慈愛に満ちた微笑みでボクを見ていた。

「なんか幸せそう。でも、男の人はほかにも沢山いるよ。よく考えたほうがいいと思うよ」

「……………え、と……………」

答えに詰まってしまった。

「あはは、そんなまともに反応しちゃだめだよ。好きなんですよ、サキのことが？ だったら、それだけでいいじゃない」

ボクは気恥ずかしくて頭をかいてみた。

ちよつと、千風は表情を引き締める。

「だけど、まずは終わらせないとね。私達と、月との間の物語を」

「そうだね。ボクの子供が生きる世界は、現うつしや夢まぼろしとかの柵しがらみを越えた新しい世界だといいな」

と、千風が笑いをなくした表情でボクを見ていた。

「何があっても、サキとチヨだけは守ってみせるよ。命に代えても」

「な、何言ってるんだよ。……まるで千風が死んじゃうみたいじゃないか」

突然の千風の言葉に、ボクは動揺して早口になってしまう。

「死んじゃうかもよ？ だって、これは戦争なんだもの。チヨだってもうそれくらいわかってるよね？」

わかつてる？

ボクはそんな“殺し合い”とかを否定し続けてきた。いろいろ言われたけどボクはここまで来たし、千風だってボクのことを認めてくれていたはずじゃ……………

頭がぐるぐるしてきて、困ったままそらしていた視線を千風に戻す。

すると千風がうつむいたまま小刻みに肩を震わせていた。彼女は笑っている！

「千風……………」

「気づいた？ 冗談だよ。ほんの少し、シリアスにしてみようかなあつて思っただけ」

「冗談……………」

「ボク、冗談は苦手だよ。 千風も人が悪いよ」

「チヨがお人好しなだけだよ。ま、それが良いと思うけどね」

そう言つて千風は腰を上げる。去ろうとする彼女を、軽やかな風がふわりと取り巻いた。

「じゃ、今度は新月の夜だね。そして、それからまたこうして会えるように頑張ろうね」

「うん、誰も死なないよ。死なせない。新しい世界にみんなでいたいから。 そのために、ボクは全ての力を使うよ」

千風の背を見送りながら、ボクは思う。

すべての想いを知るために、ボクは旅に出た。そして今、ボクは想いを賭けて戦おうとしている。

世界はいま何を想っているのだろうか？ いまだに、というかこれからもないだろうけど、ボクは世界の想いを知り尽くすことはできない。ボクが大地を介して感じている想いも、ほんのわずかなも

のだ。

でも、ボクは願う。世界が安らかなものになりますようにと。皆が、そうなってほしいと想ってくれますようにと。

*

その夜、サキと手をつないで寝る。畳の上に二つ布団を敷き、間をちよつとだけ作って。

寢室の闇の中、つないだ手は見えないけど確かにつながっている感触はある。そう、ボクは安心と一緒に思う。

「あなたは恐れられないですね。変わりゆく自分を」

ふいにサキが言った。

「そうだね。 まったく恐くないわけではないけど、ボクはボクのままだと思ってるから。いま変ってるのは身体で、心の器だけ。だから、心が、想いが変わらなければ、ボクはボクであり続けられると思うんだ」

サキの答えはない。

ボクからサキへ問いかける。

「サキは、ボクのこと好き？」

一分間の沈黙。

「はい わたくし 私はあなたのことを愛しく思います」

ぎこちない言葉だと思った。でも……こんなサキ、今の彼の気配はいつもと違っていた。

けど今は言葉をつなげる。

「なら、良いよね。ボクらは互いに想い合ってる。想い合ってるから、支え合える。　ボクがサキのことを頼りに思ってるように、サキもボクを頼ってくれればうれしいよ」

吐息が一つ零れた。闇の静けさに、ふうつと消えた。

「あなたはお強いのですわね」

「ボクは強くないよ。でも、“みんな”がいてくれるから。大地、サキ、アカや千風たちが。それはサキも同じはずだよ」

ぎゅつと手が握られた。

「私はかつてツミさんの悲しみを慰めようと思いました。でも弱かった私は彼の悲しみを少しも背負ってあげることができず彼の胸の中に冷たい怒りを作らせてしまったのです」

小さな声で、区切れなくサキは言った。まるで懺悔するように。

サキが悔いを口にするなんて、今まであり得ないことだったと思う。でも口にはしなかったけど、これまでもずっとサキはこんな悔いとか戸惑いとかを押し隠してきたんだ。小悪魔のようにお気楽に振舞う、その影で。

「大丈夫だよ。悲しみと過ちの連鎖は止められる。　一緒に行

こう、サキ。二人なら、何も怖がることはないから」

手が引かれる。まるで、ボクの手にすぎるように。

「ええ。　離れないでください」

会話はここまでだった。

この夜、ボクらは身体を重ね合わせることはなかったけど、はじめて心を重ねることができた気がした。　はじめて、サキの素顔というものをボクは見ることもできたと思う。

サキもやっぱり弱い心を持っていて、それを隠していた。でも、だからこそボクは確信した。

この人となら、どんな大地の上でも、どこまでも歩いて行けると。互いの弱さを曝け出すことができた今だからこそ。

7・0「fly me to the moon」(後書き)

帰ってきました、京都から。いろいろ疲れて、おまけに目の前にやるのが山積していて調子が狂ってます。

今回は間幕でした。

解説、というか注釈を一つ。

建速須佐之男命はタケハヤスサノオノミコトと読みますが、“スサノオ”というほうが知られていると思います。“スサノオ”は日本書紀の言い方です。この物語のネタはとりあえず古事記だけに絞っているのです。

しばらく投稿は遅めにやると思います。しかし最終幕なので、どうかお付き合いください。

7・1「火蓋はきつておとす」

世界最後の日は、暗い朝から始まった。

曙光は赤黒く、まるで乾きかけの血のよう。わずかに太陽が昇り空が青白くなつたところで、日食は始まった。

光輪も見せない皆既日食。世界は日の光を奪われ、黒い空には無数の星々が、天球に張り付いた銀蠅のように瞬きもせず光っていた。

さらに、各地で電灯の故障が相次いだ。他の電化製品は動くのに、光を出す物だけが壊れたのだ。

現は闇と、無数の空の眼のような星に包囲されながら、じっと光を待った。一時間、二時間と経つても月は太陽を隠し続ける。火を焚いて明かりをとるところもあつたが、それはまるで戦火かのろしのようなだった。

そして正午を迎えたとき、ついに最後の刻は始まる。

*

「状況は？」

「はい、先ほど東京湾中央に現れた巨大建造物には変化はありません。しかし、海面が固着化され、その上に無数の異形バリアントが出現し、建造物から湾岸までの区間を隙間なく埋め尽くしています。向こうからの侵攻はありません」

日本武道館の中に陣を敷いた 漆黒 の人たちが、あわたたしく情報の交換と戦闘の準備をしている。武道館の中は術式によってわずかに明かりが取られていて、みんなこの薄暗い中で動き回っている。

ボクとサキ、それに千風はワンボックスカーの中からその光景を見ている。ボクは助手席、千風は後ろの座席で、ハンドルを握っているのはサキだ。

「暇そうね」

闇にも映える唐紅の狩衣を着たアカが来た。手にコーヒーマグを持っているらしく、薄明かりにボォツと浮かび上がっている。

「あれ？ アカはすることないの？」

「ないわね。鷲が号令を下せば状況は始まる、それだけだもの。私の判断を挟むところはない。だから待っているだけ」

余裕綽々って感じだった。

でも本当に暇だ。することがなくてあくびが出る。

「まあ、アカは今 漆黒 の衣装ではありませんものね」

黒い服を着ていない時のアカは、ただの厄介者扱いされることに決まっているらしい。

ちなみにみんなの服装を言ってみる。

サキはいつもの黒いマントに白いインナー。インナーのシャツにはフリルが付いていて、どこかの貴公子みたいな感じになっている。千風は黒いセーラー、学校の制服だ。こうしてみるとアカより千風のほうが、漆黒の守護者 っぽい恰好をしている。

ボクはオリーブ色のジーンズに黒いノースリーブのシャツ。特にどうという服装ではないけど、シャツはサキが 漆黒 の人たちに注文した特別製で、特殊な黒い生地の上に白い線で防御の方陣がごちゃごちゃ描き込まれている。 一見すると柄が悪い。

こんな統一性のない服装をしているボクらは、これから力を合わせて戦う。まあ、そもそも思っていることもみんな適当にバラバラだし、それでも一緒にいられるのだから人同士の絆というのも不思議で、面白い。

少し経つと、小柄な 漆黒 の人がこっちに来た。確か姫鴉っていう諜報員の人だ。

「紅烏さん、伝令です。あと五十二分後、1300に鷲累さんを先頭にした突撃を開始します」

「いよいよ始まるのか、とボクは身を引き締めた。

「そ。じゃ、もう移動開始ね」

姫鴉がいくと、アカはボクらの車、千風の隣に乗り込んだ。

「では、始めましょうか」

サキが車のキーをひねってスターターをかけた。

*

ご主人様 月神ツミは、東京湾の真ん中に城を建ててボクらを待っていた。

堀はなく、高い石垣と門が城を囲んでいる。蒼い月光の中で外壁は白くあやしげな光を放ち、青い瓦は海のように波打っていた。大きさは普通の城と変わらない。けど、その異様さで、各地にあるどの城にも比べようのない威圧感を眼下に放っていた。

その足元には、数えきれないくらいの異形がひしめき合っていた。そして異形の頭上に、浮遊している銀のマントの人が何人かいる。異形の軍団を統率する 月の子 だと思う。

鏃の陣を隊伍を組むと、 漆黒の守護者 の人たちは突撃を開始した。 目的は一つ、月神を倒しうるボクらの道を作ること。サキが頼んだとおり、あの人たちはボクらの露払いをしてくれるんだ。突撃は力強く、けど門まで五十メートルというところで止まった。あとは、ボクらが進む番だ。

「 get ready! 」

サキが陽気に言い、アクセルをべた踏みした。

改造されたワンボックスカーの、レースカーにも積めるV10エンジンがフル稼働を始める。強烈な推進力で、ロケットのように車体は前に出た。

鷲累達のつけてくれた道は、早くも埋め尽くされようとしている。攻撃のはじめはボクの術。前方の重力を軽くする。

「吹き飛ばせ、ファルクラム！」

千風による、音速の風の召還。大地の支えを弱くされた異形達は、足掻くこともできず空に巻き上げられていく。

その間にアカが車を飛び降りる。

彼女は地面に降りたわけではなく、火炎の推力を使って車と並走し、すぐに屋根に立つ。そこで、大規模な攻撃術の用意を始めた。

「この火焰は龍の吐息」
風の中から火が編み出され、螺旋を描いてアカを取り巻く。

「コウリュウカライゲキ紅龍火雷撃！」

獣の咆哮のような音を立てて飛んで行く、アカの火球。

「！」
前方で炸裂。

車は進み続け爆発の範囲に入っていくので、サキとボクとで車を護る。

灼熱を突き破り、ボクらは前進する。と、外から抗議の声が聞こえた。

「馬鹿野郎！ 何人が巻き込まれただろうが！」

鷲累だ。短く太い銚のような槍を持って、二本の足で車と併走し

ている。

窓から鷺累を覗いていると、頭上から答える声が聞こえた。

「悪いわね。先を急ぐのよ」

「そんなことは知っておる！」

反対側からも声。車の右側からは糸鶴も走ってくる。

気づけば城まで四十メートル。向こうの防衛ラインも最後の物になってる。

「減速しろ！ 俺達が先行してやる！」

サキがブレーキを踏む。すると、まず糸鶴が車体の前に出た。

弦をこするような微かな音が、周りの音の中から聞こえた。

糸鶴が糸を加速を付けるように振り回している。

「Storm Runner！」

糸鶴の手の先から放たれた細い銀の線は、遠くまで伸びていく。

そこで彼女の急制動。糸は一気に下に引かれ、群がる敵を頭上から切断する。さらに腕を水平に振ることで、みじん切りにされた肉片が宙に舞った。

「次は俺だな。 “轟雷”！」

鷺累が高く跳ぶ。一直線に、城門の前に浮かぶ 月の子 目掛け
て。

隼の鋭さで月の子に槍が突き立てられる。

「烈！」という掛け声とともに、月の子を貫いて飛び出た穂先から稲妻が発し、残っていた異形のほとんどを打ち倒した。

散り逝く命に安らかな眠りを。

戦争になった以上、誰かが死ぬことは不可避だ。残念なことに、ボクにその全てを止める力は無い。ボクにできることは、死んでしまった命達の冥福を祈ることと、早くこの戦争を終わらせること。そしてこの先の未来に死という“罪”を背負っていくことだけだ。今は目の前に集中する。

扉には試すような弱い結界が張られている。ちよつと力を飛ばせば………簡単に砕けた。

結界を壊し、物理的な扉は車体で突き破って、ボクらはついに求め続けていた場所にたどり着いた。

*

城の中は、言いようもない奇妙な雰囲気漂っていた。

まずにおい。ふうわりと深く香る沈香が焚かれている。強いにおいではないのに、それが嗅覚を占領して他のおいを全然感じるこ
とができない。

音はなく、しん、とした静寂がここにある。重苦しい静寂、というわけではないけど、それがかえって不気味だ。外では激しい戦闘が繰り広げられていて、今も破った扉から見えているのに、その音も全く届いてこない。

床と壁は、仄赤かったり、仄青かったり、そんな極彩色の羽目板で覆われている。金属的な光沢をもち、でも触れると木のような温もりを持つてる。運動靴で上を歩くと、リノリウムのような感じがした。

天井は銀の梁と漆塗りの板で作られている。明かりをとるものはないけど、無機質に白い光は上から降ってくる。それも真上からまんべんなく降ってくるので、ボクらはどこに立っていても足元にちよつとしか影を作れない。

しばらくすると、扉がふさがり始めた。一秒の間に、青銅みたいな扉は外とボクらを完全に隔てた。

かすかな衣擦れの音。

「「ようこそ、月の宮城へ」」

重ねられる二つの同じ声。ササヤキとナゲキだ。

今日の二人はまったく同じ柄の留袖ではなく、互いに鏡合わせになるように柄が配置された着物を着ていた。左右片方は瑠璃紺がベースで、もう片方の鈍色までグラデーションしている生地に、秋という季節に合わせたのか酸漿（ほおずき）と銀杏のアクセントがちりばめられている。つやのない帯は銅色で、栗色の飾り紐を巻いている。

「出迎えありがとうございますわ。このままツミさんのところまで案内してくださいませの？」

サキの口調に挑発的な色が見えるのは気のせいだろうか？

ううん、気のせいじゃない。なんだか気を昂ぶらせているみたいだ。

答えるのはナゲキ。彼女は見下すような笑みを浮かべ、

「残念だけど、それは違うわ。私達は一緒に踊ってくれる相手が必要しくてここにいるの。せっかくの宴ですものね」

「千風ちゃんに負けたあなたが、私に釣り合おうと思っていますの？」

邪魔をしたいのなら、はっきりそう言いなさい」

やはり嘯み付くように話すサキ。

二人は目線で火花を散らす。

「今日はずいぶんと吠えるのね、サキ。どうしたの？ 声もまた低くなったみたいだし、女じゃない身体の具合になれないのかしら？」

それは、黙っていたササヤキの言葉。

虚を突かれた表情となり、サキは口をつぐむ。サキが黙り、ササヤキとナゲキが何も言わないと、あとに口を開く人はいない。

「サキ、気にすることは無いよ。ボクがサキと一緒にいるから。

ササヤキ、ナゲキ、戦いたいのならボクは相手になるよ」

「馬鹿じゃないの？」とアカ。「ここで力を使って、ツミに勝てると思ってるの？　ここはサキとキズ……千風にやらせて、私達は先に行くわよ」

サキを見る。彼は顔をしかめて、視線を何処ともなく空中に定めていたけど、ボクの視線に気づいて振り向いてくれた。作り物っぽい笑みを浮かべて。

「任せてくださいまし。」

わたくし 私は大丈夫ですから」

本当に？　と言葉にせずに思うと、答えるようにサキは言う。

「なら……口づけを、してください。私がまだ戦場に立っていられるように」

いつもの強引な調子のない、弱々しい要求。

ボクは何も言わず、そのとおりにする。

爪先立ちする彼と、ゆっくり唇を重ねる。口付けは何度もし

ただけど、こんなふうにサキから求められてボクからするのは初めてかもしれない。

「私達は」サキが言う　「いつも一緒だよ」ボクが繋げた。

繋げた言葉は、心を繋げる。ボクをまっすぐ見る、彼の青い瞳がとても愛おしく感じられた。

「ならば、私はあなたの思うように戦いましょう。ですから、いつ

てらっしやいまし」

今度の微笑には、安心できる感じがした。いつもどおりの、不敵なサキだ。

千風のほうを向く。視線を合わせると、彼女はぱちりと笑った。

「あたしも頑張るから。何も心配しないで先に進みなよ」

「うん、信じてるよ。あ、これ渡しておくね」

首にかけている八尺瓊勾玉やかさのまがたまを左手でつかみ、右手を千風の右手と重ねる。そうして彼女の中に、草薙乃剣くさなぎのつるぎを実体のない状態で送り込む。

「ん、いいね。あたし影薄いみたいだから、これで活躍させてもらうよ」

ササヤキとナゲキに目をやる。同じ顔の二人は、微妙に違うけど同じように目を細め、ボクとアカに一つの方向を示した。

「あちらに進みなさい。ツミのところまで行かせてあげるわね」

「でも何もないとはい思わないことね。もちろん、何があるかは教えないけど」

絶対何かある。でも、恐れる必要はない。今さら。

ボクが歩き出したと同時に、アカも隣に並んでいた。

「ちらり、と互いに目くばせする。でも、もうごちゃごちゃ言つこともない。」

ボクの後ろにサキ、ボクの前にご主人様がいる。

7・1「火蓋はきつておとす」（後書き）

城の場所をどこにしようかな、と少し悩みました。あと 漆黒 が集まる場所も。

だいたい六話くらいで書こうかと思ってます。最後なので、限定解除でいきたいとおもってますが。

PCが新しくなったのにもだいぶ慣れました。誤字脱字があったら教えてください。

7・2「闇映す水面」

サキと千風、ササヤキとナゲキ、四者は二組に分かれ対峙する。

「何故あなた方は戦うのですか？」

静かに、サキが問う。

「それ以外にすることがないからよ。あなた達と一緒にツミと戦うわけにもいかないし、黙って事の終結を見ている気もない。なら、かつての“家族”と死ぬまで戦ってみるのも一興じゃない」

そう、ナゲキは特に面白がるでもなく答える。

ササヤキは千風に視線を向ける。

「思い返せば、キズオト、あなたに私達は殺されている。これから命を奪われるのは、命を奪うのはどっちかしらね」

千風は真顔だ。

「誰も殺されないよ。チヨが悲しむから。あたしの風の刃は、ササヤキやナゲキが自分で心に作った戒めを断ち切るために振るわれる」

「誰も彼も」とナゲキ。「チヨの名を口にするのね。彼女なんて、ちよつと運が良かっただけじゃない」

「それを言うのなら、あなた方は運がなさすぎですわ。幸運は月の恩寵。結局、どこまでもあなた方はツミさんの慰み物以上にはなれなかったのですわね」

しばしの間が空き、ふう……と誰かが溜め息。

「私達は疲れたわ。だから 最後まで楽しんでませね」

* *

手を合わせても、人は一つになりはしない。

しかし元は一つの体に入っていた二人の女。互いに手を合わせる

ことで、その末端から形を崩しゆるやかに混和し始める。

「憎しみの囁き悲しみの嘆き。水底に沈み氷に秘められたものは今ここにある。」

私達は合わせ鏡。水面に映る双つの影。この世ならざるもの、実体なきもの、此処にある」

二人の形が崩れ、サキと千風の足元を水が浸す。その水はこれ以上なく青く、同時に黒く渦巻く。ザラリとした流動物の上に、二人分の着物が漂っていた。

「さて……青は悲しみで、黒は憎しみですか？ その逆でもよさそうですね。」 千風ちゃんはどう思いますの？」

千風は浮遊し、空中で濡れた足をプルプルと振るっている。

「それどころじゃないよ！ 来るよ、サキ！」
床一面に広がった水。墨流しの水面が波打ち、無数の痛い水滴を発射する。

「あらあら。これは余裕のない戦いですわね」

水面に揺れる自分の影を踏み、サキは水の上を走る。

左手の銃をバレルを長くして水底につける。そのまま駆け回り、大きな方陣を床に描く。

「force field！」

烈光が走る。

凄まじい量のエネルギーが、光の形をとって発動する。物質・非物質を問わず破壊される、そんな光だ。

しかし、実際には先の術が顕した効果は薄かった。水は相変わらずそこにあり、絶え間なく攻撃を仕掛けてくる。

「駄目でしたね……」

「じゃあ今度はあたしが…… 草薙乃剣！」

千風の右腕を光と風が包む。それらは集結して一振りの剣となる。

「叢雲は月を隠し雷を呼ぶ。

あまのむらぐも
天叢雲剣 モード！」

バシツ、と剣身が放電し、草薙乃剣は形を変える。

切っ先を二つに分け、剣の平にもスリットを開けた両刃の剣。陰鬱な空の色に、鈍く、光沢する。

「落ちろ！」

剣の力で天井と床の間に大きな電圧差が生じる。

千風が剣を振り下ろすと屋内に何本もの雷柱が建った。

水を貫き、稲妻は轟音と水蒸気を発生させる。

意思ある水は苦悶の叫びをあげ、宙に飛び散った。

「！」

宙に舞った水は千風に付着し、彼女を鉛直下方に引いた。大技の後で隙を作っていた彼女は、容易く水の中に落ちてしまう。

殺してえ。

水の中で、千風は聞き覚えのない声を聞く。

あいつら汚ねえことしやがって、絶対復讐してやる。

裏切られました。彼が裏切りました。裏切られています。裏切ろうかと思えます。

人前で言えない憎悪を、闇に囁く幾多の声。

千風は恐怖した。水から抜け出そうとし、もがく。

浅い水だったはずなのに、どうして逃げられない？ そんな焦りと困惑が、千風の心を重くする。

死なないで！

返して！ 大切なものを奪わないで！

次いで聞こえたのは悲痛の嘆き。

千風は心を閉ざすように固く眼を閉じ、がむしゃらに逃げようと

する。

「ちゃんと聞いてあげないとだめよ。キズオト、あなたは風を通してすべての者たちの声を聞く者でしょ？　なのに、どうして拒絶するの？　喜びも悲しみも等価よ。ほら、もっとお聞きなさい」

脳髓に浸みこむようなササヤキ（或いはナゲキ）の声。

嫌、と千風は水中で言う。口を開くとただ気泡が出て、代わりに辛く臭みのある水が流れ込んできた。

「心地よいものばかり聞いていられると思ったの？　甘いわね、キズオト。そんなあなたが、刃を持って何かを守れると本気で思ってるの？」

千風は抗う。鳴り響く囁きと嘆きの声に、心を砕かれぬように。息が苦しい。水の中の声は身体に巻きついていているかのようで、ひどく手足が重く感じられた。

目の前が暗く、心に絶望が忍び寄るのを感じる

「black eraser！」

水が消え、深い闇が、そして細いサキの腕が千風を包んだ。

そして光。再び視界を取り戻したとき、千風は水の上に立つサキに抱きかかえられ、サキと対向してナゲキ（もしくはササヤキ）が立っていた。

「喜びと悲しみは等価ではありませんわ。何故なら、光あるところに闇は必ずありますが、闇あるところには闇しかないのですもの。

人は喜びを、光だけを求め続けてよいのです。闇は知ってさえいれば良いのです」

「あなたは悪夢を否定するの？」　とササヤキ。その声の調子は単

なる問いかけ以上、逼迫した感情を感じさせる。

「誰がそのようなこと言いましたの？ 否定とは、求めもせず知りもしないこと。けれど闇を知るということは、少なくとも闇の存在を認めているということですよ。悪夢は存在していてもよいのです。そして」

サキは千風を腕から下ろす。千風は水に足が着く前に、風を操って浮遊を始める。

銃を構えるサキ。黒い銃は、かつて彼が半身とまで思っていた者が遺した“形”だ。

「私は闇を継ぐ者。その闇の名は“願い”。ですから私は宣言します。私は闇を孕む大地と共に生き、風には大地を照らす光を望むと。空翔ける風には、光こそふさわしい」

彼のマントが翻る。黒いマントは常よりさらに暗く、深淵の色に染まっていた。

その横に千風が並ぶ。少し前まで怖気に顔をひきつらせていた彼女だが、今はもうその影もない。彼女の面持ちは毅然としている。

「サキは強いね」

「いいえ、それは正しくありません。私はチヨに支えてもらっていますから、チヨがともにあると言ってくれましたから、こうして立っています。彼女は言っていました。誰にだっていつもそばにいて支えてくれる存在がいると」

「そうだね」

風が巻き起こる。

猛烈で、雄渾な風。荒れ狂っているわけではなく、完全に統率され、見えない鋼の手のように一つの仕事を為さんとする。すな

わち、床一面に広がった水を一点にかき集め始めた。
当然、命ある水は風に抗う。だが断固たる風の手は、そんな水の抵抗を物ともしない。

「The sea is burned by the suns
hine. The water is erased by t
he ray. (海は陽光に焼かれる。水は光によって消される)

「コッキング。黒の銃身に緑の光が文字を刻む。

狙うは風の檻に押し固められた水の一塊。ドラム缶一つ半はある
うかその量を、サキは跡形もなく消さんと力を溜める。

「BLAZE !」
比較的低速で射出された光の球は、物静かに水の中に入る。

直後、炸裂。

太陽のような光の塊が解放され、閃光の洪水の中、水は分子から
破壊されて嵩を減らしていく。

「!」
水が震える。攻撃により与えられた衝撃と、苦痛により身を擦じ
らせる痙攣だ。

痛めつけられた水が、二つの氷塊に形を変え飛び出した。高速で、
唸りを上げながらサキと千風に飛来する。

「!」
今は乾いた床の上で、二人は各々ステップして回避する。
氷塊は床に落ち、一つになって巨人の形をとる。
無骨で、威圧的な姿の巨人。のそり、と身を回すと拳を振り上げ

た。

「くだける!」

空気との摩擦で氷の表面が瞬時に解けるくらいのも、高速の拳。狙いはサキ。しかし千風が剣をもって間に割って入る。

「……………」
荷重は百キログラムを超える。千風の、少女の細腕では到底支えうるものではないが、風の力と、意志の力が彼女を支える。

身体が軋む。しかし想いは軋まず、不屈だった。

「I rule light and dark. Light is Heaven, and dark is Hell.」
私は光と闇を支配する。光は天、闇は地なり）

So, I am a master of Heaven and Hell. (私は天地を支配する者なり) And, my assault is……………」

サキの詠唱に応え、膨大な神秘^{エナジー}霊力が集まり始める。

呼び寄せられる光と闇。それは白と黒の螺旋となり、人の目には映る。

彼は銃を持つ左腕を垂直に構える。どろどろとした煙のような光と闇が、彼の左腕に沿って床と天井の間を上下動していた。

「……………千風ちゃん、好きな狙撃銃は？」

「え、えつと……………L98A1 とか……………」
力が収縮し、凝結を始める。

雷鳴のような音をたて、光と闇の中から一丁の長銃が作り出される。

淡く灰色に光沢する、一・ニメートルほどのライフル。本来のデザインに加え黒と白のストライプが引かれたそれを、サキは重々しく左肩に乗せる。

「乾坤一擲 My assault break through everything!」
(私の一撃はすべてを打ち破る

「！」

詠唱が完成した瞬間、千風は氷の巨人とサキの間から退避する。トリガーが引かれる。長いバレルの先から放たれるのは、黒と白、二条の稲妻。

稲妻は巨人の胸、人であるならちょうど心臓のある位置を過たず貫通、そのまま背後の壁に穴をあけて消え去った。

『……！』

声にならない絶叫。

氷が数えきれないほどの数で、目に見えないほどの小ささで破砕する。それは霧散。ダイヤモンド・ダストの如き微小な粒子になった氷が、煌めきながら宙に舞う。

粒子は下に落ちていく。だが、地に着くものはなかった。解けて水になることもなく、むなしく空中で消滅していく。

まるで雪のように。

かつての家族の散りざまは、あまりに美麗だった。断末魔を耳にしながら、サキと千風は哀悼と憐憫だけを胸に、舞い散る細氷を見ていた。

*

声が聞こえて、ボクは駆け足していた進みを止める。

左前を走っていたアカが、ボクの停止に気づいて振り返る。

「何しているの？ 置いて行くわよ」

別に心配はされてない。下手な理由を言えば、確実に置いてかれ

る、そう悟らされる口調。

「えっと……声が聞こえたような気がして」

ふうん、と胡乱な返事。自分に聞こえなかったものに興味はわからないみたいだった、アカは。

ボクも深く気にはせず、先に進もうとした。

だけど、アカが立ち止まったままだ。何か考え込んでいる。ちよつとしてから、珊瑚色の瞳をボクにむけ、問いかけた。

「あなたの名前、“チヨ”はツミからもらったの？」

「う、うん、そうだよ……」

アカはまた黙る。沈黙考。

でも、こうしてアカがボクに興味を示し何かを尋ねるなんて珍しいことだ。

「あなたは夢まぼろしに行ったとき、自分の名を忘れなかった。でも、現うつでのツミ《あいつ》の名は忘れた。　違ちがう？」

鋭く、心を抉るようなアカの視線。

ボクはかくかくと肯く。なんとなく、声が出なくて。

「それで、今は現に戻ってきたわけだけど……あなたはあいつの名前を思い出したの？」

ボクは否定する。

「ずっと頑張ってるんだけど……。……でも、なんとなく思い出してきたかな」

ボクの答えに、そう、と短く言って歩き始めた。

しばらく経って、

「私の昔の名前、稚菜わかなといったわ。須藤・稚菜」　と出し抜けに言われた。

「へ、へえ。そうなんだ……」

「須藤・稚菜には恋人がいたわ。月神を名乗るあいつに似てたその男は、蒼崎・充秀あおさき みつひでという名前だったわ。彼は子孫も残さずに死んだけどね」

それ以上アカが話すことはなかった。

名前、か。

名前はそれが持つ、力とか、運命とか、いろんなものを一言で表しているときがある。名前がないと、それは形があやふやになってしまっし、何より無いと呼びかけることもできない。

『千風の名において、森羅万象、時空を吹き抜ける遙かな風よ。水に愛された、この人の名前を教えてください』

さっき聞こえた声。千風もそうやって名前を失くした誰か。そう、誰かの。名前を風を探していた。そ

ご主人様の名前は、ボクの中にあると思う。見つけ出して、呼んであげたいと思う。

ボクにとって、自分の名前よりも大切なものでもあるから。

7・2「闇映す水面」（後書き）

ああ、ササヤキ・ナゲキが……。

風は水に弱いですね。全然千風を活躍させてあげられない。

い

つものことです。

稚菜^{わか菜}、は天照大神に關係の深い稚日女尊^{わかひるめのみこと}から由来してます。わか菜、

という名の人はいるようですが、こういう字の人はいますかね？

アカの名前はすぐ思いつきましたが、ツミの名は苦労しました。ただ秘密ですよ？ まあヒントは出しましたので、予想してみてください。さい。

7・3「月には裏表」

誰もいない、音のない城の中をボクとアカは黙々と進んだ。

畏はなく、邪魔する人も異形もない。奇妙に綺麗な城の中、ボクらが歩く通路は、冗談抜きでボクらが初めて歩いているのだと、なんとなく悟らされる。

質感は妙だけど、この城も大地に属する土や岩、または木から作られているのは間違いなかった。けどそれらはまるで、首を絞められて塗り固められたような、そんな息苦しさでボクの気を沈ませた。アカは何も感じていないみたいだった。少し先を歩く彼女の、赫いシヨートヘアの後ろ頭を見ている限り、何を考え思ってるのかも読み取れなかった。

単調な前進。

かれこれ三十分は歩き、十六回目くらいの階段を上ったとき、突然城内の様子が変わった。

階段を上ると、まず襖障子の戸があった。少し開くと、闇が、いや夜がのぞいている。踏み込むと、後ろで勝手に襖障子は閉まり、夜の暗さがすっぽりとボクらを包む。

部屋の広さが感じられない。まるで広い体育館にいるみたいだ。すると、明かり。青白い炎が少し離れた、距離感の掴めないところで点る。

月光のような明かりで、畳くらいの大きさのアクリルのような黒いタイルが敷き詰められた床は見えるようになる。だけど、壁を見ることは、猫の瞳をもってしてもできない。

炎からは、微かに人の神と肉が燃えるにおいがした。

そして近寄ってくる人の気配。

「やっとここまで来てくれたね。アカ、それにチヨ」

ツミ　ボクのご主人様だ。

小ざつぱりとした着物姿。雲の浮かぶ夜空を思わせるように濃淡の付いた浅葱色の着物を身にまとい、その下には何も着てないみたいだった。朽葉色の帯の腰に、一振りの刀。まるで、江戸の町を歩く武士みたいだ。

足にはなにも履いていない。

ちよつと長めの髪は白く、瞳は琥珀色。童顔の彼は、前に見た幻影の時と少しも変わってないみたいだった。

ボクより少し背の低いご主人様に、抱きつくことを想像する。けど、実際に身体は動かない。どう振舞っていいのか、わからない。となりのアカを見ると、彼女は厳しい表情で彼を凝視していた。瞳の色が金色になっていた。

そんなアカに、ツミはゆっくり歩み寄る。ツミの白い手が、アカの少し荒れた頬に触れる。

「　気安くするんじゃないわよ、偽物」

頬に触れた手をアカが掴むと、二人の手がまとめて火に包まれた。「！」

火のついた腕を振り払い、二三歩後ずさるツミ。あつという間に片腕は焼き落とされてしまう。

一方、アカは呼び出した火の中から、細身の金の剣　高御産巢日たかみむすひを取り出す。

二人は緊張感をみなぎらせ無言で対峙する。ボクも、あえて口を開くことを避けた。

「僕は偽物ではないよ」

しばらくして、彼が言った。

焼かれた服ごと腕を再生させ、刀の鯉口を切りいつでも抜けるようにする。

「でもあんたは、私の求めているあいつじゃない」

「なら、僕はだれだろう？　　チヨ、君なら何かわかるかい？」

ボクが言いきれないことは何一つない。

あるのはただ漠然とした違和感と戸惑いだけ。でも、聞かれたかには言葉にしてみようと思った。

「そこにいる人は………ツミの、複製………？　　ううん、ツミであつてツミじゃない、もう一人のツミ………」

「ねえ、本当のツミって何かな？　　答えてくれるかな、アカ？」
愉しむような彼。

アカの眉間に厳しくしわがよった。

「なぞなぞは嫌いよ。言いたいことがあるなら、はっきり言いなさい」

切つて捨てるような口調。

その返答に、やれやれと彼は首を振る。

「君は相変わらずだね。でも、そんなぶっきらぼうなところも好きだよ、アカ」

とびきりの甘い声で、彼は言う。

アカの顔にちよつとだけ朱が差す。

「僕はツミだ。ツミはこの世界に一人しかいない。　　ツミの名を持つ者はね。」

神となり、世界を作りかえるためには莫大な、天文学的ほどの神祕霊力が要る。さらに単なる力以外にも、無限の知能や知識、つまり全知全能を得ることになる。

だけど神の力と能力の前で、人という存在はちっぽけだ。封じられた神の長子 淡島 に接触しその力を得てから、ツミという意識は急速に希釈され始めた。まるで大海に落ちた水滴のようにね。そのままではツミの意識は消滅していた。そうなれば世界を思い通りに変えることはできなくなる。だから、ツミは 僕は、解決策を講じた。

僕は己を二分することにした。片方には、神の力と根源的な意志を与え、もう一方には心の大部分と力のごく一部、それと“ツミ”の名を持たせた。つまり、後者が今ここにいる僕。だからこそ、僕がツミなんだよ」

長々と、つつかえもせず滑らかに彼は話しきった。

ボクは話の大きさに、啞然として何も言うことができなかった。

一方アカは、いつにない程けわしい顔でツミを睨みつけていた。彼女はどれだけツミの話聞いていたのだろうか？ 彼女を見ている限り、話の内容よりも目の前の人間をどう扱うかだけ考えているようにも見える。

「ひどい顔だね。そんなでは、凜々しい顔にしわができてしまうよ」とツミ。

「あんたの後ろにいる」 アカは無視した 「もう一人のあんたは、今何をしているの？」

「もう一人の僕は 僕は 月神 と呼んでいるけど この古い世界を壊すための奇蹟を実行し続けているよ。」

月神 はね、まあ機械みたいなものだ。ツミが、つまり今ここにいる僕がプログラムを組み、月神 に打ち込む。すると 月神 に持たせた衝動的なモチベーションに沿って、月神 は奇蹟をおこしていく。二人の僕はそれぞれ物理的にも隔絶していてね、

この方法は少し手間がかかるんだけど、他に思い通りに世界を変える術を見つけれなくてね」

「思い通り？」 とボクが言う 「こんなやり方が、ご主人様の思い通りなの？」

彼はにっこりと笑う。まるで、ほしいものを手に入れた子供のように、無邪気に。

「前にも言ったよね？ 僕は悪夢いたみによって世界を平らなものにした。そのため僕に罪を負い、世界に等しく痛みを与える。

でもね、こういうことは加減が難しくくてね。少しでも神の力に引きずられてしまったら、全部を壊してしまうんだよ。その分、ここまですぐやってきたと思うんだ。 どうか？」

「そんなの変だよ！」 ボクは大声で言った。

「流された血は土が吸い込んでしまう。痛みの後にできた世界は、結局誰かの痛みを土台にしないと続いていけなくなっちゃうよ！」

彼は何も言わない。物のわからない子どもを相手にする父親のような微笑を顔に張り付かせたまま、刀を抜いた。

その刀 あめのこしたち 天乃常立 の刃は、白く、雪のような光を放つ。冷たくて、命の持つべき温かみを全く感じさせない、そんな光。アカも剣を構える。ボクも……戦うために力を練り始めた。

「あんたを消すと、すべては終結するの？」

「いいや、 月神 をどうにかしないとだめだね」

なら、とアカは横目でボクを見る。闘志のみなぎった、熱い視線。

「チヨ、あんたは先に行つたらどう？ この調子だと、放っておけばあと一時間くらいで現は壊されると思つんだけど」

「たしかに、君が現を守りたいのだったら、一刻も早く 月神に会うべきだろうね。でも……僕たちはもう話すことはないのかな？ 今後、僕たちが話し合う機会はないと思つけど」

けどボクの心はもう決まっていた。

夜闇の向こうにある、次の場所に向かうためのポイントを感じ取り、そつちにつま先を向ける。

「ご主人様は………壊れてるよ。人間は、命や心は粘土みたいに分けたりできるものじゃない。神とか何とかはわからないけど、今のご主人様にボクの言葉は届かない。だからその前に、まずご主人様のしていることを止めるよ」

そう言い残して、ボクはその場を後にした。

*

「行かせてよかったのかい？」

チヨがいなくなつてからツミは言った。

「アカ、君にとって僕は偽物なんだろう？ それなのに、“本物”を他人に渡していいのかい？」

二人がいる場所は、床と天井という名の強固な剛体板に囲まれた、高さ三メートル、水平方向には無限に広がる亜空間だった。アカとツミだけの二人だけの世界。

ツミの問いを、アカは鼻でせせら笑った。

「ツミは二人も三人もいらぬ。あんたは目障りだからこの手で消す。それに、チヨができるのは時間稼ぎくらいよ」

彼女は 月神 をチヨが倒せるとは思っていなかった。

「君なりにチヨを利用したってことか。アカも人が悪いね」

アカは返事をしない。

やおら剣を両手持ちし、一息でツミに打ちかかった。

神の力を持つ刃と刃がぶつかり合う。

凄まじい衝撃波が生じ、無限の彼方へと消えていった。当然その衝撃は二人にも当たるが、攻撃と同時に防御の術も展開している二人には、強い風が吹いたくらいにしか感じられない。

まず七合ほど剣戟を交わし、少し離れてツミは言った。

「その狩衣、なかなか良いね。やっぱりアカには炎色の狩衣が似合うよ」

「ありがとう。あんたの浪人侍みたいな恰好もなかなか似合っているわよ」

「浪人……。ほめられているのかけなされているのか、よく判らないな」

邪悪に笑うアカと、苦笑するツミ。

そしてまた打ち合い。

剣が触れ合うたびに耳を聳する轟音が、否、頭蓋を割るような、というより音と呼ぶにはあまりに強すぎる空気の波が二人の耳を掠める。

無尽蔵に近い二人は、剣戟によって力を周囲にまき散らす。それらは渦となって二人を囲み、夜を基調とした空間に光と熱を絶やさず放ち続けていた。

「……少し、冷やしてみようか」

アカの斬り下げを弾いたあと、ツミはそう言って少しさがった。
「夜は静けさと眠りなり。月は氷華を白く輝かせん……」
一瞬にして二人の周囲が白く凍りつく。輝く力の渦も消えた。
アカの身近だけが凍っていないかった。いや、赫い狩衣の長い袖の端が凍りついている。わずかに動かすと、そこは硝子のように砕けた。

「……………緋王陣！」
ヒオウジン

腕力任せに、アカは たかみむすひ 高御産巢日 を床に突き刺す。

これも一瞬。半径二百メートルの床に八卦図のような円陣が浮かび上がり、一刹那後に炎上した。

真紅の炎の中、ツミは光の球に包まれ立っている。恋人の炎を、めめるように恍惚とした表情を浮かべて。

「！」

炎の向こうから、アカに向かって光の波。

すかさずかわすと、波は波濤となって砕け、幾多の矢となりて再び襲いくる。

「この…！」

剣を振るい、矢を落とす。だが矢は素早く、また何本とある。その上、火炎の光から次々と新しく生まれていた。

「光を使っつてわけ？ 光を使えるのはあんただけじゃないのよ。」

レンカコウレツ
蓮華光烈！」

光が破裂した。周囲に満ち満ちていた光の一切が破裂し、時空をも震撼させるエネルギーが発生する。

一通りの激震の後、また夜が再生しはじめる。

闇の中で、アカは倒れ伏していた。攻撃に偏る彼女は、自らが発

動させた術を防ぎきれなかったのだ。

「ま、それでも君は治癒できるから良いんだろっね」

うつ伏せになったアカの後頭部を見下ろしてツミが言った。

さすがの彼も無傷ではない。着物は焼け、左腕は力なく下がっている。彼の力を受けて燃える青白い篝火も、やや頼りなく揺らめいている。

俄かにアカの全身が炎に包まれた。治癒が始まったのだ。

「火の中で命を再生させる存在。まるで不死鳥だね」

アカが身体を裏返し、仰向けになってツミを見上げる。

見開かれた瞳は、爛と金色に輝いていた。

「ずいぶんポロポロね。　　どうやら、月の属性には私が持つほどの治癒力はないみたいね」

「そうだね、防御は強いはずだけど。　　でも、なら僕はどうやって君を倒せばいいのだろう」

のそりと彼女は立ちあがる。狩衣も無残な状態だが、それが彼女にある種の迫力を持たせている。

「　　約束を、忘れてないよね？」

静かに、彼が問うた。

「負けたほうが勝ったほうの奴隷になるってやつ？　　くだらな

い。私はあんたを抹殺するためにここにいるのよ」

アカは吐き捨てるように言う。

ツミは残念そうに、寂しげに微笑んだ。

「アカ……君は今も僕のことを愛してくれているかい？」

彼女の答えは刃を振り下ろすことだった。

ツミも応戦し、鏢迫り合いとなる。

ぎりり、と刃のこすれあう音。半目になった金眼の彼女が、低い

声で言う。

「私のことを愛せないといったあんたが、そんなこと言わないことね。 気づいている？ あんたはいかれているのよ。 だから

その名ごと焼きつくしてあげるわ」

その時、 高御産巢日 が閃いた。

天乃常立 が折られ、そのままアカの斬撃はツミの半身を削りながら下に落ちる。

しかし、肉体の損傷と痛みでツミが顔を歪めることはなかった。

「 ガツ!?! 」

それはアカの声。

アカが倒れる。彼女の後頭部があったそのちょうど位置に、ツミが手のひらを当てている。

彼女の赫い後ろ髪を、さらに赤い液体が染めていた。

「 あんた、何を埋め込んだの? 」

延髄の上を探ると、固い突起があり、その内側に突起物の本体があるのを彼女は感じる。

アカは立ち上がるうとする。しかし、その足に力が入らない。

「何ってこともないさ。君を奴隷にするための術を結晶化させたよ
うなものだよ」

頭痛。後頭部の柔らかい部分をかき回され抉じ開けられるような筆舌に尽くしがたき痛み。彼女は声も出せずに床に手をつく。

「声を出せないのは僕が禁じているからだよ。 手も使えなくしようか」

途端にアカの手から力が抜け、彼女は顔面を床にぶつける。

「 苦しいよね? 何か言つてよ 」

苦痛に喘ぐアカの口が開かれる。

彼女はそこに、ありったけの憎しみをこめて言った。

「この　　きちがい」

7・3「月には裏表」（後書き）

ツミの話が予想以上に長くなりました。

そもそも当初の予定ではたんに偽物つてはずだったのですよ。しかしそれもあれかなあ、とか思っつて変えてみました。

今回、字数は多めでした。またノートが変わったので。

7・4 「夜裂く鳳凰の舞」

ボクのご主人様は、ボクの知らないものになってしまった。

言葉が届かないと感じた。集めて積み上げてきた想いも、理解されない気がした。

まるで空にあって、手が届きそうに見せているのに届かない月のように。

二つに分かれたご主人様。“ツミ”という名を捨て、神となった方にボクは会いに行く。

でも、この胸はかつてないほどに戸惑っている。目的のために名前まで捨ててしまった大切な人を、ボクみたいな大したことのない存在が邪魔していいのかと。

『あなたの願いは何ですか？』

ふいに、サキの声が心の中に響いた。　念話とかじゃない、単なるボクの想像だけだ。

ボクの願い、それはこの世界を本当に安らかなものにしたいたいこと。この世界のみんなが幸せになってほしいこと。もちろんご主人様も。

だけど、こんなやり方じゃ誰も幸せになれないに決まってる。だから　ボクはご主人様のやっていることを止めるんだ。

それと、ご主人様は自分を孤独に追い込んでいる。たった一つの神となって、世界中にある罪を全部自分に集めて、それで誰も届かない場所に登って世界を治めようとしている。

だけど、そんなのも間違っている。夜空に浮かぶ月さえ、本当は孤独じゃない。自分の正体を歪めて、さらに名前を失くしたって、孤独になれはしない。

名前を呼んであげたい。ボクが思い出すのも、その人がいる場所

に着くのも、あと少しだった。

世界の果てと始まりの場所へ。

アカはツミの裸の足を舐めていた。指の間まで、丹念に。

もちろん、これはツミが彼女に埋め込んだ術を使い、彼女に強制していること。だが、彼女自身は自分が何をさせられているのか認識できていなかった。絶え間なく彼女を苦しめる肉体と精神の両方の痛みが、彼女の認識能力を著しく低下させていたからだ。

にもかかわらず、アカの気高い心は屈辱に震えていた。痛みと共に、刻一刻と自分というものが書き換えられていくことを感じていたからだ。

「ササヤキとナゲキはね、僕が分裂していることを知らないんだよ。当然、ブラスフィア月の子たちもそうだけだね」

独り悦に入って話すツミ。

「月神は大雑把なことしかできないからね。僕が新世界の統治者となるための準備は、すべてツミがやらないといけないんだ。そのためにも月の子を組織した。けど彼女達には月神のことは教えなかった。何故か？ ……月は孤独なものだと思ったからかな」

アカはその話を、彼の前に這いつくばりながら聞いている。唾棄すべき話だと思ったが、禁じられて言い返すこともできなかった。

「僕が月読命ツキヨミの力を得ているように、君も天照大神アマテラスの力を持っている。その点では僕は同等だ。でもね、神の力を得ること、神に

なることの違いはわかるかな？

神の力は強い意志と訓練さえあれば人でも使える。だけど、神とならなければ奇跡は起こせない。世界を創りなおすことも、人々を根源的に支配するのも、神でなければできない。だから僕は神となった。心が壊れるのも承知でね。

ねえ、だから僕が少し狂っていても仕方ないだろう？ ……僕が狂ったことを、許すといってよ、アカ」

アカの口が開き、音を作りかける。しかし、彼女は絶対の意思でそれに抗った。

「すごいね……！ それでこそ僕のアカだよ。ねえ、今思ってることを身体で表してよ」

身体の拘束が解ける。激痛に虫食まれる身体を立ち上がらせ、ア力はツミと視線の高さを合わせる。

そして、その少年の顔を拳で張り飛ばした。

「そう来ると思ったよ」

ツミは喜々として言った。

「次はキスでもしてくれるかい？ ……っ！」
今度は蹴りが入った。

痛みでアカは立っているのも辛かった。だが、彼女の意地が、憤りが、彼女を立ち続けさせ、さらに言葉を発することも可能にした。

「あんたを見ているとね……吐き気しかないのよ。 ……憎いとも思わない。

誰が本物で偽物なのか、そんなことはどうでもいい。私はツミを愛した。そして憎んだ。また会って殺しあうことを望んだけど、いないならそれでもよかった。だけど、できそこないの滓みたいな奴がいることだけは、どうにも腹が立つのよ……！」

それは愛しい思い出を守りたい想いか、変わり果てた恋人を恨む想いか、如何なる想いなのか彼女には解らなかつた。だが、そんなことはどうでもいいことだつた。理屈よりも、今この胸にある感情の方がアカにとって重要なことなのだから。

アカは彼の襟首をつかみ、上に持ち上げる。大して背丈の変わらない二人なので、そんなにツミが持ち上げられることもないが。

「覚えてる？ 初めて会つたとき、あんたは私の火を見て怖がつた」
ツミは特に抵抗するでもなく、むしろ楽しむかのように彼女の手にぶら下がっている。

「そうだつたね。あれは怖かつた。でも同時に、君という存在に引かれ始めた最初の瞬間だよ」

アカは上目づかいにツミを睨みつける。その瞳は金ではなく、彼女と同じ名の色。

「あの時の恐怖を、もう一度味あわせてあげるわ」

ツミの目と鼻の先にある、アカの手が燃え始めた。

単に燃えているわけではない。いつものように体表の上に火を走らせるのではなく、彼女の手自体、身体自体が燃焼しはじめているのだ。

「はは……！」

ツミは顔を焼かれる。だが、肉体に与えられる痛みは彼女にとって重要ではない。

指が燃えてしまうと、自然とアカは彼を落としてしまう。

床に倒れるツミ。その上に、全身に火を付けたアカが覆いかぶさり、彼の頬を両手で包みこむ。二人ともすでに眼球が焼かれ視界が利かなくなつたが、アカは彼の息吹を感じていた。

熱いね、アカの手は。

ツミはそう言おうとしたが、口を焼かれ話すことはできない。

まだ戦闘を放棄していない彼は、火を纏う女の胸を突き飛ばして立ち上がる。

この時彼の片腕は燃やさせてしまいが、まだ腕は一本ある。その腕で、自分の前方に巨大で複雑な術陣を描き、精神で唱えた。

月光は魔を断つ刃。魔とは我が敵。抗うものよ、我が刃をその身に受け、あさましき動きを止めるがいい。

青白い月光の刃が、アカを、炎を貫く。刃に触れた炎は輝きをそのまま、写真に撮られたかのように動きを止める。曆を司る月読命の属性の一つ、時を操る能力だった。

まもなくして、アカの動きは完全に停止する。しかし、

『火は一時として同じ姿を見せない。命も、想いも、みんな同じ。止まったときは死んだとき。私は生きている。まやかしのあんなには解らないでしょうけど』

火炎の輝きが増し、月光を打ち消す。

焰はそのまま、鳥の形をとって前に飛び出した。

「！」
無数の光の槍が、迎撃のために射出される。どれも停止の力を持つものだ。

アカは 焰の鳥はそれを旋回したり、曲芸飛行で回避しつつツミを指す。焰の翼が羽ばたくたびに、爆発するような火炎と衝撃が空間に放たれる。

だが鳥が自由に飛ぶには、高さが三メートルしかないこの空間は狭かった。特にツミが誘導するわけでもなく、焰の鳥は天井という名の空間壁にこすれる。

その隙をツミは逃がさない。密集した光の矢が、しつこく焰の鳥を狙う。

「！」

啼鳥。その声は時空を引き裂くか如く響き、矢の群れを薙ぎ払う。
なら、これはどうかな。

ツミは極太の光砲を放つ。まるでミサイルのように、それは鳥を追いかける。

しかし次の瞬間、ツミは我が目を疑った。

再度、空間壁に激突した焰の鳥は、そのまま壁を歪め始めた。膨大なエネルギーをもって、壁を突き破らんばかりに。

無茶だ、ツミは思う。彼女が空間壁に身体を押し付けている限り、歪んだ空間の影響で自分の攻撃は届かないが、神でもないア力が時空に干渉すれば間違いなく身を滅ぼす。

だが焰の鳥は飛び続けた。空間を壊し、歪め、同時に自分の再生力を空間に分け与えることで、空間の損傷を最小限のものとして。

「君は何もかも矛盾している。破壊しながら再生するなんて、僕には信じられないよ。　　だけど、それが君の力……！」

「昔はこの矛盾も怖かった。でもツミがいたから、私はっ…………。」

受けなさい、私の炎を！」

夜の闇をどこまでも白く照らしだす、激情の炎。

月光を融かしながら、光の速さで駆け抜ける。

よく知った熱の中で、ツミは自分という存在が融かされていくのを至福と共に感じた。

羽目板張りの床を歩く姿がある。

赫い長めの髪に、暖かい珊瑚色の瞳の女。大きな真紅のワンピースを着て、金色の素足に白いスニーカーを履いている。その風貌は、城という重々しい空間からは浮いているかのように見える。しかし胸の前で合わされた両手の中には、焼け焦げて黒くなった**髑髏**が収まっていた。

『君は、誰かな？』

髑髏が発す、声なき声。

「私は……」 彼女は少し長く逡巡する。十メートルほど歩き、さらに階段を登り切ってから答える。

「私はアカ。 それ以外の何者でもないわ」

『そっか……。 大好きな僕のアカ。 僕には君が遠くに行ってしまった気がするよ』

髑髏の声に耳を傾ける、今の彼女の表情は穏やかそのものといったところだった。毅然としていて、わずかに微笑んでいるようにも見える。まるで舞踏会に臨む姫君のような心躍るような表情にも見える。

「私はずっと同じところにいる。 同じところにいるだけで、そのまま腐りそうになっただくらいに。 遠くに行ったのはツミの方。 私はずっと待ってやっていったのに」

彼女が“ツミ”と口にするとき、それは手の中にある髑髏を対象としてはいなかった。

彼の方にもそれは分かっていた。 その理由は分からず、あえて推し量ろうとも思わなかったが。

『ねえ、左を見てごらん』

アカが言われたとおり首を曲げると、直径五十センチメートルくらいの鏡があり、そこに若い娘の顔があった。……自分の顔だが、若すぎる。そう、ちょうど現に来た五年前はこんな顔だった気がする。

『ちよつと悪戯させてもらったよ。成熟した君も魅力的だったけど、なんだか過ぎてしまった時を感じてサミシクなったからね』

「……勝手なことを」

ぼそりと、ほんの少しの苛立ちをこめてアカは言う。だが……これ悪くはないかもしれない。彼の言うとおり、若いままの彼の顔を見ていると自分が身体ばかり老けた気がして、惨めな気がするのも確かだ。心はあの時と変わらないのに。

しかし、一つ思う。世界は生まれ変わろうとしているのに、自分は何一つ変わっていないと。まあ、自分にはどうでもいいことだけだ。

「本当に勝手なことをするわね」 もう一度彼女は言う。

「ツミは我儘よ。私の思いを棒に振って、勝手に神になって、世界を創り変えようとして。 我儘があんたの罪よ」

髑髏は苦笑する。

『それはお互い様。 でも、顔を変えたことはその鏡を送ることで許して。気づいてた？ それは やたのかがみ 八咫鏡 だよ。神器の一つだから、持っていけば何かしら力になると思うよ』

アカは気づいていた。けれども、鏡を受け取ることには拒否した。歩きながら、髑髏を顔に近づける。

口づけ、想いを込めるように。そして手には力を込め、髑髏を潰した。

『歪な欠片だけど、僕の思いを君に捧げるよ』

彼の最後の声。心に入り込んだ思いは、深く吟味せずにも隅へと追いやる。 どうせ彼は自分のことを愛してくれていないのだから。 アカは行く。腕づくでも何でも、とにかく今度こそ愛しい者を自分のものとするために。

7・4 「夜裂く鳳凰の舞」 (後書き)

「あなたは誰？」

という感じの問いが、この後しばらく続きます。

この物語に限らず、一体どれだけの人が自分というものを断言して定義できるのでしょうか。

いよいよ次はラスボス戦に突入です。みんな話が多くてバトル分が少なめですが、熱くやってみたいです。

7・5「白き月と神」

ここがどこなのか、ボクにはもう表現することはできない。

確かにボクは東京湾の中央に出現した城を下から順に登ってきたけど、この城は造りからして変だった。階段は何十とあり、積み重なる階の構造は下のそれとまるで一致しない。おまけに所々の窓から見える風景は、まるで雲の上にいるような俯瞰だった。

果てしない道筋。でも、少しずつ終わりが近づいているのはわかる。

襖障子が目の前に現れる。縁が奈落のように黒い、真っ白な襖。

一枚あけると、その向こうも襖だった。またあけても襖。その向こうにも、さらに向こうにも、しつこいくらいに襖がある。

二十九の襖があつた。すべてをくぐると、そこに真っ白な空間。足をつける固い床面はどこまでも雪原のように広がり、そこから上はぼつかりと黒い空。星がなくて、ど真ん中に骨のように白い大きく円かな月が一つ。色のない光で、月下は煌々と昼間のように明るかった。

そして、少し離れた所に白い人の形をした“何か”。

白い直衣のしを着た、白髪が背丈よりもずっと長く伸びた人。肌も白く、目には黒眼がない。茹で卵みたいな目で、その人は天を仰ぎ見ている。

それは状況からいえば、ボクのご主人様以外の誰でもなかった。でもその人が放つ雰囲気は異様過ぎて、ともすれば人間にさえ思えない。

ボクは声もなく彼に歩みよる。彼は月の海クレターみたいな奇妙な模様の魔法陣の中に座っている。

陣をつくるのは灰色の線で、テレビの砂嵐みたいにくぐめいてい

る。足で踏んでもこつちに何も無いけど、線は逃げるように動いて形を変えていた。

一メートル。座っている彼の視線を上から覗き込んでも、石のような目に反応を見ることはできない。色あせた唇は、何かを唱えて幽かに動いている。

「ご主人様……？」

ボクは呼びかける。

声に反応して、白い顔がこつちに向けられる。そこに、人間らしい表情は一切ない。

「僕は……誰かな？ ……君は誰？」

彼の声は砂漠みたいに味気ない。おまけに男声とも女声とも判別できない、機械的な喋り方だった。

ボクは自分のことをご主人様に分かってもらえなかったことに驚かない。自分のことすらわからない彼が、ボクのことをわかるはずがないと予想できたから。……少し悲しいけど。

「ボクはチヨだよ。ご主人様の……あなたの猫だよ」

「僕の猫？ ……ああ、記憶の中にあるね。それで……僕は誰？」

彼の話し方は途切れ途切れだった。ボクを見る　黒目がないから本当に見えているのかわからないけど　表情もだらんとしている、彼の心の状態が危ういことを表している。

「あなたは……」　ツミだよ、と言いかけて止めた。

この名前は夢まぼろしに行ったときに、自分の名前を忘れてしまったご主人様がとっさにつけた名前なまえで、本当の名前じゃない。彼にとってもボクにとっても真実ではないうえに、もうこの名前は捨てられてしまった。

それに……やっとな、思い出せたから。

「あなたは、光樹^{みつぎ}。ボクのご主人様だよ」

「ミツキ……」

自分の名前の音を口にするご主人様。

彼の眼に黒い丸が生まれる。緩んでいた顔の筋肉が、少しずつ緊張し始める。

「光樹^{みつぎ}、ボクのご主人様」　ボクは呼びかける　「もうこんなことは止めて、一緒に帰る？　アカもサキも、みんな待つてるよ」

「アカ、サキ……僕は君の飼い主……僕に帰る場所があるのかい？」
「もちろんだよ。元住んでいた家でもいいし、新しい場所だってある。だから……」

深い穴のような黒い瞳は、次第に色を薄くして夢見るような琥珀色になる。陶器のような白い肌に血の気が差し、顔には感情が表れ始めた。

優雅な衣擦れの音をたて、彼は立ち上がる。すると、ゆったりとした直衣に隠れていた色鮮やかな錦の帯が顔を見せた。

「そうか　やっとな来てくれたんだね、チヨ。また会える日をどれだけ待ったことか」

光樹はボクの手をそつと取る。ボクが膝を着いて頭を低くすると、柔らかい彼の手がボクの頭を撫でてくれた。耳に触られると、喉がごろごろ鳴った。

「ご主人様……」

ボクは彼の胸に頭を擦り付ける。懐かしいにおいを感じた。

「君の名前はチヨ」とご主人様は言う。「そう、ボクがつけた名前。でも、僕にとつて八年前のあの日、君と夜の散歩で別れてしまった時からずっと僕は君の名前を忘れていた。月神になつたとき君の名前を知ることができたけど、それは思い出したうちには入らなかった。今この瞬間まで、僕は君を見失っていたんだ」

「ボクもご主人様の、光樹の名前を忘れていたよ。でも、ご主人様がくれた名前は覚えていたから、まだそんなに寂しくなかった」

ボクらは抱きしめあう。ご主人様の体に体温は感じられないけど、深い奥の方に、それが眠っているのを僕は感じ取れる。

しばらく、そうしていた。まぶしい月下の、無音の世界で。

「でも……ごめん。僕は帰れない。僕が続べた夢たちを、現に還してやらなければいけないから」

そう言つて、ご主人様はボクから離れた。

「どうして……！ ご主人様のやり方じゃ誰も幸せにできない。わかつてるんでしょ？ なのに……」

彼は余所余所しいまでの決意をみなぎらせて、ボクを見ている。静かにボクと見つめあったあと、落ち着いた声で答えた。

「僕には僕のやり方がある。月神のやり方がね。世界は幸せになるさ。そうだ、君ならどうするの？ 聞かせてほしいな」

だんだん、彼の口調が冷たくなってくる。

ご主人様はボクが答えなくてもいいと思つている。どうでもいいんだ。……だけど、ボクははっきりと答える。

「夢と現は一つにするよ。だって、夢は現から生まれたもので、還してあげなきゃ夢はいつまでも彷徨つたままだから。」

でも、戦争は起こさなくてもそれはできる。夢と現は共存できる

よ。夢が現に戻れば現は変わり始めるけど、現の大きな大地に夢を包みこんで、少しずつ解き放つようにすれば現の変化はゆっくりとしたものになるはずだから」

「だけど、それで世界は平らなものになるのかい？」

「それは、みんなが手を取り合ってやることだよ。今までと変わらない。夢の力もあるんだし、平和のためだけに力を使えるようになることは簡単にできる。ボクにでも、もちろんご主人様にも。

だから、神の力は必要ない。神が世界を治める時代は、これから先も来る必要がないよ」

彼は失笑する。

「本当にそうかな？ 結局、君の言う管理のためには、神に近い管理者が必要なんじゃないのかな。だったら、絶対の力を持つ神がすなわち僕が、力だけではなく総てを納めてしまえばいい。

だけど、まあこの話はこれくらいでいいだろう。そろそろね、僕は戦いたくて我慢できなくなってきたんだ」

彼は口元を思いつきり、歪に曲げる。狂っている……彼から伝わる禍々しい気配に、ボクは背中に寒気が走るのを感じた。

「光樹……」

「結論として、君のいう方法には夢を操る権利が必要だよ。けど、それは僕が持っている。因って君は僕からその権利を奪い取る必要がある。それに、今ちょっと遅めているけど、現の終わりの時は刻一刻と迫っているよ。だから、どうあっても君は僕を倒さなければいけない」

彼は言外に要求する、戦いを。

月光の輝きが強くなり、彼の元から力がにじみ出始める。風ならざる風と、全身を竦ませる威圧感。彼に目を向けることが恐ろしく

なってくる。

「光樹……ご主人様……！」

でも、ボクは目をそらさずに、圧力の向こうに呼びかける。

「僕は光樹でも、君の飼い主でもない。月神 だよ、地の代理者。さあ、次の千代王国ミレニアムの命運をかけて、戦おうじゃないか」

力持つ者の、好戦的な視線。それはアカに似ている。

負けそう、冗談抜きで。

「……いくよ、月神！あなたを倒す！」

*

「ボクが立つのは黒い大地。やわらかい土のしとね」

白い足場が、ボクの言葉で土の地面にすり替わる。

ふんわりとした黒土に、靴を沈みこませ力を練り始める。

油断すれば、消される。

対峙する 月神 からは脅威を、恐怖を、ひしひしと感じる。彼はもう人間ではないのだと、否応なしに悟らされる。

全力を出されれば、絶対に勝てない。でも今はまだ何も仕掛けてこないみたいなので、この時間を使って長い準備のいる大技の用意をしておく。

「土はボクの力。月に抗うもの」

月神 に最低限ボクの力の源を奪われないための術。

「神を名乗る者、その肉を脱ぐことはできない。肉の欠けるとき、力の欠けるとき」

相手は実体を捨てて精神アストラルだけでボクを攻撃できるけど、それを制限する術。

「地は動かざるものにして、固きもの」

今立っている場所から動かない限りは、かなり頑丈な結界を張ることができる。

そして、自分の後ろに六連の大砲を作り上げる。砲口は全部 月神 に向いている。素材は鉄の合金をメインに、足りない部分は土自体を焼き固める。

弾はない。八尺瓊勾玉やさかにのまがたま から抽出した神秘霊力を圧縮して装填する。

他にも後々の攻撃を考えて術を仕掛けた。 まあ、それは後のお楽しみで。

「 てえ！」

砲口が光り、紅く光る玉が打ち出される。

月神 はよけない。六つの砲弾はすべて命中し、炸裂する。とりあえず目に見える効果は灼熱と閃光と爆風で、他にも重力の急激な増減や、天の属性を破壊する効果が付いている。

爆発の消えないうちに、ボクはいったん地面に目を落とし、土の中から棒の一端を掴み上げる。

持ち手の反対側は、長い長い、全長二十メートルくらい。そして太く、最大で直径三メートルくらい。超特大棍棒って感じだ。

気合い一発、棍棒を振り上げる。この時は重力で軽くできるけど、あとで振り落とすときは自分の筋力だけでやらないといけない。

「！」
まだ持ち上げている最中で 月神 が攻撃してきた。さっき張った結界がそれを弾く。

「く、ら、えー！」

振り下ろす。その速さは大きく、半分くらい下ろしたところで空気と摩擦して高熱を生み、棍棒は火を纏いはじめる。

月神 の頭上、少し浮いたところで棍棒は何かと激突する。

響く轟音。手首に痛いほど伝わる衝撃。

棍棒を受け止めているのは、月光が固まった薄い盾だ。盾を打ち砕くために、棍棒に仕込んだ力を解放する。

彼の盾が少し歪み、棍棒が少し落ちる。いける、そう思って渾身の力で棒を押し込む。

だけど、競り合いは途中で挫かれる。上空から降り注いだ月光の一撃で、棍棒はたたき折られ、ボクは後ろに吹き飛ばされた。

「くっ！」

何とか受け身を取って着地。ダメージは小さい。

しかし気がつくとき、目の前に光の有刺鉄線が張られていた。大した防壁じゃないけど、挑発的だ。

鉄線の向こうで、彼は微笑してボクを見ていた。

「折れる」

そつと彼が言葉を吐いた瞬間、ボクの右腕に見えない力が加わった。言霊 言ったそのままに世界を変える神の能力か。

「彼は天でボクは地。天地は平等だから言霊は無効……！」

八尺瓊勾玉の余剰エネルギーの全部を使って、彼の言霊を無効化

させる。

これで神器は使えなくなった。あとはボクと大地の力のみで 月神 と戦わないといけない。

「 割れる！」

衝撃波を放ち、地面ごと一直線に彼の防壁を裂く。

迎撃として、無数のビームが発射される。それを重力レンズで逸らしつつ、力を右手に集中させる。

「 いっけー！」

音速で踏み出す。空気の壁を切り裂きながら、 月神 に突進し拳を叩きこむ。

拳はまたしても彼の防壁にぶつかる。でもひるまず、インパクトの瞬間に溜めていた力を解放する。

密着して大砲を撃つみたいな感じた。ボクの攻撃は何層にも張られていた彼の結界を貫き、ついに彼自身に直撃する。

月神 は三步後ろに下がった。 それだけだった。

だけど、それは彼の闘志に油を注ぐ結果となる。

「 いいね、面白いよ。 今度はこっちから行くよ」

月神 は右手を月光に、自らの象徴の光にかざす。

彼から発せられる気配が風となってボクに押し寄せる。そんな中、白い月光は棒状に集まりやがて一本の錫杖となる。

しゃらん、と錫杖が鳴る。澄み切ったその音に、ボクは心の奥底が畏怖に震えるのを感じた。

「 天乃御中 あめのみなか 見せてあげようか、神の戦いを」

殺気。それは絶滅の予告としてボクに伝わる。

心臓が止まるような、絶対の恐怖を感じた。

7・5「白き月と神」（後書き）

ツミはもっと前々から出しておけばよかったかな、と思うこの頃です。

今日の解説。あめのみなかぬしのかみ天御中主神は古事記で一番初めの神様です。宇宙そのものらしいですが、ここで出したことにあまり深い意味はありません。

そういえば、同じ別天津神の天乃常立も何も喋らないで碎けてしまいました。もっと登場人物を大切にすべきでしょうか。

なかなか最終幕は長いです。小説の構成としてはどうかかなぁと思いますが、今さら考えることも多すぎるのでやりたいようにやろうと思います。お付き合いください。

7・6「天の是非」

深い水の底は闇の底だ。

その闇はやわらかく重みがあり、人を寝かしつけるように包み込む。中で動けば、衣擦れよりも幽かで優しい深い音が聞こえる。その音は人の身体に耳を突けたときに聞こえる音にも似ている。

誰かの胎内に収まり守られているような、そんな安心感が闇という水の底にある。

彼女もまた、そんな闇と水の中に沈み込んでいた。傷ついた身体と心はちくちくする外気から遮られ、有るか無いかの幽かな流れの中、彼女は閑かにたゆたっていた。

自分は眠っているのか、彼女は自問し、否と答えを出す。これは眠りにしては重くなく、意識は穏やかに目覚めている。現実の出来事は遙か遠くに感じ、目覚めのときが迫るような感覚も無い。

自分には何一つ欠けたところのない、満ち足りた永遠だけが与えられているのだと、彼女は確信できた。

そう　私は死の中にいるのだ。

二つに割れて擦れ合っていた心も、水の中で一つになっている。こんな安らぎは何時振りだろうか。このまま、たゆたい続けたい。

しかし、名を呼ぶ声が聞こえる。煩わしいけれど、彼女はあの声には応える責任があると思った。今ここにある安らぎは何ものにも替えがたいが、それでもあの声には応えなければならぬのだ。

彼女は闇の中で眼を開いた。

「 さな！ さな！」

空色の瞳の少女が、彼女の上半身を抱き上げ、名を呼び続ける。高くあどけないその声は、少し囁れ始めている。

眼を開けた彼女は思う。澄んだ瞳に、悲哀は似合わない。

「ち、かぜ……」

だから彼女は言う。目覚める前の身体を無理やり動かし、声を振り絞って。安心して欲しい、私はここにいる。

「さな……！ ああ、よかった！」

千風は彼女の身体をかき抱く。彼女の身体は千風の身体より少し大きい、二本の腕に宿る力は強い。

少女の体温を始めとして、彼女の感覚が少しずつ生き返り始める。適度に明るい室内、ほどよい気温。下半身は床についているが、浅いぬるい水に浸っている。

「まったく、ずいぶん長いこと待たされましたわ、さなさん」

頭上から少年の声。天色の瞳を二つ、それに加え不可思議な紫苑色の瞳を持つ白い髪の彼は、

「 サキ」

名を呼ばれた彼は大仰にうなずく。

そして、と彼女は自らに意識を向ける。

私は誰？

「ナゲキ……ではない」

それが私の主人格だけど、

「ササヤキ……でもない」

彼女は彼女の中に、もう一人の自分を感じられないでいた。
今の彼女は一つだった。それはもう半世紀近く前からなかったこ
と。

“ナゲキ”も“ササヤキ”も、分たれた心に初めてつけられた名
前であった。一つである、本当の自分の名は……

「私は……沙波^{さな}」

ずっとずっと昔に失った名前　失った自分。

「取り戻してくれたのね、千風、私の名前を」

少女は沙波に抱きついて泣いている。

流れる涙の熱さを、沙波は首筋で感じる。

「うん……うん、だってあたし、もう失くしたくなかったから。大
好きな人を殺したくなかったから……！」

ああ、と沙波は思う。さっきは何と酷いことを、この無垢な少女
に言ってしまったのだろう。

彼女は私を殺したのではない。私を彼女に殺させたのだ。

守りたくて、けれど他に術がなく負わせてはならない罪を彼女に
背負わせてしまった。そして私は、歪んだ運命の中で、彼女に罪を
負わせたという罪を忘れ、彼女を傷つけようとしていた。

「……なのにあなたは私を殺さなかった。そうして当然だったとい
うのに。　千の風の名をもつ強い子、あなたの風の刃は纏れた絆
を断ち切るのね。」

もう泣かないで、千風。あなたが取り戻してくれたこの命^{めい}で、も
う二度とあなたのそばを離れないから」

着物の袖で千風の涙をぬぐい、顔を拭いてやる。

二人は手と手を取り合って立ち上がる。沙波はサキと視線を交わした。

「よろしければ、早く行きましょう。もうこの宴の、最後の演目がはじまっていますわ」

「うん、行こ？ 沙波、チヨが待ってる」

力強い促し。

沙波も負けじと力を込めて肯く。

「ええ、行きましょう」

もはや、過去（いせつ）に留まる理由もないから。

*

月神 と戦い始めて早十分が過ぎた。

初めの攻撃のチャンスを逃した今、ボクは防戦を強いられ続けていた。

彼は錫杖と光の矢を交えて攻撃してくる。光の矢はともかく、神杖 天乃御中（あめのみななか） の攻撃力は恐ろしい。土当たるとびにスパークして電光は飛び散るし、かすっただけで肌が焼かれる。

ボクは全身を石の鎧で固めて防御力を上げている。錫杖を直接受けとめることはせず、籠手で受け流しながら隙があれば攻撃する。

「鬼（おに）ごっこは楽しいかい？ でもあんまり楽しんでると、現（ま）が砕けてしまうよ」

彼の言葉に乗せられるまま、ボクは焦り始めている。

今や、天と地が新しい時に臨んで唸り、鳴動していた。

頭上の月は大きさを増し、うるさいくらいの光を投げおろしてくる。月面には、美しいくらいに複雑で緻密な文様が浮かび上がっている。あれは、あれこそが宇宙を塗り替えてしまふ狂った奇跡のための術陣なのだ。

「この！」

ボクは回し蹴りを放つ。

思い切った攻撃は、月神の身体にクリーンヒットする。

「はは、いいね、そういうの」

カウンターで錫杖の大振り。それに伴って、全方向に空気の壁が押し出される。

迫る壁を掌底で砕く。

月神は錫杖を一つ鳴らす。それに応えて、天上から月光が瀑布の如く落ちてきた。

「黒曜の鏡！」

闇色の鉞物で月光を弾き返す。

袈裟掛けに錫杖が振り下ろされる。それも今の黒曜石の塊で受け止めた。

「へえ……」

力と力が激突し、空気を裂く音が走る。

彼の攻勢に尻込みせず、大地の力をありったけ汲み上げて前に押し出した。

ばん、と音を立て、黒曜石の破裂と一緒に錫杖が弾かれる。月神も体勢を崩す。

ボクは渾身の力を肩にこめ、月神に体当たりした。

「！」

反射的に張られた薄い防壁がボクを阻もうとする。だけど、身にとつていた防御の力をすべて破裂させ、突き破る。

「！」

月神 が弾け飛ぶ。受け身も取らず、土埃をあげて吹っ飛んだ。一瞬の間。

倒れ伏した彼に、ボクは追撃をかけようと思ったけど、できなかった。恐怖だったのか、憐れみだったのか、理由は分からない。けどしなかったことだけが事実だった。

月神 は何事もなかったように立ち上がる。どこにも怪我はなく、白い直衣が土で茶色くなっているだけ。

時間が止まった。

止まったのは現の夢の両方 この城を除く全宇宙の時間。絶えず動いている大地が鎮まって、ボクはそのことを知った。

「愛し合う者達の一瞬は永遠” ねえ、神である僕はこんなこともできるんだよ」

彼はいたくご満悦。だけど、

「ボクは認めない……！ こんなこと、あなたが力を誇示しているだけじゃないか。

あなたは確かに宇宙を支配している。だけど、力を誇示しているあなたはやっぱり人間だ。だってあなたは“罪”に捕らわれている。罪に捕らわれるものが、神なはずがない。 あなたはアカにとつてのツミで、ボクにとって光樹みじきなんだ！」

停止した静寂に、ボクの叫びは響く。

すぐに答えはない。ゆつくりと、静かな空気が、憤るように震え始め

「僕を否定するな」

裂けた。

一瞬のことだった。裂けた空間に巻き込まれ、ボクの足が千切れた。

為す術なく、痛みと血にまみれてボクは土の上に転がる。

月神 は少し浮遊してボクを見下ろしていた。埃の付いていた直衣は、いつの間にか純白に清められていた。

「ほら……所詮、君は足がなければ立つこともできない。自分の血で出来た泥にまみれながら、まだ君は神ほくを否定するのかい？」

「泥がなんだ。人であることが、地に立つことが悪いことなの！？」

うつ伏せになり、地を叩いて五十の人形を作る。

人形はそれぞれ斧や槍を持ち、一斉に 月神 に飛びかかる。

月神 は動かない。だけど、当たらない。

「鏡花水月 地を這いずる者達が天にある月の神に触れること能わず」

月光が一条降りてきて、ボクを背中から圧迫する。

背骨が軋み、肋骨が折れて肺に刺さった。

ボクは痛みを訴えることもできない。肺が血で満たされ、口から溢れた。

「人であった僕が飼っていた猫だろうと、情けはかけないよ。神に逆らう者には神罰を。」

死ね」

八尺瓊勾玉がボクの下で砕けた。言霊を封じていた術が壊されたからだ。

もう一度言われれば、ボクは死ぬ。抵抗はできず、あっけなく、どうにかしなくちゃと思いつつも、身体は指一本動かない。

「シ……………」

彼の声を最後まで聞くことはなかった。

*
*

人を黙らせるには口を殴りつけるのが一番、と私は思う。
炎を纏った右ストレートを一発。直撃の瞬間に爆発もつけてやる。

「ぐ……………」

あいつは顔を仰け反らせて、浮遊したまま後ずさりする。

「しばらく会わないうちに、ずいぶんと好い気になっていたみたいね。その傲慢ごと焼きつくしてあげるわ」

「無駄だ。神でないお前が我を攻撃することなど　　っ！」

鳩尾にまず一発。身を屈めたところで頬を横殴りし、顎をかちあげる。あいた喉に正拳突き、仕上げに両肩を掴んで膝蹴りを密着して入れる。

効果は十分。彼は苦悶に顔を歪ませている。

「口の利き方を忘れたみたいね。私は“お前”でも“君”でも“あなた”でもない。アカ、よ。何度言ったら覚えるのかしら、ツ

三

「我はツミではな　ぐわッ！」

蹴り飛ばす。それでも浮遊しているあいつを、私は踵落として土に叩きつけた。

「な、何故」

打撃に身体を軋ませるあいつが言う。神である自分に何故“人間”の攻撃が利くのか、それに私は答えてやる。

「地を見ることね、ツミ。見下ろすんじゃない、しっかり向き合っ
て見なさい。」

すごいと思わない、この術陣。詳しいことは分からないけど、こんな複雑で入り組んだ模様を四層にも重ねているのよ。それぞれの模様に一つとして同じ部分はなく、でも干渉しあうこともなく、一つの効果だけを發揮させている。つまり、神の存在の禁止を。完全ではないにしろ、あんたは神として不完全になっているのよ、ツミ。これをチヨが組み立てたなんて、あんたは信じられる？」

と、チヨは一体どうしたんだろうか。

見ると、寝ている　ではなく気絶している。
放っておいても回復するだろうけど、気が向いたので再生の火を分けてやる。

それにしても、彼女は本当に大したことをしていると思う。発動している術陣は力に溢れ、確実にあいつを弱らせている。しかも、力の供給源を大地だけではなく私にも指定しているところが面白い。これは、チヨが練りに練った術なのだろう。

「僕は………神ではないのか」

背中に土をつけて、あいつは立ち上がる。その足は、地について

いる。

「……知らないわよ。ただ私は、あんたが偉そうにしているのが気に入らないだけ。あんたがツミであることを否定するのがむかつくだけ」

あいつは何も言わない。

私も何も言わない。

あいつは何も言わない。

私も何も言わない。

あいつが言う「僕は“罪”^{ツミ}。君は“垢”^{アカ}」

「もしかして、あんたは罪を 穢れを恐れているの？
まあ、なんだっていいのよ。ただこの胸にある想いが、そこにいるあんたを示すから。 あんたを私の物にしたい」

目と目が合う。

彼色かれいろの瞳が、たまらなく

「僕には君の想いがわからない。だから、教えてくれるかな」
「いいわよ。それが……告白つてもものでしょ」

私と彼は拳と拳を、力と力を、身体と身体をぶつけ合う。

これは戦い。 いや、これは遊戯。

心と心をぶつけ合う。 想いを伝えるために。

私達は天へと昇る。 月と太陽の狭間で、すべてを解放する。

喜びに世界は満たされ、
終結する。カンケツ

7・6「天の是非」（後書き）

今回は視点が三度切り替わりました。特に、なんで最後にアカの主観が入るのかなあとというのは、書いている私にも解りかねます。沙波が生き返りました。このまま死んでしまったらどうしようかと本気で心配しました。

あと二回くらいで終幕まで持ち込もうかなと思います。

7・7「地平」

ここはどこ？

ここは夢、ボクは答えを得る。

だけど、夢はどこにある？ 現は、つまり地球。太陽があつて、そこから水星と金星を挟んで千五百万キロメートル離れたところに地球はある。地球は自転もして、三十八万キロメートル離れて月も回つて。月も自転してる。

夢は 夢は月にある？

それは正しく、同時に間違っているとボクは答えを得る。

今、月神 によつて夢は月に集められている。そして、その一部は現にある。

でも元は夢は現にあつた。現は夢を生み、夢は現を生む、それがかつてあつた姿だった。 現と夢は一つだった。

だけど、いつのまにか一つは二つになっていた。それはあつてはならないこと。引き裂かれた兄弟のように、二つは求めあつた。

分かれた後は、夢は時空の狭間で、在るのか無いのか曖昧なところでさまよい続けた。そのとき夢は不安定で、互いに潰し合わない存在を続けられなかった。

そして願ひ続けた。還りたいと。それは夢も、現も同じだった。

だから、ボクは為そうと思う。帰還を希求する千のもの達に代わつて、地に代わつて、ボクが謹んで為そう。

開け。

閉じられた境界よ、開け。

*

身体を起こすと、傷が全部治っていた。アカが力を分けてくれたんだと悟り、心の中でありがとうと言う。

世界が眩しかった。太陽と月が同時に輝き、世界を光で満たしていた。

荘厳で、壮麗。

真っ白な天空を震わせるものがあつた。震えの名は歓喜で、震えのもとは一組の恋人同士だった。男の方は月の力を、女の方は太陽の力を従えている。

二人は神ではない。だけど人でもない。そういえば、ボクも人ではなく、猫でもなかった。ボクはボクで、二人は二人なんだ。神でも人でもない、ありのままの二人の戦いは絢爛豪華なオペラのように、見ているボクに胸を震わせる感動を与える。

「て、うわっ！」

二人の激突の余波が、地にぶつかって爆発した。

まずい、あの二人のせいで世界が壊れるかも。

現実うつつとか夢まぼろしとか関係なく。

神じゃないけど、二人がすごい力を持っているのは確かで、そんな二人がなりふり構わず戦えば常識では考えられない被害が出ることは明らかだった。

どうしよう、と思う。こんなことになるとは思わなかったから、二人を止める方法がまったく思いつかないし、そもそも恋人同士の時間にボクが横やり入れていいんだろうか？

「やれやれ、相変わらず迷惑な二人ですわね」

「サキ！」

やっと、来た彼にボクは抱きつく。サキは腕を広げて待っていて、しっかりとボクを抱き締め返してきてくれた。

「まったく、私わたくしとチヨはこんなにも無害なのに」

サキの背後に立つ二人、千風とササヤキは彼の言葉に曖昧に笑っている。

ササヤキ？

胸の中で首をひねったボクに向かって、滄い髪の彼女はやんわりと笑顔を見せた。

「私の名は沙波さな。水よ、天に満ちる大気のすべてと、地の暗き深淵まであらゆるところに存在する水よ。今ここに大地に癒しの力を与えましょう」

光に灼かれ荒れ始めていた土に、水の潤いが宿る。

透明な水はしずしずと湧き出してきた、浅くボクらの足元を濡らした。

「あたしは千風。遥かな時空を駆け抜ける風達よ、よどみなく、おらかに吹いて大地を包む護りの手となって」

風のなかったこの場所に吹きわたる風。今世界に満ちる戦いのにおいをはらむ風は勇ましく、天から打ち寄せるエネルギーの波から大地を守った。

「これを使って、あの二人を落としますわよ」

そういつて、サキは一枚の鏡を取り出す。

「八咫鏡やたのかがみ

サキが呼んだの？」

「いいえ、落ちてましたの」

不可解な返答。けどあまり気にしないで、ボクは鏡を受け取る。八咫鏡は天の光を受けて煌めき始めていた。力を蓄えて、一気に打ち出す感じみたいだ。

「かつて、天照大神の閉じこもった天^{あまのいわと}之岩戸を開いたきっかけとなつたのは、この八咫鏡でした。それと同じように、現と夢の閉じられた境界を開くきっかけとなるのも、この神器がふさわしいと思いませんか？」

そうこうしている内に、八咫鏡のチャージが限界に近づいていた。ボクは足を肩幅に開き、鏡を頭の上に掲げる。……光がまぶしくて、目がちかちかする。

サキがボクの背中に身を寄せる。すると、目の前がすつと薄暗く なった。

「無理する事はありませんわ。大地^{あなた}を護る闇はここにあります。

さあ、お願いします」

「閉じられた空よ、開いて。夢を向かえる準備はできたよ。さまよっている者達、これからは、同じ地平に立っていくことを約束しよう」

八咫鏡が砕け、力を放出する。

七色の光。白い天に吸い込まれ、見えない爆発と、扉を開くような轟音が響いた。

天上で戯れていた二人が落下を始める。太陽は天の彼方に一步引き、そして

月が落ちてきた。

*

「我、今此処に風を伴い、西に立ちて白虎の名を借りん」

「我、今此処に水を操り、東方に立ちて青龍の名を借りん」

「我、今此処に黒き闇を従え、北方に立ち玄武の名を借りん」

「我今此処に焔を司り、南に立ちて朱雀と名乗らん」

サキのアイデアで、できる限りボクの力を高めるために四神相應の術を使うことになった。

場所は富士山の麓の誰もいないところ。土地としては、日本一の山とそれに従う地脈がある以外はなんでもない場所だけど、あの月の城から出たらここに飛ばされて、他に移動する時間が惜しいということで、ここで月を迎えうけることにした。

地面は草に覆われ、山に向かってなだらかに傾斜している。真っ白い月の光が皓々と降り注ぎ、草っぱらだけど雪の中に立っている気分になる。

月は真上から少しずれて南の空にある。

見た目で直径四メートル以上ある月。巨大なそれからボクは目をそらさない。

背中には富士山があり、サキが立っている。左手方向には沙波、右手には千風、そして正面にはツミを背負ったアカがいる。ツミは眠っているみたいだった。

「『四神の形と理はそろえたり。我、四方に立つ者達の認証を受け、此処に土を司る黄龍の名を借りつけると宣するなり』」

とくん、と大地の力がボクの胎で脈打つなかのを感じた。これまでにない強い力が、足の裏を伝って入ってくる。地球という、大きな存

在に支えられているんだという感覚は、それだけでこの局面に立ち向かう勇気をくれる。

「……ボクの両腕は地の両腕。地の腕は、すなわち天を支える宇宙の柱！」

ボクは両腕をあげ月光の中にかざす。そう、受け止めるように。

届く！

ずん、と身体に重さがかかる。もちろん、手の平の上に載る、目に見える物は何もない。

月の落下が止まる。

「う……………うう！」

重くて、息が切れて目の前が暗くなってくる。両足が震えて、挫けてしまいそうだ。

「腕の力で支えてはいけませんわ。身体……………大地と一体になった全身で、月を受けとめるのです。あら、でもそれって妬けますわね。チヨと一体になれるのは私わたくしだけですのに」

地球にもジェラシーできるサキ。

そんな自分の半身にふつと笑みがこぼれ、身体に入っていた無駄な力が抜けた。

本当の力はもっと下の方から、しみじみと湧いてくる。ボクは大きな地球の、その表面に乗る小さな存在で、限らない力が向かうべき方向を指し示しているだけなんだと自覚する。

顔をあげると、月が本当に間近に迫っていた。でも、今はもう身体を圧迫する力はない。

月面に浮かび上がる、海クレーターをなぞるように描かれた無数の円で出来た術陣。これがつまり、宇宙の狭間にぼんやりと漂う夢まぼろしを、現いまに還すための扉。

「分かれたものを一つとするために、開け扉」

ボクの足元を中心に、同心円がいくつも重なったシンプルな術陣が現れる。

「ダウンロード降着開始

！」

月面と地面、向かい合う術陣の間に七色の光がほとばしる。

降るすのは情報としての夢まぼろしで、想いや魂といった形になる。物質のまま降るすことはできない。

いったん地面ある術陣に飲み込まれた情報は、一部はすぐに受肉、物質化して適当な場所に出てくる。けど大部分はしばらく地の底で眠らせて、それから少しずつ地上に現れることになる。そうしないと、現が変化に耐えられないでめちゃくちゃになってしまいかもしれないからだ。

夢が広がっていく。

これから世界はどうなるのだろうかと思いを馳せる。世界は一つになる喜びに震えているけど、その中に住む命がどう思つかはボクに分かるはずもない。不和は、あるだろう。その最たる例が月ムーンの子で、結局 月神 に裏切られたみたいになった彼らはこれからどうするのだろうかと思う。現にはこれまで眠っていた、科学を超えた力が活性化するから、混乱は避けられない。

でもきつと明るい未来は来ると、ボクは楽観する。夢まぼろしの力は、みんなの願う夢ゆめを叶える力。みんなが安らかな世界を夢見ているなら、きつと世界はその方向に動くから。

「うまくいつているみたいね」

手のひらの上で青い水を弄んでいる沙波が、そつと言った。

「うん、風が　世界の呼吸が強くなつてきてるよ。ずっと昔に消えちゃった、色んなものの存在を感じる」
千風が言うのは、妖怪とか精霊とか、御伽噺トーキョウセツに出てくるような存在のこと。そういったものは夢まぼろしでは、凶暴な異形　としてしか出てこなかったけど、あるべき姿にあった世界でなら、無害で世界をより面白くさせる要素となるんだ。

「見るだけ、はつまらないですわ。早く終わらせて、チヨといちゃいちゃしたいです」

そんなサキの軽口。ボクをリラックスさせようとしているんだと解釈して、術に集中し続ける。

冷え切った土の空洞に、温かな溶岩を注ぎ込むようなものだと感じている。世界は芯から温まるけど、危険性はある。

あせらずに落ち着いて……

ぱしり

小さな地割れ。　大丈夫。元気がつた世界が、転んでちょっと怪我したみたいなものだ。

だけど、ぱしり、ぱしり、と地割れは続く。風が吹き荒れ始めて、月が落ちてくる力が強くなる。そう　まるで悪夢のように。

「……ここまでのようだね」

ふいに、光樹が目を覚ました。

アカの背中から降り、手の中に錫杖を出現させる。そして彼はしやらんと杖を鳴らして振り上げる。

琥珀の瞳はボクを見ている。感情のない瞳。

まさか、と思うけど術で精いっぱい身体を動かすことができない。見つめられるまま、ボクは視線をそらさなかった。

天に錫杖を掲げたまま、彼は杖を動かす。先端は、虹色の光の中で、白く淡い光を灯してゆつくりと軌跡を描く。ゆるやかな、弧を。

「チヨ」 そう発せられた彼の声は、穏やかさそのものだった。

「君の術は完璧だった。君のおかげで、現と夢は反発することなく一つに溶け合い始めた。この美しい調和は、必ず人々の心にも響く。きつと、世界は穏やかに和していくよ」

ダウンロード
降着が止まった。月が落ちてくる力もなくなった。

月が遠ざかり、光はしめやかになる。空は群青を重ねた濃紺となり、星が瞬き始めた。

しん……と世界が静まる。世界中の人が、命が、この美しい星月夜に魅入っているんだ。

光樹はボクに背中を向けている。土埃の付いた直衣の背中に流れる白い髪は、優しい夜風にさらさらと梳かれていた。

「夢と現はすこし長く分たれてしまった。誰のせいでもない、しかし一度で元に戻ることはできないんだ。だけど、これ以上夢を時空の端で漂わせることは、僕としてできない。」

だから、僕は夢を連れてもう一度天へ、月へ昇ろうと思う。今度は侵略のためではなく、時を待つために。少しずつ、夢を現に還していくために」

それってまさか……

「別に、この世界のいけにえとなるわけじゃない。罪の償いのために、僕が為せることを為したいんだ。」

……僕はずっと罪を恐れていた。罪を背負っているといつて悪を為し、実際のところ罪から眼を背けていた。罪を背負うことで、視界から消したんだ。けれど、それも止めましょう。僕は罪を償

い、罪と向き合う。そうすることで、僕は初めて“ツミ”となるんだ」

胸を締め付けられるような、言いようのない感情が込みあがってくる。

「いやだ……」

言葉は絞りだされるように出た。

「そんなの……また光樹は独りになっちゃう。……あの夜の公園で離ればなれになってから、最後までボクらは別々になるの？ ねえ、ご主人様！」

ご主人様は少し寂しそうにほほえむ。月光が、そんな彼の顔をはつきりと照らす。

「大丈夫、僕は」

「僕はアカのもの”でしょ、ツミ」

唐突にアカが割り込んだ。ご主人様と並び立つ、彼女にも当たる月光は、身にまとう真紅の振袖を燃え上がらせていた。

「今度こそ逃がさないわよ、ツミ。さもなければ、今すぐ殺してやるんだから」

彼は心底うれしそうに破顔した。アカに歩み寄り、彼は彼女を包みこむように抱きよせた。

「そうだね。僕は、君の想いに報いることにしよう」

アカは彼の肩に頭を預けた。

赫い髪に鼻をよせた後、ご主人様はボクを いや、ボクの後ろに立つサキを見た。

「サキ、これからもずっとチヨの傍にいてあげてほしい。もちろん、君個人としてチヨを愛してほしいんだ。言うまでもないことか

な

「ええ、あたり前ですわ。 アカ、幸せにおなりなさいまし」

アカはちらりとこちらに微笑を見せただけで、何も言わなかった。

「沙波さん」 とご主人様は話しかける。

「あなたを弄んだこと、謝る権利すらないけれど、それでも謝らせてください。 だけど、沙波さんがいてくれたから僕はここにいられる気がします。 プラネスフィア 月の子 達をお願いさせてください」

「 よろこんで。それが私の役目だもの。 行ってらっしゃい、私の可愛いツミ、アカ」

彼は千風にも顔を向ける。 千風は、ちょっとだけでもぞもぞした。

「君はこれから多くの人と絆を結び、多くの人に愛される。 千風、僕は君の幸運を祈るよ。 それと、ありがとう。 チヨに力を貸してくれて。 元気でね」

「うん、……………またね、ツミお兄ちゃん。 それと アカお姉ちゃん」

意表を突かれたのか、びくとアカの方が震えた。 それを見て、千風はくつくつと笑った。

ご主人様が、ボクに視線を向けた。 静かに、静かに言葉を紡ぐ。

「僕はいつか必ず戻る。 夢と現がひとつに戻るその日に。」

それはあと千年かかるかもしれない。 でもここから始まる“ 帰還 ”の千代、そのあとの千代は ミレニアム 万物にある八百万が神となる満ち満ちた世界となる。 だからチヨ、この千代を君と君の血族が守ってほしい。 いつかまた、全き世で僕達がめぐり合うために」

誓うような、約束するような言葉。

ちかひ 誓約。

ご主人様からは、ただひたむきにこの世界を思う気持ちが感じら

れた。

でも

「うん……わかったよご主人様………」

涙の堰が壊れた。

しゃくりが上がってきて、何も言えなくなった。

「一つ、神話を残して行こうか」

・ 月虹は懸け橋となる

「月夜にかかる虹が夢を運ぶよ。そして、千度目の橋に僕とア力は渡ることしよう」

それが最後の言葉。

潤んだ視界の中で、月光の柱が降りてきたのを見た。彼はア力を連れ添って柱の中に入っていく。

振り返りもしない、未練を残さないその背中。何か言わなくちゃ

……

気がつくのと、夜は夜らしく静まり返っていた。世界の気配の奥にはちよつと違うものがあるけど、夜は、彼が望んだとおりの安らささを持っていた。

「ボクは………」

地面にうずくまって、誰に言うともなく、言葉を吐く。

「ご主人様に、またねって言えなかった」

涙があふれ、落ちる。秋の入りの、枯れ始めの草の上でぽとりと弾ける。

「ボクは泣いてばかりだ。　悲しいことなんて　悲しむべきことなんてないのに、どうして……」

「悲しむことならありますわ」

サキがそつとボクの傍にしゃがむ。

「大切な方とお別れですもの。だけど　本当に再会があるのなら、別れ際の言葉など不要とは思いませんか？　ツミさんも何も言わなかった。それは、再会が絶対のものだということですよ。……あなたは何にも間違っていないせんわ」

「ねえねえ、東の空を見なよ、チヨ」

朗らかな千風の声に促され、ボクは顔を拭って顔をあげる。

東の空には、夜明けがあった。

朱の光が地平に沿って燃え上っている。弱い心を突き飛ばすような、新しい刻の衝撃。

「新しい世界のはじまりだよ」

後ろを見ると、月が白んだ空に消えようとしていた。でも、また会える。そんなことは当たり前

「Where are we go?」

サキの問い。ボクは光る地平に向かって言う。

「もちろん、この先の世界に」

サキはくすぐったそうに笑った。千風はあははと笑い、沙波は悠然と足を踏み出す。

これでボクらの物語はおしまい。でも、世界はまだはじまったばかり。世界はいつだってはじまりを迎えている。

だから大地が、地球せかいが言う。言い続けている。“はじまりはじまり”と。

7・7「地平」（後書き）

ラスボス戦という感じはないのでした。チヨは攻撃性が低いので、流れとしてこうなるのが当然だと思います。

……なんだか燃え尽きた感じがあります。
とりあえず次回の終幕へと行きましょう。

終幕

“大戦”から十六年が過ぎた。

かつて現うつと呼ばれ、戦乱と惰眠、貧困と飽和、矛盾した安定を持っていた世界は今やその安定を失い、日々変化し続けるようになっていた。

まず、“力”が活性化した。

古代には魔術や錬金術とされていた力。近代に入り科学によって駆逐された力だったが、夢まほろしの混和により再び人々の間にそれは広まった。

物質に頼らず、感情のままに使うことのできる意志の力。それはまず戦争に利用されようとしたが、すぐに止められた。力には意思があった。

戦うこと、他者を傷つけることよりも、他者に恵みをもたらすことに力は強く働いた。田畑を焼くより、田畑を広げ実りを豊かにすることに、その力は反応したのだ。誰にでも使える力だったが、邪な思いには応えなかった。力は常に、善を為すように発現した。

次に、“人間”が変わり始めた。

大戦の後に生まれた子供達は、親の持つものを部分的に否定し始めた。

髪の色が違ったり、肌の色が違ったりした。ある子供は言葉を覚えなかった。ある子供は風俗慣習をまったく無視して育った。

そして子供達は“力”が強かった。大人たちが暴力を振るい無理強いをすれば、すぐさま反撃できた。

無秩序のようだが、次世代の人間は親から学ばずとも世界から学び始めていた。変わりゆく世界、古い人間は戸惑ったり絶望したり

もしたが、次世代は世界と語らいながら、希望を持ち健やかに育てていた。

そして、戦後は終わった。混乱の中からも秩序は芽生え、平穏と呼べるものが見え始めていた。

「では行ってきますね、千代。帰りはいつもどおりに」
「うん、行ってらっしゃい後介。お仕事がんばってね」

一軒家の並ぶ、平凡な住宅地。
守宮・千代とその夫後介。チヨ、サキ、君達はごく普通の夫婦として暮らしている。

容姿の違いは始めだけ異様に見られはしたものの、今では町内会一のおしどり夫婦として名を馳せている。

アスファルトの砕けた道の上を自転車で走り、後介ことサキは仕事に通う。

その背中を見送り、チヨ、君は一度家の中に入る。

少しして、また守宮家の扉は開かれる。今度は、君と四人の子供が出てくる。

「行ってまいります、お母様」

まず言葉を発するのは守宮家の長女、初音。十三歳の初音はとも落ち着いた雰囲気を持っている。

「行って……きます……」

次いで眠そうに言う長男、夕霧。初音とは二歳離れている夕霧は、君譲りの尻尾を地面に垂らしている。

「行つて」「行つて」「きます」「きます！」

ちよつと気の合わない声。次男と次女は双子で、それぞれと真木まひぎと若菜わかなという。夕霧からさらに二歳離れている。父親似の同じ顔を同じように輝かせて、同じ猫の耳をぱたぱたしている二人。だけど、真木の髪は綿のように白く、若菜の髪は炎のように赫いのはなぜかな？

「行つてらっしゃい。遅くならないで帰ってくるのよ」

姉を先頭に、連なつて登校する四人の子供たち。それを見送る君妻となり、母となつたね、チヨ。いや、今は“千代”か。今、君は幸せだ。

それでいい。世界には確実に、希望と幸福が存在しているのだから。

君の子供達を追うことにしよう。

子供達は一時間ほど歩く。この時代、もはや電車や自動車でセカセカ通う者は遅れている。

野を横切り、草木のなかを通る。木々の間には妖精たちが遊んでいる。少し抉れた地面には、古い機械達が朽ちる時を待っている。

やがて到着する、新成第一学園。日本に八つある新成学園は次世代の人間の教育を旨とする学園。帰化した夢まぼろしの大人たちが教師や事務員を務めているのが特徴の一つだ。

学園長は ああ、そこにいるね。

「おはよう、初音ちゃん、夕君、若菜ちゃん、真木君」

玄関の前に立ち、その声をかける君の名前、今は水瓶宮・沙波と名乗っているんだっけ。

戦後、各地に散らばっていた 月の子 を集めていた君は、その中で子供達にふさわしい教育が為されていないことに気がついた。そして日本政府や、超科学に対処する国際組織 SEME と掛け合って、この学園をつくることを決めた。

守宮の二代目達は一通り君に挨拶する。その愛らしい様子には君は相好を崩す。

「ねえ小母さん、歩は？」

そう問うのは小学部二年の真木。

歩とは君の息子。同い年の真木とは仲が良いんだよね。

「歩は教室にいるはずよ」

君がそう告げると、真木は他の兄弟に先んじて行ってしまった。

明確な登校時間はないので、それから一時間、まったく生徒が来なくなるまで君は玄関の前に立ち続けた。

それから自分の仕事場である、学園長室に入る。

「学園長、電話で伝言があります」

水晶のような青い瞳が美しい君の秘書。彼女も夢から帰化した人間だ。

「何かしら、アケルナル」

「えっと相川様からで、明日会いにいらっしゃるとのことです」

相川・千風。今は S E M E の特殊エージェントとして各地を回っている。

「そう……久しぶりに日本に帰ってきたのね、あの子は」
椅子にすわり、窓の外を見やる。
そうして君は、三十過ぎても未だ少女みtainな彼女のことを思う。

「相川・千風。職場で、私用での電話は控える」

「久しぶりに会ったら、いきなり小言？ 名塚・鷺累」

旧漆黒委員会、今は S E M E B 部署、日本支部のオフィスに緊張が走る。

千風、君は名塚氏とライバルのような関係になっている。顔を合わせれば言葉を戦わせ、剣を合わせれば火花を散らさではいられない。

「小言ではない。組織の規範を示すのは必要なことだ」

「あ、そうなの？ でも今のは新成学園の学園長との連絡だから、あながち悪いってこともないよね」

「おやおや何ですか？ 朝から騒がしいですね」

守宮・後介の登場。普通の会社員の如く通勤する君は、実際はこんなところで働いている。

後介と千風は互いを認め合い、笑みを交わす。まさしく旧友といった様子だ。

「久しぶり、後介。子供達は元気？」

「ええ、千風さんがいない間に、下の双子も学校に入ったのですよ。そういえば、あなたまだ独り身なんですか？」

千風、君は恋人も作らず旅を続けている。……その理由は、ここで探る必要もないけど。

それを言及されると君は気まずい顔をする。後ろめたい訳ではないが、とにかく苦手なのだ。

と、そこに一人の女性がお茶を持って入ってくる。

「あ、でも千風さんは最近若い人をアシスタントに雇ったんですよ」

「っ！ 優見、余計なこと言わない！」

それを聞いた後介はにやりとする。

「若い人って乾さん、その方は男の人ですか？」

「もちろん。感じのいい人ですよ」

千風の顔に朱が昇る。

騒がしくなる、力をもって世界を見守る者達の集い所。

なか

なか、面白そうだね。

「充秀！ いままでどこに行ってたのよ」

赫い髪の君が、眉を立てて待ち受けている。

ちよつとあちこちを見て回ってたんだ、稚菜。……ああ、一日経ってしまったんだね。

朝、チヨを見てから、今はすっかり黄昏になってしまった。

もう太陽の沈みかけた西からの光は、君の影法師を作らない。君の姿は誰にも見えない。

神となるといふのは、思えばやっぱりかないなことばかりだね。時間感覚がすっかりおかしくなっちゃったよ。

「それで言い訳しているつもり？ ……で？ どうだったのよ、久しぶりの地球は」

なかなか良かったよ。しばらくは安心して彼女たちに任せておけそうだよ。

「そう。じゃあ帰るわよ」

君は光を放ち始める月を見る。

君はあまりここが好きじゃないみたいだね。

「当たり前よ。まだここは私達のいるべき場所じゃない。だから、私は“稚菜”としてしか存在できないし、あんたも“充秀”としてしか存在できない」

そうだね。帰ろうか。

君とともに歩く。見えない階かたまりを上り、やがて淡い色の月虹に足がかかる。

ねえ、君たち。

これは地上に生きる人達への呼びかけ。

君たちは、君たちの大地に生きているんだよ。矜持をもって、責任をもって、君たちの大地を歩きつづけて欲しい。そう、僕は願

うよ。

地に足をつける者と、夢と月は共にある。

そして夢は現に還り、現実となる。

願わくば、人々が希望をもって夢を見んことを。

終幕（後書き）

最終話は結構手間がかかりました。あまりだらだらしないように、文字数をできるだけ少なくしようとしたのです。

守宮の二代目の名前は、『源氏物語』のサブタイトルから来てます。“真木”は“真木柱”ですが。

ああ……終わりましたね。一年もかけてませんが、長い時間がかかった気がします。その長い間に私というものは微妙に変化し、はじめ思っていたテーマと全然違うことを小説に入れてしまいました。この物語は私のエゴイズムだけで書かれているみたいなのです。それでも読んでくださった皆さん、ありがとうございます。つまらない、不完全なものです。皆さんの心に欠片でも残るなら私は仕合せ者でしょう。

感想批評待ってます。

では、さようならです。

夢が現実になることを願って。

白亜・迦舞、 2008・10・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0947e/>

your earth

2010年11月8日19時29分発行